

平成20年度  
「山口大学のFD活動」

山口大学大学教育機構  
山口大学教学委員会

平成20年度  
「山口大学のFD活動」

山口大学大学教育機構  
山口大学教学委員会

## はじめに

平成 20 年度の山口大学の FD 活動は、全学から学部・研究科、あるいは学科・コースというさまざまなレベルで推進された。全学レベルでは全学 FD 講演会が 2 回、研修会が合計 15 回開催され、合計 452 人の教職員・大学院生が参加した。この人数は全学 FD 活動がはじまって以来過去最高の数である。

また、今年度から新たな取り組みとして「教育改善研修会」が導入された。これは各学部・研究科が主催して実施する研修会に大学教育センターが協力する FD 研修会である。今年度は主に学部・研究科の教授会の時間を利用して山口大学全体の教育改善の取り組みの概要と進捗状況の説明をすべての学部・研究科で行った。グラジュエーション・ポリシーとは何か、カリキュラムマップはどのようにして作成されるか、シラバスに記載された到達目標とグラジュエーション・ポリシーの関係はどうなっているか、学生授業評価をどうみるか、など山口大学の教育改善のモデル (PDCA サイクル) に対する理解を深めることが目標とされた。2006 (H18) 年 4 月にグラジュエーション・ポリシーを公開してから既に 3 年が経過したが、今回の取り組みでようやく教員一人ひとりにまで教育改善モデルが浸透したように感じられる。

また、FD に関する本年度のもう一つの大きな変更点は「数値目標」の設定が公式に行われたことである。

「FD 義務化に伴う数値目標」(平成 20 年 12 月 16 日、教学審議会承認)

各教員は、日常的に教育改善に努力するとともに、組織的 FD 活動に積極的に参加する。組織的 FD 活動については、当面、年間 1 回以上参加することを目安とする。

組織的 FD 活動とは、本学のグラジュエーションポリシー (GP) を達成するために、全学、共通教育授業科目別分科会、学部、学科、講座、コース、その他本学の教育組織において行われる教育改善活動のことであり、その内容は、大学教育機構が編集する「FD 報告書」に記載するものとする。

これまで、本学の FD 活動については、全学の FD 研修会に 5 年に 1 回参加することが暗黙の了解事項になっていた。これは、かつて 1 泊 2 日の合宿形式で全学 FD 研修会が年 2 回実施され、それぞれの定員が最大 100 名程度であったことから、5 年間で全教員の参加を目指すという趣旨であった。その後、全学 FD 活動の実施形態は変わり、合宿形式は廃止され、講演会や小規模のアラカルト方式研修会に移行したが、5 年に 1 回参加という数値目標だけが残って現在にまで引き継がれていた。しかし、現在各学部・研究科における FD 活動が以前より活発化してきており、今後より一層その充実を目指す時期にきている。そこで、今回、全学のみならず、共通教育授業科目別分科会、学部、学科等を含めた組織的 FD 活動への参加の数値目標設定が公式に行われることになった。

なお、組織的 FD とは、教育改善への個々の取組を組織全体で認知し評価することであると行ってよい。現在の FD 研修等に費やす時間は、1 回あたり 1, 2 時間からせいぜい数時間であり、5 年間で最低 5 回参加したとしても、かつての 1 泊 2 日の合宿研修の時間を超えるものではない。最低目標数値の年 1 回にとどまらず、様々な場面での FD 活動の積極的な展開を期待している。

山口大学大学教育機構・副機構長  
大学教育センター・センター長 岩部浩三

# 目次

## 第1部 全学FD活動

第1章 大学教育機構主催のFD活動	1
第1節 講演会及び研修会一覧	1
第2節 講演会及び研修会の概要・報告	5
第2章 共通教育授業科目別分科会のFD活動	23
第1節 FD活動	23
第2節 第56回中国・四国地区大学教育研究会報告	25
第3章 学生授業評価及び教員授業自己評価	35
第1節 実施方法・実施状況	35
第2節 学生授業評価の結果について（全学）	41
第3節 学生授業評価の結果について（共通教育）	58

## 第2部 学部・研究科のFD活動

第4章 人文学部のFD活動	77
第1節 教員間授業公開（ピア・レビュー）	77
第2節 大学教育機構との共催による教育改善FD研修会	78
第3節 「基礎セミナー2」の導入に伴うFD活動	79
第4節 大学教育機構主催FD研修・講演会への参加	80
第5節 人文学部における学部学生むけアンケート	81
第6節 その他のFD関連活動	89
第5章 教育学部のFD活動	90
第1節 研修会・研究会の報告	90
第2節 教員授業自己評価における自由記述欄の考察	91
第6章 経済学部のFD活動	100
第1節 平成20年度経済学部FD計画	100
第2節 ピア・レビュー	100
第3節 全学FD研修会等への参加状況	109
第4節 学生授業評価・教員授業自己評価	109
第5節 経済学部・経済学研究科教育改善FD研修会	109
第7章 理学部のFD活動	111
第1節 理学部におけるピア・レビュー	111
第2節 大学教育機構主催全学FD研修会への参加状況	122
第3節 学生授業評価	123
第4節 その他のFD活動	123
第8章 医学部のFD活動	127
第1節 医学科	127
第2節 保健学科	129
第9章 工学部のFD活動	135
第1節 はじめに	135
第2節 公開授業	135
第3節 授業評価表彰	151



第 4 節	全学 F D 研修会への参加 .....	154
第 5 節	まとめ .....	157
第 1 0 章	農学部 of F D 活動 .....	158
第 1 節	はじめに .....	158
第 2 節	セミナー（農学部公開講演会） .....	159
第 3 節	ピアレビュー .....	160
第 4 節	大学教育センターと農学部・農学研究科・連合獣医研究科との教育改善 F D 研修会 .....	160
第 5 節	全学 F D 研修会 .....	161
第 6 節	その他の F D 活動 .....	162
第 7 節	学生授業評価と教員授業自己評価 .....	163
第 8 節	まとめ .....	168
第 1 1 章	人文科学研究科 of F D 活動 .....	169
第 1 節	教員間授業公開（ピア・レビュー） .....	169
第 2 節	大学教育機構との共催による教育改善 F D 研修会 .....	169
第 3 節	大学教育機構主催 F D 研修・講演会への参加 .....	169
第 4 節	人文科学研究科における自由記述式アンケート .....	169
第 1 2 章	教育学研究科 of F D 活動 .....	173
第 1 3 章	経済学研究科 of F D 活動 .....	179
第 1 節	平成 2 0 年度経済学研究科 F D 計画 .....	179
第 2 節	授業の事例研究・報告 .....	179
第 3 節	学生授業評価・教員授業自己評価 .....	186
第 1 4 章	医学系研究科 of F D 活動 .....	187
第 1 節	概要 .....	187
第 1 5 章	理工学研究科 of F D 活動 .....	188
第 1 節	理学系 .....	188
第 2 節	工学系 .....	193
第 1 6 章	農学研究科 of F D 活動 .....	196
第 1 節	はじめに .....	196
第 2 節	セミナー（農学部公開講演会と共催） .....	197
第 3 節	教員授業自己評価 .....	201
第 4 節	学生授業評価 .....	201
第 5 節	全学 F D 研修会 .....	206
第 6 節	まとめ .....	206
第 1 7 章	東アジア研究科 of F D 活動 .....	208
第 1 節	平成 2 0 年度東アジア研究科 F D 計画 .....	208
第 2 節	東アジア研究科 F D 研修会 .....	208
第 1 8 章	技術経営研究科 of F D 活動 .....	218
第 1 節	セルフレビュー .....	218
第 2 節	全学 F D 研修会 .....	221
第 3 節	教育改善を目的とした評価活動 .....	221
第 4 節	その他の F D 活動 .....	226
第 1 9 章	連合獣医学研究科 of F D 活動 .....	233
第 1 節	はじめに .....	233
第 2 節	共通ゼミナール .....	233

第 3 節	各大学における特別講義 .....	234
第 4 節	E-ラーニング .....	236
第 5 節	その他 .....	236
平成 20 年度	山口大学 教学委員会 名簿	
平成 20 年度	山口大学 学部・研究科 F D 担当者 名簿	
平成 20 年度	山口大学 大学教育センター 名簿	



# 第 1 部 全学 F D 活動

# 第1章 大学教育機構主催のFD活動

山口大学のFD活動において、全学レベルのFD活動を推進しているのは大学教育機構の大学教育センターである。大学教育センターでは各学部・研究科の教学委員およびFD担当教員の協力のもと様々なニーズに応じた講演会・研修会を開催している。

平成20年度の大学教育機構主催FD研修会は講演会および小規模の研修会が実施された。これらの研修会は対象者が限定されている一部の研修会（新任研修等）を除き、教員は何年度でも自由に参加できる。また、「大学コンソーシアムやまぐち」に参加している山口県内の大学等に所属する教職員も参加可能である。

また、今年度から新たな取り組みとして「教育改善研修会」が導入された。これは各学部・研究科が主催して実施する研修会に大学教育センターが協力して実施する研修会であり、大学教育センター教員が山口大学全体の教育改善の取り組みについて教授会等の場を利用して説明を行うものである。今年度はグラジュエーション・ポリシー、カリキュラムマップ、Webシラバスなど教育改善の全体的な枠組みについて説明を行い、山口大学のPDCAサイクルに対する理解を深める一助とした。

以下の表はこれらの取り組みの一覧表である。また、第2節では各研修会の報告書を掲載している。

## 第1節 講演会及び研修会一覧

I 講演会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	より充実した初年次教育を目指して 第1部：講演会「学士課程教育の中での初年次教育」 第2部：ワークショップ「初年次教育の効果的な進め方」 (共催 大学コンソーシアムやまぐち)	平成20年 7月29日 (火)	13:30～ 16:15	吉田地区	大学会館 2階会議室	山田礼子（同志社大学教授：初年次教育学会会長）  杉谷祐美子（青山学院大学准教授：初年次教育学会理事）	希望者	第1部：初年次教育の置かれた現状と取り組むべき課題などを明確にするとともに、より良い初年次教育とはどうあるべきかを解説。学生に対するメンタルヘルスについても説明する。 第2部：初年次教育でよく用いられるグループ学習の活動や関係づくりについて、日ごろの悩みや工夫をフロアで共有してもらい、それに対して講師からポイントを補足説明する。	教職員53名
2	メンタルヘルスの手法を学ぼう 「大学生の自殺問題—教職員の対応上の留意点について」	平成20年 9月19日 (金)	13:30～ 15:15	吉田地区	大学会館 2階会議室	名島潤慈（教育学部教授、臨床心理士）	希望者	大学生の自殺問題について、教職員がどのような点に留意すればよいかについて紹介する。これにより、自殺を図ろうとしている学生や自殺後に残された他の学生への対応についての理解を深める。	教職員54名

II 研修会									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	共通教育ティーチング・アシスタント(TA)研修会	平成20年4月2日(水)	13:00～16:00	吉田地区	共通教育SCS室、共通教育各教室、工学部E21番教室、医学部第3講義室	岩部浩三(大学教育センター長) 山崎行宏(共通教育係長) 森本宏志(保健管理センター講師)	共通教育において前期にTAに採用された大学院生及びTAを採用する教員	共通教育におけるTAの役割や責任について理解を深める。	教員24名 学生84名
2	発達障害学生の授業方法についての研修(共催 理学部)	平成20年4月7日(月)	17:30～18:30	吉田地区	共通教育棟2階会議室	平田牧三(保健管理センター) 岩部浩三(大学教育センター長) 小川勤(大学教育センター教授)	理学部教員、受講科目担当教員(共通教育・専門教育)、保健管理センター、学生相談所、大学教育センター、担当事務	発達障害のある学生への修学支援の方法。授業中・授業外における支援方法を学ぶ。	教員24名
3	聴覚障害学生の授業方法についての研修(共催 理学部)	平成20年4月22日(火)	18:00～19:00	吉田地区	理学部会議室	小川勤(大学教育センター教授)	理学部教員、大学教育センター、聴覚障害学生本人	聴覚障害のある学生への修学支援の方法。授業中・授業外における支援方法を学ぶ。	教員12名
4	新規採用教育職員研修会(共催 人事課)	平成20年8月4日(月)	9:55～17:00	小串地区	医学部霞仁会館会議室	小川勤(大学教育センター教授) 吉田香奈(大学教育センター準教授) 岡田耕一(大学教育センター助教授)	平成19年8月以降に新規採用された助教以上の教育職員	山口大学のGPとカリキュラムマップ、教務システム、観点別シラバスの作成方法及びWEBシラバスの入力法、学生授業評価システムと教員授業自己評価システムについて理解する。	教員24名
5	学生参加型授業の展開方法	平成20年8月26日(火)	13:30～15:00	吉田地区	共通教育棟2階学習室22	林徳治(教育学部教授)	希望者	人文社会系の学生を対象とした参画型授業の設計と評価について学ぶ。	教員12名
6	学習意欲を高める問題解決型の授業展開—その方法と展開—	平成20年9月25日(木)	10:30～12:00	吉田地区	共通教育棟2階会議室	池田幸夫(教育学部教授)	希望者	授業を受けた学生が、「分かった」と実感をもつ授業とは、どのような授業であろうか。実際の授業のVTRを見ながら授業分析を行い、授業改善に必要なノウハウについて考察する。	教員8名
7	情報セキュリティ・情報モラルの教え方	平成20年9月26日(金)	14:30～16:30	常磐地区	工学部D24教室	糸長雅弘(教育学部教授)	希望者(21年度からの授業担当者を中心に)	本年度前期の実施状況を踏まえ、「情報セキュリティ(第3週)」、「情報モラル(第4週)」及び「コンプライアンス(第5週)」を中心に、共通教育「情報セキュリティ・モラル」を指導する上で留意すべき点について、研修を行う。	教員13名
		常磐地区		工学部D24教室	教員21名				
		平成21年3月2日(月)	吉田地区	共通教育棟2階会議室	教員9名				
平成21年3月13日(金)	吉田地区	共通教育棟2階会議室							

8	GP達成のための学生参加型授業の展開 (共催 医学部保健学科)	平成20年 12月10日 (水)	16:30~ 18:30	小串 地区	医学部総合 研究棟 S 1 講義室	林徳治 (立命館 大学教授)	本学教職員	各学部・学科において設定されているGPを学生一人ひとりに達成させるため、個々の教員は学生参加型の授業をどのように設計していったらよいのかについて、演習やワークショップ等を通じて実践的な教育指導能力の育成を図る。また本講演では、初年次教育や学生に対するメンタルヘルスについても説明する。	教員41名
9	教育での標準テストの影響 -The Influence of Standardized Tests in Education-	平成20年 12月19日 (金)	14:30~ 16:30	吉田 地区	共通教育棟 2階会議室	Edwards Nathaniel (留 学生センター准 教授)	希望者	この20年でアメリカや他国では、教育分野での標準テストの影響が大きくなっている。本研修では標準テストのメリットとデメリットを詳しく比較する。	教員13名
10	学士力・社会人を教育する方法	平成21年 1月7日 (水)	14:30~ 17:00	吉田 地区	共通教育棟 2階会議室	村松直樹 (リア セック) 辻多門 (学生支 援センター講 師) 藤井文武 (イノ ベーション推進 機構准教授)	本学教職員	学士力・社会人が求められている背景、および大学教育において実際にどのような取り組みが可能であるかを、他大学の事例を交えながら説明する。	教員7名
11	最近の学生の実態と社会人基礎学力の養成	平成21年 3月18日 (水)	13:30~ 16:00	常磐 地区	工学部 D 2 3 教室	小川勤 (大学教 育センター教 授)	希望者	本研修の前半は青少年の学習観や生活観について、各種の調査結果から分析した結果を示し、最近の学生の特徴に学ぶ。後半は、中教審の大学部会から示された「学士力」の意義と設定の背景、また、経済産業省が検討している「社会人基礎力」について、大学教育との関係等について学ぶ。	教員8名
12	事例から学ぶ危機対応 -自殺のポストベン ションについて-	平成21年 3月18日 (水)	16:00~ 17:30	吉田 地区	大学会館 2階会議室	平野均 (保健管 理センター教 授) 今井佳子 (学生 相談所カウンセ ラー)	希望者	自殺直後の危機介入を組織としてどう進めていけばよいのか、遺された人の喪失反応に教職員としてどう対応していけばよいのかを一緒に考える。	教職員36名
13	インストラクショナル・デザイン(ID)セミナー (共催 独立行政法人 メディア教育開発セン ター、山口大学eラー ニング研究会)	平成21年 3月25日 (水) ~27日 (金)	13:30~ 17:30	常磐 地区	工学部 D 22 教室、D棟 4 F 情報演 習室	内田実 (メディ ア教育開発セン ター特定特任教 授)	希望者	インストラクショナルデザインの方法論を学び、さらに教材開発のワークショップを通じて、どのように大学教育に生かすのかについての実践的な理解を深める。	教員9名
									参加者 計452名

III その他（教育機構主催の研修会に関連する研修会）									
	講座名	開催時期	時間	開催地区	開催場所等	講師	対象者	内容	参加人数
1	大学教育センターと農学部・農学研究科、連合獣医研究科、医学系研究科（農学系）との教育改善FD研修会	平成20年6月18日（水）	14:30～15:00	吉田地区	農学部会議室	木下真（大学教育センター講師）	農学部関係教員	グラジュエーション・ポリシー、カリキュラムマップ、Webシラバスなど教育改善の全体的な枠組みについて説明	教授会出席者全員
2	大学教育センターと教育学部・教育学研究科・東アジア研究科（教育系）との教育改善FD研修会	平成20年6月18日（水）	15:00～15:45	吉田地区	教育学部21番教室	岩部浩三（大学教育センター長）	教育学部関係教員	グラジュエーション・ポリシー、カリキュラムマップ、Webシラバスなど教育改善の全体的な枠組みについて説明	教授会出席者全員
3	大学教育センターと理学部・理工学研究科（理学系）・医学系研究科（理学系）との教育改善FD研修会	平成20年6月25日（水）	14:30～15:15	吉田地区	理学部・人文学部会議室	木下真（大学教育センター講師）	理学部関係教員	グラジュエーション・ポリシー、カリキュラムマップ、Webシラバスなど教育改善の全体的な枠組みについて説明	教授会出席者全員
4	大学教育センターと人文学部・人文科学研究科・東アジア研究科（人文系）との教育改善FD研修会	平成20年7月16日（水）	14:30～15:00	吉田地区	理学部・人文学部会議室	岩部浩三（大学教育センター長）	人文学部関係教員	グラジュエーション・ポリシー、カリキュラムマップ、Webシラバスなど教育改善の全体的な枠組みについて説明	教授会出席者全員
5	大学教育センターと技術経営研究科との教育改善FD研修会	平成20年9月8日（月）	10:00～10:30	常磐地区	常盤キャンパスD講義棟4F MOTオフィス	木下真（大学教育センター講師）	技術経営研究科関係教員	グラジュエーション・ポリシー、カリキュラムマップ、Webシラバスなど教育改善の全体的な枠組みについて説明	教授会出席者全員
6	大学教育センターと医学部保健学科・医学系研究科との教育改善FD研修会	平成20年10月8日（水）	16:10～16:40	小串地区	医学部会議室	吉田香奈（大学教育センター准教授）	医学部保健学科関係教員	グラジュエーション・ポリシー、カリキュラムマップ、Webシラバスなど教育改善の全体的な枠組みについて説明	教授会出席者全員
7	大学教育センターと工学部、理工学研究科（工学系）、医学系研究科（工学系）との教育改善FD研修会	平成20年11月12日（水）	14:15～14:45	常磐地区	工学部D11教室	岡田耕一（大学教育センター助教）	工学部関係教員	グラジュエーション・ポリシー、カリキュラムマップ、Webシラバスなど教育改善の全体的な枠組みについて説明	教授会出席者全員
8	大学教育センターと経済学部・経済学研究科・東アジア研究科（経済系）との教育改善FD研修会	平成20年11月19日（水）	13:30～14:00	吉田地区	経済学部会議室	小川勤（大学教育センター教授）	経済学部関係教員	グラジュエーション・ポリシー、カリキュラムマップ、Webシラバスなど教育改善の全体的な枠組みについて説明	教授会出席者全員



## 第2節 講演会及び研修会の概要・報告

### 1. 講演会

#### (1) より充実した初年次教育を目指して

主催：大学教育機構

共催：大学コンソーシアムやまぐち

日程：平成20年7月29日（火） 13:30～16:15

場所：大学会館2階会議室

対象：教育職員ほか及び県内他大学関係者



#### 第1部 講演会

題目：学士課程教育の中での初年次教育

講師：山田 礼子（同志社大学教授、初年次教育学会会長）

杉谷 祐美子（青山学院大学准教授、初年次教育学会理事）

司会：北本 卓也（大学教育センター主事）

概要：本講演では、初年次教育の置かれた現状と初年次教育で取り組むべき課題などを明確にするとともに、より良い初年次教育とはどうあるべきかを解説する。また学生に対するメンタルヘルスについても説明する。

#### 第2部 ワークショップ

テーマ：初年次教育の効果的な進め方

講師：山田 礼子（同志社大学教授、初年次教育学会会長）

杉谷 祐美子（青山学院大学准教授、初年次教育学会理事）

司会：小川 勤（大学教育センター教授）

内容：基礎セミナーの授業担当者にとって、実施方法や教育内容が担当教員に任されていることや、教員間の横の連携（情報交換・共通認識）の不足などから、指導方法に悩みを抱えている教員も多いと聞く。そこで、本研修会では初年次教育でよく用いられるグループ学習の活動や関係づくりについて、日ごろの悩みや工夫をフロアで共有してもらう予定である。それに対して講師からポイントを補足説明するかたちで、進めていく。

報告：

7月29日（火）、大学会館2階会議室にて「より充実した初年次教育を目指して」をテーマにFD講演会が開催された。第1部の基調講演では同志社大学教授・初年次教育学会会長の山田礼子先生を講師に迎え「学士課程教育のなかでの初年次教育」と題して約1時間にわたる講演が行われた。

続いて、第2部のワークショップでは「初年次教育の効果的な進め方」をテーマに約1時間半にわたって議論が行われた。まず、下関市立大学経済学部の大内俊二教授より「下関市立大学における導入教育「基礎演習」への取り



組みと課題」について報告が行われ、続いて本学の各学部代表のパネリストより各学部・学科における基礎セミナーの具体的な取り組みについて報告が行われた。会場からは「基礎セミナーはなぜ重要なのか?」「半期しかないが通年で行うべきか?」「どのような内容を教えるべきか?」等について様々な質問があり、活発な討論が行われた。基礎セミナーは学習へのモチベーションの維持・向上や、文書力・問題解決能力の育成といった点から非常に重要であることが再確認され、各学部においてFD活動のテーマとして積極的に取りあげていくべきであるとの方向性が確認された。

終了後のアンケートでは、「良かった・非常に良かった」の合計が全体の約85%を占めた。また、「講演会の内容は非常に説得力があり参考になった」「授業の改善法の具体的な話があってよかった」「基礎セミナーの具体的なあり方、問題点がよくわかった」という肯定的意見が寄せられたが、一方で「学生の意欲を喚起する...学ぼう」という本来のディスカッションに至らなかった」「研修会の時間が長い。後半のパネルディスカッションはもう少し短くても良いのではないか」「下関市立大学のみならず、他大学の状況も聞きたかった」という意見も寄せられた。今回のパネルディスカッションは情報交換が主な目的であったため、参加者からはもっと深い議論を望む声が多かった。今回の取り組みをきっかけとして今後も継続的に基礎セミナーのあり方を議論し、内容の改善・充実に努めていく必要が感じられた。

#### 研修会に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	2	4.3%
どちらとも言えない	4	8.7%
良かった	23	50.0%
非常に良かった	16	34.8%
無回答	1	2.2%
合計	46	100.0%

## (2) メンタルヘルスの手法を学ぼう

主催：大学教育機構

日程：平成20年9月19日（金） 13:30～15:15

場所：大学会館2階会議室

対象：教育職員ほか及び県内他大学関係者

### 講演会

題目：大学生の自殺問題—教職員の対応上の留意点について

講師：名島 潤慈（山口大学教育学部教授、臨床心理士）

司会：小宮克弘（学生支援センター長）

概要：本講演は、大学生の自殺問題について、教職員がどのような点に留意すればよいかについてのものである。これにより、自殺を凶ろうとしている学生や自殺後に残された他の学生への対応についての理解を深める。

報告：

メンタルヘルスの手法を学ぶFDの一環として、今回は教育学部教授で臨床心理士の名島潤慈先生に大学生の自殺問題に関する講演をお願いした。教職員がこの問題にどのように対処したらよいかについて、長年のご経験を踏まえた具体的な方法をご指導いただくことができた。

講演会は名島先生の論文「大学生の自殺問題－教職員の対応上の留意点－」『山口大学学生相談所年報』第15・16・17合併号、2006年、9-25頁、が配布され、この内容に沿って進められた。まず、一般的な留意点として、何か変わった様子があれば声をかけてみる、何度も電話をしても出てこない場合でも留守電にメッセージを残しておく、家族に連絡をとる、自殺の危険性がうかがわれるときには専門家の許に相談に行くように進めるか一緒に(できれば二人以上で)ついていくようにし、学生を一人きりにしない、緊急度が高い場合にはすぐに専門家に連絡をとる、といったことが指摘された。続いて、より具体的な留意点について説明があった。自殺のリハーサルとは何か、自殺計画とは何か、自殺の緊急度とは何か、緊急度が高い場合にはどうするのか、自殺の最中に遭遇したらどうするのか、いったん防止すればあとは安心していいのか、「自殺は孤立の病である」という言葉はどういう意味か、自殺の危険因子にはどのようなものがあるか、自殺的性格といったものは存在するのか、パーソナリティ障害と自殺の関係とは、性別同一性障害と自殺の関係とは、自殺の予告サインとは、自傷と自殺の関係、自殺の決意と実行まで、統合失調症と自殺の関係、学生から自殺したいといわれた場合の対応、連鎖自殺とは、自殺の境界線型とは、自殺志向学生がいた場合学友に相談相手になってもらっていいか、24時間対応の電話相談機関とは、ゼミの学生が自殺未遂した場合どうしたらよいか、といった問題が取り上げられ、詳しい説明が行われた。

続いてフロアより、様々な質問が寄せられた。自殺まではいかないが大学にでてこないゼミ生への指導をどうしていけばよいか、という質問には、もしその学生がカウンセリングにかかっているならば、そのカウンセラーと教員が意見交換すべきであるとの回答があった。また、保健管理センターや学生相談所が関知していない学生の自殺はどれくらいかという質問に対しては、実は関知していない学生の自殺の方が多く、また休学している者が多いとの回答があった。30分という質疑応答の時間設定は短く、瞬く間に過ぎてしまった。講演会終了後のアンケートからは、「現在大学で最も問題となっているトピックであり、興味深く拝聴できた。」「実際に経験する可能性のある場面での対処方法が参考になった。」といった意見が寄せられた。また、「質問したいことがあったが、多くの聴衆の前で、またビデオが回っている前では支障があってできなかった。自殺のようなデリケートな問題では、予め期待する内容を募集しても良いのではないか。」との指摘もあった。今後は、こうした意見を参考にしながら運営の改善を図りたい。

研修会に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	1	2.4%
どちらとも言えない	2	4.9%
良かった	28	68.3%
非常に良かった	10	24.4%
無回答	0	0.0%
合計	41	100.0%

## 2. 研修会

### (1) 共通教育ティーチング・アシスタント(TA)研修会

主催：大学教育機構

日時：平成 20 年 4 月 2 日（水） 13:00～15:00

場所：共通教育 SCS 教室、共通教育各教室、工学部 E21 番教室、医学部第 3 講義室

対象：共通教育において前期に TA に採用された大学院生及び TA を採用する教員

内容：ティーチング・アシスタント(TA)制度は、「優秀な大学院生に対し、教育的配慮の下に教育補助業務を行わせ、学部教育におけるきめ細かい指導の実現や大学院学生が将来教員・研究者になるためのトレーニングの機会の提供を図るとともに、これに対する手当での支給により大学院生の処遇の改善の一助とする」ことを目的として実施されている。本学で共通教育の TA に採用されている大学院生は年間 200 名を超えており、特にその充実が求められている。そこで、今年度は昨年度に引き続いて研修会を開催し、TA の役割や責任について理解を深めるように努める。また、今年度は第 2 部で TA が実際に授業支援を担当する教室やパソコン教室、理科実験室などで TA 研修会を開催する予定である。

#### スケジュール

##### 第 1 部 全体研修 13:00～14:00

13:00～13:10 挨拶（大学教育センター長 岩部浩三）

・共通教育の理念・目標と TA の役割

13:10～13:40 TA の任用と業務について（学務課共通教育係長 山崎行宏）

・勤務時間、共通教育の仕組み、TA の業務内容等について。教務手帳。

13:40～14:00 大学の授業における安全衛生（（全学）労働安全衛生管理室主任、保健管理センター講師 森本宏志）

・授業における安全衛生と教職員・TA の責務

##### 第 2 部 個別研修 14:10～15:00

報告：

#### ①参加者の感想

・TA の心得的なものをアドバイスいただき、今後の活動のヒントになった。

・司会者の声は大きいのに演者は 2 人とも小さく聞きづらかった。

・教員に向けて話しているのか、学生に向けて話しているのかよくわからなかった（やはり立場が違うと思うので）。

・この研修会の必要性を感じられない。もっと具体的な内容かと思っていましたが、そうでもなかったのが残念だ。

・実際には TA として採用していない学生を TA として働かせているところもある。こうした点を改善するためにも、もっと強制力のある研修にして TA 採用・実施に関する業務をきちんと管理した方が良かったと思った。

#### 研修会に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	2	2.0%
あまり良くなかった	11	10.8%
どちらとも言えない	34	33.3%
良かった	46	45.1%
非常に良かった	6	5.9%
無回答	3	2.9%
合計	102	100.0%

## ②今後の対応

来年度、当研修会を計画する際には、講師の方々に事前にプレゼンの方法（声の大きさや配付資料の精選等）や資料配付の仕方などについて、事前にオリエンテーションなどを実施して、この研修会が参加したTAや先生方にとって、有意義な研修内容になるように工夫する必要があることを痛感した。

## （2）発達障害学生の授業方法についての研修

主催：大学教育機構・理学部（共催）

日時：平成20年4月7日（月） 17:30～18:30

場所：共通教育棟2階会議室

対象：理学部教員、受講科目担当教員（共通教育・専門教育）、大学教育センター、担当事務。

参加者：参加実績24名（内訳：理工学研究科7名、学生相談所1名、保健管理センター1名、学生支援課3名、教育支援課3名、大学教育センター3名、非常勤講師2名、後日研究室等へ出向いて説明を行った者4名）

講師：平田牧三（保健管理センター長）、岩部浩三（大学教育センター長）、小川勤（大学教育センター教授）

内容：発達障害のある学生への修学支援の方法。授業中・授業外における支援方法を学ぶ。

報告：

当日は、まず岩部大学教育センター長から、本学に教育支援が必要な発達障害学生が本年度入学して来たことについて、その入学の経緯と今回の研修会の趣旨が説明された。

次に、平田保健管理センター長より当該学生の本学入学前までの成長の過程や高校での学生生活の様子、両親と当該学生の親子関係等について説明があった。その後、ADHDやアスペルガーといった発達障害を抱えた人の行動や人間関係に関する特徴や一般的な対応の仕方について説明があった。

小川教授からは発達障害のある学生に対して、授業でどのように対応を行なったらよいのか具体的な事例や資料を使って説明が行なわれた。

参加者との意見交換では、「発達障害学生の指導方法がわかってよかった」、「発達障害学生支援については、個別に考えるべき点が多くあると思う」という意見とともに、「場合には少し授業法を変えれば対応できるが、場合には全く新しい授業内容を準備しなければならない。後者の場合の支援をいただきたい」というような要望事項も寄せられた。

また、何か発達障害を持った学生との間でトラブルが発生した場合の相談窓口の設置について要望があった。さらに、今回の研修会開催時期については、「研修会は授業開始1週間前で、事前の授業準備や心構えができてよかった」というこの種の研修会開催をタイムリーに実施して欲しいという意見が多かった。

## （3）聴覚障害学生の授業方法についての研修

主催：大学教育機構・理学部（共催）

日時：平成20年4月22日（火） 18:00～19:00

場所：理学部会議室

対象：理学部教員、大学教育センター、担当事務。

講師：小川勤（大学教育センター教授）

参加者：参加実績 10 名（内訳：理学部 9 名、聴覚障害学生本人 1 名）

内容：聴覚障害のある学生への修学支援の方法。授業中・授業外における支援方法を学ぶ。  
報告：

聴覚障害を持った理学部物理情報学科の学生（1 年生）に対する授業のやり方や情報保障について、物理・情報科学科の学科会議の場を利用して、当該学生の所属学科の教員や前期授業を担当する教員を対象に研修会を開催した。

当日は、まず小川勤大学教育センター教授から、当該学生が入学する際の経緯や本学入学前までの成長の過程や高校での学生生活の様子、両親と当該学生の親子関係等について説明があった。

次に、聴覚障害学生も研修会に参加していたので、本人から先生方に授業のやり方で注意して欲しいことや授業の情報保障について直接述べてもらった。

参加者の意見としては、「聴覚障害学生本人から直接話しが聞いて、障害の程度がよくわかってよかった」、「聴覚障害学生の指導方法がわかってよかった」、「聴覚障害学生支援については、個別に考えるべき点が多くあると思う」という意見とともに、「場合には自分の授業のスタイルを少し変えれば対応できないことがわかった」という意見もあった。また、「大学教育センターには継続的に支援をいただきたい」というような要望事項も寄せられた。

また、何か聴覚障害を持った学生との間でトラブルが発生した場合の相談窓口の設置について要望があった。後日、窓口は共通教育係が担当することになった。

#### （４）新規採用教育職員研修会

主催：大学教育機構（人事課と共催）

日時：平成 20 年 8 月 4 日（月） 9：55～17:00（内 センター担当分 14:30～17:00）

場所：霜仁会館会議室（医学部構内）

対象：平成 19 年 8 月以降に新規採用された助教以上の教育職員

講義 1 山口大学の GP とカリキュラムマップについて

講師：小川 勤（大学教育センター教授）

内容：本学は教養教育及び専門教育において、それぞれ GP（グラジュエーション・ポリシー）を作成した。また GP に対応したカリキュラムマップも作成した。その仕組み、意義等について説明する。

講義 2 シラバスの作成

講師：岡田 耕一（大学教育センター助教）

内容：教務システムの説明と山口大学の観点別シラバスの作成方法及び WEB シラバスの入力法など。

講義 3 学生授業評価と教員授業自己評価

講師：吉田 香奈（大学教育センター准教授）

内容：山口大学の学生授業評価システムと教員授業自己評価システムの内容説明など。

報告：

本年度も昨年度と引き続いて総務部人事課職員係と一体となった、新規採用教育職員研修会を実施することになった。参加人数は、昨年度と同様の 24 名であった。午前中は、

学長や副学長による大学経営に関する講話やメディア基盤センターによる山口大学の情報セキュリティに関する説明が行われた。大学教育センターが担当したのは、午後の 14:30～17:00 で、「山口大学の GP とカリキュラムマップについて（講師：小川センター専任教員）」、「Web シラバスの作成について（講師：岡田専任教員）」、「学生授業評価と教員授業自己評価について（講師：吉田センター専任教員）」の 3 つのテーマで研修会が実施された。受講者のそれぞれの研修内容について評価は以下の通りである。

今回の研修会の参加者には、本学医学部に初めて赴任された先生方が多かった関係で、「医学部のシステムに対応したものではなかった」、「内容は十分に理解できるものであったが、医学部のシラバスについて具体的説明を受けたかった」「シラバス入力方法の講習は不必要に感じた（着任前の 12 月に実際に入力しているの）。既に 7 月に受けた研修との内容の重複もあって、二重に不満だった。」など医学部の立場からの意見が多く見受けられた。ただし、研修内容として、「GP についてと Web シラバスについては、同時に説明があったほうがわかりやすいように思った。」という意見に代表されるように、研修内容の見直しが今後必要であると感じた。来年度の計画を立てる際に参考にしたい。

研修会に参加した感想

選択肢	人数
良くなかった	1
あまり良くなかった	1
どちらとも言えない	5
良かった	16
非常に良かった	1
無回答	0
合計	24

## （5）学生参加型授業の展開方法

主催：大学教育機構

日程：平成 20 年 8 月 26 日（火） [吉田地区] 13:30～15:00

場所：共通教育棟 2F 学習室 22

対象：希望者

講師：林 徳治（教育学部教授）

内容：人文社会系の学生を対象とした参画型授業の設計と評価

報告：

学生参加型授業で用いられている手法として、強制連結法、ロジックツリー、マイクロプレゼンテーション、オーディエンス教育、無言面接、フォトランゲージ等の紹介が行われ、強制連結法については演習も行われた。学生参加型ということグループワーク的な内容が多かったように思われる。中でもユニークに思われたのは、オーディエンス教育で、これは基礎セミナー等、初期教育に取り入れておけばその後の授業のずいぶんと影響を及ぼすだろうと感じた。



研修後回収したアンケートには、「理系の知識伝達の授業にはヒントにならない。」、「授業に役立つアイデアを照会していただいたことがよかった。」、「オーディエンス教育には大変関心をもちました。」、「専門の授業をどう学生参加型にするのか。」、「大学教員は教育実習のようなものがないのでこのような研修は大変役立ちます。」、「講師の説明が具体的で、

わかり易かった。「強制連結法シート」を体験しましたが、そのカラクリを聞くと自分が実際授業で行っているものであり、大変参考になったし、安心した。」「多様な手法の存在を知って勉強になりました。ただし、実際の授業での運用法は難しいと思いました。」「大変に興味深い話であった。特に論理性思考力を高める方式、学生の授業参加など」「もう少し、ディスカッションの時間がほしかった。」等の感想が寄せられた。

どのような研修会へ参加したいかという設問には、パワーポイントの効果的な作成方法、実習・実験に関する研修、学生の興味をひきつける方法、時代に合った授業方法、論理的思考を養う方法、人数に応じた授業方法、視聴覚教材の作成、授業方法の改善法、教育方法論等が挙げられた他、学生参加型授業の参考例をもっと示して欲しいとの意見も見られた。

### 研修会に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	1	8.3%
どちらとも言えない	1	8.3%
良かった	7	58.3%
非常に良かった	3	25.0%
無回答	0	0.0%
合計	12	100.0%

## (6) 学習意欲を高める問題解決型の授業展開—その方法と展開—

主催：大学教育機構

日程：平成20年9月25日(木) [吉田地区] 10:30~12:00

場所：共通教育本館棟2階会議室

対象：希望者

講師：池田 幸夫 (教育学部教授)

内容：授業を受けた学生が、「分かった」と実感をもつ授業とは、どのような授業であろうか。そのような授業を行うためには、どのような方法をとればよいのか。また、授業に活気があって、授業中に眠気を感じさせない授業にするためにはどうすればよいのか。実際の授業のVTRを見ながら授業分析を行い、授業改善に必要なノウハウについて考察する。

報告：

学習意欲を高める問題解決型の授業展開の一例として、ビーカーとフラスコ、アルコール温度計を持ち込んで水の沸点の温度を確認する実験が実演された。水の沸点は100℃であるのは周知の事実だが、実際に実験を行ってみると沸騰時の水温は100℃には届かず、ビーカーでは90℃近い温度が認められる。この実験を理論依存型授業において取り上げ、なぜ100℃にならないのか？どうやったら100℃になるのかKJ法を用いて問題解決型学習を行わせた事例紹介がされた。授業直後の意識としては、難しいという感想が多いものの、理解できない子はおらず、面白いという感想が大半を占めると言う。KJ法を用いるため全員が参加でき、負荷をかけて問題が解けたことが面白みに繋がるとのことである。

質疑応答では、「フラスコの方が沸騰の勢い良い。本当に温度違うんじゃないかと思う。デジタル温度計を持って来て測らないと主張出来ないのでは?」「今日、僕はここに来てビ



ーカー・フラスコ並んでいて、人文だけ間違ったところに来たかな？と思ってしまった。如何に、理科が日常生活に結び付けられてないか印象づけられている。」「人文の推薦入試やっていると理科・数学凄くできる人が人文目指してやってくる。理学部受ければ通るでしょうという人が。それはそれで良いのだけれど、日本の将来考えるとこれでいいのかと思う」「我々理系はもう一歩突っ込んでいかないと、意欲に繋げて行けない。卒論である特定領域やっていく。やり方が違う。講義の部分でどうやって学習意欲繋げていけばよいか？」「職業会計士コースやっていて自分の授業は実用志向なんだなとつくづく認識させられた。会計士なれば年収 540 万がはじまるんだぞというところからはじまる。今はいろいろと反省している」など幅広い意見が寄せられた。

### 研修会に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
どちらとも言えない	1	14.3%
良かった	5	71.4%
非常に良かった	1	14.3%
無回答	0	0.0%
合計	7	100.0%

## (7) 情報セキュリティ・情報モラルの教え方

主催：大学教育機構

日程：平成 20 年 9 月 26 日（金）[常盤地区] 14:30～16:30

平成 21 年 3 月 2 日（月）[常盤地区] 14:30～16:30

平成 21 年 3 月 13 日（金）[吉田地区] 14:30～16:30

場所：吉田地区：共通教育本館棟 2 階会議室

常盤地区：工学部 D24 教室

対象：希望者

講師：糸長 雅弘（教育学部教授）

内容：本年度前期の実施状況を踏まえ、第 3 週～第 5 週のテーマである「情報セキュリティ(第 3 週)」、「情報モラル(第 4 週)」及び「コンプライアンス(第 5 週)」を中心に、共通教育「情報セキュリティ・モラル」を指導する上で留意すべき点について、研修を行う。

報告：

インターネットを基盤とする情報通信技術が広く一般に普及した現在は、大きな利便性を享受できるようになった反面、コンピューターウイルスへの感染や「なりすまし」などさまざまな新たな脅威に晒される時代になった。また、電子掲示板への不適切な書き込みなど、モラルの低下も深刻な状況にある。そのため、大学教育においても、情報セキュリティや情報モラルについて体系的に学習させる必要に迫られている。

そこで山口大学では、一部の学部を除いて、本年度前期より従来の情報処理演習を廃止し、情報リテラシー演習（前期前半）と情報セキュリティ・モラル（前期後半）に再構成

して教授することとなった。しかし、情報セキュリティ・モラルの講義には、新しい内容が多く含まれるため、統一教材は準備されているものの、担当教員からは指導内容について様々な不安や意見が寄せられている。

本研修では、共通教育の1年生向け必修科目である情報セキュリティ・モラルの統一教材として本年度用いられた PowerPoint によるプレゼン資料、ワークシート、出席確認課題に対して、新たに NIME（メディア教育開発センター）製作のビデオ教材「情報倫理デジタルビデオ小品集 3」を取り入れた来年度向けの教材、およびそれを用いた授業の進め方について紹介する内容の研修が行われた。研修後の質疑応答では、本年度授業を行った教員による手ごたえや、来年度新たに授業を行う教員の持つ疑問点等、非常に活発な意見交換が行われ、熱心な意見交換が続いた。



平成 20 年 9 月 26 日に行われた研修会では、「講義のおおすじの統一は必要なので良かった。」、「資料の授業における運用状況がわかった点が良かった。」、「講義のポイントがわかりやすく説明された。意見交換ができた点が良かった。」、「情報セキュリティ関連の講義を担当するに当たり大いに参考になった。」、「実際の授業に必要なことであった。」、「内容について大変よく理解でき、有意義でした。」等の感想が得られた。これらの感想と表 1 から、情報セキュリティ・モラルを担当する教員にとって、本研修は非常に有意義であったと考えられる。

今後はどのような研修会へ参加したいかという設問には、「精神的に不安定で不登校になった学生への対応。」「講義でのプロジェクタ（PC）の効果的な使い方。」「ID（インストラクショナル デザイン）に関する研修。」などの意見が得られた。

#### 研修会に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
どちらとも言えない	1	10.0%
良かった	6	60.0%
非常に良かった	3	30.0%
無回答	0	0.0%
合計	10	100.0%

平成 21 年 3 月 2 日に行われた研修会では、「具体的な事例があって良かった。」、「共通して行うべき講義内容を皆で経験するというのは良い。」、「授業だけでなく、その他の業務にも役に立つ内容である。」等の感想が得られた。これらの感想と表 1 から、情報セキュリティ・モラルを担当する教員にとって、本研修は非常に有意義であったと考えられる。

今後はどのような研修会へ参加したいかという設問には、「(情報セキュリティについての) 最近の事例や対策」、「教育（授業）実施事例等について」、「プロジェクトマネジメント」、「最近のウィルスの巧妙化と凶悪化の事例紹介」、「サイバー犯罪の事例紹介」、「講義

の教育的効果を上げる具体的な方法など教育の専門家の話を聞きたい」、「授業のやり方、テストの出題などについて」、「模擬講義と教授法に関する討論」、「E-learningの導入に関するもの（特にクイズデータベース）」、「授業の改善実施の参考となる内容」などの様々な意見が得られた。

#### 研修会に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
どちらとも言えない	2	10.5%
良かった	7	36.8%
非常に良かった	10	52.6%
無回答	0	0.0%
合計	19	100.0%

平成 21 年 3 月 13 日に行われた研修会では、「ざっくばらんに質問できてよかった」、「具体的なディスカッションができて有意義だった」、「大変勉強になった」といった意見が寄せられた。今後、参加したい研修会としては、「情報セキュリティ、IT 技術、デジタルコンテンツ」、「セキュリティモラルについて他の回の授業方法&実施例」といった意見が寄せられた。

#### 研修会に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
どちらとも言えない	0	0.0%
良かった	2	18.2%
非常に良かった	7	63.6%
無回答	2	18.2%
合計	11	100.0%

### ( 8 ) GP 達成のための学生参加型授業の展開

主催：大学教育機構

日程：平成 20 年 12 月 10 日(水) [小串地区] 16:30～18:30

場所：医学部総合研究棟 S1 講義室

対象：本学教職員

講師：林 徳治 (立命館大学教授)

内容：各学部・学科において設定されているグラジュエーションポリシー（卒業時まで学生が身に付けておく基本的な資質）を学生一人ひとりに達成させるため、個々の教員は学生参加型の授業をどのように設計していったらよいのかについて、演習やワークショップ等を通じて実践的な教育指導能力の育成を図る。

本講演では、初年次教育の置かれた現状と初年次教育で取り組むべき課題などを明確にするとともに、より良い初年次教育とはどうあるべきかを解説する。また学生に

対するメンタルヘルスについても説明する。

報告：

学部・学科のGPを達成するために、その手法の一部として、学生参加型授業を授業の中にどのように取り入れていくのかについてビデオや事例紹介を交えて講演が行なわれた。

学生参加型授業で用いられている手法として、強制連結法、ロジックツリー、マイクロプレゼンテーション、オーディエンス教育、無言面接、フォトランゲージ等の紹介が行われた。学生参加型ということでグループワーク的な内容が多かった。オーディエンス教育やPCMの概念を取り入れたクリティカルシンキングの手法であるロジックツリーの作成の過程を実際に学生が取り組んでいる様子をビデオ撮影したものを視聴できたことは、参考になる点が多かったという意見が受講した先生方から多く聞かれた。

研修後回収したアンケートには、「反省すべき点や PowerPoint を使用してわかりやすく・・・とっていたことが裏目に出る事もあると知り、微妙だった。」「学生にどのようにしたら興味を持ってもらえる授業になるか教えていただきたい。」「実際の講義風景なども見ることができ、実際にどのように行っていけばよいか、方法論が理解しやすかった。」といった肯定的な意見がある一方で、「非常に興味ある内容でしたが、理系の科目で、どのように応用したら良いのか、活用方法が良く分からなかった。」「もう少しディスカッションの時間がほしかった。」等の感想が寄せられた。

どのような研修会へ参加したいかという設問には、「講義形式もよいのですが、workshop にして頂きたい。」「学生のキャリアデザインや学科の方向性について問題提示できるようなテーマの研修会の開催」、「今回のFDのように、実践に役立つような内容」、「学生の興味をひきつける方法」、「人数に応じた授業方法」等の研修会の開催を望む声が多かった。

また、開催会場については、「参加人数（見込み、実数）に対して、場所が広すぎる。」等の意見もあり今後検討する必要があると感じた。

#### 研修会に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
どちらとも言えない	4	10.3%
良かった	21	53.8%
非常に良かった	14	35.9%
無回答	0	0.0%
合計	39	100.0%

### (9) 教育での標準テストの影響 : The Influence of Standardized

#### Tests in Education

主催：大学教育機構

日程：平成20年12月19日（金）[吉田地区] 14:30～16:30

場所：共通教育棟2階会議室

対象：希望者

講師： Edwards Nathaniel TYLER （留学生センター准教授）

内容：教育で標準テストの影響はこの 20 年、アメリカと他の国で大きくなる傾向がある。  
この発表では標準テストのメリットとデメリットを詳しく比べる。

The influence of standardized tests in education, in America and other countries, has been growing over the past 20 years. This presentation compares in detail the advantages and disadvantages of standardized tests.

報告：

教育における標準テスト（standardized tests）の影響は、過去 20 年の間にアメリカや他の国々で大きくなる傾向にある。そこで、本研修会では主にアメリカの初等中等教育における標準テストの実施状況、およびそのメリットとデメリットについて報告をしていただいた。アメリカでは、19 世紀半ばにボストンの学校で標準テストが実施され、その後学習成果の測定ツールとして全米に広まった。その後、1965 年の連邦法や、『危機に立つ国家』、the Goals 2000: Educate America Act などでも繰り返し標準テストの使用が求められており、現在も同様の傾向にある。しかし、標準テストはアカウントビリティを示したり、子どもの学習を促進させたりする点においては有効であるが、一方、過度な実施はドロップアウト率を増加させたり、カリキュラムを狭める危険性があることが指摘された。

終了後、フロアーからは「アメリカの標準テストの抱える問題は、本学の TOEIC が抱える問題と同じだと思いました。」「アメリカの標準テストに関する歴史、現状、問題点等を聞くことができ、今後の日本のあり方を考えていく参考になった。」「These days, Japanese people (or university) have favoring standardized test, more and more. This lecture was fruitful in that there are bad aspects as well as good ones, in standardized tests. 」といった意見が寄せられた。また、「できれば、初等中等教育の話だけでなく、高等教育（大学）の話を知りたい。」「I wish you had referred to university-level standardized test. Ex. TOEIC at Yamadai. 」という意見も寄せられた。

#### 研修会に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
どちらとも言えない	2	18.2%
良かった	6	54.5%
非常に良かった	3	27.3%
無回答	0	0.0%
合計	11	100.0%



### （10）学士力・社会人を教育する方法（講演及び事例報告）

主催：大学教育機構

日程：平成 21 年 1 月 7 日（水）[吉田地区] 14:30～17:00

場所：共通教育棟 2 階会議室

対象：本学教職員

講師：松村 直樹（リアセック）

辻 多門（学生支援センター講師）

藤井 文武（イノベーション推進機構准教授）他

内容：近年、大学生が身につける能力として、学士力・社会人力、社会人基礎力などの言葉が聞かれるようになった。大学で学ぶ専門的知識・幅広い教養に加えて、社会において必要とされる能力の育成が大学に求められている。そこで、本研修会では、このような力が求められている背景、および大学教育において実際にどのような取り組みが可能であるのかを、他大学の事例を交えながら講師の方々にご報告していただく。

報告：

まず、(株)リアセックの松村氏より、学士力・社会人力を教育する方法と題して、日本の政策動向、およびアメリカ・イギリス・OECDの動向についてご報告いただいた。さらに、Project based learning（PBL）による能力伸張、ルーブリック評価の方法等についても説明があり、最後にイギリスで注目されているエンプロイアビリティ（employability、雇用可能性）を高めるための教育とキャリア教育の統合について紹介があった。

続いて、産学公連携・イノベーション推進機構の藤井文武准教授より事例報告①として共通教育講義「アクティブラーニング」の実施について紹介があった。2007年度から開始した同講義は学生参画型の授業であり、本年度は企業で働く社会人へのインタビューと企業紹介ホームページの作成を行っているとのことであった。1/10には協力していただいた企業を本学に招いて学生のプレゼンテーションを行う予定であり、社会人基礎力を育成する授業を考える上で非常に参考となった。最後に、学生支援センターの辻多聞講師より事例報告②として共通教育講義「ボランティアと自主活動」の実施について報告があった。同講義はボランティアの概要を学ぶ座学と実際にボランティアを行う体験活動で構成されており、20時間のボランティア体験をまとめさせ、報告会を開いているとのことであった。実施においてはボランティアの受け入れ団体探し、学生との密な連絡調整、危機管理対策（保険への加入義務化）など、様々な苦労があることもあわせて報告された。

参加者からは「海外大学の取り組み例等の情報が得られた。」「松村氏のお話はcomprehensiveで、とても役に立った。各学部・学科の先生がいないのが残念。」といった意見が寄せられた。今回の研修会は急な企画であったため学内への周知不足であったことを反省し、今後は周知方法の工夫・改善を図りたい。

#### 研修会に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
どちらとも言えない	1	14.3%
良かった	4	57.1%
非常に良かった	2	28.6%
無回答	0	0.0%
合計	7	100.0%

## (11) 最近の学生の実態と社会人基礎力の養成

主催：大学教育機構

日程：平成 21 年 3 月 18 (水) [常盤地区] 13:30～16:00

場所：工学部 D23 教室

対象：希望者

講師：小川 勤 (大学教育センター教授)

内容：本研修の前半は青少年の学習観や生活観について、各種の調査結果から分析した結果を示し、最近の学生の特徴に学ぶ。

後半は、中教審の大学部会から示された「学士力」の意義と設定の背景、また、経済産業省が検討している「社会人基礎力」について、大学教育との関係等について学ぶ。

報告：

戦後教育では、高度成長期の科学的知識を重視した教師主導・知識偏重の画一教育を経て、子供の主体性や問題解決能力を重視したゆとり教育が導入されたが、深刻な学力不足に陥ることになった。そのため、現在は再び、知識重視の教育に回帰しつつあるが、2006年の国際学習到達度調査(PISA)では科学的なリテラシーは6位、読解力は15位、数学的なリテラシーは10位と以前と比べるといずれも大きく順位を落としている。これらの結果から、日本の学生は知識重視の学力の低下だけではなく、自分自身で考える力も低下していることがわかる。更に、現在の日本の学生(高校生)は、学ぶことに対して韓国、中国、米国と比べて意欲が低く、自分さえ良ければよいという傾向も強い。また、「より良い仕事に就きたい」という意欲も低い。しかし、その一方で、企業は即戦力になる人材を求めており、大学教育で学生の社会人基礎力が養われることを期待している。大学における社会人基礎力の養成では、基礎学力と専門知識だけではなく、多様な人々と協調して仕事を行うために必要な能力の育成も必要である。これを大学でどのように養成すべきかについて、他大学のPBL形式の授業を用いた取り組みの紹介と解説が行われた。

質疑応答では、「大学における社会人基礎力の養成には限界があり、そもそも小中高の時に学校と家庭で養成すべきことではないのか。」「他大学の取り組みは、学習意欲に欠ける学生に果たして効果があるのか。」「多人数の学生に対して、紹介されたような他大学の取り組みは、時間や労力の面からも非現実的である。」といった意見が出された。研修後のアンケートでは、「川上氏による、なぜ今更「社会人基礎力」なのか-必要とされる3つ背景の共通要因に、幼少期からのパソコンゲームに熱中することが大きいと考えられないか。学生がかなり受身的であることが大変気になる。」「PBL授業の考え方が興味深く、参考になった。」等の感想が得られた。今後参加したい研修会については、「社会人教育について。」「企業、産業界から求められる留学生教育。」「インターンシップのあり方。」「教育方法に関する研修。」「今回と同じテーマ。」などの回答が寄せられた。

研修会に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
どちらとも言えない	0	0.0%
良かった	8	100.0%
非常に良かった	0	0.0%
無回答	0	0.0%
合計	8	100.0%

## (12) 事例から学ぶ危機対応－自殺のポストベンションについて－

主催：大学教育機構

日程：平成 21 年 3 月 18 日(水) [吉田地区] 16:00～17:30

場所：大学会館 2 階会議室

対象：本学教職員

講師：平野 均 (保健管理センター 教授)

今井 佳子 (学生相談所 カウンセラー)

内容：平成 10 年以降自殺者数が毎年 3 万人を超えている。自殺者は全ての年齢層で増えており、大学生も例外ではない。一人の人が自殺すると、その人を取り巻く家族や友人など、少なく見積もっても 10 名前後は深刻なダメージを受けると言われている。

自殺の予防と防止の重要性は申すまでもないが、一度起きてしまった自殺に対し、大学という組織として、大学の教職員として、どのような対応が求められるのか。講師の先生方に自殺のポストベンションについて、本学での事例をもとに説明いただき、往々にしてその重要性が看過されやすい正課外教育の充実にむけて考えるきっかけとする。

遺された人への自殺の影響を最小限に食い止めること、これを目的とした対処を自殺のポストベンションというが、時系列的にみればポストベンションは自殺直後の危機介入と、喪失反応に対するその後の援助に分けられる。本講演では危機介入を組織としてどう進めていけばよいのか。遺された人の喪失反応に教職員としてどう対応していけばよいのか、一緒に考えていきたいと思う。

報告：

親しい人の自殺が遺された人々に及ぼす影響を最小限に食い止めることを「自殺のポストベンション」という。一人の人が自殺すると、その人を取り巻く家族や友人など、少なく見積もっても 10 名前後は深刻なダメージを受けると言われている。そこで、本 F D 研修会では教職員によるポストベンションの進め方について研修が行われた。参加者は学内の教職員 36 名であった。当日は学内限定の Web 配信も行われた。

保健管理センターの平野均教授からは「自殺学生に関わってきた学生への支援－周囲の受け止めからみた自殺学生の日常風景－」というタイトルで報告が行われた。ポストベンションは①自殺直後の危機介入、②喪失反応に対するその後の援助、の 2 段階に分けられる。平野教授からは各段階における対応の留意点について詳しい説明があった。

また、学生相談所の今井佳子氏からは本学のカウンセラーとして過去 6 年間に約 800 名の学生のカウンセリングを行ってきた立場から指導が行われた。特に、自殺直後、残された学生を一人にさせないよう数日は友人同士で寝食を共にさせたり、保護者のもとに帰宅させたりするなどの配慮が必要であること、および、その後も継続的な支援が必要であるとのことであった。さらに、平野教授からは、学生の親世代の自殺の状況から判断すると、今後、深刻な影響を被っている学生の入学の増加が予想されること、および、うつ状態を呈した新入生の増加も予想されるため、全学的な対処が必要であるとの指摘があった。

フロアーからは様々な質問がよせられたが、特にポストベンションに限らず一般的に教職員が学生から相談を受ける場合の留意点については、今井氏から①まずゆっくりと話を聞くこと、② 1, 2 度相談にのる中で自分の手に負えないと判断した場合は保健管理センター・学生相談所への受診を勧めてみる、こと、という回答があった。

参加者からは、事後アンケートで「学生指導の現場では、メンタルヘルスの必要性が年々



増しているので、具体的事例をふまえたお話が勉強になった」「事後対応について、いろいろな情報・症例を知ることができてよかった」という声が寄せられた。また、今後の研修会への希望は「定期的に行われる、今回と同趣旨のメンタルヘルス講習会」「一次予防的なメンタル対策の具体的実践例」などが寄せられた。今後、FD 研修会では、これらのテーマについて継続的な研修を開催していくことが必要であると強く感じられた。

### 研修会に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
どちらとも言えない	0	0.0%
良かった	16	59.3%
非常に良かった	11	40.7%
無回答	0	0.0%
合計	27	100.0%

## (13) インストラクショナルデザイン (ID) セミナー

主催：大学教育機構

日程：平成 21 年 3 月 25 日(水)～27 日(金) [常盤地区]

25 日 13:30～16:30 ID 入門セミナー

26 日 13:30～17:30 ID 実践研修会 1 日目

27 日 13:30～17:30 ID 実践研修会 2 日目

場所：25 日 工学部 D22 教室(定員 88 名)

26 日 工学部 D 棟 4F 情報演習室

27 日 工学部 D 棟 4F 情報演習室

対象：本学教職員

講師：内田 実 (メディア教育開発センター特定特任教授)

内容：「インストラクショナルデザイン」は教育の真のニーズを充足するために学習の効果・効率・魅力向上を図る方法論である。本セミナーでは、インストラクショナルデザインの方法論を学び、さらに教材開発のワークショップを通じて、どのように大学教育に生かすのかについての実践的な理解を深めることを目的とする。

報告：

インストラクショナルデザイン (以下、ID) を大学教育で効果的に用いる方法の検討。

山口大学では、GP、カリキュラムマップ、Web シラバス、学生授業評価、教員授業自己評価などを設けて、教育改善のための PDCA サイクルを既に整備している。しかしながら、学部や研究科においては、PDCA サイクルの基本的な枠組みはあるものの、学科あるいはコース等における教育改善の組織的な取り組みは、まだ十分とはいえないところもある。本 FD では、GP、カリキュラムマップ、Web シラバスに記載されている教育目標を組織的かつ具体的に達成するためのひとつの手段として、ID を知ることを目的とした。

第 1 日目は ID 入門セミナーが実施され、ID の概念や基本的な分析の手順、大学における教育改善活動への応用方法が説明された。2 日目はワークショップ形式でニーズ分析および初期分析の具体的な手順が示され、GP、カリキュラムマップ、Web シラバスを参照しながら、各自でカリキュラムや個別の授業が抱える問題や改善方法を分析し、議論を行

った。3日目もワークショップ形式で eラーニングコンテンツの作成実習を行い、ビデオカメラや PowerPoint を用いた効果的な eラーニングコンテンツ（ビデオ教材）の作り方を学んだ。

本 FD 研修会の感想としては、「講義内容は実践的で役に立った。」「ID は教育設計にとっても大切だと実感した。」等のコメントが得られ、特に今後の学部・研究科別の FD 活動に ID は大変有用であると考えられるので、来年度の FD 研修会でも ID を是非取り上げて欲しいという声もあった。また、今後はどのような FD 研修会に参加してみたいかという問には、「具体的な教材開発や教授法の改善につながるもの。」「実践的なもの（テーマを設けたもの）に参加してみたい。」「Moodle について知りたい。」「より実施局面や状況に近い形での eラーニングのコンテンツ作成と教育方法。」「教育効果向上につながる短時間（2～3 時間）の講義」「実践的な教育手法および教育評価手法についての研修」という回答が得られた。

#### 研修会に参加した感想

選択肢	人数	割合(%)
良くなかった	0	0.0%
あまり良くなかった	0	0.0%
どちらとも言えない	0	0.0%
良かった	4	57.1%
非常に良かった	2	28.6%
無回答	1	14.3%
合計	7	100.0%

## 第 2 章 共通教育授業科目別分科会の F D 活動

授業科目別分科会は共通教育の授業の担当と実施について責任を有する組織であり、全部で 23 分科会が置かれている。年度末に提出される活動報告書には年間の F D 活動に関する報告も併せて行われている。本章では、まず第 1 節において、今年度 F D 活動に取り組んだ分科会の活動内容を報告する。続いて第 2 節では、毎年、中国・四国地区の大学が共同で行っている「中国・四国地区大学教育研究会」へ出席した共通教育の各分科会の代表者からの報告を掲載する。

### 第 1 節 F D 活動

#### 〈 F D 活動を実施した授業科目別分科会 〉

##### 1. 情報処理（分科会長：大学教育センター 小川勤）

情報セキュリティ・モラルを教えるための教員を育成するための F D 研修会を 3 回開催した。特に、21 年度からはメディア基盤センター以外の先生方にも情報セキュリティ・モラルの授業を担当していただく関係で、当初は年 2 回開催する予定であったが、工学部において追加でさらに 1 回 F D 研修会を開催した。講師は教育学部糸長教授にお願いした。

また、学生授業アンケートの結果や本年度実際に情報セキュリティ・モラルの授業を担当した先生方の意見を踏まえて、メディア基盤センターの先生方を中心に教材の再検討を 2 回にわたって実施し、教材の改訂版を試作した。

##### 2. 初習外国語分科会（分科会長：人文学部 井上三朗）

2009 年 3 月 20、21 日に京都大学で開催された第 15 回大学教育研究フォーラムに出席し、F D 活動に関する情報を収集した。

##### 3. 英語分科会（分科会長：人文学部 宮原一成）

「Basic English」自習オンライン課題についての操作法習得と、オンライン学習全般に関する意見交換・討論会。木下大学教育センター講師とアルク教育社の森下光氏の協力を仰いだ。

##### 4. 数学分科会（分科会長：工学部 柳原宏）

プレースメントテストを実施し、数学 IA（週 2 コマ）、IB（週 1 コマ）、数学 II の開講クラスの決定を行った。再履修生の増加対策、TA 担当院生の割り当てを行った。

##### 5. 物理学分科会（分科会長：工学部 嶋村修二）

###### (1) 「物理学実験 A・B」のテキストの改訂と出版

物理学分野の教員 8 名と物理学実験の非常勤講師 2 名の 10 名が共同で物理学実験テキストの改訂作業をし、平成 21 年度版を東京教学社から

出版することにした。

(2) 「物理寺子屋」(学生に対する物理学の学習相談室)の開設

数年来続けている学習相談室を前期、後期とも開き、TAの大学院生が相談員となり、授業内容や演習問題について学生の質問に対応した。

今年度の実施回数は33回で、66名の学生が利用した。

1年生 21名(理10、医2、工8、農1)

2年生 21名(理21)

3年生 18名(理18)

4年生 6名(理6)

(3) 「物理学I」の成績評価に関する問題への対応

工学部2年生の再履修用の「物理学I」(非常勤講師担当)の成績評価に関して複数の学科から相談を受け、成績評価資料を精査し、担当教員の了承のもと、分科会として再試験を実施した。

(4) 「物理学実験B」における独自アンケートによる教育改善

工学部と医学部保健学科の「物理学実験B」において、昨年度から実施している学生への独自アンケート(実験テーマ、テキスト、レポートに関するアンケート)を実施し、担当教員へ報告し、物理学実験の教育改善について検討した。

(5) 平成21年度の放送大学利用の検討

理学部、工学部、医学部の間で検討を重ね、平成21年度前期に3学部合同クラスで「初歩からの物理学」を利用することを決定し、開講の準備中である。

6. 生物学分科会(分科会長:農学部 利部聡)

2008年10月28日(火)17:00~18:00

「放送大学ビデオ教材の利用についての検討」

参加者 3名、宮川、渡辺、利部

2008年度前期は放送大学との単位互換による補講的授業として「初歩の生物学」が医学部1年生希望者を対象に開講された。2009年度に生物部会として、放送大学教材をどのように利用できるかについて検討した。その結果、放送大学ビデオ教材「初歩の生物学」を購入し、共通教育 生物学I、生物学IIその他の授業の中で教材利用することを希望することとした。ビデオ教材を必要に応じて利用することで、学習効果の向上が期待されるとともに、授業内容の共通化にも一定の効果が期待できる。なお、放送大学との単位互換による補講的授業としての「初歩の生物学」は生物部会としては行わないこととした。

7. 地球科学分科会(分科会長:理学部 加納隆)

12月17日に地球圏システム科学科主催で、「大学生のメンタルヘルス:関わりのヒント」という題で、学生相談所今井先生を招いて、講演と討論を行った。

2月28日に同学科主催の第6回外部アドバイザー委員会において、現在の学生の状況について議論する中で、共通教育の位置づけ、基礎セミナーの改善などについて話し合った。

8. 運動健康科学分科会(分科会長:教育学部 森田俊介)

今年度は分科会としては特に取り組んでいない。鳥取大学で開催された第56回中国・四国地区大学教育研究会に分科会長が参加し、意見交流を行った。

## 第2節 第56回中国・四国地区大学教育研究会報告

### 1. 日程・テーマ

日程：平成20年5月31日（土）～6月1日（日）

会場：鳥取大学共通共通教育棟

◎平成20年5月31日（土） 9：00～19：30

・シンポジウム メインテーマ：学士課程教育の充実をめざして

#### 第1部 趣旨説明と講演

趣旨説明 鳥取大学理事（教育担当）・副学長 本名 俊正

#### 講演（その1）

演題：「新潟大学の新学士課程教育構築への取組」

講演者：新潟大学全学教育機構副機構長・副学長（教務担当）濱口 哲

司会：第56回研究会実行委員長 田畑 博敏

#### 講演（その2）

演題：「中教審のまとめ」「学士力」

講演者：神戸大学大学推進機構教授 川島 太津夫

司会：第56回研究会実行委員長 田畑 博敏

#### 第2部 質疑と討論

・総会

・部会（テーマ別セッション）

①第1部会 「FD関係」

②第2部会 「評価（大学評価、学生評価、ポリシーなど）」

③第3部会 「初年次教育（キャリア教育、語学、ゼミなど）」

④第4部会 「大学教育の国際化（特色ある大学教育）」

・部会報告

・懇親会

◎平成20年6月1日（日） 9：30～12：10

分科会（研究若しくは実践報告）

① 人文・社会科学分科会

「教養教育における人文・社会科学の充実をめざして」

② 自然科学分科会

「自然系科目の高大接続・リメディアル教育および学習記録法」

③ 情報科学分科会

「情報メディア・リテラシー教育の改革および情報セキュリティ・モラルの向上」

④ 外国語（英語）分科会

「多様な入学制度に伴う英語学力差問題を考える」

⑤ 外国語（初修）分科会

「初修外国語の教授法および“多様化”問題をめぐって」

⑥ 保健体育分科会

「実技系科目の授業目標と成績評価について」

⑦ 日本語・日本事情分科会

「留学生受入れと教育指導体制」

- ・全体会
- ・閉会行事

## 2. 報告

### (1) 本学からの参加者および参加部会・分科会

職名	ふりがな 氏名	出席部会	出席分科会	山口大学 授業科目別分科会
教授	おがわ つとむ 小川 勤	第1部会 「FD関係」	情報科学	情報処理
センター長 教授	いわべ こうぞう 岩部 浩三	第2部会 「評価（大学評価、学生評価、ポリシーなど）」	外国語（初修）	英語
教授	たかはし としあき 高橋 俊章	第3部会 「初年次教育（キャリア教育、語学、ゼミなど）」	外国語（英語）	英語
教授	もりた しゅんすけ 森田 俊介	第4部会 「大学教育の国際化（特色ある大学教育）」	保健体育	保健体育

### (2) 部会報告

#### 1) 第1部会「FD関係」（情報処理分科会：大学教育センター 小川勤）

##### 1. 香川大学におけるFD：現状と課題

松根伸治（香川大学大学教育開発センター）

最初に、香川大学の大学教育開発センターの組織の人員構成について説明が行われた後、FD研修会の概要について説明があった。全学共通研修会は12月に開催され、2部構成になっていて、1部が全般的課題、第2部が分科会に分かれてテーマ別研修が行われているとのことであった。また、新任教員研修会も5月に開催されているそうである。また、2007年度からFDスキルアップ講座を開始し昨年度は6講座開催したそうである。本学で実施しているアラカルト型FD研修に相当するものである。全般的に見て、本学ですでに実施されているFD研修会の内容で目新しさはなかったが、昨年度から「SDワークショップ」が開催され、教職協働の実現を目指して、新しい事務職員像の構築というテーマで講演会やワークショップ形式の研修会が開催されたことは興味深かった。最後にこれからのFDの焦点というテーマで、大学設置基準の改正に伴って組織的な研修及び研究の実現に努めなければならないことや、個々の授業改善（教授内容と授業手法）からより広い視点のFDへという考え方や、学生の「学習効果」の視点からの教育改善、すなわち、「何を教えるか」から「何をできるようにさせるか」への重点移動が重要である点が指摘された。

##### 2. 電気電子工学科におけるFD活動と教育改革システム

岸田悟（鳥取大学大学院工学研究科情報エレクトロニクス専攻）

鳥取大学電気電子工学科における教育改革の取組が紹介された。4年間で何を教えるかを議論する場として、1996年よりカリキュラム検討委員会を設け、検討した結果を教育改善に活かしてきた。FD活動では、研究公開講義を5年間以上も実施し、現在は授業研究会だけでなく、カリキュラム改訂の検討といった組織的FD活動までに活動が発展しているとのことであった。また、学外卒業研究発表会には、学生、保護者も参加している。4年生卒業時の満足度は80%にも達している教育改善のサイクルが順調に推移しているとのことであった。これからは、入ってくる多様な学生の質の違いに対応できる教育体制の構築を重視していきたいとのことであった。このためには、教養科目をうまくやることによって、学生の能力を向上させることができると考えている。「学び方を学ぶ」、「問題解決能力」の育成などを共通教育段階でしっかりやる必要があるのではないかという見解が示された。

2つの大学の事例紹介の後、質疑応答や討議が行われた。第1部会では最近大学教育の質の向上が求められていることに対応して、大学では「何を教えるか」ではなく、「いかにして学生に必要とされる能力を身に付けさせるか」が求められるようになってきていること。このような大学教育におけるパラダイムシフトに応じて教授法や問題解決能力を育成するための指導方法の開発を教員グループで検討する必要性が高まっていることなどが共通認識として討議がおこなわれた。このような状況の下でFD活動は益々重要になってきている。しかし、FD活動に関して多くの大学で共通する問題点が指摘された。すなわち、①参加率と参加者の固定化、②学部のFDと全学FD協力体制の不足、③学部と教員との協力体制の構築（教員の教育改善に対する認識不足）などがあることが議論された。

## 2) 第3部会「初年次教育（キャリア教育，語学，ゼミなど）」

（英語分科会：教育学部 高橋俊章）

第3部会では、初年次教育に関するいくつかの事例報告を通して、初年次教育の問題点や改善点等を検討することを狙いとして進められた。

まず、徳島大学（総合科学部）の大橋 眞先生より、「社会人形成に向けた初年次教育」と題する報告があった。それによると、徳島大学では、「大学入門科目群」、「教養科目群」、「基盤形成科目群」及び「基礎科目群」に加え、平成20年度より「社会性形成科目群」を創設しているとのことである。この科目群の目的は学生の社会性を高めるためであり、①グループ学習を活用して互いのコミュニケーションを図ったり、地域の社会人ボランティアに授業に参加してもらう（一緒にものづくりをするなど）ことにより、「共創型学習」を行う授業（注：共創型学習の場合はグループ学習の形態であり、一方的に教師が講義する形式ではないため、必ずしも教員の専門領域ではなくても授業が可能という側面もある）や、②保育所で子供とコミュニケーションをする体験（実習）を行うことにより社会性や人間力を身につける「ヒューマンコミュニケーション」の授業について報告がされた。これらの科目は、いずれも体験型の学習を重視しているが、それは今後の社会においては自ら学ぶ姿勢が必要であり、座学→体験→座学→体験のサイクルを繰り返すことにより、座学で学んだ専門的知識を体験を通じて活用する力（知識を活用する力）が身につくと期待されているからである。もちろん、体験型の授業を多くすると授業中に扱える絶対的な知識量が減ることになるが、体験型授業で学んだことに関連したことを自主学習で学ぶようにすれば、そのような問題にも対処可能であると主張された。

次に、鳥根大学教育開発センターの森 朋子先生より、「初年次ゼミ、効果検証へのプロセス」と題する報告があった。この報告では、まず、初年次教育の効果を高めるために、

外発的動機や内発的動機だけでなく、達成動機や親和動機を活用するような授業を行うことが大切だと報告があった（特に、1年生には親和動機が強いため、グループ活動が有効であると主張された）。そして、初年次教育において親和動機を高めるような工夫をすれば、学習効果と教育的効果が得られるかについてSPDCCサイクル（大きなPDCサイクルの中に小さなPDCサイクルが入れ子式で入っている方式）で検証することの大切さについて報告があった。それによれば、アンケートデータや学生へのフォーカスインタビューなど根拠資料に基づいた研究ベースの分析・検証を行って行くことが重要であり、それにより初年次ゼミの学習効果と教育的効果に改善を行うことが可能となると主張された。興味深い発表であったが、全般的に、分析方法（あるいは分析モデル）の紹介にとどまっていた感があった。また、初年度教育に関する学習効果と教育的効果に関する調査結果に関しては、若干の自由記述データの紹介を除けばほとんど聞けなかったのが残念であった。詳しくは報告されなかったが、分析の結果、ノートの取り方を初年次教育で学ぶ際にグループ学習を活用した場合（つまり、親和動機を高める取り組みをした場合）、活動を楽しんでいると感じたり、他の学生からノートの取り方のアイデアに関して学べるという側面があることがわかった。その一方で、ノートの取り方を学ぶという目的は学生にはインパクトが薄いことが分かった。このことから、学生が興味を持って学習したい内容がまず先にあり、その学習を支援するためにノートの取り方を学ばせることが重要だと報告された。

3番目に松山大学経済学部の松井名津先生より、「大学生活への意欲を高めるための導入教育プログラム」と題する報告があった。新入生の学力低下がよく問題にされるが、偏差値が55未満の学生の場合には大学入学後の学習意欲が毎年低くなっていることがより深刻な問題であるという指摘がされた。興味深かったのは、大学入学直後の段階で、新入生が意欲的に大学生活に取り組むようにする特別なプログラムを、外部の講師に依頼（つまり、アウトソーシング）しているということである。外部の講師はチームビルディングの手法（記憶が曖昧だが、グループごとに、無人島に置き去りになったら、リストにあげてある物のうち、どの5つが重要かについて討議する方法が一例で紹介された）を用いた自己探求プログラムを実施し、新入生の学生の意欲を高めることに成功しているそうである。ただし、その効果をその後も維持するためには、入学直後の自己探求プログラムの実施だけでは不十分である。そのため、①キャリアカウンセラーとのセミナーにより、初年次からキャリア形成を意識させるプログラムを実施し、②実際の社会人にインタビューを行う社会人セミナーを提供していることが報告された。①に関して、注意しなければならないのは、キャリア形成を意識させるということは、1年生の段階で学生の職種を決定するといったことではないことである。むしろ、職業選択は、人生の多様性や偶然性によりキャリア形成がされている部分が多いことを意識させ、将来の職業選択において柔軟性と適応性を持たせることに主眼が置かれていることである。②の社会人セミナーは、実際に社会人にインタビューをする前に、事前学習をすることが求められており、学生の事前学習支援のために専門の相談員が図書館に配置されている。また、社会人へのインタビュー終了後には学生はレポートを書くことが求められる。そして、書いた文章は専門の担当者が添削を行い、返却する仕組みになっている。その点で、日本語の文章作成に関するリメディアル教育的側面も有している。

4番目にノートルダム清心女子大学（人間生活学部）の菊永 茂司先生より、「ノートルダム清心女子大学における初年次教育」と題する報告があった。1990年代より、入学前教育として、1～3つ程度のレポートを書かせる課題を学生に課しているとの報告があった。例えば、英語英文学科の場合、①5冊から1冊選んで、400字詰め原稿用紙（B5、5枚）程度のレポートを書かせ課題と②7冊から1つのトピックを選んで、自分の考



えを英文で書かせる（2000字）の2つの課題を課している。学科ごとに課題の量には差が見られ、400字詰め原稿用紙（B5、5枚）程度のレポートのみというような学科もあれば、3つの課題を課す児童学科のような学科もある。いずれにしても、学生のほとんどがきちんと課題を提出していることを考えると学生の学習意欲は十分に高いと考えられる。ノートルダム清心女子大学には第2希望や第3希望で入学してくる学生が多いとのことだが、学年があがるごとに満足度は上昇し、最終学年ではほとんどの生徒が大学生活に満足という評価に変化して行くそうである。うらやましい状況であるが、今回の報告（あるいは取り組み）からは、そのような結果を生み出す秘訣を見いだすことはできなかった。

### 3) 第4部会「大学教育の国際化（特色ある大学教育）」

（保健体育分科会：教育学部 森田俊介）

第4部会では、主管大学である鳥取大学国際交流センター長の若良二氏より、同大学の教育の国際化に関する取り組み概要が説明され、続いて、メキシコ海外実践教育プログラムに参加・修了した学生による体験発表がなされた。

#### 1. 若良二氏（鳥取大学国際交流センター長）

鳥取大学では、教育研究理念「知と実践の融合」のもとに、教育の国際化に取り組み、現地を重視して、「現実」に接することで現代社会や自然環境でおこる様々な課題探求に挑む学習姿勢を奨励している。このことは、文部科学省の「大学国際戦略本部強化事業」「海外先進教育実践支援事業」「戦略的国際連携支援事業」「グローバルCOE」に採択され、着実に実施してきたことで具現化されつつある。

今日は、平成17年度に戦略的国際連携支援事業で採択された「持続性のある生存環境に向けての国際人養成—砂漠化防止海外実践教育カリキュラム—」を、平成19年度に参加した学生の発表をもって紹介する。この事業では、砂漠化が進行しつつある乾燥地を有する海外に教育拠点を置き、全学的な実施体制の下に、海外の教育研究機関と連携しながら、講義とフィールドワークを融合させた実践教育カリキュラムを実施することによって、国際的に活躍できる課題解決能力を備えた人材を育成することを目的としている。大学としては、修士課程用のITP（平成20年から5年間）と博士課程用のグローバルCOEを整備しているのので、今回の参加者から、さらに上のレベルの研究者・技術者を目指す人が出てくることを期待している。

#### 2. 学生報告

##### ① メキシコ海外実践教育プログラムの概要

- ・ 実施場所：メキシコ合衆国・南バハカルフォルニア州ラバス市にある南バハカルフォルニア州立自治大学とメキシコ北西部生物学研究センター
- ・ 派遣期間：9/12～12/19 約3ヶ月
- ・ 派遣学生：主に3年生20名（農学部16名、地域学部4名）
- ・ 派遣教員：鳥取大16名（主に農学部、他に工・医）、中国1名、韓国1名、アメリカ2名
- ・ 実施科目：語学（英語2単位、スペイン語・中国語・ハンゲル語うち1単位）  
：講義（自然環境概論、生存環境論、国際理解、地域開発と保全、乾燥地科学概論、世界の高等教育と社会事情 各1単位）
- ・ 実習・調査：生態環境・圃場実習、エネルギー・生活環境調査（各5単位）
- ・ 帰国後の学内・学外報告会：各1回

② メキシコ海外実践教育に参加した学生から、語学・講義・実習・フィールドワークから学んだことや生活・体験・交流をとおして学んだことが、英語・スペイン語・日本語で報告された。要点は以下の通りである。

- ・ 英語とスペイン語の授業は会話を中心に行われ、現地人との交流や実習報告会のプレゼンテーションでその成果を試す機会が多々あった。事前の準備不足と語学力のなさを痛感するとともに、コミュニケーションの基本は、理解してもらおうと思って積極的に話しかけていくことが重要であることが理解できた。語学の勉強は今後も続けていこうと思う。
- ・ 「Let's Try」を旗印に共同生活をした 20 人の仲間は、互いに励まし協力し合っ  
て、有意義な 3 か月を送ることができた。自分ひとりでは続かなかったと思う。
- ・ 実習・フィールドワークの内容は多岐にわたっていた。自分の専門外の内容については十分理解できなかったところもあったが、関連する分野として幅広い知識を持つことの必要性が認識でき、興味を持つこともできた。また、実習・フィールドワークでは、時間的な制約があるなかで結果を求められている。このことから、グループには、共通の問題意識・観察力そしてチームワークが強く求められていることが分った。
- ・ 世界各国で起こっている人口問題や飢餓問題の根源には、環境問題があることが強く認識できた。今回の貴重な現地経験を生かして、将来にわたって積極的に環境問題に取り組んでいきたい。

③ フロアーからの質問

Q1 学生負担経費はどの程度か？

(A) 約 8 万円程度であり、渡航費は文科省経費で賄った。

Q2 参加者選抜を語学力と面接で行ったそうだが、語学力はどの程度だったのか

(A) 一応 TOEIC の点数を参考にすることを考えていたが、意欲を重視して選抜した。

参加者には、事前の語学シャワールームの活用を促してはいたのだが・・・。

Q3 今回のプランで課題となることがあるのか

(A) リスクマネジメント不足していると思う。

Q4 事業は昨年度で終了しているが、成果もかなりあるようだ。大学としての今後の取り組みがあれば教えて欲しい。

(A) 帰国後の学内外の 2 回の報告会で、外部評価委員ほか多くの人から高い評価が得られた。平成 20 年度も継続して行うこととなり、学内で予算措置をいただいている。

### (3) 分科会報告

#### 1) 情報科学分科会

「情報メディア・リテラシー教育の改革および情報セキュリティ・モラルの向上」

(情報処理分科会：大学教育センター 小川勤)

本分科会は「情報メディア・リテラシー教育の改革および情報セキュリティ・モラルの向上」をテーマに 3 つの研究発表が行なわれた。はじめに、鳥取大学の西田総合メディア基盤センター長より挨拶があり、高校の教科情報が導入されているが、思ったほど効果が上がっていないのではないのではないか。セキュリティ・モラル教育や e ラーニングの推進が今後大学教育の中で重要になっていくのではないかという見解が示された。その以下

の発表は行なわれた。

1. 「情報セキュリティ・モラルを重視した情報カリキュラム改訂への取り組み」 小川 勤  
(山口大学大学教育センター)

本学では、本年(20年)度から取り組んでいる共通教育における情報教育カリキュラムの改訂について、最近、社会的なニーズとして重要視されている情報セキュリティや情報モラルに対する教育を、積極的に共通教育における情報教育の中に取り込んだことを中心に、改訂に至る経緯と統一カリキュラムの内容について発表を行なった。共通教育における情報教育を担当する教員の指導体制では、他の分科会との二重登録を止め、単独所属の教員からなる情報処理分科会に新たに再編成したことを説明した。また、従来学部・学科ごとに、異なる教育内容で実施されてきた情報教育を統一シラバスによって実施することになったことを説明した。これらの教育改革の結果、時間割の策定からTAの配置、統一シラバスの作成、共通教材の開発などが全学的な規模で展開されることになったことを説明した。

2. 「臨機応変に学生の理解度を把握するための電子メールを用いた簡易小テストシステム」 井上 仁(鳥取大学総合メディア基盤センター・米子サブセンター)

授業の最中で重要なことはクラス全体の理解度を把握することである。この把握を通じて授業中にフィードバックさせることが重要であるという考え方から、電子メールを用いた簡易小テストを開発したことについての発表があった。このシステムの特徴としては、事前に問題コンテンツを作る必要がないこと。操作が簡単であること。携帯を利用することによって講義室でも利用できること。個人ごとの解答履歴の収集・分析ができるなどがあげられるようである。

作業としては、先生が発問→学生は指定したアドレスに解答を送信→サーバーコンピュータへ→携帯かPCで解答状況を確認(先生)という手順で行なわれるようである。

このシステムの利点としては、①個人が特定できる。②解答を強制できる。③瞬時に結果がわかって便利(先生)④コンテンツ作成の手間がかからない。

実際に携帯を利用する場合、学生に通信費用が発生するが、学生は、わかりやすい授業の展開のために多少費用がかかろうと協力的だそうである。

課題としては、すべての講義室で利用できないことや、送信メッセージから解答を識別できないことなどがあげられるようである。

3. 鳥取大学 石田雅先生「情報科学教育における教材コンテンツ開発と学習環境整備の実践」 石田 雅(鳥取大学総合メディア基盤センター)

鳥取大学の共通教育における情報リテラシー教育の実態やその他の情報関連科目の教育内容の紹介があった。情報リテラシーは、必修として1年時前期に2単位で設定されている。受講延べ人数は、約1,000名程度で、19クラス編成になっている。1クラスにTAが1~2名配置されているようである。鳥取大学では、その授業の6割を総合メディア基盤センター所属の教員が担当している。本学では本年度から情報セキュリティ・モラルをメディア基盤センターの先生方に担当してもらっているが、鳥取大学の事例を見れば、もっとメディア基盤センターの教員が共通教育に対して貢献すべきであると感じた。教材としては、「OFFICE2003で学ぶコンピューリテラシー(実教出版)」と「インターネット社会に生きるための情報倫理」(実教出版)の2冊を教科書として学生に持たせているとのことであった。また、この授業の中では、第2~4回目の授業でeラーニングを利用してい

るとのことであった。また、eラーニングを利用して授業アンケートを実施し、これを講義出欠用に利用しているとのことであった。この点でも本学でe-ラーニングの活用をもっと推進すべきであると感じた。

## 2) 外国語（英語）分科会

### 「多様な入学制度に伴う英語学力差問題を考える」（英語分科会：教育学部 高橋俊章）

外国語（英語）分科会では、推薦入試、AO入試などの多様な選抜方法の採用により、入学者の学力格差が広がっている状況に対応するため、各大学が行っている取り組みの現状が発表され、その問題点や課題について討議を行った。

まず、鳥取大学（教育センター・外国語部門）の福安 勝則先生から、推薦入試、AO入試などの多様な選抜方法の採用により、入学者の学力格差が広がっている状況について報告があった。具体的には、推薦入試や個別入試で英語を課していない学部や学科は英語の学力が際だって低いことが報告された。また、中学卒業程度や高校初級レベルの英文法問題で誤答する学生が驚くほど多い現状が報告された（例：（November / December / February / March） is the month that comes before January.（正解率 84%）、 He came up with the idea（showed / had shown / be shown / shown） below.（正解率 27%）。

その一方で、英語能力の高い学生も入学し、学力格差が広がっている現状が報告された。鳥取大学1年生の場合、1年次の12月に実施したTOEICのスコアの最低点は185点で最高点は975点（平均点は407点）であった。鳥取大学の場合、TOEIC300点以下の学生に対応するため、H20年度から”基礎の基礎クラス”を2クラス開設して対応しているとのことであった。

どの大学でも当てはまるようだが、いわゆる補習クラス（単位なし）にすると出席率が回を追うごとに低下し、2、3回後には学生数が半減していることも珍しくない。山口大学では Basic English を今年度から実施するが、このクラスの場合には、TOEICの認定基準点に到達しなくても、きちんと出席して与えられた課題を行って行くことで単位の積み上げが可能である。その点で、山口大学の方が取り組みとしては効果が高いのではないかと感じた。

次に、鳥根大学（外国語教育センター）の廣瀬 浩三先生が、入学時の多様な英語力に対応するため、①習熟度別クラス編成を行っていること、そして、②平成20年度からは初年次教育としての「大学英語入門」を実施していることが報告された。①の問題点としては、習熟度クラスの成績評価は統一テストに基づいて行われるため、上級のクラスの学生が優をほとんど取り、基礎のクラスの学生は可がほとんどという状況になることが報告された。これに関連し、鳥取大学から発言があり、鳥取大学ではいわゆる相対評価を行っているため、習熟度別クラス編成を行っていてもクラスごとに優良可をつけているとのことであった。ただし、いくつかの大学から、GPAを導入している場合、統一テストで評価を出さないと、公平な評価にならないため、相対評価ではなく、絶対評価方式を採用するのは避けられないのではないかという意見が出された。

次に、習熟度クラスの別の問題として、習熟度クラスにおけるクラスの雰囲気や学習意欲の問題が報告された。具体的には、習熟度クラスに分けた場合、中・上級のクラスの雰囲気や学生の学習意欲は良いが、一番下のクラスの場合にはとても悪くなることが多いことが報告された。改善策としては、一番下のクラスの学生だけにすることは避け、中級のクラスの学生も入れることにより、「僕たちは英語が出来ない人の集まり」という認識を強

化するのを防ぐ必要があると報告された。

最後に、習熟度別クラス編成を行っても、TOEIC認定スコアをクリアするような英語学力の高い学生には対応できていない問題点が指摘された。これに関する取り組みはあまりされていないのが現状のようだが、①認定により必修単位として英語を履修しなくても良い学生のために選択科目（スーパーリスニングなど）として英語の授業を開設している大学、②英語力の高い学生だけが履修可能な授業プログラム（2年生以上対象）を開設し、そこで優秀な成績をおさめた学生に証明書を出している大学、③各学部の専門英語として英語能力の高い学生用授業を開設している大学、があるようである。

### 3) 保健体育分科会

「実技系科目の授業目標と成績評価について」（保健体育分科会：教育学部 森田俊介）

I 初めに、福元和行・鳥取大学教育センター教授より、同大学の全学共通科目・健康スポーツ科学実技の概要と標記議題の提案趣旨が説明された。

(1) 概要と授業目標

- ① 鳥取大学では、工学部の2学科を除いた全学部・全学科で1単位必修である。定時開講授業数37（前期22、後期15）・集中開講授業数2を、常勤教官8名・非常勤講師5名が担当している。
- ② これまでの健康スポーツ科学実技のシラバスでは、各種目の授業目標として、種目の特徴を理解し、技能を身につけ、スポーツを楽しむ習慣を獲得する、といった生涯スポーツに対応した準備教育を意図した目標を掲げていた。
- ③ 最近、大学は、「人間力を根底におく教育」を教育のグランドデザインとして採用し、人間力の養成を教育課題としたため、シラバスには、②で述べた生涯スポーツに関連した目標だけでなく、人間力養成に関連した目標も併記するようになった。例えば、ある種目では、「高等学校までの教育課程において養われた基礎体力および技術力を維持することと、生涯にわたる運動習慣の動機づけを目的とする。人間力としては、体力の維持・増進に、また班別練習を通してコミュニケーション力、実践力の向上にも役立つと考える」と記載されている。このような変化は、スポーツの教育だけでなく、スポーツによる教育も重視していく方向を示している。

(2) 成績評価

- ① 鳥取大学では、担当教官ごとに評価の項目と配点が異なっている。評価の主な項目は、出席率・学習意欲（学習態度、上達意欲）・種目理解・技能などである。
- ② 大学体育連合が174大学についてアンケート調査（2003年）した結果では、項目と配点を統一している大学・項目だけを統一している大学・両者とも統一していない大学がほぼ同数であった。評価基準の項目を多い順にあげると、出席(97%)・学習態度や意欲(90%)・技能やスキル(71%)、レポート(59%)であった。学習態度や意欲に含まれる項目は、積極性、遅刻の有無、準備や片付けへの参加、リーダーシップであった。同調査では、配点内容は記載されていない。

(3) 今後の課題として、以下の事項が述べられた。

- ① 項目と配点の大学内での統一の必要性
- ② 採用項目の妥当性
- ③ 採用された項目についての人間力の観点からの評価方法
- ④ 項目間の適切な配点

II 鳥取大学の発表についての質疑、および各大学の体育実技の授業目標・評価項目・配点などについて意見交換がなされた。

(1) 鳥取大学の発表についての質疑

- ① 人間力の理念は誰が作ったのか？実効性を考えれば、学生の意見も必要なのではないか。
- ② 人間力は、教養・専門課程の授業の中で育てるものではなく、大学生活全体で育てることを考える必要がある。
- ③ 記載されている要素の全てを身につけた人間の育成は、本当に可能なのだろうか。
- ④ 記載されている人間力の要素以外に重要な要素があるのではないか。

(2) 各大学の体育実技の授業目標・評価項目・配点など

- ① 大学の教育目標との絡みでシラバスの内容を書くことはなく、またその内容は、授業を担当する教員が生涯教育の観点から独自に作成されたものであり、配点についても統一していない、ことが多くの大学から報告された。
- ② 実技種目は異なっても、身体づくりや身体の動きの重要性は共通するので、授業開始の3～4回は共通内容にすることを検討している。このことで、評価内容は一部統一されることになる。大学内では、評価項目としての「出席」はふさわしくないとの意見が紹介された。
- ③ JABEEでは、出席点を評価項目としていない。現状では、出席点を授業態度の観点に置き換えて評価項目にしている大学も多いようである。実技・実習については、JABEEの規制はなじまないとの意見があった。
- ③ 法人化以後、全国の約50%の大学において体育の位置づけが必修から選択に変更された。しかし最近では、再び必修化に変更した大学が増えており、約70%となっている。本会でも2大学で変更があったことが報告された。
- ④ 体育実技に関する学生の授業評価は、実施していない大学、講義と同様の評価項目で行っている大学、講義とは異なる実験・実習用の評価項目を設定して実施している大学など、授業評価の現状が多様であることが報告された。

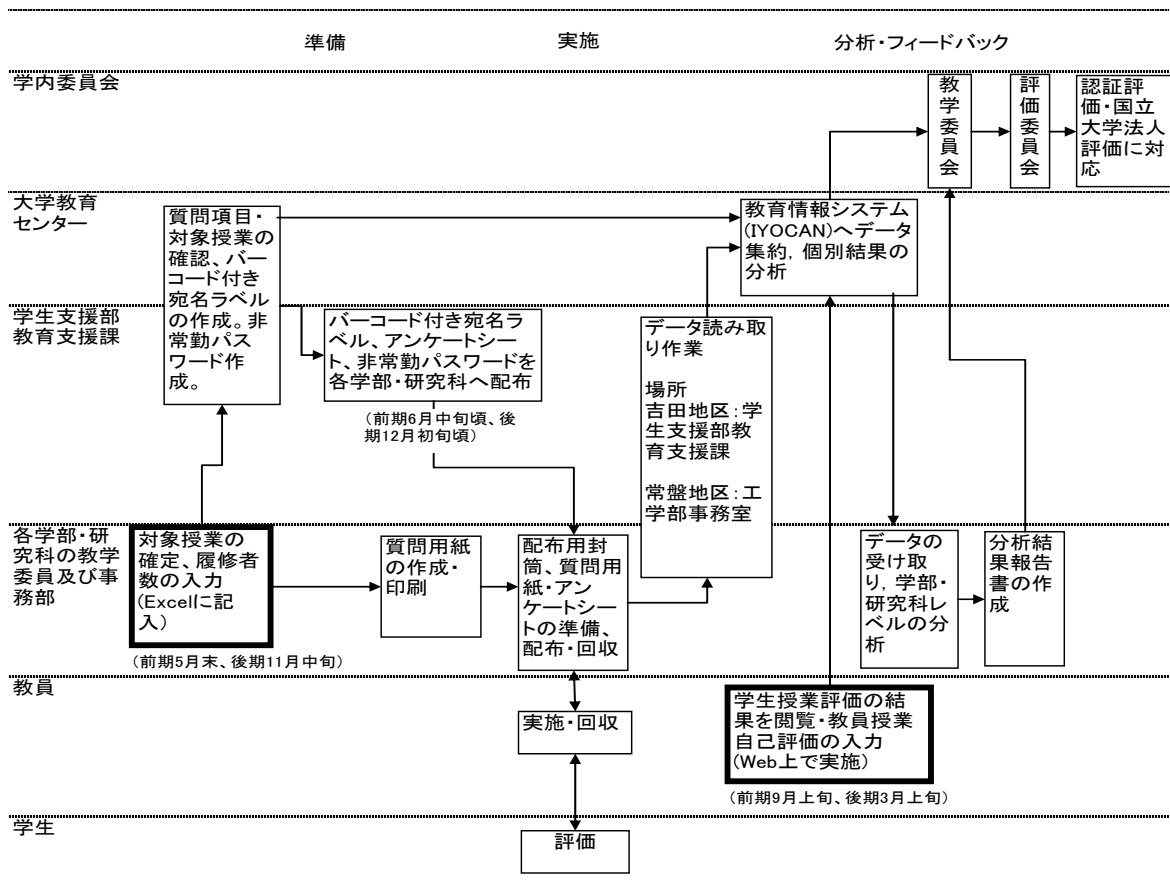
# 第3章 学生授業評価及び教員授業自己評価

## 第1節 実施方法・実施状況

### 1. 実施方法

山口大学では、平成17年度前期より、旧大学教育職員能力開発（FD）委員会（～2008年3月。現在は教学委員会）のもとで、学生による授業評価（以下、学生授業評価）および教員による授業自己評価（以下、教員授業自己評価）を全学的にスタートした。平成16年度までは7学部が独自に学生授業評価を実施してきたが、効率化・簡便化を図る必要性や、認証評価への対応の必要性から、大学教育センターがこの実施業務を引き受け、現在まで統一的に実施している（医学部を除く）。下図はその一連の流れである。マークシートに記入された回答は教育情報システム「IYOCAN」(Information of YOur Course ANalysisの略、いよかんと呼称)に蓄積され、教員はWeb上で結果の確認と自己評価を行っている。なお、医学部(医学科、保健学科)は全学に先駆けてWebによる授業評価を実施しており、独自のデータベースを構築しているため、IYOCANは利用していない。

#### (1) 教育情報システム(IYOCAN)による学生授業評価・教員授業自己評価



※共通教育、全学部、一部の研究科で実施。ただし、医学部のみ独自のシステムで実施。



## (2) 医学部医学科「医学教育総合電子システム eYUME」

平成13年度より、医学教育センターが管理する「医学教育総合電子システム eYUME」上で毎回の授業ごとにオンライン授業評価（進行評価）が実施されている。また、ユニット終了時にはマークシート方式による「ユニット学生振り返り評価」「ユニット責任者振り返り評価」が実施されている。その結果は同システム上で公開されている。





### (3) 医学部保健学科「山口大学医学部保健学科授業支援システム」

保健学科ホームページ上から「山口大学医学部保健学科授業支援システム」にログインし、教員が登録した授業評価メニューや出席確認メニューに対して、学生が教員から告げられた期間（時間）内にアクセスしてオンライン授業評価を行っている。



## 2. 質問紙の種類

質問紙は各学部・研究科ごとに異なっている。また、授業区分（講義、演習・実験・実習等）ごとに分かれており、学部・研究科独自の質問項目も設けられている（詳しくは4章以降の各学部・研究科のFD報告を参照のこと）。これは各学部・研究科のニーズに合った授業評価を実施するためである。

なお、本学のシラバスでは下表のように様々な授業区分が設けられているが、用いられる質問紙は大まかに分類して以下のようにになっている（医学部を除く）。

シラバスの授業区分	質問紙の種類
「講義」の場合	講義用
「講義と演習」の場合	講義用
「講読」の場合	講義用
「演習」の場合	演習・実験・実習用
「実験・実習」の場合	演習・実験・実習用
「その他」の場合	講義用

共通教育では、上記に加えて、外国語系列の授業でシラバスの授業区分に関わらず「語学用」「TOEIC準備用」の質問紙が使用されている。この2つの質問紙は基本的には「講義用」と同じであるが、授業技術を尋ねる質問の内容が異なっている。

シラバスの授業区分	質問紙の種類
「講義」「演習」のうち外国語教育の場合	語学用 もしくは TOEIC 準備用

※「語学用」の質問紙は農学部専門授業の外国語科目でも使用されている

### 3. 質問項目

上述のように学部・研究科ごとに質問紙・質問項目は異なっているが、平成 17 年度からの統一的な実施に際して、全学共通の質問項目が 5 項目設定され、上記の「講義用」「演習・実験・実習用」「語学用」「TOEIC 準備用」の各質問用紙に盛り込まれた。この共通質問項目の導入によって山口大学全学の傾向の分析を行うことが可能となった。ただし、各学部・研究科では、共通質問項目に独自の質問項目を加えたオリジナルの質問紙を作成することができるので、これまで実施してきた学生授業評価との経年比較を行うことも可能となっている。

#### 全学共通質問項目

- ① <授業外学習時間> あなたはこの授業において、授業外学習(予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強)をどれくらい行いましたか？総時間を平均し、授業1回当たりの時間に換算してお答えください。
- ② <学習目標達成> あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？
- ③ <理解> あなたはこの授業の内容を理解したと思いますか？
- ④ <満足> この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？
- ⑤ <出席> あなたはこの授業にどのくらい出席しましたか？

### 4. 実施対象授業

#### (1) 学部

基本的に全ての授業で実施しているが、授業評価の対象として適さない科目(例：教育実習、卒業論文等)については実施対象から除いている(詳しくは第2節「学生授業評価の結果について(全学)」の表を参照のこと)。なお、教員授業自己評価については学生授業評価を実施した授業を対象としている。

#### 学生による授業評価実施要項 (H17-)

	実施対象科目	授業規模	その他
全学部 (学士課程)	全て。ただし、学生授業評価の対象として適さない授業科目については実施対象から除くことができる。	規模に関係なく全ての授業で実施。ただし回答者が5名未満の場合は授業担当者に結果を開示しないものとする。	非常勤講師についても実施

※評価を実施しない授業科目名は一覧にして質問項目とともに大学教育センターに情報を提供。

#### (2) 研究科

平成 18 年度より大学院における授業評価は、a)学生授業評価は各研究科で最適な方法を決定・実施する(IYOCAN を利用してもよいし、自由記述形式等の独自の方式でもよい)、

b)その代わり、学生授業評価の実施・非実施にかかわらず教員授業自己評価はすべての授業で実施し、授業の振り返りを通じた授業改善を促す、という方式で実施している。

●大学院・学生授業評価の実施方法（H18-）

	実施対象科目	実施方法	その他
全研究科（修士）	学生授業評価の対象として適する授業科目全て。	各研究科で選定した評価対象授業については、各研究科独自の方法で授業評価を実施する。学士課程と同様の方法を用いる場合は「いよかん」を利用できる。	独自で実施する場合は、質問項目の選定も自由とする

※実施方法および対象授業については大学教育センターに情報を提供。

●大学院・教員授業自己評価の実施方法（H18-）

	実施対象科目	実施方法	その他
全研究科（修士）	全て	学生授業評価の実施・非実施にかかわらず、全ての授業で自己評価を実施する。自己評価は「いよかん」で行う。 なお、評価項目については学士課程に準じるが、【28. 授業実施上の工夫】(10項目)は任意とする。	

※授業形態の特殊性等の理由から学生授業評価を実施しない授業についても、教員自身による授業の振り返りを通じた授業改善を促す観点から自己評価については実施する。

## 5. 学生授業評価の結果の閲覧方法、

### 教員授業自己評価の実施方法について

これまで各学部・共通教育では個々の教員への学生授業評価の結果の通知を印刷物で行ってきた。しかし、これは非常に手間がかかるため、より効率的で効果的な方法として、Web上での閲覧システムの導入が共通教育は平成16年度から、また専門教育は平成17年度から導入された（医学部医学科は平成13年度より）。

教員は大学教育センターのホームページにアクセスし、公式メールアドレスとパスワードを入力して教育情報システム「IYOCAN」にログインし、学生授業評価の閲覧と自己評価の入力を行うことができる。Web上では過去の評価結果も閲覧でき、PDFでダウンロードすることもできる。また、非常勤講師も学外からデータベースにアクセスできるようになっている。

なお、学生授業評価の回答者が5人未満の場合、集計結果は教員には開示されない。これは学生が特定される危険性を避けるためである。

閲覧・入力の手順で工夫したことは、個々の教員が学生授業評価の結果を見る前にまず自己評価を行う点である。教員による自己評価と学生授業評価はほぼ裏返しの質問項目で

あるため、自分の認識と学生による評価の「ずれ」を確認できる。教員はこのずれを確認した上で、授業の反省点・改善点を記入することになっている。

## 6. 学生への結果のフィードバックについて

平成 18 年度後期より、学生への結果のフィードバックの第一歩として教員授業自己評価の一部を学内公開した。具体的には【30.授業実施上の問題点・改善点（自由記述）】を Web 上で公開した。



## 第2節 学生授業評価の結果について（全学）

### 1. 実施状況

#### （1）今年度の変更点

今年度の変更点は、大学院における学生授業評価において教育学研究科と経済学研究科が新たに IYOCAN を利用したマークシート方式の授業評価を採用した点である。両研究科ともほとんどの授業が数名で行われているという状況であり、マークシート方式が果たして適切かどうか議論されてきたが、できるだけ簡便かつ継続的に学生からの意見を聴取するため今回の導入に至った。なお、質問項目については経済学研究科では他の研究科と同様に全学共通 5 項目を含んだ質問項目が使用されているが、教育学研究科では全学共通 5 項目のうち「満足」に関する質問が使用され、あとは独自の質問項目となっている。そのため、以下で取り上げる全学共通 5 項目の比較表・図では教育学研究科は「満足」以外は比較できなかった。

また、大学院の授業評価において人文科学研究科と農学研究科は IYOCAN ではなく独自の方式を採用しているため、これらも全学共通 5 項目の図表には含まれていない。

#### （2）実施率

以下の表は学生授業評価と教員授業自己評価の実施率および回答数である。昨年度までと比較して若干の変動はあるが全体的にみて良好であるといえよう。

注目したいのは教員授業自己評価の入力率の上昇である。昨年度と比較して今年度はすべての学部で自己評価の入力率が上昇している。特に人文学部と農学部は 7 割に近い入力率であり、授業の振り返りを行う教員が増えている。また、大学院では農学研究科が大きく伸びて 7 割を超えており、経済学研究科も 6 割近い数字となっている。しかし入力率が大きくダウンした研究科もあり、来年度以降は入力率を安定させていくことが教学委員会・大学教育センターの目標となるであろう。

## 2008(平成20)年度 学生授業評価および教員授業自己評価 結果一覧

### <学部>学生授業評価

データベース	学部等	学生授業評価 (2005年度)	学生授業評価 (2006年度)	学生授業評価 (2007年度)	学生授業評価 (2008年度)	対象外の授業
I Y O C A N	共通教育	89.1%	94.2%	94.4%	93.6%	なし
	人文学部	91.6%	90.8%	90.5%	89.2%	卒業論文、集中講義、一部の演習を除く
	教育学部	78.1%	85.6%	86.0%	80.3%	卒業研究、教育実習、事前・事後指導、介護等体験実習を除く
	経済学部	89.6%	90.4%	89.1%	92.1%	卒業論文演習、演習I・IIを除く
	理学部	96.9%	98.0%	97.3%	94.7%	特別研究、集中講義、一部の実習等を除く
	工学部(昼)	81.6%	95.4%	89.0%	90.6%	卒業論文、国際実習、社会活動実習、インターンシップを除く
	工学部(夜)	79.0%	91.3%	81.5%	56.5%	〃
	農学部	82.7%	89.7%	93.0%	93.0%	卒業論文、集中講義、特別演習、専攻演習、インターンシップ等を除く
独自	医学部(医学科)	96.7%	95.9%	100.0%	98.7%	自己開発コース、臨床実習1、臨床実習2、を除く
独自	医学部(保健学科)	48.6%	52.9%	55.2%	52.6%	なし

### 教員授業自己評価

データベース	教員授業自己評価 入力率 (2007年度)	教員授業自己評価 入力率 (2008年度)	対象外の授業
I Y O C A N	39.1%	43.6%	学生授業評価と同じ
	49.7%	68.8%	学生授業評価と同じ
	34.1%	47.0%	学生授業評価と同じ
	38.9%	47.5%	学生授業評価と同じ
	57.3%	64.9%	学生授業評価と同じ
	35.1%	36.7%	学生授業評価と同じ
	37.0%	39.1%	学生授業評価と同じ
	50.6%	66.2%	学生授業評価と同じ
独自	—	—	学生授業評価と同じ
独自	—	—	学生授業評価と同じ

### <大学院>学生授業評価

データベース		学生授業評価 (2005年度)	学生授業評価 (2006年度)	学生授業評価 (2007年度)	学生授業評価 (2008年度)	対象外の授業
I Y O C A N	理工学研究科	90% 80%	79.7%	81.3%	68.7%	学外特別演習、特別講義、演習等を除く
	技術経営研究科	—	90.9%	100.0%	100.0%	なし
	医学系研究科	—	46.5%	54.5%	64.4%	特別研究除く
	教育学研究科	—	—	—	88.5%	授業形態・規模等を考慮して決定
	経済学研究科	—	—	—	54.3%	授業形態・規模等を考慮して決定
独自	人文科学研究科	—	—	—	24.1%	なし
独自	農学研究科	—	—	—	28.6%	留学生特別コース対象の授業・日本語による授業でも受講者の少ない授業は対象科目から除外

### 教員授業自己評価

データベース	教員授業自己評価 入力率 (2007年度)	教員授業自己評価 入力率 (2008年度)	対象外の授業
I Y O C A N	36.9%	33.1%	なし(学生授業評価は対象外でも自己評価は全て実施)
	56.3%	29.4%	〃
	53.5%	28.8%	〃
	22.4%	38.0%	〃
	36.5%	58.1%	〃
独自	27.3%	38.0%	〃
独自	48.8%	70.8%	〃

※理工学・医学系研究科の博士後期課程、および連合獣医学研究科、連合農学研究科、東アジア研究科(すべて博士後期課程)は実施対象から除く

学生授業評価アンケート実施率(通年)

部局名 (コード)	全数(A)		開講科目(B)		対象科目(C)		履修登録者 ありの科目(D)		B & C		B & D		C & D		B & C & D		実施率 最大値			
	CABO 登録科目 数	実施数	科目数	実施数	科目数	実施数	科目数	実施数	科目数	実施数	科目数	実施数	科目数	実施数	科目数	実施数				
共通教育(Y2)	2031	951	1053	950	2009	936	46.6	916	857	93.6	1031	935	90.7	916	857	93.6	849	93.6	93.6	
人文学部(10)	674	347	464	347	391	345	88.2	389	347	89.2	388	345	88.9	389	347	89.1	387	89.1	89.2	
教育学部(07)	830	491	747	491	712	489	68.7	589	468	79.5	639	489	76.5	583	468	80.3	581	80.2	80.3	
経済学部(17)	672	172	324	172	187	171	91.4	178	164	92.1	187	171	91.4	178	164	92.1	177	92.1	92.1	
理学部(22)	500	163	215	163	174	163	93.7	211	162	76.8	173	163	94.2	198	162	81.8	172	94.2	94.7	
工学部(昼間コ一 入)(25)	501	371	448	371	410	368	89.8	408	369	90.4	409	368	90	408	369	90.4	404	90.6	90.6	
工学部(夜間主コ一 入)(26)	77	13	37	13	24	13	54.2	4	2	50	23	13	56.5	4	2	50	4	50	56.5	
農学部(34)	248	146	208	146	157	146	93	157	146	93	157	146	93	157	146	93	157	93	93.0	
教育学研究科(55)	676	72	622	72	27	23	85.2	192	72	37.5	27	23	85.2	192	72	37.5	26	23	88.5	88.5
経済学研究科(60)	398	52	261	52	111	50	45	135	52	38.5	93	50	53.8	135	52	38.5	92	50	54.3	54.3
医学系研究科(70)	522	76	509	76	118	76	64.4	121	76	62.8	118	76	64.4	118	76	64.4	118	76	64.4	64.4
理工学研究科 (新)(27)	483	160	422	160	293	160	54.6	259	158	61	242	160	66.1	258	158	61.2	231	158	68.4	68.7
技術経営研究科 (88)	36	34	35	34	34	34	100	35	34	97.1	34	34	100	35	34	97.1	34	100	100.0	100.0

教員授業自己評価実施率(通年)

部局名 (コード)	全数(A)		開講科目(B)		対象科目(C)		履修登録者 ありの科目(D)		B & C		B & D		C & D		B & C & D		実施率 最大値			
	CABO 登録科目 数	実施数	科目数	実施数	科目数	実施数	科目数	実施数	科目数	実施数	科目数	実施数	科目数	実施数	科目数	実施数				
共通教育(Y2)	2031	450	1053	450	2009	437	21.8	916	399	43.6	1031	437	42.4	916	399	43.6	907	393	43.3	43.6
人文学部(10)	674	268	464	268	391	267	68.3	389	267	68.6	388	267	68.8	389	267	68.6	387	266	68.7	68.8
教育学部(07)	830	290	747	290	712	288	40.4	589	274	46.5	639	288	45.1	583	274	47	587	273	46.5	47.0
経済学部(17)	672	84	324	84	187	84	44.9	178	84	47.2	187	84	44.9	178	84	47.2	177	84	47.5	47.5
理学部(22)	500	111	215	111	174	111	63.8	211	111	52.6	173	111	64.2	198	111	56.1	172	111	64.5	64.9
農学部(34)	248	104	208	104	157	104	66.2	157	104	66.2	157	104	66.2	157	104	66.2	157	104	66.2	66.2
工学部(昼間コ一 入)(25)	501	151	448	151	410	150	36.6	408	149	36.5	409	150	36.7	408	149	36.5	404	148	36.6	36.7
工学部(夜間主コ一 入)(26)	77	9	37	9	24	9	37.5	4	1	25	23	9	39.1	4	1	25	4	25	39.1	39.1
人文学部研究科 (50)	254	73	192	73	254	73	28.7	0	0	-	192	73	38	0	0	-	0	0	-	38.0
教育学研究科(55)	676	81	622	81	27	7	25.9	192	73	38	27	7	25.9	192	73	38	26	6	23.1	38.0
経済学研究科(60)	398	60	261	60	23	12	54	48.2	135	56	94	54	57.4	135	56	41.5	93	54	58.1	58.1
医学系研究科(70)	522	34	509	34	118	34	28.8	121	34	28.1	118	34	28.8	118	34	28.8	118	34	28.8	28.8
理工学研究科 (新)(27)	483	80	422	80	293	80	27.3	259	75	29	242	80	33.1	258	75	29.1	231	75	32.5	33.1
農学研究科(75)	141	57	65	46	70.8	141	57	40.4	0	-	65	46	70.8	0	0	-	0	0	-	70.8
技術経営研究科 (88)	36	10	35	10	34	10	29.4	35	10	28.6	34	10	29.4	35	10	28.6	34	10	29.4	29.4



回答数

	講義	講義と演習	演習	講読	実験・実習	その他	合計
共通教育(2005)	32,922		4,425		2,590	25	39,962
共通教育(2006)	34,504		3,701		2,682		40,887
共通教育(2007)	33,743		3,657		2,491	9	39,900
共通教育(2008)	41,399				1,544	998	43,941
人文(2005)	5,519		998	567	15		7,099
人文(2006)	4,977		1,042	568			6,587
人文(2007)	5,017		1,117	531			6,665
人文(2008)	4,927		1,368	626			6,921
教育学部(2005)	7,607	2,524	817	97	714	155	11,914
教育学部(2006)	8,268	2,706	1,002	76	762	214	13,028
教育学部(2007)	8,325	2,520	894	68	811	274	12,892
教育学部(2008)	8,167	2,310	712		635	191	12,015
経済(2005)	7,657					14	7,671
経済(2006)	10,057						10,057
経済(2007)	10,627						10,627
経済(2008)	10,454						10,454
理(2005)	5,431		1,159		458		7,048
理(2006)	5,329	167	860		550		6,906
理(2007)	5,132	400	428		577		6,537
理(2008)	4,599	442	469		433		5,943
工(昼)(2005)	14,807	1,297	1,391		1,526	49	19,070
工(昼)(2006)	14,128	1,264	1,639		1,464	48	18,543
工(昼)(2007)	13,920	1,199	1,532		1,432	65	18,148
工(昼)(2008)	14,301	1,413	1,243		1,981	49	18,987
工(夜)(2005)	1,394	168	69		171	39	1,841
工(夜)(2006)	992	64	61		97	29	1,243
工(夜)(2007)	584	21	14		64		683
工(夜)(2008)	109		12		15		136
農(2005)	3,473		325		1,083		4,881
農(2006)	3,483		252		1,051		4,786
農(2007)	3,753		365		1,023		5,141
農(2008)	3,691		268		1,082		5,041
大学院・理工(2005)	3,344		29			24	3,397
大学院・理工(2006)	2,653						2,653
大学院・理工(2007)	3,062		118				3,180
大学院・理工(2008)	5,442		140				5,582
大学院・技術経営(2005)	167		49				216
大学院・技術経営(2006)	247		67				314
大学院・技術経営(2007)	371		57				428
大学院・技術経営(2008)	315		67				382
大学院・医学系(2006)	92		37				129
大学院・医学系(2007)	213		150				363
大学院・医学系(2008)	234		108				343
大学院・教育学(2008)	208	112	83		38		441
大学院・経済学(2008)	187						187
合計(2005)	82,321	3,989	9,262	664	6,557	306	103,099
合計(2006)	84,730	4,201	8,661	644	6,606	291	105,133
合計(2007)	84,747	4,140	8,332	599	6,398	348	104,564
合計(2008)	94,033	4,277	4,470	626	5,728	1,238	110,373



## 2. 全学共通質問項目の分析

次に、全学共通質問項目である5項目を取り上げ、各学部・研究科ごとに経年変化をみていく。各質問項目の選択肢1～5の評定平均を算出し、授業区分別（講義、演習、実験・実習など）に結果を整理した。また、全体平均については図にも示した。

なお、大学院については、IYOCANを利用した学生授業評価を行っている研究科とそれ以外の独自の方法で実施している研究科が混在しているため、ここではIYOCANを利用している理工学研究科、技術経営研究科、医学系研究科、教育学研究科、経済学研究科のみの結果を整理した。

### (1) 共通質問項目1「授業外学習時間」

#### 変更点

2008年度より選択肢の文言および並び順を以下のように変更した。

#### <2007年度まで>

**Q. あなたはこの授業のために授業時間以外にどのくらいの学習(予習・復習・宿題や関連した学習)を行いましたか？授業1コマ当たりの平均で教えてください**

1. 30分未満
2. 30分～1時間
3. 1時間～1時間30分
4. 1時間30分～2時間
5. 2時間以上

#### <2008年度～>

**Q. あなたはこの授業において、授業外学習(予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強)をどれくらい行いましたか？総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。**

1. 3時間程度または以上
2. 2時間程度
3. 1時間程度
4. 30分～50分程度
5. 30分未満

共通質問項目1は、授業1回あたりの授業外学習時間を尋ねたものである。今年度から選択肢の文言と並び方を変更し、1)3時間程度または以上を5点、5)30分未満を1点として授業区分別の平均値を算出した。そのため、2007年度までとの経年比較は厳密には行うことはできない(2007年度の5点に相当する「2時間以上」は2008年度では4点となり、単純に比較すると低くなる)。また、選択肢の並び順を肯定的なものを前に配置し、否定的なものを後ろに配置したことも学生の回答に影響を与えていることが考えられる。

以上の点に留意しながら平均値をみると、2008年度のデータの平均値は2007年度の平均値を上回っており(大学院医学系研究科を除く)、全体的な授業外学習時間は伸びているといえる。

なお、各学部・研究科とも講義形式の授業は授業外学習時間が短く、演習や実験・実習の授業の方が授業外学習時間は長い傾向にあるのは昨年度までと同じ傾向である。

## (2) 共通質問項目2 「学習目標達成」

### 変更点

2008年度より選択肢の文言および並び順を以下のように変更した。

#### <2007年度まで>

#### Q. あなたはシラバスに記載された学習目標を達成しましたか？

1. そう思わない 2. あまりそう思わない 3. どちらとも言えない 4. ややそう思う 5. そう思う

#### <2008年度～>

#### Q. あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？

1. そう思う、2. ややそう思う、3. どちらとも言えない、4. あまりそう思わない、5. そう思わない

共通質問項目2はシラバスに記載された学習目標を学生自身が達成できたかどうかについて尋ねたものである。山口大学はシラバスに観点別の到達目標を記載する方式となっており、「知識・理解の観点」「思考・判断の観点」「関心・意欲の観点」「態度の観点」「技能・表現の観点」の5つのうちから教員が用いる観点を選び、それぞれについて具体的な到達目標を学生に示すことになっている。これらの学習目標を達成できたかどうかについて、「1.そう思う」を5点、「そう思わない」を1点として平均値を授業区分別に算出した。

今年度はほぼ全ての学部・研究科で平均値が上昇している。特に共通教育は3.75と大きく上昇しており、学部・研究科が提供する専門教育と同程度の平均値となった。今年度から共通教育は新しいカリキュラムで実施されており、平成19年度に設定された7つの「教養教育グラジュエーション・ポリシー」を達成するため、授業担当者にもグラジュエーション・ポリシーとの関係を意識してシラバスに学習目標を記入し、授業を実施するようお願いしている。また、全学FDでも共通教育の多人数授業の効果的な進め方や学生参画型授業の実施方法等について研修会を行っている。そういった取組がこの平均値の上昇に結果的に結びついているとすれば、大変喜ばしいことである。

## (3) 共通質問項目3 「理解」

### 変更点

2008年度より選択肢の文言および並び順を以下のように変更した。

#### <2007年度まで>

#### Q. あなたは授業の内容を理解しましたか？(講義、語学、TOEIC準備)

#### Q. 内容理解や技能のレベルは向上しましたか？(演習、実験・実習)

1. そう思わない 2. あまりそう思わない 3. どちらとも言えない 4. ややそう思う 5. そう思う

#### <2008年度～>

#### Q. あなたは、この授業の内容を理解したと思いますか？

1. そう思う、2. ややそう思う、3. どちらとも言えない、4. あまりそう思わない、5. そう思わない

共通質問項目 3 は授業の理解のレベルについて尋ねた設問である。

全体平均ではほぼすべての学部・研究科で上昇している。特に、医学系研究科と経済学研究科は 4.0 を越えており、経済学は 4.84 という非常に高い数値となっている。これは経済学研究科の授業がほとんど 10 名以下の少人数で行われており、質の高い授業が実施できているためであると考えられる。

#### (4) 共通質問項目 4 「満足」

##### 変更点

2008 年度より選択肢の文言および並び順を以下のように変更した。

<2007 年度まで>

**Q. この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？**

1. そう思わない 2. あまりそう思わない 3. どちらとも言えない 4. ややそう思う 5. そう思う

<2008 年度～>

**Q. この授業はあなたにとって満足のいくものでしたか？**

1. そう思う、2. ややそう思う、3. どちらとも言えない、4. あまりそう思わない、5. そう思わない

共通質問項目 4 は授業の満足度について尋ねた設問である。全体的にみて、ほぼすべての学部・研究科で平均値が上昇しているが、特に人文学部は昨年度より 0.43 ポイントも上昇しており、他学部・研究科の伸びより大きかった。人文学部生の授業への満足度は他学部と比較して伸びているとあってよいと思われる。なお、講義よりも実験・実習や演習の授業の方が平均値は高い傾向にあるのは例年どおりである。

#### (5) 共通質問項目 5 「出席」

##### 変更点

2008 年度より選択肢の文言および並び順を以下のように変更した。

<2007 年度まで>

**Q. あなたはこの授業にどのくらい出席しましたか？**

1. 20% 未満、2. 20%～40%、3. 40%～60%、4. 60%～80%、5. 80% 以上

<2008 年度～>

**Q. あなたは、この講義にどれくらい出席しましたか？** (括弧内は、15 回講義の場合の出席回数参考値)

1. 90% 以上 (14 回以上)      2. 80～90% (12～13 回)      3. 60～80% (9～11 回)  
4. 40～60% (6～8 回)      5. 40% 未満 (6 回未満)

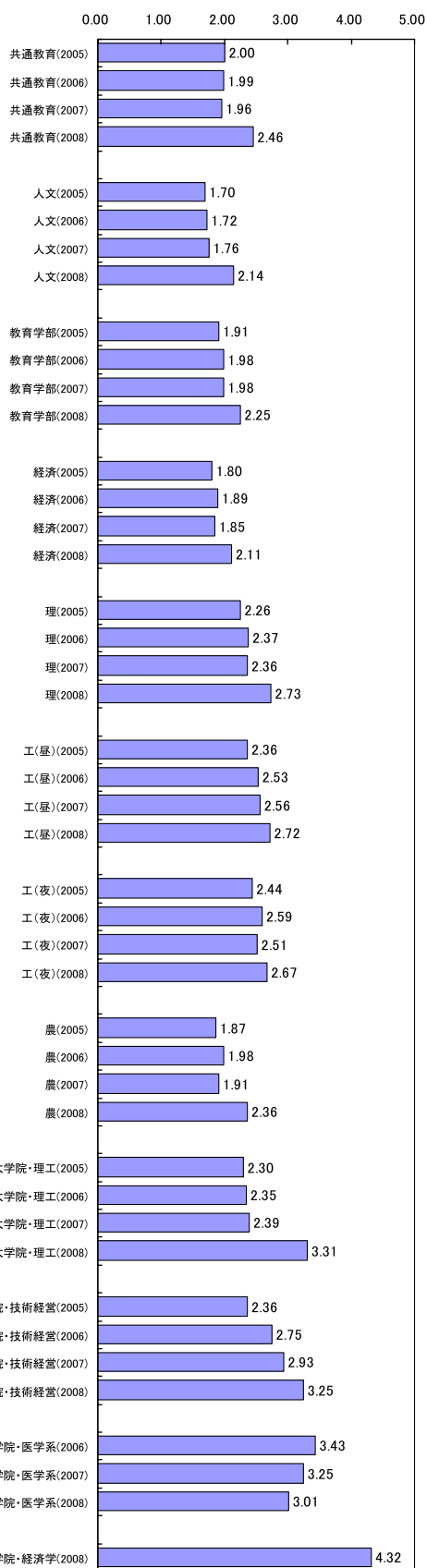
共通質問項目 5 は授業への出席状況について尋ねた設問である。本質問も並び順に加えて文言を修正し、90%以上の出席を 5 点、80～90%の出席を 4 点として、より細かく状況を把握できるよう修正した。そのため、多くの学部で平均値が低下しているが、すべて 4.0 以上の数値となっており、これは昨年度の 5 点に相当することから、出席状況そのものは変化していないと考えてよいだろう。また、一部の学部・研究科(工学部、農学部、技術経営研究科)では平均値が上昇しており、非常に出席状況がよいことが明らかとなった。

< 全学共通質問項目 1 授業外学習時間 >

授業外学習時間

	講義	講義と演習	演習	講読	実験・実習	その他	全体平均
共通教育(2005)	1.95		2.00		2.62	0.44	2.00
共通教育(2006)	1.93		2.04		2.71		1.99
共通教育(2007)	1.88		2.09		2.79	1.89	1.96
共通教育(2008)	2.42				4.26	1.70	2.46
人文(2005)	1.44		2.54	2.67	2.33		1.70
人文(2006)	1.38		2.70	2.89			1.72
人文(2007)	1.48		2.53	2.75			1.76
人文(2008)	1.80		2.95	3.04			2.14
教育学部(2005)	1.65	2.19	2.57	1.74	2.66	3.50	1.91
教育学部(2006)	1.73	2.31	2.51	1.61	2.75	2.13	1.98
教育学部(2007)	1.74	2.30	2.57	1.66	2.87	2.10	1.98
教育学部(2008)	2.05	2.46	3.11		3.15	2.13	2.25
経済(2005)	1.80					2.93	1.80
経済(2006)	1.89						1.89
経済(2007)	1.85						1.85
経済(2008)	2.11						2.11
理(2005)	2.08		2.66		3.32		2.26
理(2006)	2.16	2.60	2.96		3.39		2.37
理(2007)	2.19	2.20	3.32		3.27		2.36
理(2008)	2.55	2.94	3.33		3.82		2.73
工(昼)(2005)	2.17	2.07	3.07		3.84	1.78	2.36
工(昼)(2006)	2.37	2.25	3.05		3.70	2.65	2.53
工(昼)(2007)	2.43	2.25	2.91		3.73	2.34	2.56
工(昼)(2008)	2.52	2.69	3.19		3.87	2.22	2.72
工(夜)(2005)	2.22	2.15	3.48		4.23	1.72	2.44
工(夜)(2006)	2.83	2.86	3.67		4.13	2.83	2.59
工(夜)(2007)	2.30	2.62	3.93		4.06		2.51
工(夜)(2008)	2.48		3.67		3.27		2.67
農(2005)	1.75		2.22		2.16		1.87
農(2006)	1.83		2.49		2.35		1.98
農(2007)	1.78		2.34		2.22		1.91
農(2008)	2.21		3.48		2.59		2.36
大学院・理工(2005)	2.29		3.24			2.50	2.30
大学院・理工(2006)	2.35						2.35
大学院・理工(2007)	2.36		3.08				2.39
大学院・理工(2008)	3.29		3.94				3.31
大学院・技術経営(2005)	2.19		2.92				2.36
大学院・技術経営(2006)	2.58		3.39				2.75
大学院・技術経営(2007)	2.92		3.02				2.93
大学院・技術経営(2008)	3.15		3.71				3.25
大学院・医学系(2006)	3.40		3.51				3.43
大学院・医学系(2007)	2.97		3.65				3.25
大学院・医学系(2008)	2.90		3.24				3.01
大学院・経済学(2008)	4.32						4.32

授業外学習時間(全体平均)－経年変化－

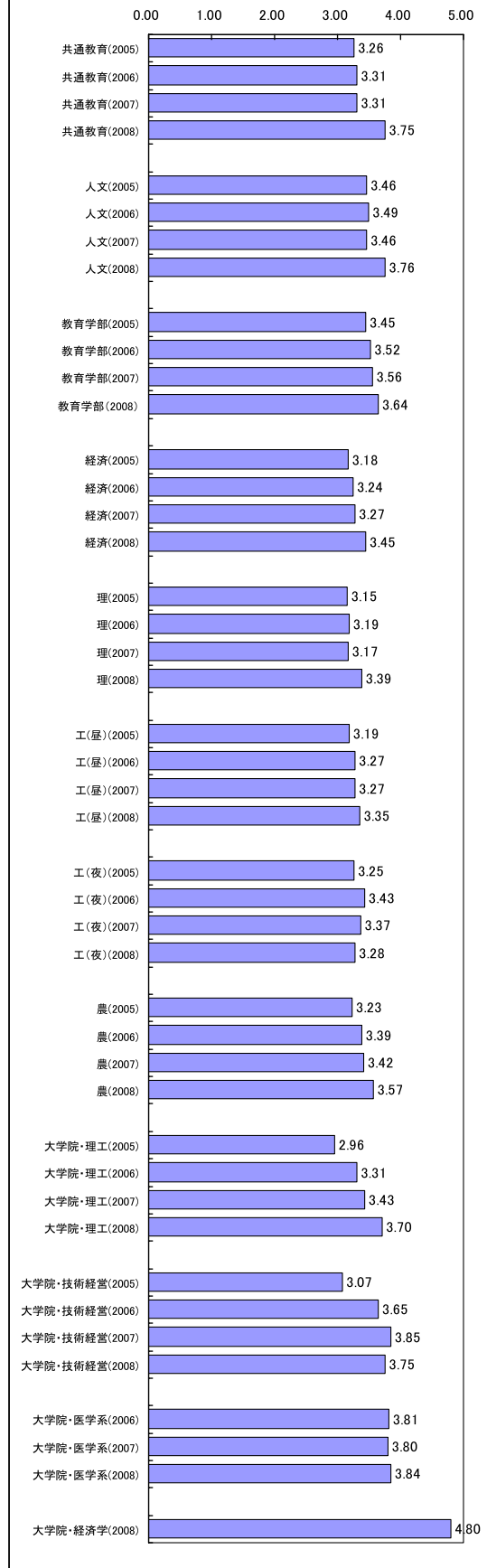


< 全学共通質問項目 2 学習目標達成 >

学習目標達成

	講義	講義と演習	演習	講読	実験・実習	その他	全体平均
共通教育(2005)	3.22		3.38		3.69	1.96	3.26
共通教育(2006)	3.27		3.40		3.70		3.31
共通教育(2007)	3.27		3.37		3.69	3.78	3.31
共通教育(2008)	3.72				4.12	4.21	3.75
人文(2005)	3.39		3.72	3.64	3.47		3.46
人文(2006)	3.40		3.76	3.78			3.49
人文(2007)	3.37		3.76	3.75			3.46
人文(2008)	3.73		3.75	3.81			3.76
教育学部(2005)	3.42	3.44	3.74	2.94	3.54	3.04	3.45
教育学部(2006)	3.45	3.58	3.86	3.07	3.73	3.47	3.52
教育学部(2007)	3.49	3.63	3.76	3.16	3.85	3.43	3.56
教育学部(2008)	3.60	3.63	3.84		3.95	3.63	3.64
経済(2005)	3.17					3.86	3.18
経済(2006)	3.24						3.24
経済(2007)	3.27						3.27
経済(2008)	3.45						3.45
理(2005)	3.11		3.17		3.56		3.15
理(2006)	3.14	3.04	3.32		3.48		3.19
理(2007)	3.12	2.96	3.45		3.51		3.17
理(2008)	3.32	3.34	3.77		3.78		3.39
工(昼)(2005)	3.15	2.91	3.45		3.54	3.71	3.19
工(昼)(2006)	3.24	3.28	3.38		3.50	3.35	3.27
工(昼)(2007)	3.25	3.23	3.35		3.48	3.25	3.27
工(昼)(2008)	3.28	3.46	3.52		3.62	3.35	3.35
工(夜)(2005)	3.22	2.92	3.58		3.82	2.85	3.25
工(夜)(2006)	3.36	3.72	3.66		3.79	3.52	3.43
工(夜)(2007)	3.35	3.14	3.29		3.62		3.37
工(夜)(2008)	3.32		3.42		2.93		3.28
農(2005)	3.15		3.16		3.50		3.23
農(2006)	3.31		3.45		3.61		3.39
農(2007)	3.34		3.72		3.60		3.42
農(2008)	3.47		3.95		3.83		3.57
大学院・理工(2005)	3.12		3.38			3.38	2.96
大学院・理工(2006)	3.31						3.31
大学院・理工(2007)	3.41		3.86				3.43
大学院・理工(2008)	3.70		3.62				3.70
大学院・技術経営(2005)	3.08		3.06				3.07
大学院・技術経営(2006)	3.62		3.76				3.65
大学院・技術経営(2007)	3.85		3.86				3.85
大学院・技術経営(2008)	3.72		3.85				3.75
大学院・医学系(2006)	3.92		3.54				3.81
大学院・医学系(2007)	3.76		3.86				3.80
大学院・医学系(2008)	3.81		3.90				3.84
大学院・経済学(2008)	4.80						4.80

学習目標達成— 経年変化—



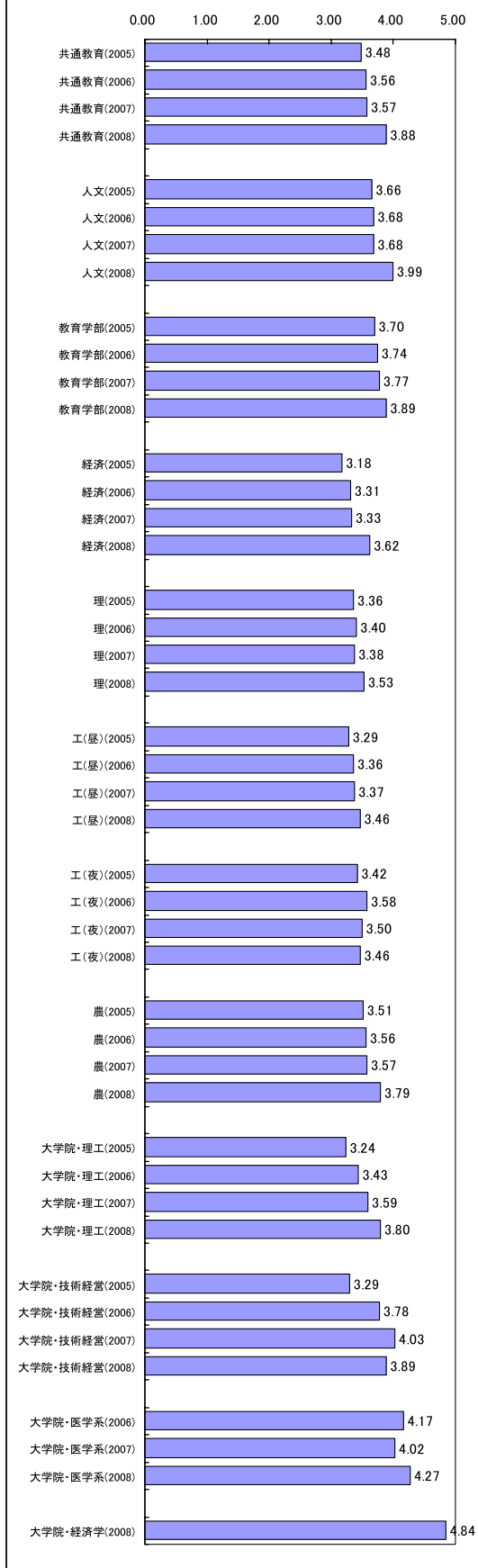
< 全学共通質問項目 3 理解 >

理解

	講義	講義と演習	演習	講読	実験・実習	その他	全体平均
共通教育(2005)	3.42		3.68		3.84	2.56	3.48
共通教育(2006)	3.50		3.78		3.93		3.56
共通教育(2007)	3.52		3.77		3.96	4.33	3.57
共通教育(2008)	3.85				4.15	4.52	3.88
人文(2005)	3.58		3.92	3.89	4.07		3.66
人文(2006)	3.58		3.98	4.02			3.68
人文(2007)	3.57		4.02	3.95			3.68
人文(2008)	3.84		4.03	4.09			3.99
教育学部(2005)	3.69	3.64	3.97	3.27	3.84	3.71	3.70
教育学部(2006)	3.68	3.76	4.06	3.29	4.01	3.70	3.74
教育学部(2007)	3.72	3.79	3.95	3.32	4.07	3.62	3.77
教育学部(2008)	3.86	3.85	4.14		4.12	3.89	3.89
経済(2005)	3.17					4.71	3.18
経済(2006)	3.31						3.31
経済(2007)	3.33						3.33
経済(2008)	3.62						3.62
理(2005)	3.32		3.39		3.81		3.36
理(2006)	3.35	3.23	3.62		3.85		3.40
理(2007)	3.34	2.98	3.74		3.76		3.38
理(2008)	3.47	3.38	3.89		3.91		3.53
工(昼)(2005)	3.24	2.95	3.64		3.70	3.41	3.29
工(昼)(2006)	3.30	3.42	3.56		3.68	3.29	3.36
工(昼)(2007)	3.31	3.38	3.56		3.72	3.34	3.37
工(昼)(2008)	3.40	3.62	3.57		3.69	3.59	3.46
工(夜)(2005)	3.38	3.12	3.96		3.91	2.97	3.42
工(夜)(2006)	3.51	3.77	4.11		3.94	3.55	3.58
工(夜)(2007)	3.48	3.33	3.50		3.67		3.50
工(夜)(2008)	3.53		3.36		3.07		3.46
農(2005)	3.36		3.68		3.92		3.51
農(2006)	3.43		3.87		3.94		3.56
農(2007)	3.42		4.16		3.91		3.57
農(2008)	3.66		4.55		4.08		3.79
大学院・理工(2005)	3.24		3.41			3.58	3.24
大学院・理工(2006)	3.43						3.43
大学院・理工(2007)	3.57		4.14				3.59
大学院・理工(2008)	3.80		3.91				3.80
大学院・技術経営(2005)	3.28		3.33				3.29
大学院・技術経営(2006)	3.74		3.94				3.78
大学院・技術経営(2007)	4.03		4.02				4.03
大学院・技術経営(2008)	3.84		4.14				3.89
大学院・医学系(2006)	4.21		4.08				4.17
大学院・医学系(2007)	3.92		4.16				4.02
大学院・医学系(2008)	4.23		4.36				4.27
大学院・経済学(2008)	4.84						4.84



理解(全体平均)- 経年変化-

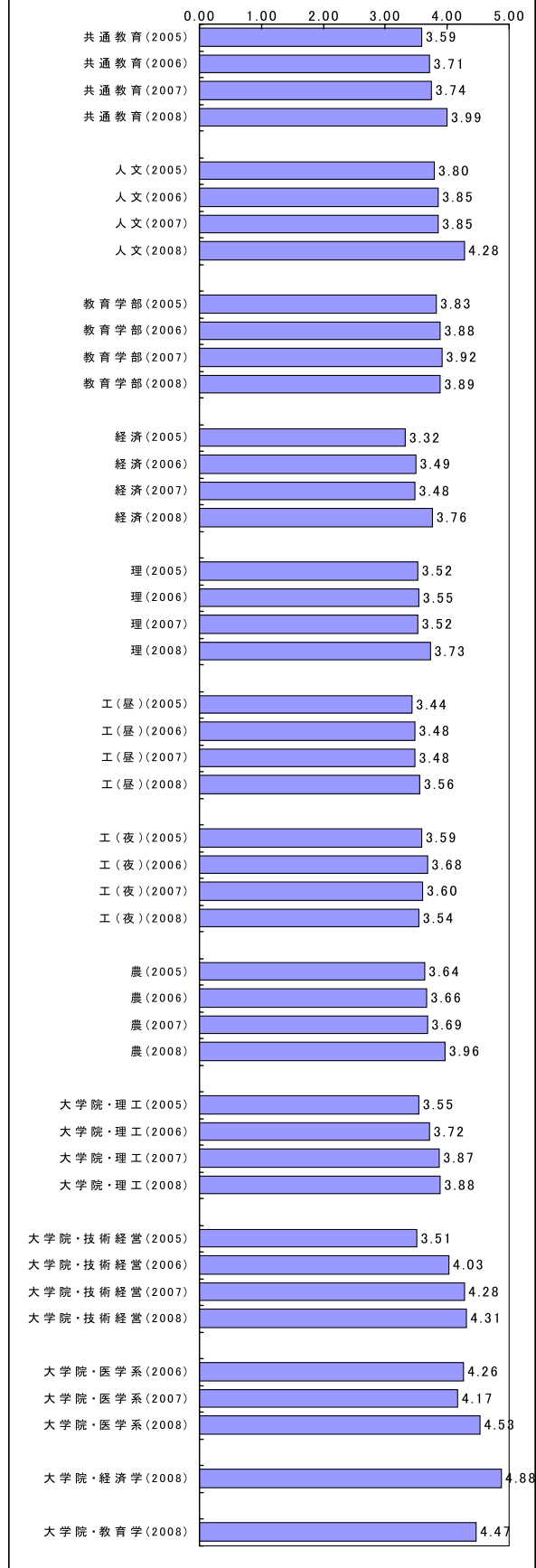


< 全学共通質問項目 4 満足 >

満足

	講義	講義と演習	演習	講読	実験・実習	その他	全体平均
共通教育(2005)	3.57		3.60		3.93	2.40	3.59
共通教育(2006)	3.69		3.69		4.05		3.71
共通教育(2007)	3.72		3.75		4.07	4.33	3.74
共通教育(2008)	3.97				4.26	4.60	3.99
人文(2005)	3.72		4.08	4.06	3.93		3.80
人文(2006)	3.74		4.13	4.22			3.85
人文(2007)	3.75		4.12	4.21			3.85
人文(2008)	4.22		4.39	4.50			4.28
教育学部(2005)	3.79	3.77	4.19	3.42	3.97	4.54	3.83
教育学部(2006)	3.82	3.88	4.27	3.49	4.17	3.82	3.88
教育学部(2007)	3.87	3.93	4.16	3.51	4.27	3.70	3.92
教育学部(2008)	3.86	3.85	4.14		4.12	3.89	3.89
経済(2005)	3.32					4.43	3.32
経済(2006)	3.49						3.49
経済(2007)	3.48						3.48
経済(2008)	3.76						3.76
理(2005)	3.48		3.57		3.91		3.52
理(2006)	3.52	3.25	3.62		3.85		3.55
理(2007)	3.48	3.16	3.95		3.78		3.52
理(2008)	3.68	3.59	3.99		4.05		3.73
工(昼)(2005)	3.42	3.07	3.68		3.68	3.94	3.44
工(昼)(2006)	3.44	3.49	3.60		3.69	3.31	3.48
工(昼)(2007)	3.46	3.39	3.58		3.62	3.55	3.48
工(昼)(2008)	3.51	3.63	3.68		3.79	3.71	3.56
工(夜)(2005)	3.57	3.33	3.99		4.02	2.74	3.59
工(夜)(2006)	3.63	3.81	4.00		3.87	3.62	3.68
工(夜)(2007)	3.60	3.71	3.71		3.53		3.60
工(夜)(2008)	3.61		3.50		3.07		3.54
農(2005)	3.61		3.18		3.86		3.64
農(2006)	3.63		2.92		3.94		3.66
農(2007)	3.65		3.47		3.91		3.69
農(2008)	3.84		4.49		4.25		3.96
大学院・理工(2005)	3.55		3.97			3.75	3.55
大学院・理工(2006)	3.72						3.72
大学院・理工(2007)	3.85		4.31				3.87
大学院・理工(2008)	3.88		3.76				3.88
大学院・技術経営(2005)	3.54		3.43				3.51
大学院・技術経営(2006)	4.00		4.13				4.03
大学院・技術経営(2007)	4.29		4.19				4.28
大学院・技術経営(2008)	4.27		4.53				4.31
大学院・医学系(2006)	4.36		4.03				4.26
大学院・医学系(2007)	4.05		4.34				4.17
大学院・医学系(2008)	4.52		4.56				4.53
大学院・経済学(2008)	4.88						4.88
大学院・教育学(2008)	4.37	4.47	4.64		4.63		4.47

満足(全体平均)-経年変化-

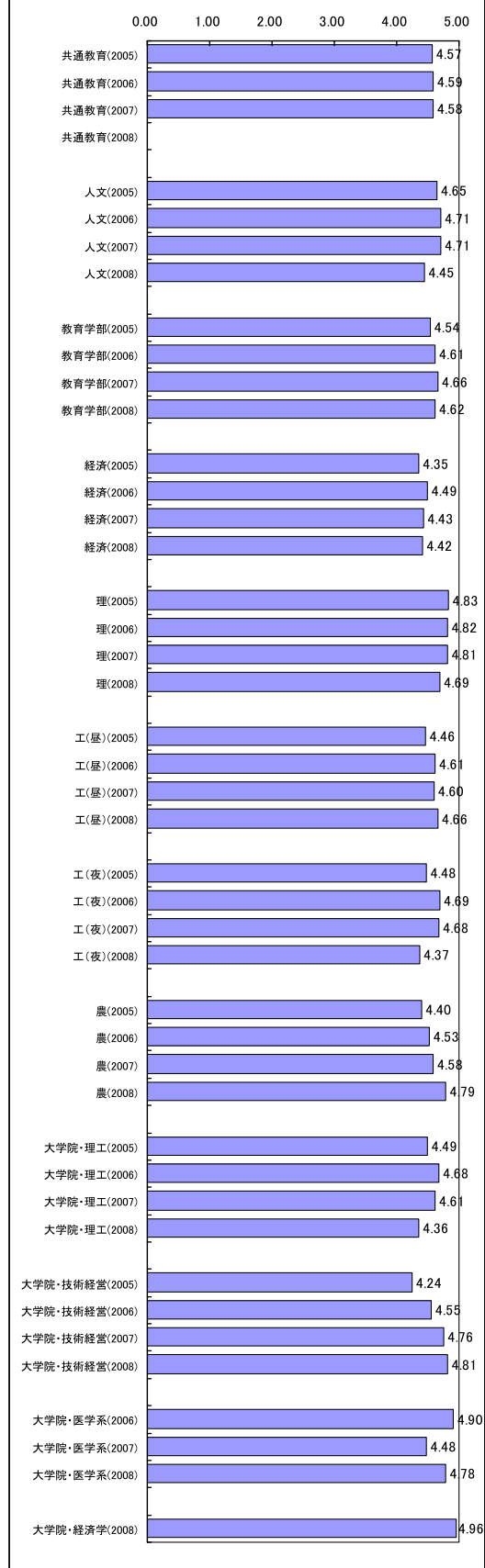


< 全学共通質問項目 5 出席 >

出席

	講義	講義と演習	演習	講読	実験・実習	その他	全体平均
共通教育(2005)	4.55		4.65		4.68	3.28	4.57
共通教育(2006)	4.58		4.65		4.63		4.59
共通教育(2007)	4.57		4.64		4.65	4.89	4.58
共通教育(2008)							
人文(2005)	4.66		4.57	4.68	4.87		4.65
人文(2006)	4.71		4.73	4.73			4.71
人文(2007)	4.70		4.72	4.72			4.71
人文(2008)	4.45		4.41	4.52			4.45
教育学部(2005)	4.55	4.57	4.54	4.66	4.48	3.66	4.54
教育学部(2006)	4.60	4.65	4.58	4.68	4.69	4.48	4.61
教育学部(2007)	4.65	4.69	4.57	4.69	4.74	4.65	4.66
教育学部(2008)	4.62	4.62	4.52		4.73	4.52	4.62
経済(2005)	4.35					5.00	4.35
経済(2006)	4.49						4.49
経済(2007)	4.43						4.43
経済(2008)	4.42						4.42
理(2005)	4.81		4.87		4.94		4.83
理(2006)	4.80	4.72	4.88		4.92		4.82
理(2007)	4.81	4.73	4.84		4.91		4.81
理(2008)	4.65	4.70	4.82		4.88		4.69
工(昼)(2005)	4.46	4.04	4.60		4.64	4.73	4.46
工(昼)(2006)	4.59	4.62	4.65		4.75	4.88	4.61
工(昼)(2007)	4.59	4.55	4.64		4.74	4.65	4.60
工(昼)(2008)	4.64	4.72	4.68		4.77	4.75	4.66
工(夜)(2005)	4.48	4.08	4.48		4.80	4.85	4.48
工(夜)(2006)	4.68	4.97	4.75		4.74	4.24	4.69
工(夜)(2007)	4.67	4.67	4.57		4.83		4.68
工(夜)(2008)	4.43		4.50		3.80		4.37
農(2005)	4.52		3.49		4.29		4.40
農(2006)	4.63		3.67		4.43		4.53
農(2007)	4.64		3.78		4.61		4.58
農(2008)	4.73		4.95		4.93		4.79
大学院・理工(2005)	4.49		4.03			4.50	4.49
大学院・理工(2006)	4.68						4.68
大学院・理工(2007)	4.76		4.77				4.61
大学院・理工(2008)	4.36		4.39				4.36
大学院・技術経営(2005)	4.28		4.10				4.24
大学院・技術経営(2006)	4.64		4.21				4.55
大学院・技術経営(2007)	4.74		4.44				4.76
大学院・技術経営(2008)	4.82		4.81				4.81
大学院・医学系(2006)	4.87		4.97				4.90
大学院・医学系(2007)	4.54		4.41				4.48
大学院・医学系(2008)	4.77		4.80				4.78
大学院・経済学(2008)	4.96						4.96

出席(全体平均)-経年変化-

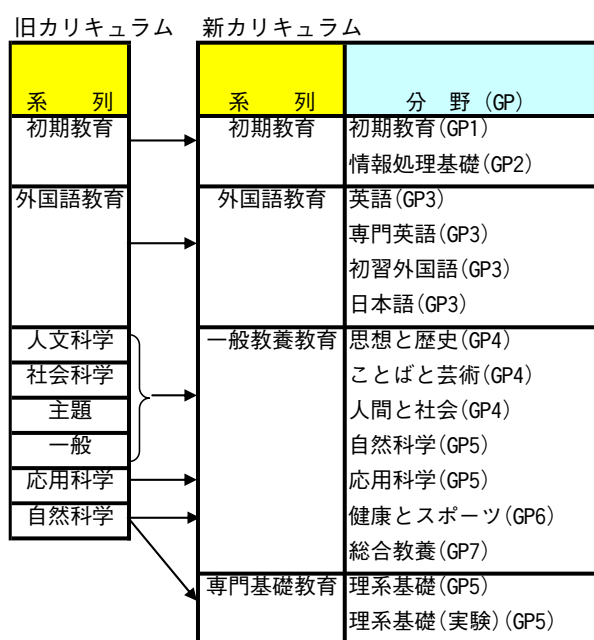


### 第3節 学生授業評価の結果について（共通教育）

次に、第3節では共通教育に絞って2008年度の学生授業評価の結果を考察する。前節で示したデータのとおり、今年度の共通教育の学生授業評価実施率は93.6%、教員授業自己評価実施率は43.6%であった。前者は昨年度より0.5%下がったが、後者は4.5%上昇した。

今年度の大きな変更点は共通教育の新カリキュラムが4月からスタートしたことである。下図のようにカリキュラムが大きく変更されたため、昨年度までのデータとは経年比較が不可能になった。そこで今回は新カリキュラムの系列・分野別に平均値を比較することとした。分野別に評定平均値を算出したのは、各分野が教養教育の7つのグラジュエーション・ポリシー（GP）とそれぞれ対応しているため、GPの達成状況を確認する参考資料とするためである。なお、各分野に含まれる授業科目および開設科目についても一覧表を付したので確認いただければ幸いである。

各授業はシラバス上では「講義」「演習」「実験実習」の3種類に分かれるが、それぞれ使用されている質問紙は「講義」は「講義用」、「演習」と「実験実習」は「演習・実験実習用」である。また、外国語については講義や演習の形態に関係なく「語学」の質問紙を用いており、さらに英語のうち必修である「TOEIC準備」については専用の質問紙を使用している。従って、用いている質問紙は「講義」「演習・実験実習」「語学」「TOEIC準備」の4種類となる。以下では、各授業をこの4種類に分類し、それぞれの評定平均値を算出する。



#### YAMAGUCHI UNIVERSITY 教養教育グラジュエーションポリシー(H19～)

GP1 (日本語)	日本語を正確に理解し、論理的な文章を書くと同時に、課題に対する自らの見解をわかりやすく伝達するための方法を知り、実践することができる。
GP2 (情報科学)	情報及び情報手段を主体的に選択し、安全に正しく活用するための基礎的な知識・技能を持つ。
GP3 (外国語)	多様な文化への柔軟な理解と共感を持ち、一つ以上の外国語について、日常生活に支障のない程度に聞き、話し、読み、書くことができる。
GP4 (人文社会科学)	社会と文化およびそれらと人間との関わりに関する基礎的な知識を習得し、地域・社会に貢献することができる。
GP5 (自然・応用科学)	自然や環境について基礎的な知識を習得し、自らの生活や社会に還元することができる。
GP6 (健康科学)	健康で文化的な生活を営むために必要な基礎的な知識と方法を習得し、自らの生活の質を高めることができる。
GP7 (学際領域)	幅広い領域の知識に触れ、特定の専門分野を超えた複合的な視点を確立するとともに、そこから自らの将来を見つめることができる。

#### < 共通教育 質問紙の種類（4種類） >

シラバスの授業区分	質問紙の種類
「講義」の場合	講義
「演習」の場合	演習・実験・実習
「実験実習」の場合	演習・実験・実習
「講義」「演習」のうち外国語教育の場合	語学
〃 TOEIC準備の場合	語学（TOEIC準備）

< 共通教育 系列・分野別平均値（質問紙別） >

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11
初期教育	基礎セミナー	講義	4.81	2.79	4.14	4.08	4.09	3.97	4.12	4.09	3.97	4.07	
		情報処理基礎	4.85	1.93	3.60	3.70	3.84	4.00	3.56	3.50	3.53	3.43	
		演習・実験実習	4.91	2.65	3.67	3.61	3.89	3.98	3.94	4.01	3.63	3.90	3.81
	合計	講義	4.83	2.39	3.89	3.90	3.97	3.98	3.85	3.81	3.76	3.77	
		演習・実験実習	4.91	2.65	3.67	3.61	3.89	3.98	3.94	4.01	3.63	3.90	3.81
外国語教育	英語	語学	4.74	3.15	4.27	4.28	3.67	4.12	4.26	3.88	4.07	4.15	
		語学(TOEIC準備)	4.90	3.02	3.96	3.70	3.99	3.68	3.55	3.28	3.69	3.60	
	専門英語	語学	4.91	2.32	4.28	4.28	3.76	4.29	4.37	4.03	4.25	4.32	
	初習外国語	語学	4.69	2.62	4.26	4.32	3.99	4.29	4.33	3.91	4.13	4.33	
	日本語	語学	4.42	2.91	4.64	4.54	4.03	4.54	4.50	4.06	4.60	4.35	
	合計	語学	4.71	2.84	4.27	4.31	3.84	4.22	4.30	3.90	4.12	4.25	
		語学(TOEIC準備)	4.90	3.02	3.96	3.70	3.99	3.68	3.55	3.28	3.69	3.60	
一般教養教育	思想と歴史	講義	4.67	2.04	4.10	4.13	3.98	3.89	4.02	3.64	3.77	4.03	
		ことばと芸術	4.74	1.96	4.04	4.01	3.85	4.05	3.83	3.72	3.87	4.07	
	人間と社会	講義	4.71	1.96	4.02	4.07	3.94	3.93	3.89	3.60	3.76	3.91	
	自然科学	講義	4.73	2.36	3.93	3.93	3.92	4.13	3.79	3.63	3.73	3.90	
	応用科学	講義	4.71	2.23	3.97	4.01	4.03	4.18	3.85	3.71	3.88	4.02	
	健康とスポーツ	講義	4.81	2.06	4.10	4.10	3.96	4.05	3.87	3.67	3.91	3.96	
		演習・実験実習	4.73	1.70	4.50	4.49	4.13	4.33	4.47	4.52	4.21	4.52	4.60
	総合教養	講義	4.68	1.90	4.27	4.13	4.27	4.35	4.07	3.85	4.13	4.26	
	合計	講義	4.71	2.06	4.05	4.06	4.00	4.07	3.91	3.68	3.85	4.01	
		演習・実験実習	4.73	1.70	4.50	4.49	4.13	4.33	4.47	4.52	4.21	4.52	4.60
専門基礎教育	理系基礎	講義	4.76	2.70	3.69	3.78	3.77	3.73	3.76	3.58	3.58	3.69	
	理系基礎(実験)	演習・実験実習	4.95	4.25	4.15	4.12	4.29	4.30	4.22	4.33	4.12	4.16	4.24

< 共通教育 系列・分野別 有効回答数（質問紙別） >

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11
初期教育	基礎セミナー	講義	1806	1798	1805	1803	1805	1802	1777	1799	1776	1794	
		情報処理	1577	1578	1573	1576	1580	1582	1578	1580	1576	1576	
		演習・実験実習	1707	1711	1711	1710	1712	1710	1713	1710	1711	1712	1670
	合計	講義	3383	3376	3378	3379	3385	3384	3355	3379	3352	3370	
		演習・実験実習	1707	1711	1711	1710	1712	1710	1713	1710	1711	1712	1670
外国語教育	英語	語学	3741	3729	3737	3736	3731	3732	3733	3742	3730	3703	
		語学(TOEIC準備)	1989	1987	1988	1985	1987	1985	1985	1985	1985	1970	
	専門英語	語学	384	385	383	383	385	384	382	383	383	380	
	初習外国語	語学	4254	4246	4245	4245	4243	4244	4246	4250	4240	4213	
	日本語	語学	235	235	233	235	235	235	236	235	234	231	
	合計	語学	8614	8595	8598	8599	8594	8595	8597	8610	8587	8527	
		語学(TOEIC準備)	1989	1987	1988	1985	1987	1985	1985	1985	1985	1970	
一般教養教育	思想と歴史	講義	2754	2748	2754	2757	2753	2753	2755	2748	2747	2722	
		ことばと芸術	975	970	973	971	975	972	975	973	973	963	
	人間と社会	講義	5852	5840	5849	5856	5854	5844	5848	5851	5834	5783	
	自然科学	講義	1984	1977	1983	1983	1982	1985	1982	1984	1982	1965	
	応用科学	講義	3813	3816	3812	3810	3809	3812	3810	3807	3798	3768	
	健康とスポーツ	講義	1418	1413	1416	1417	1414	1411	1416	1412	1415	1402	
		演習・実験実習	991	989	991	997	991	992	994	989	995	987	897
	総合教養	講義	2804	2799	2808	2804	2810	2810	2806	2807	2803	2779	
	合計	講義	19600	19563	19595	19598	19597	19587	19592	19582	19552	19382	
		演習・実験実習	991	989	991	997	991	992	994	989	995	987	897
専門基礎教育	理系基礎	講義	5874	5858	5855	5864	5856	5872	5859	5866	5856	5806	
	理系基礎(実験)	演習・実験実習	1594	1588	1591	1590	1590	1591	1591	1590	1592	1588	1382

＜各分野に含まれる授業科目および開設科目＞

系列	分野	授業科目	開設科目名			
初期教育	初期教育 (GP1)	フレッシュマンセミナー	フレッシュマンセミナー			
		基礎セミナー 1	基礎セミナー 1 基礎セミナー(経)			
	情報処理基礎 (GP2)	基礎セミナー 2	基礎セミナー 2			
		情報リテラシー演習	情報リテラシー演習			
		情報セキュリティ・モラル	情報セキュリティ・モラル			
外国語教育	英語 (GP3)	TOEIC準備	TOEIC準備			
		Basic English	Basic English			
		English Speaking	English Speaking			
		TOEIC認定	TOEIC認定			
		TOEIC認定400	TOEIC認定400			
		英語リーディング	英語リーディング			
		英語ライティング	英語ライティング			
		英語特別演習	英語特別演習			
			英語特別演習1a			
			英語特別演習1b			
		Comprehensive English	Comprehensive English Fundamental Comprehensive English Pre-Intermediate			
		TOEIC認定500 (TOEFL450)	TOEIC認定500 (TOEFL450)			
	TOEIC認定600 (TOEFL500)	TOEIC認定600 (TOEFL500)				
	海外英語研修	海外英語研修				
	専門英語 (GP3)	医学英語 1	医学英語 1 a 医学英語 1 b			
		医学英語 2	医学英語 2			
		医療英語	医療英語			
		基礎医療英会話	基礎医療英会話			
		医療英会話	医療英会話			
	初習外国語 (GP3)	初習外国語初歩		ドイツ語初歩 フランス語初歩 中国語初歩 ハンガール初歩		
			初習外国語入門 1		ドイツ語入門 1 フランス語入門 1 中国語入門 1 ハンガール入門 1	
				初習外国語入門 2		ドイツ語入門 2 フランス語入門 2 中国語入門 2 ハンガール入門 2
					初習外国語初級 1 A	
		初習外国語初級 1 B				
			初習外国語初級 2 A			
				初習外国語初級 2 B		
					初習外国語会話 1	
		初習外国語会話 2				
			海外初習外国語研修			海外中国語研修 海外ハンガール研修
			初習外国語認定	ロシア語 スペイン語		
日本語 (GP3)			日本語 ※外国人留学生対象科目		日本語 1 A 日本語 1 B 日本語 2 A 日本語 2 B 日本語 3 A 日本語 3 B 日本語 4 A 日本語 4 B 日本語 5 A 日本語 5 B 日本語 6 A 日本語 6 B 日本語 7 A 日本語 7 B 日本語 8 A 日本語 8 B 日本語 9 A 日本語 9 B 日本語 10 A 日本語 10 B 日本語 11 A 日本語 11 B 日本語 12 A 日本語 12 B 日本語 13 A 日本語 13 B 日本語 14 A 日本語 14 B 日本語 15 A 日本語 15 B	



<各分野に含まれる授業科目および開設科目(続き)>

一般 教養 教育	思想と歴史(GP4)	思想と倫理	哲学 倫理学 生命倫理学 宗教学
		歴史	日本史 東洋史 西洋史
		主題(思想と歴史)	漱石の思想Ⅰ 漱石の思想Ⅱ 東洋の思想
	ことばと芸術(GP4)	文学と言語	日本文学 漢文 外国文学(アメリカ文学) 言語学
		芸術	芸術史(美術史) 芸術史(日本近代美術史) 芸術概論(音楽の歴史) 芸術概論(美術) 芸術概論(音楽) 芸術実践(美術) 芸術実践(音楽) 芸術実践(工芸)
		主題(ことばと芸術)	美術鑑賞と作品記述
	人間と 社会(GP4)	人間と社会	法学 政治学 経済学 社会学(人権・ジェンダー・人間環境論) 社会学 地理学 民俗学 文化人類学 産業倫理 社会科学概論 社会福祉学
		人間と教育	教育学
		心理学	心理学 心理学(適応と不適応) 心理学(子どものこころを科学する) 心理学(臨床心理学) 心理学(自分自身を再発見する) 心理学(心のとらえ方) 心理学(行動分析の基礎と応用) 心理学(心と社会の心理学) 心理学(道徳性心理学) 心理学(学習・記憶・認知) 発達心理学 医療心理学
		日本国憲法	日本国憲法
主題(人間と社会)		マーケティング入門 観光と交通 経営理論と応用 リスクマネジメント入門 日本の財政を考える 中国経済入門 戦略と経済心理 アジアの交通と文化 比較教育概論 大衆と観光 大学論 日常の価値を再考する 性をめぐる今日の状況 比較文化心理学 平和と文化のつながり 法と市場経済 契約と不法行為 国際コミュニケーション論 臨床人間学 Close-up Japan—Various Aspects of Culture and Society.	
自然科学(GP5)		自然科学の考え方	数学の考え方 物理学の考え方 地球科学の考え方
		自然科学	数学概論 物理学通説 現代化学総説 現代生物学総説 現代地球科学総説
		主題(自然科学)	宇宙と人間 科学の中の動物 環境とバイオテクノロジー 人間とバイオテクノロジー 歴史の中の動物 火山と地震 地球と人間 生命を科学する 生命現象のいろいろ
応用科学(GP5)		統計学	社会科学のためのやさしい統計学 理工学のための統計学 医学のための統計学
		環境科学	環境学
	応用科学	科学史 技術概論 生命科学概論 生活科学 デザイン工学入門 行動科学	
	社会と医療	社会と医療(いのちと発達) 社会と医療(心とぞの座) 社会と医療(日本の医療) 社会と医療(性を考える)	
	主題(応用科学)	命と場 香りと人間 環境と植物 環境と人間 環境と農業 現代の科学技術 暮らしの中の動物 交通と社会 知的財産の開発と権利 情報技術と社会 人間と植物	

<各分野に含まれる授業科目および開設科目(続き)>

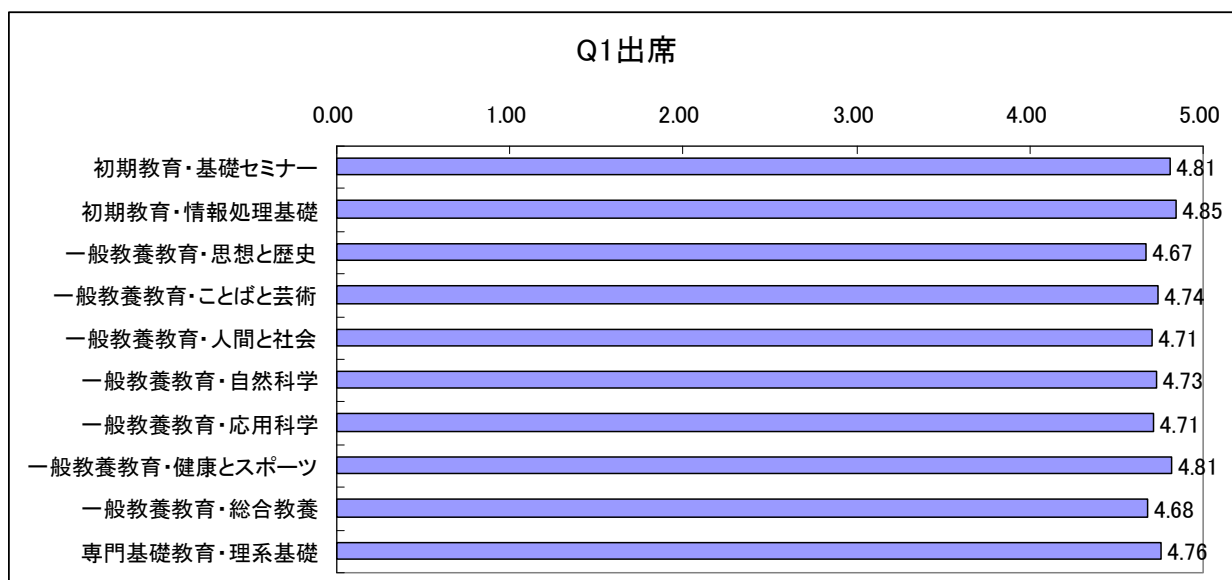
健康とスポーツ (GP6)	運動健康科学	運動健康科学
	スポーツ運動実習	スポーツ運動実習(エアロビクス) スポーツ運動実習(サッカー) スポーツ運動実習(ショットテニス) スポーツ運動実習(ターゲットバードゴルフ) スポーツ運動実習(バスケットボール) スポーツ運動実習(パドミントン) スポーツ運動実習(バレーボール) スポーツ運動実習(ハンドボール) スポーツ運動実習(フィットネストレーニング) スポーツ運動実習(フライングディスク) スポーツ運動実習(空手) スポーツ運動実習(硬式テニス)
総合教養 (GP7)	主題 (健康とスポーツ)	スポーツの医学 ライフスタイルと健康 加齢と健康 食・環境と健康
	総合教養 A	アクティブ・ラーニング キャリアデザイン クロスアップ・ドイツ ベンチャービジネス論 ボランティアと自主活動 メディア情報処理 環境と地域共生 観光と経済 国際交渉論 自然科学と現代社会 A 知の広場—人と学問— 言語の多様性と普遍性 山口県の地域政策
総合教養 (GP7)	総合教養 B	教職協働実践 I キャリアと就職 キャリア形成とコミュニケーション パソコン S O S 1 パソコン S O S 2 現代経営学事情 自然科学と現代社会 B 時間学 I 時間学 II 生命と倫理 知的財産権論 教職協働実践 II 教職協働実践 III 医療環境論 I 医療環境論 2
	理系基礎 (GP5)	数学 I 数学 II 物理学 I 物理学 II 化学 I 化学 II 生物学 I 生物学 II 地球科学 I 地球科学 II
専門基礎教育	理系基礎 (実験) (GP5)	物理学実験 A 物理学実験 B 化学実験 A 化学実験 B 生物学実験 地球科学実験
		数学 I 数学 II 物理学 I 物理学 II 化学 I 化学 II 生物学 I 生物学 II 地球科学 I 地球科学 II 物理学実験 A 物理学実験 B 化学実験 A 化学実験 B 生物学実験 地球科学実験

# 1. 講義系科目の結果について

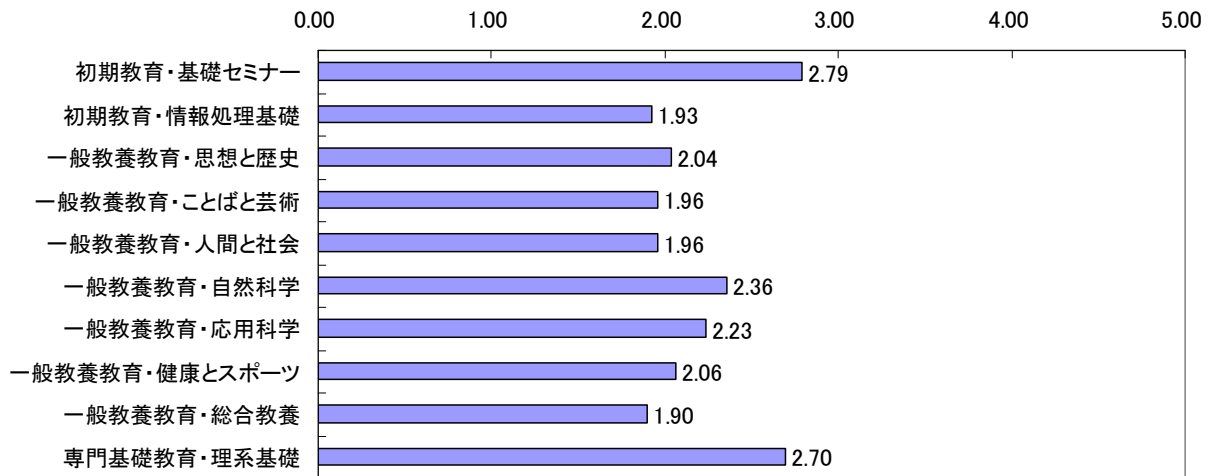
以下の表・図は4種類の質問紙のうち「講義」用を使用している講義系科目を系列・分野別に整理し、評定平均値を算出したものである。詳しい質問項目は節末の質問紙を参照していただければ幸いである。

質問1の出席状況は「1. 90%以上(14回以上)」を5点、「5. 40%未満(6回未満)」を1点として平均値を計算したものであるが、すべての分野で4.5を超えており非常に良好である。また、他の設問もほぼ3.5以上の平均値があり良好であるといえる。しかし質問2の授業外学習は最も高いもので「初期教育・基礎セミナー」の2.79であり、最も低い「一般教養教育・総合教養」は1.90しかない。これは多くの学生が試験勉強も含めた授業1回あたりの平均学習時間が1時間に満たない、という状況を表しており、単位制度の実質化の点からみて問題があると言わざるを得ない。大学設置基準には「1単位の授業科目は45時間の学修を必要とする」と規定されており、この中には授業時間の他に予習、復習の時間が含まれている。例えば、2単位の講義を行う場合90時間の学修が必要となるが、このうち授業の30時間を除く60時間は授業外学習が必要となる。半期15回の授業では、1回の授業2時間に対して4時間の授業外学習が必要、という計算になる。現状は1時間に満たないことが明らかとなったことを踏まえ、今後は教員が学生に対して積極的に授業外学習を課していく必要があるだろう。

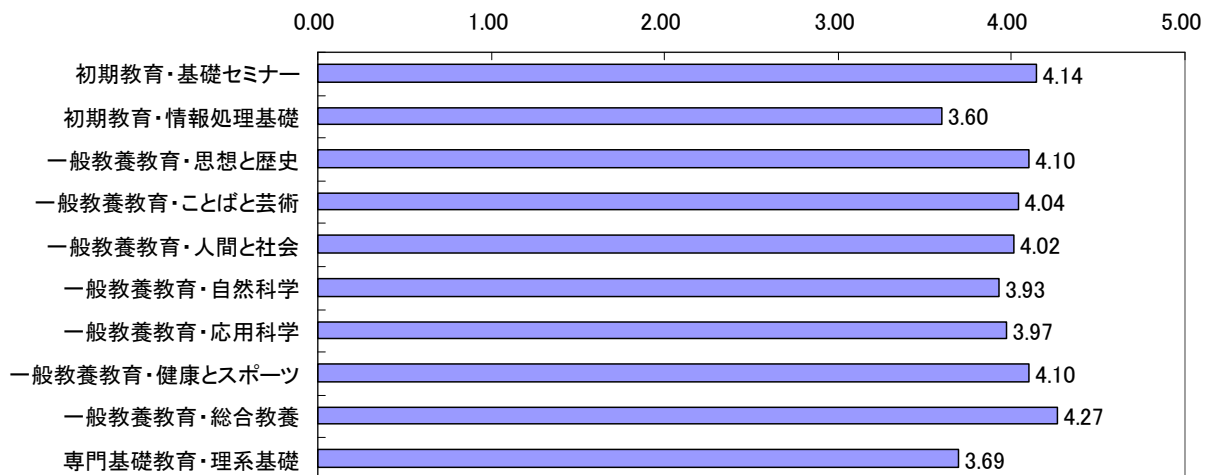
系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4説明	Q5教材	Q6板書・コンピュータ	Q7質問対応	Q8学習目標達成	Q9理解	Q10満足
初期教育	基礎セミナー	講義	4.81	2.79	4.14	4.08	4.09	3.97	4.12	4.09	3.97	4.07
初期教育	情報処理基礎	講義	4.85	1.93	3.60	3.70	3.84	4.00	3.56	3.50	3.53	3.43
一般教養教育	思想と歴史	講義	4.67	2.04	4.10	4.13	3.98	3.89	4.02	3.64	3.77	4.03
一般教養教育	ことばと芸術	講義	4.74	1.96	4.04	4.01	3.85	4.05	3.83	3.72	3.87	4.07
一般教養教育	人間と社会	講義	4.71	1.96	4.02	4.07	3.94	3.93	3.89	3.60	3.76	3.91
一般教養教育	自然科学	講義	4.73	2.36	3.93	3.93	3.92	4.13	3.79	3.63	3.73	3.90
一般教養教育	応用科学	講義	4.71	2.23	3.97	4.01	4.03	4.18	3.85	3.71	3.88	4.02
一般教養教育	健康とスポーツ	講義	4.81	2.06	4.10	4.10	3.96	4.05	3.87	3.67	3.91	3.96
一般教養教育	総合教養	講義	4.68	1.90	4.27	4.13	4.27	4.35	4.07	3.85	4.13	4.26
専門基礎教育	理系基礎	講義	4.76	2.70	3.69	3.78	3.77	3.73	3.76	3.58	3.58	3.69



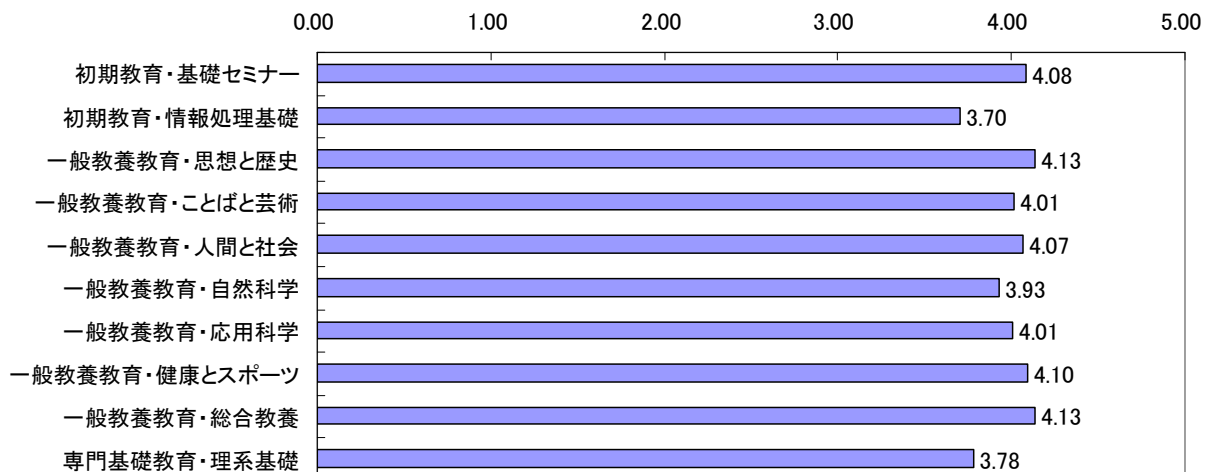
### Q2授業外学習

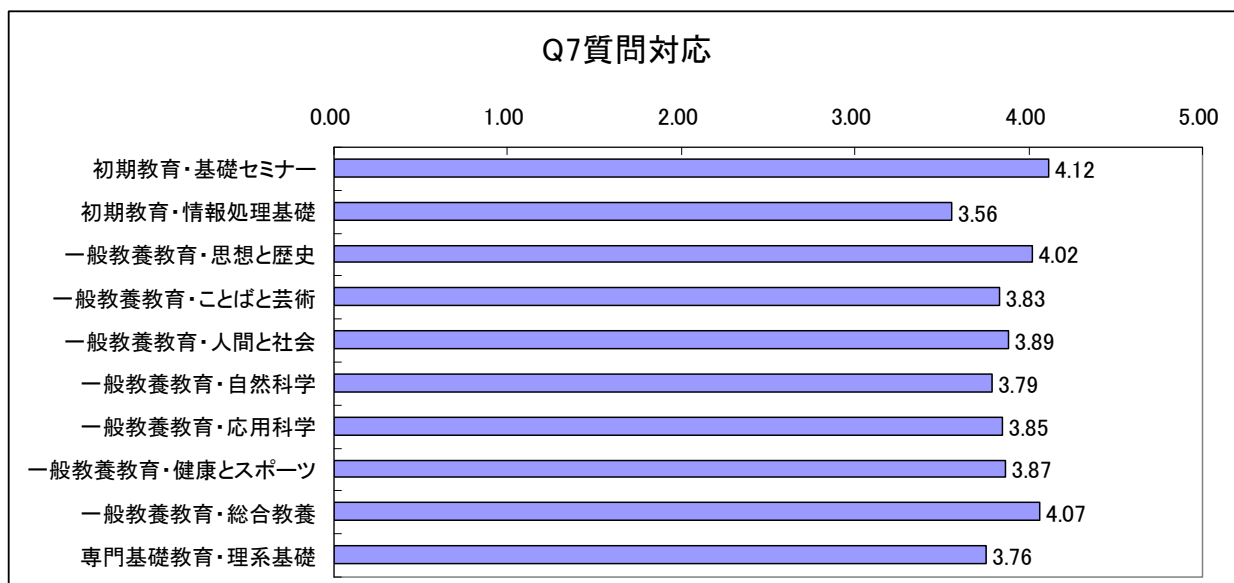
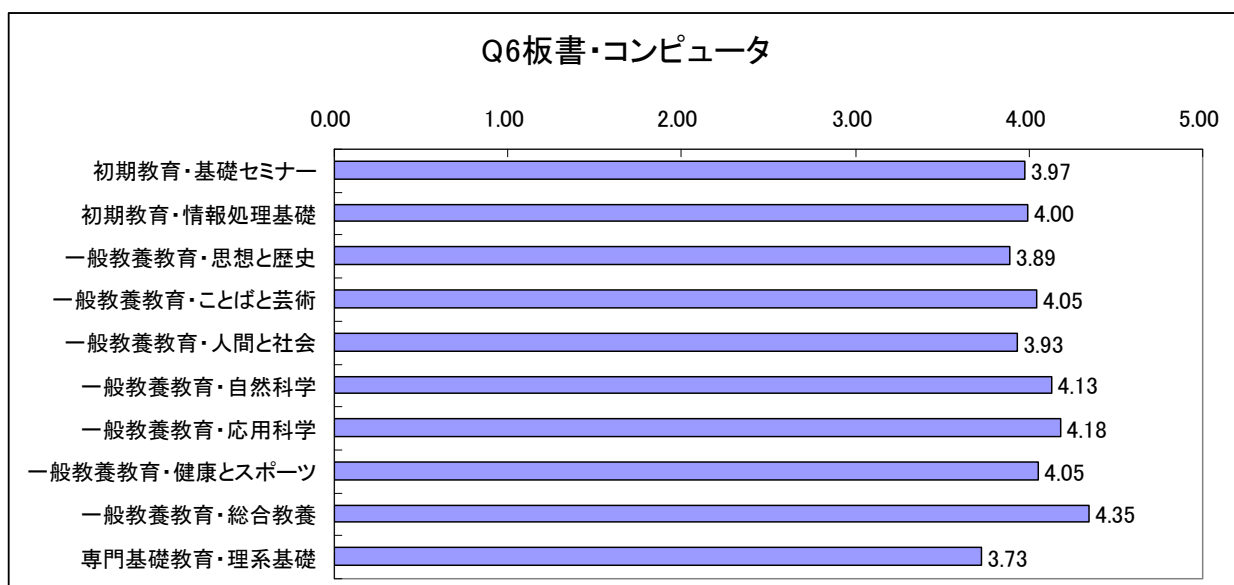
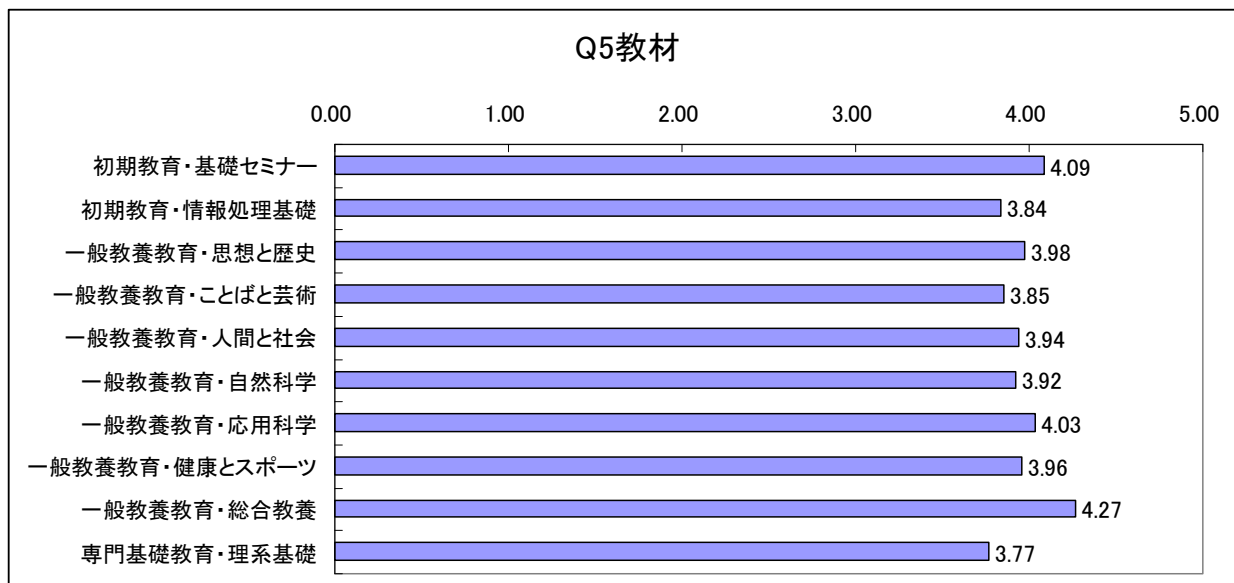


### Q3話し方

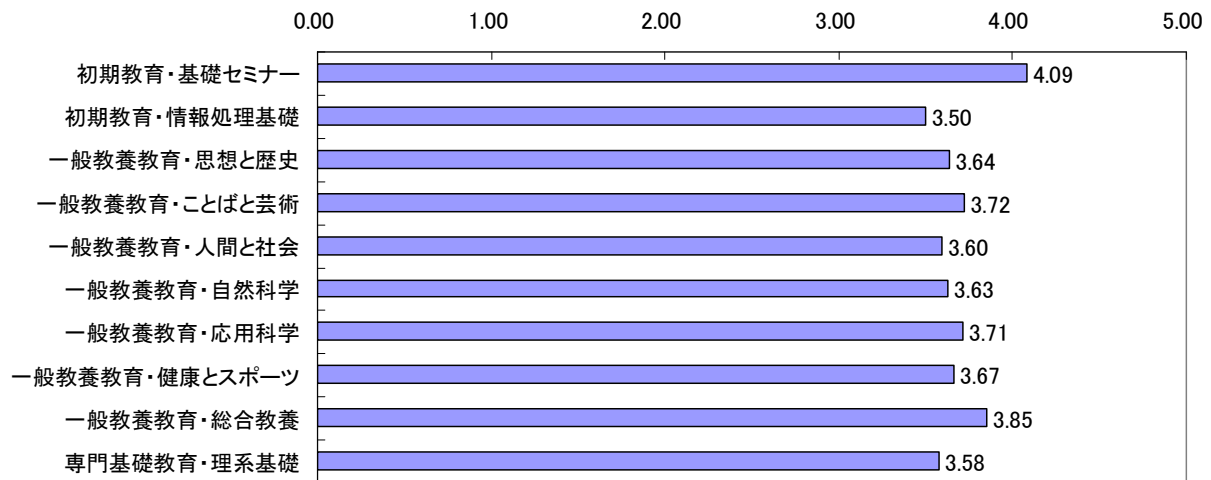


### Q4説明

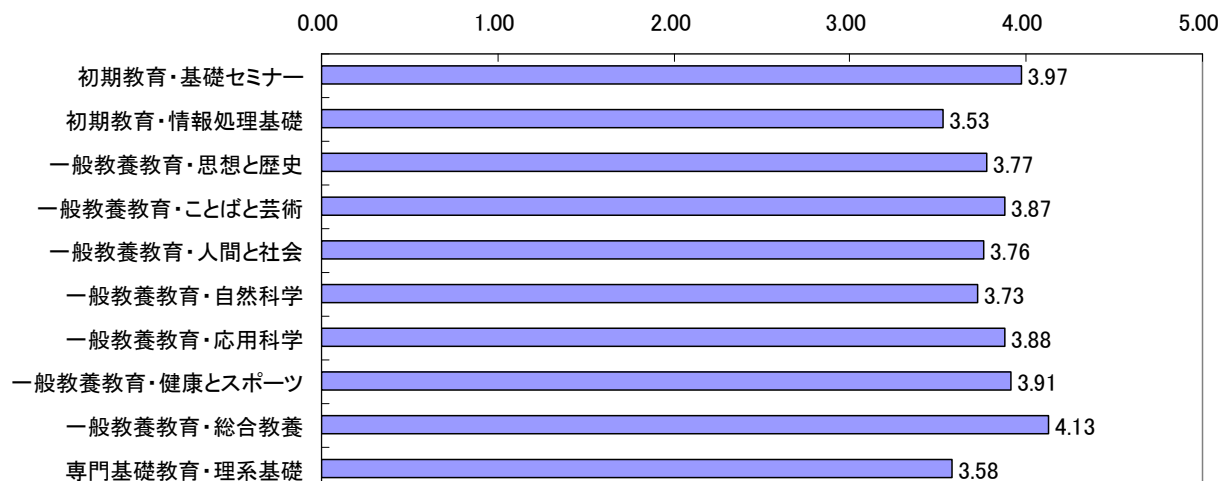




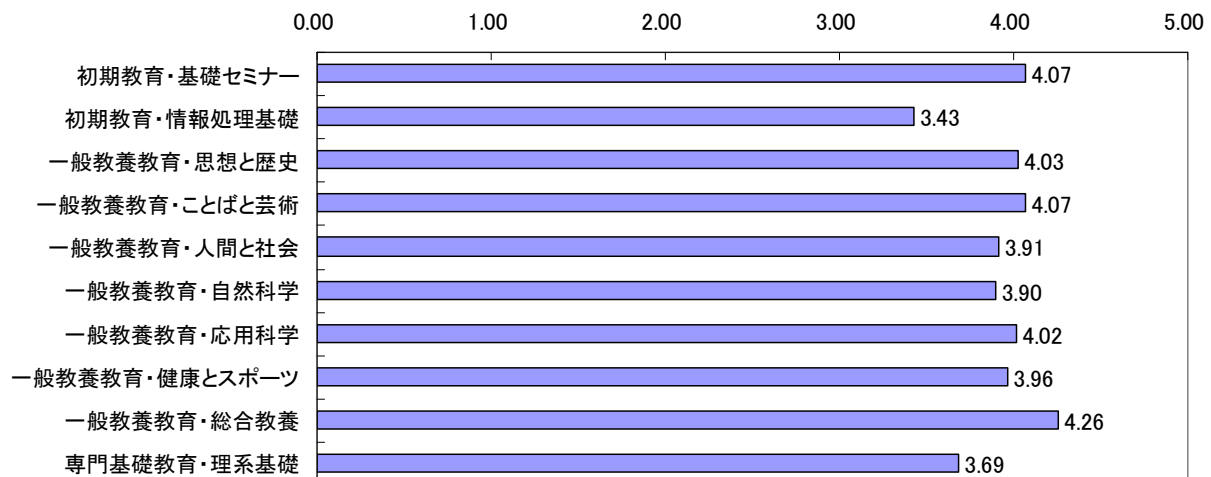
### Q8学習目標達成



### Q9理解



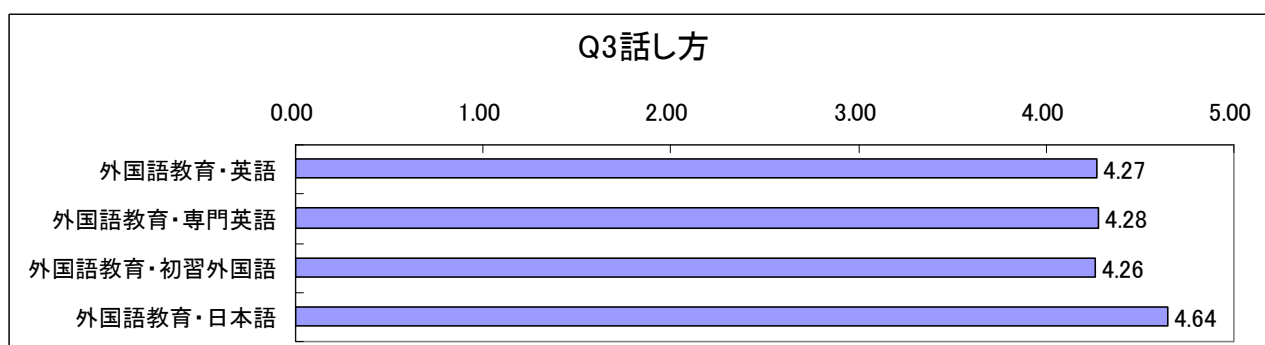
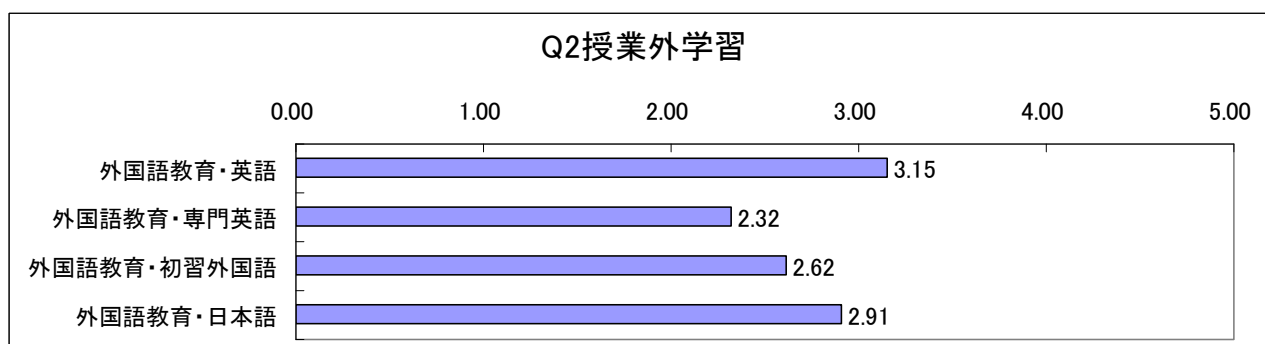
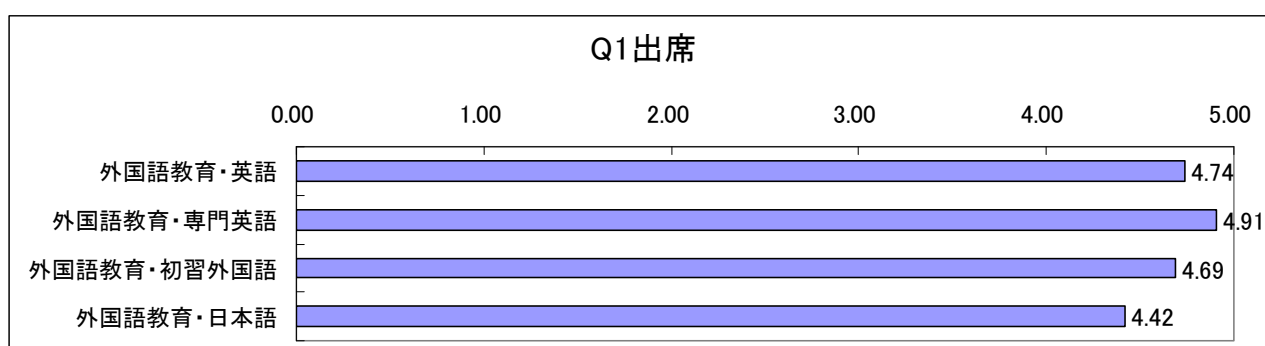
### Q10満足

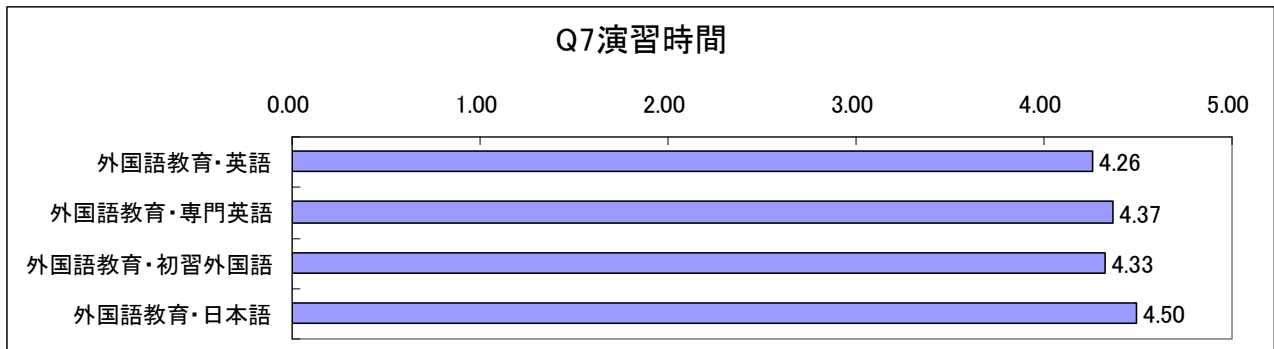
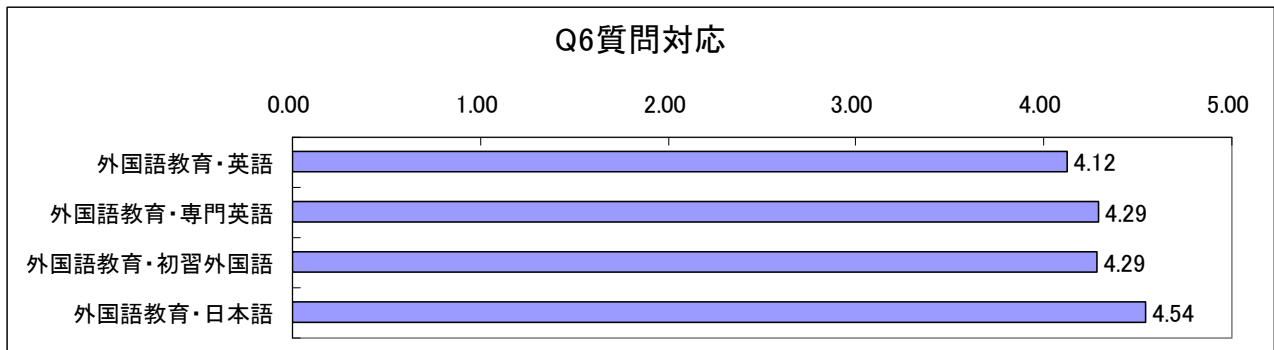
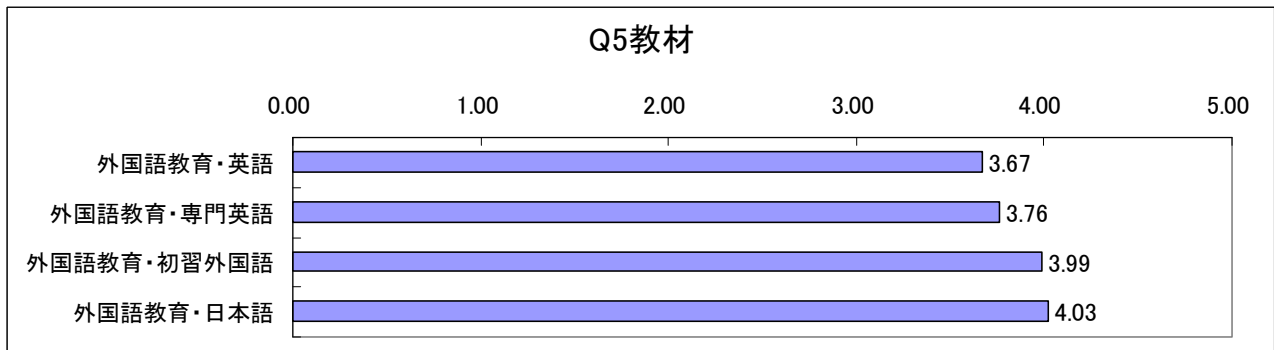
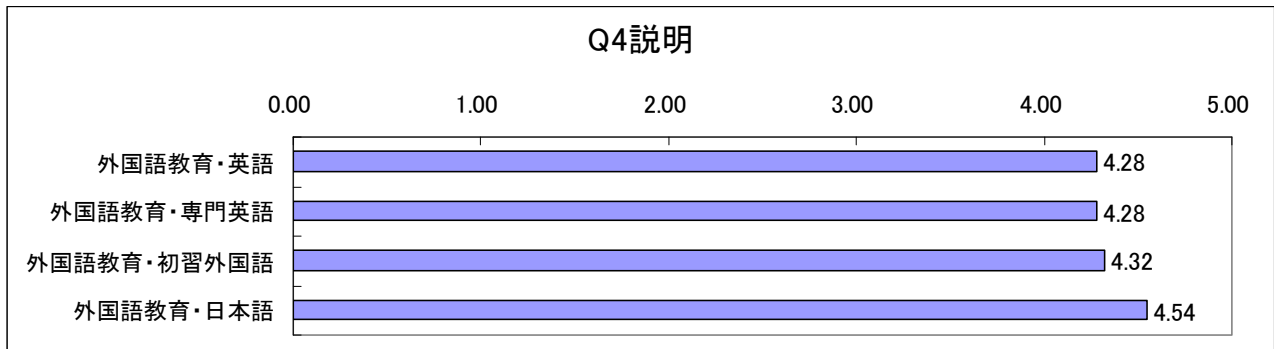


## 2. 外国語教育科目の結果について

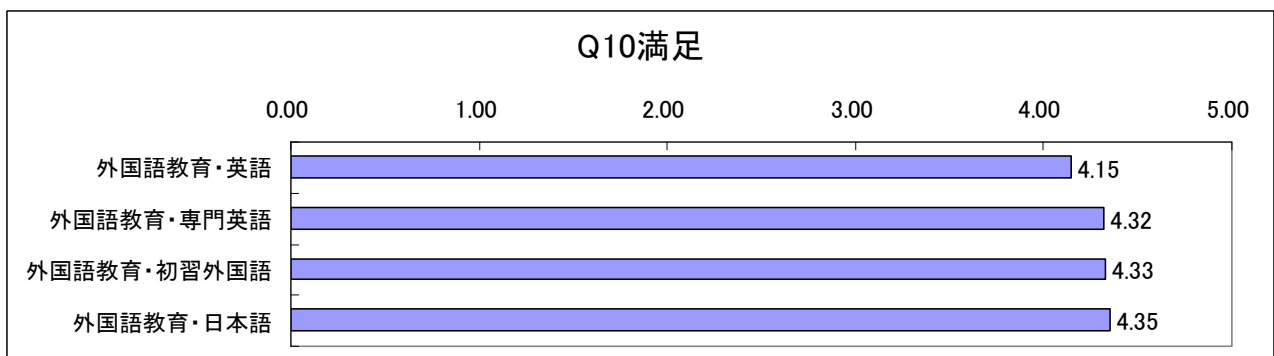
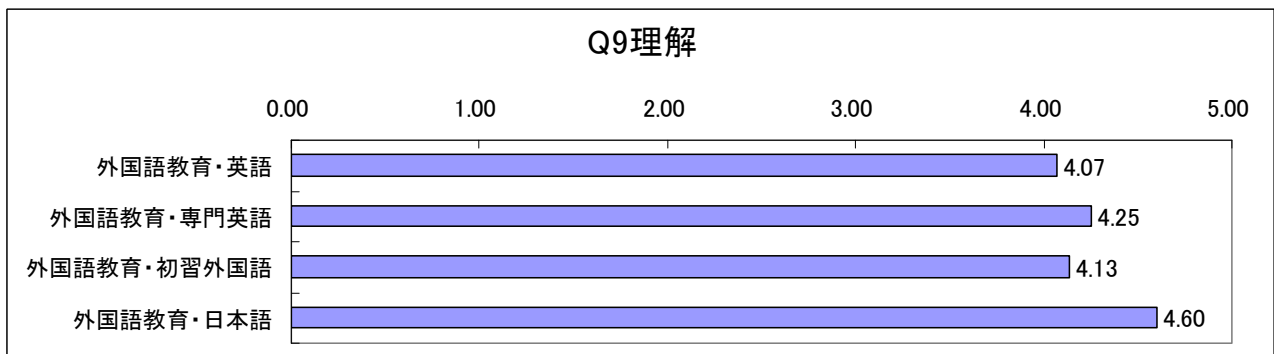
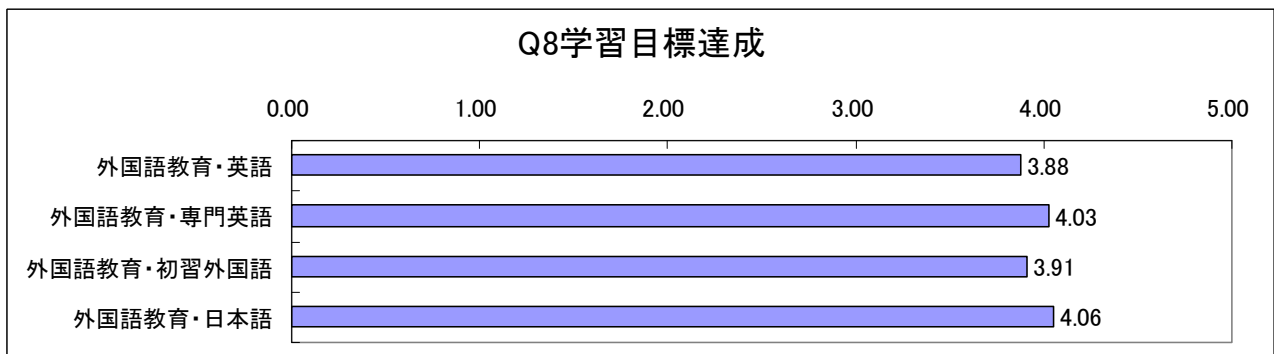
以下は「語学」の質問紙を用いた外国語科目の評定平均値である。どの質問項目も非常に高く良好であり、授業外学習時間の状況についても（1）の講義系科目と比較して平均値が高い。例えば Basic English ではオンライン学習時間が規定に満たない学生には実質的に単位を与えないといった取り組みが行われており、授業外学習を促す取り組みが効果をあげているといえよう。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4説明	Q5教材	Q6質問対応	Q7演習時間	Q8学習目標達成	Q9理解	Q10満足
外国語教育	英語	語学	4.74	3.15	4.27	4.28	3.67	4.12	4.26	3.88	4.07	4.15
外国語教育	専門英語	語学	4.91	2.32	4.28	4.28	3.76	4.29	4.37	4.03	4.25	4.32
外国語教育	初習外国語	語学	4.69	2.62	4.26	4.32	3.99	4.29	4.33	3.91	4.13	4.33
外国語教育	日本語	語学	4.42	2.91	4.64	4.54	4.03	4.54	4.50	4.06	4.60	4.35







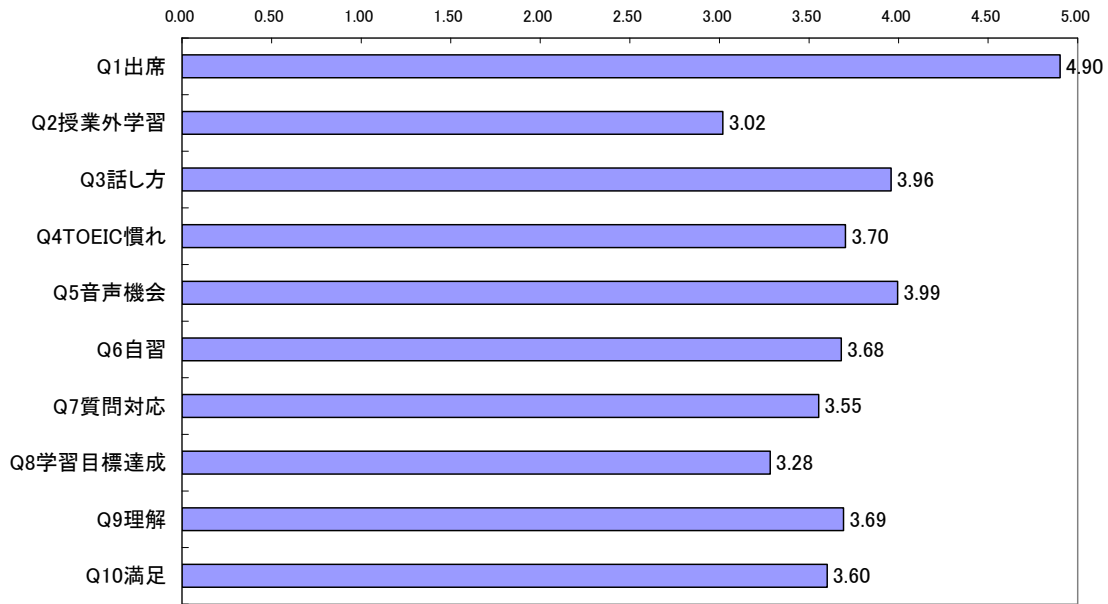


### 3. 外国語科目（TOEIC 準備）の結果について

以下は外国語科目（TOEIC 準備）の評定平均値を示したものである。TOEIC 準備は 1 年生全員が受講する必修科目であり、山口大学が学生の英語力を高めるために全国に先駆けて導入したことから、この科目に限って専用の質問紙を準備して評価を行っているものである。授業外学習時間は 3.02 であり、(2) で取り上げた他の英語の授業よりも若干低くなっている。また、学習目標達成、理解、満足についても (2) で取り上げた他の英語の授業と比較して低い結果となっている。大学に入学して初めて受講する英語の授業であり、学生にとってはとまどいが大きく、授業についていけないと感じる者が多いのかもしれない。学習目標を十分に達成できるよう指導を行い、また授業外でも積極的な学習支援を行っていく必要があると考えられる。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4TOEIC慣れ	Q5音声機会	Q6自習	Q7質問対応	Q8学習目標達成	Q9理解	Q10満足
外国語教育	英語	語学(TOEIC準備)	4.90	3.02	3.96	3.70	3.99	3.68	3.55	3.28	3.69	3.60

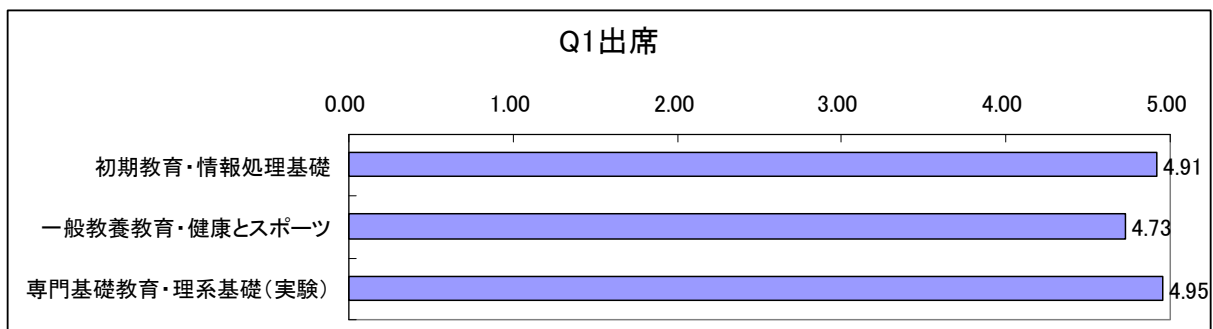
外国語教育 英語 語学(TOEIC準備)

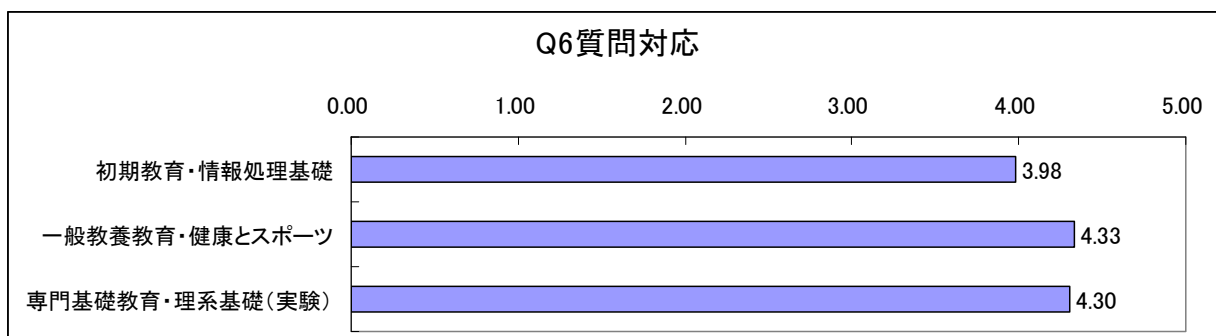
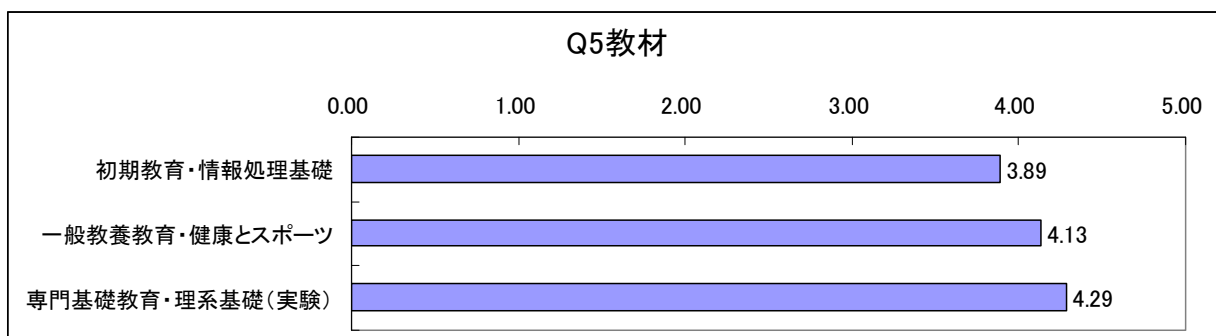
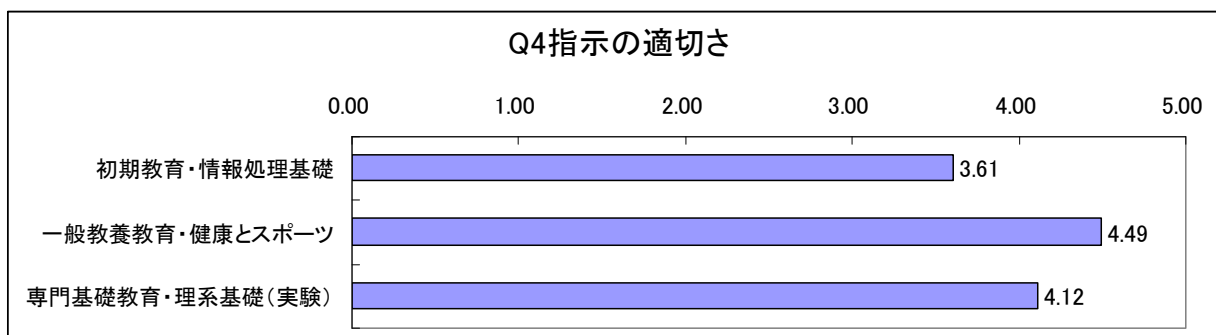
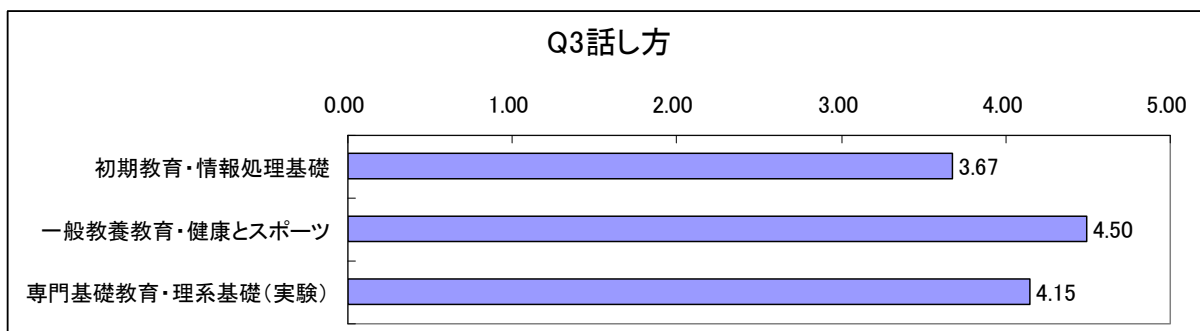
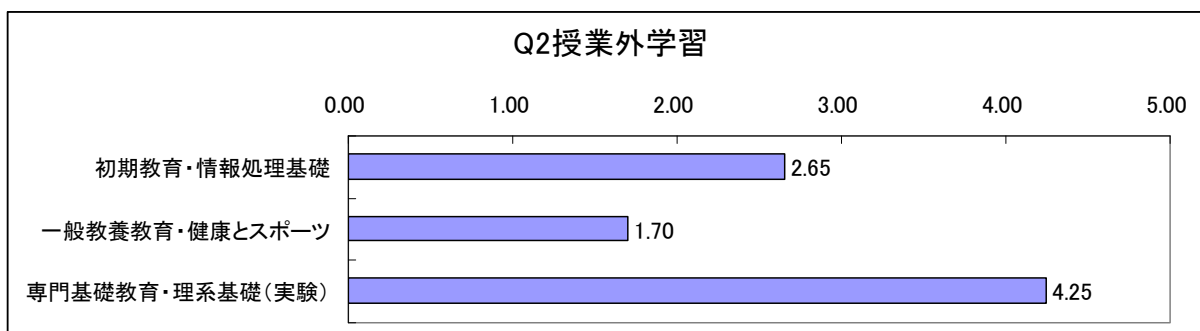


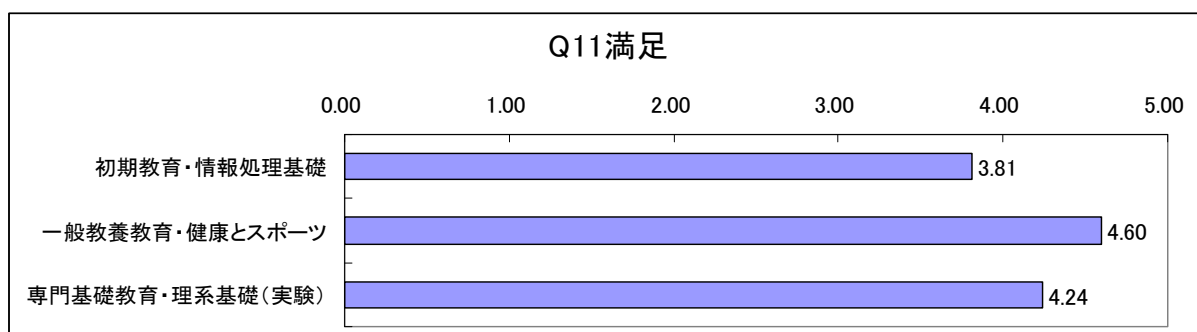
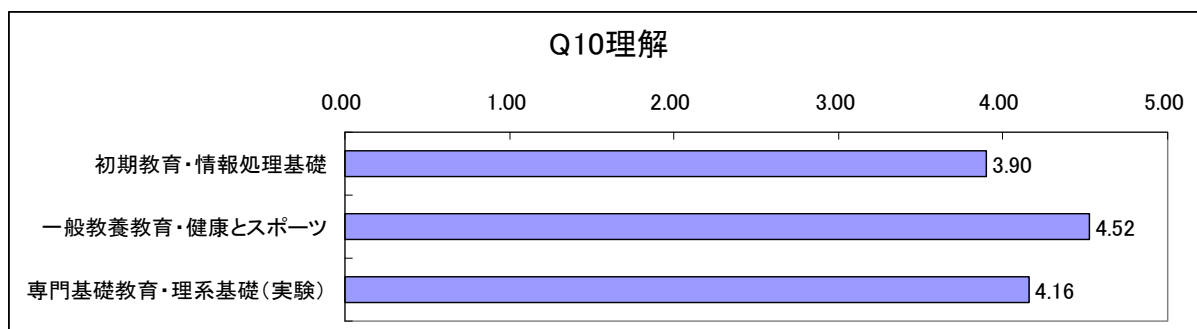
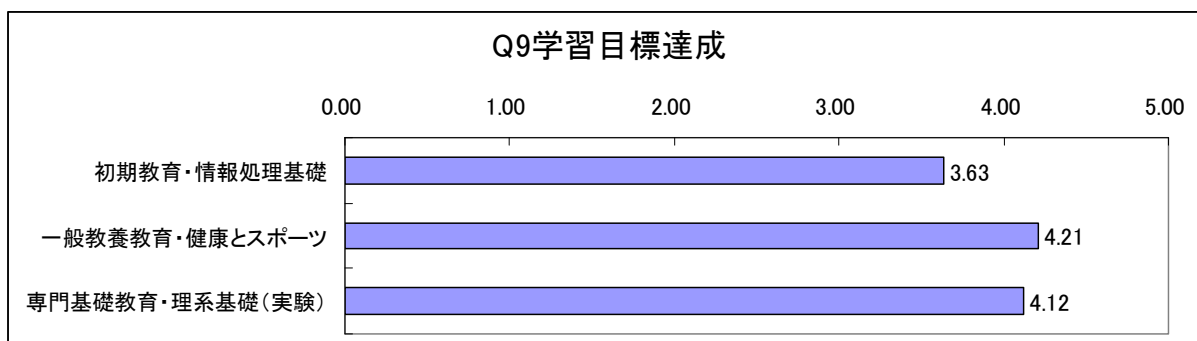
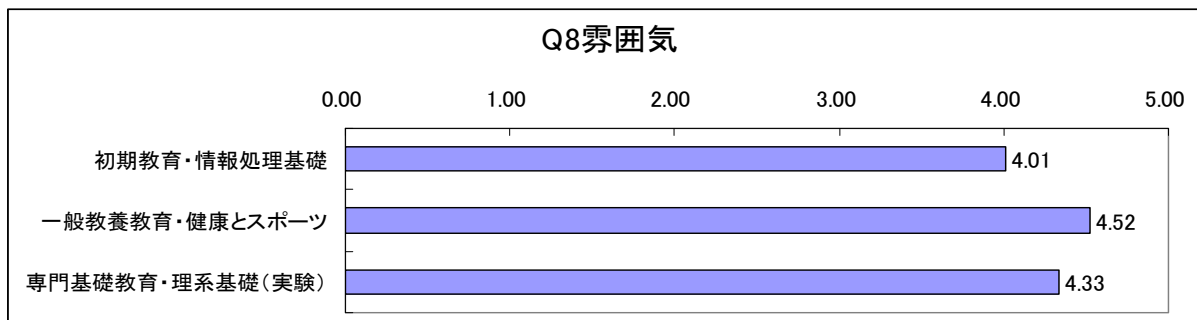
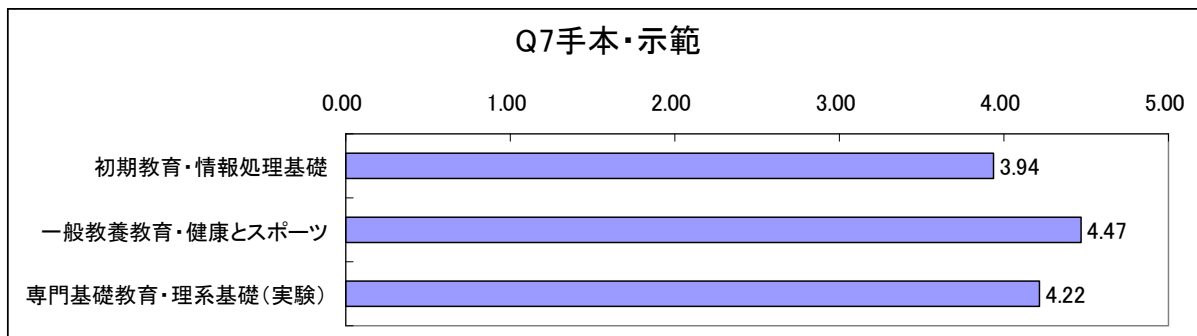
#### 4. 演習・実験・実習系科目の結果について

以下は「演習・実験・実習」の質問紙を用いた授業の評定平均値の一覧である。共通教育のうちこのタイプに当てはまるものは情報処理基礎の「情報リテラシー演習」、健康とスポーツ分野の「スポーツ運動実習」、理系基礎(実験)の各授業である。全体的にみて平均値が高いが、授業外学習については分野間で大きな差がみられる。理系基礎(実験)はレポートが毎回課されるため、学生は予習・復習のために多くの時間をかけている。4.25という平均値は多くの学生が授業1回につき2時間以上の授業外学習を行っていることを示しており、単位の実質化という点からみて非常に成果があがっていると考えられる。スポーツ運動実習については授業の性格上授業外学習を課することが難しい面もあると思われる。しかし、何らかの取り組みを行っていくことが求められよう。

系列	分野	授業区分(質問紙)	Q1出席	Q2授業外学習	Q3話し方	Q4指示の適切さ	Q5教材	Q6質問対応	Q7手本・示範	Q8雰囲気	Q9学習目標達成	Q10理解	Q11満足
初期教育	情報処理基礎	演習・実験実習	4.91	2.65	3.67	3.61	3.89	3.98	3.94	4.01	3.63	3.90	3.81
一般教養教育	健康とスポーツ	演習・実験実習	4.73	1.70	4.50	4.49	4.13	4.33	4.47	4.52	4.21	4.52	4.60
専門基礎教育	理系基礎(実験)	演習・実験実習	4.95	4.25	4.15	4.12	4.29	4.30	4.22	4.33	4.12	4.16	4.24







## <参考> 共通教育 学生授業評価 質問紙 (4種類)

### 共通教育 学生授業評価 (講義)

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学生 区分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部  
6. 工学部 7. 農学部

#### 【質問 I】

1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？ (括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です) 1. 90%以上 (14回以上) 2. 80~90% (12~13回) 3. 60~80% (9~11回) 4. 40~60% (6~8回) 5. 40%未満 (6回未満)
2	あなたはこの授業において、時間外学習 (予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強) をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。 1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分~50分程度 5. 30分未満
3	教員の話方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
4	専門用語や理論的な話は、適切に説明されましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
5	テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
6	板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
7	学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
8	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない
9	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
10	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
11~30	<この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください>

【質問 II】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

## 共通教育 学生授業評価（演習・実習・実験）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学生 区分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部  
6. 工学部 7. 農学部

### 【質 問 Ⅰ】

1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です） 1. 90%以上（14回以上） 2. 80～90%（12～13回） 3. 60～80%（9～11回） 4. 40～60%（6～8回） 5. 40%未満（6回未満）
2	あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。 1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分～50分程度 5. 30分未満
3	教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
4	演習・実習・実験の方法に関する指示は、わかりやすく説明されましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
5	教材または器材が使用された場合、それらは適切に活用されましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
6	学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
7	教員から手本・示範が示された場合、それらは適切でしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
8	授業中は、演習や実習に集中できる雰囲気でしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
9	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない
10	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
11	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
12～30	<この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください>

【質 問 Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

## 共通教育 学生授業評価（語学）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学生 区分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部  
6. 工学部 7. 農学部

### 【質 問 Ⅰ】

1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です） 1. 90%以上（14回以上） 2. 80～90%（12～13回） 3. 60～80%（9～11回） 4. 40～60%（6～8回） 5. 40%未満（6回未満）
2	あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。 1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分～50分程度 5. 30分未満
3	教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
4	テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
5	板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが、効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
6	学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
7	教員は、授業内容の説明以外に、あなたたちに演習や練習の時間を十分に与えましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
8	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない
9	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
10	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
11～30	<この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください>

【質 問 Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください

## 共通教育 学生授業評価（TOEIC 準備）

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙の指示された欄にマークして下さい。

【授業科目名】 授業科目名を記入して下さい。

【担当教員名】 担当教員名を記入して下さい。

【学 年】 1. 1年生 2. 2年生 3. 3年生 4. 4年生 5. 5年生 6. 6年生

【学生 区分】 1. 一般学生 2. 留学生

【学 部】 1. 人文学部 2. 教育学部 3. 経済学部 4. 理学部 5. 医学部  
6. 工学部 7. 農学部

### 【質 問 Ⅰ】

1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です） 1. 90%以上（14回以上） 2. 80~90%（12~13回） 3. 60~80%（9~11回） 4. 40~60%（6~8回） 5. 40%未満（6回未満）
2	あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。 1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分~50分程度 5. 30分未満
3	教員の話方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
4	この授業を通して、TOEICテストの出題形式と問題内容に慣れることができましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
5	授業中に（CD等で）英語の音声を聞く機会はたくさん与えられましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
6	配布プリントやオンライン自習課題を有効に使って自習（復習を含む）を行いましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
7	学生の疑問・質問などに答える機会（オンライン自習課題の質問機能も含む）が十分に与えられていましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
8	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない
9	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
10	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
11~30	<この問い以下は、担当教員の設問に従って回答してください>

【質 問 Ⅱ】 この授業に関する感想や要望等を率直に記述してください

この質問の回答については別に記入用紙を配布しますので、本紙には記入しないでください



## 第2部 学部・研究科のFD活動

## 第4章 人文学部のFD活動

今年度の人文学部のFD活動としては、全学的におこなっているFD活動の一環として、①大学教育機構主催のFD研修会・講演会への参加、②学生による授業評価アンケート（マークシート方式）の実施、③教員による授業自己評価のウェブ入力、以上を例年どおり推進した。また、人文学部独自のFD活動として、④教員間授業公開（ピア・レビュー）についても前年度に引きつづき実施するとともに、今回初めての試みとして、⑤大学教育機構と共催の形でのFD研修会、⑥「基礎セミナー2」の導入に伴うFD活動を実施した。

### 第1節 教員間授業公開（ピア・レビュー）

今年度の人文学部における教員間授業公開（ピア・レビュー）については、1教員が授業1コマを公開する従来型のものを1回実施した。授業参観の部に引き続き、事後検討会もあわせて実施した。参観教員には参観に際して「参観コメント票」を配布し、内容に関する所感、および質問、授業技術面に関する所感、および質問、授業目標に関する所感、質問、その他、授業公開に関する意見や要望、以上を記入していただき、事後検討会における議論に活用した。

#### 一平山豊先生授業公開一

##### （1）授業参観の部

- 1) 対象授業：ヨーロッパ文学入門（フランス）Ⅱ
- 2) 日 時：平成20年7月11日（金）11：20～11：50
- 3) 講義室：人文学部第2講義室
- 4) 授業担当：平山豊先生
- 5) 授業対象：人文学部の受講者
- 6) 本時の内容：論題「ラ・ファイエット夫人『クレーヴの奥方』とその時代背景について」
- 7) 参観教員：磯部佳宏・井上三朗・田中均・平野尊識・宮原一成・村田裕一・森野正弘

##### （2）事後検討会の部

- 1) 日 時：平成20年7月11日（金）公開授業終了直後
- 2) 場 所：人文学部第3演習室
- 3) 参加教員：平山豊（授業担当）・磯部（司会）・井上・田中・村田・森野
- 4) 概 要：コメント票に基づき、質疑応答や意見交換をおこなった。

## 第2節 大学教育機構との共催による

### 教育改善FD研修会

今回、初めての試みとして、大学教育機構と共催の形で、拡大教授会開始前の時間を利用したFD研修会が開催された。

主催：大学教育機構と人文学部・人文科学研究科・東アジア研究科（人文系）による共催

日程：平成20年7月16日（水）14:45～15:45

場所：人文理学部大会議室

対象：全員（拡大教授会出席者）

講師：岩部浩三（大学教育センター長）

内容：グラジュエーション・ポリシー、カリキュラムマップ、Webシラバス、学生授業評価、教員授業自己評価などの相互関係および組織的な取り組みの必要性について理解する。

講師より「山口大学における教育改善の枠組みについて－教育改善活動におけるPDCAサイクル－」という題目で30分のプレゼンテーションがあり、その後質疑応答が行われた。授業改善のPDCAサイクルが機能しているかどうかは法人評価や各種補助金等の審査の対象にもなっており、その成果は今後重要であるため、学科・コース単位で時々見直していただき、卒業時の質保証ができる教育課程となっているか確認してもらいたいという要望があった。

まず、卒業生・修了生が備えておくべき資質であるグラジュエーション・ポリシー（GP）、GPの各項目をどの授業を通じて実現するかを明示したカリキュラムマップ、個々の授業の到達目標・成績評価方法を記したWebシラバスの概略が説明された。また、今後の組織的FD活動を進めていくためのヒントとして、カリキュラムマップやシラバスの具体例に基づいて、良い点や今後改善すべき点が指摘された。学部・研究科のFD活動を計画する際には大学教育センターを活用し、報告書作成等の負担軽減につなげてほしいとの申し出もあった。

プレゼンテーション後の質疑応答は予定時間を大幅に超えて活発になされた。

学生主体の教育を求めて行くと、現状の学部組織の在り方との整合性が問題になる可能性があるという指摘があった。

また、シラバスや授業評価のシステムは、教育改善のPDCAサイクルの中に位置づけられており、ばらばらではなく一体のシステムであるべきではないか、という意見があった。入力や内容参照の便からもその通りであるが、シラバスが教務システムという業務システム（パッケージソフト）に組み込まれる方向であるのに対し、授業評価システムはそれ自体が可変的かつ独自性の強いものであるため、現在、システム開発上は別扱いになっていること、また、シラバスが公開されるデータであるのに対し、授業評価の方は、現状、原則として非公開データである点でも違いがあるとの回答があった。その一方で、不便の少ないように入力画面に構成することは可能なことであり、今後その方向で改善を行いたいと述べられた。

次に、「概説」などの授業の目標は設定しやすいが、「特殊講義」の目標はことばでは表現できないとの意見もあった。たしかに難しい場合も考えられるが、始めからできないと決まったことではないのではないかと、できる限り表現できるように工夫してほしいという

応答があり、議論が続いた。

最後に「5年に一度はFDに参加する」というルールは今でも有効かとの質問があり、そのルールは合宿形式によるFD時代の遺物であり、教学審議会でも数値目標の設定の必要性等も含めて改めて審議する予定であることが述べられた。

## 第3節 「基礎セミナー2」の導入に伴うFD活動

### 1. 「基礎セミナー2」の背景と必要性

#### (1) 人文学部の1年生に対するケア体制の改善

学生のケアに関して、人文学部は従来、1年生を対象に前期の「基礎セミナー1」を開講するとともに、全体的には学生委員が学生の世話役を務めている。2年生に進級すると、各学科のコース別けによって所定のコースに所属することになり、コース委員が学生の履修や勉学の相談役となる。3年生からは各学生に指導教員が決まり、卒業まで個別に指導や相談にあたることになっている。しかし、順調に卒業できない学生の場合、すでに1年生から勉学に何らかの障害があることが成績表や単位取得状況から判明し、1年生に対してのケアを改善するとともにより充実させる必要があることが分かった。

#### (2) 後期開講の必要性

1年生にとって、後期が一つの難局と考えられる時期である。入学時の熱意が醒め、一人暮らしの不安、人間関係をうまく構築できない、気候の影響（寒さ、暗い）、望みのコースへの進学が困難になるなどの事由により、授業を欠席がちになるなどこの時期に履修上の問題が発生すると期間内の卒業に赤信号が点滅することとなる。

#### (3) コースガイダンスの必要性

2年次進級時のコース選択において、とくに言語文化学科の希望に偏りがみられる。高校時代に既修の日本語学・日本文学コースと英語・英米文学コースの希望が多く、コース間の人数的なアンバランスが生じている。

### 2. 「基礎セミナー2」の目的と導入の過程

1年生全員のケアを改善・充実するために前期の「基礎セミナー1」に引続き後期に「基礎セミナー2」を導入することを決定し、平成18・19年度に教務学生委員会において計画案を作成、拡大教授会で議論し、実施を決定した。学生全員に専門教育への橋渡し、コース選択のための情報提供、大学の授業形態（講義、講読、演習、実習）の紹介、また、出席確認を徹底し、欠席者への対応を徹底して行うことを目的とする。さらに、コース人数のアンバランスを緩和するため、学生に多くのコースの学問や実情を把握できる場を提供することによって、よりバランスのとれたコース振り分けを目指す。

こうした過程を経て平成20年の後期にはじめてオムニバス式の授業を開講した。

### 3. 「基礎セミナー2」にともなう

#### 議論・意見交換・授業アンケートなど

開講二ヶ月後の12月12日（金）に担当教員、および次年度の担当者を中心として教員全員の意見交換会を開催し、30名が参加、欠席者からメールによる意見等もあわせて、活発な議論が行われた。これらを報告書にまとめ、教員全員にメール報告するとともに拡大教授会において周知徹底した。学生の反応を把握できるように「基礎セミナー2」専用の授業アンケートを実施し、年度内に報告した。「基礎セミナー2」のコース振り分けへの効果を活かすため、コース選択志望の日程を従来より遅らせた。

#### (1) アンケートの結果

学生の大半から「人文のコースや学問の多様性に関心を持った」「視野が広がった」「コース選択に参考になった」「他コースの現状も把握できて良かった」「仲間ができた」などの好意的な意見が提出された。批判的な意見としては「開講の時間帯（金1・2時限）が良くない」「関心のあるコース以外には興味がない」などが見られた。

#### (2) 課題

2年目の実施に向けて、まず、基礎セミナー2への理解を広めること、また、学生同士の横のつながりを深める工夫がさらに必要である。授業の内容や評価について教員間でさらに検討し、同時に学生のチームワーク、ワークショップ風、討論形式の授業を増やすことも考えられる。今回の取組により、教員全員の理解と関心が得られ、授業法の改善の可能性も考えられる。

#### (3) FDとしてのフォーラム

「基礎セミナー2」の取り組みは、今後さらなる教育方法の改善にも活かせると考えられる。チーム・ティーチングの試み、パネル・ディスカッションなどの実験授業にも挑戦する可能性がある。今まであまり挑戦されていない実験的な授業方法(学生どうしの討論、グループ・ワーク、パワーポイント発表など)を実施するチャンスでもある。分野の異なる教員の交流の場として、基礎セミナーにおいて、教育方法改善のための意見交換や手短なピア・レビュー、チーム・ティーチングなどを実施することも可能であろう。

## 第4節 大学教育機構主催FD研修・講演会への参加

平成20年度の大学教育機構主催FD研修およびFD講演会において、人文学部・人文科学研究科から参加した教員一覧は以下の通りである。

実施年月日	会場	研修内容	参加教員
平成20年7月29日	吉田	より充実した初年次教育を目指して	岩部浩三（センター長）、 ジュマリ・アラム、柏木寧子
平成20年8月4日	小串	新規採用教育職員研修会	田中均

平成 20 年 8 月 26 日	吉田	学生参加型授業の展開方法	林伸一、田中均
平成 20 年 9 月 19 日	吉田	メンタルヘルスの手法を学ぼう	岩部浩三（センター長）、 豊澤一、井上三朗、平野尊識
平成 20 年 9 月 25 日	吉田	学習意欲を高める問題解決型の授業展開－その方法と展開－	ジュマリ・アラム、林伸一
平成 20 年 12 月 19 日	吉田	教育で標準テストの影響： The Influence of Standardized Tests in Education	エムデ・フランツ、池園宏、 和田学、赤羽仁志、富平美波
平成 21 年 1 月 7 日	吉田	学士力・社会人を教育する方法	岩部浩三（センター長）
平成 21 年 3 月 18 日	吉田	事例から学ぶ危機対応 －自殺のポストベンションについて－	岩部浩三（センター長）、 エムデ・フランツ、真木隆行、 尾崎千佳、田中均、武本雅嗣 添田建治郎、宮原一成

(以上 18 名、のべ 26 名)

## 第 5 節 人文学部における学部学生むけアンケート

### 1. 概要

#### (1) 経緯

平成 14 年度以来、人文学部で実施してきた学部生むけ授業アンケートは、初年度は講義のみを対象とし、しかも記述式であった。翌 15 年度にマークシート方式へ変更、平成 16 年度後期からは、全学共通の質問項目を加えた。その後、平成 17 年度からは、講義のみならず、演習や講読もアンケート対象に加えて実施することとなり、現行の方式がほぼ確立した。そして平成 18 年度からは、それらアンケート結果を踏まえて、教員自己評価入力のうち 1 項目を学内ウェブ上で公開することとなった。

#### (2) 質問項目と実施をめぐって

人文学部の授業アンケートについては、質問Ⅰをマークシート方式、質問Ⅱを自由記述方式としている。そのうち、質問Ⅰのマークシート方式の質問項目については、講義用として全 12 項目、演習講読用として全 11 項目からなり、それぞれ 5 項目が全学共通のものとしている。今回、質問Ⅰの質問項目とその配列を見直した。

今年度使用した講義用質問項目は、次の通り。

1. あなたがこの講義を受講した動機のうち、該当するものを 2 つまで選んでください。
2. あなたは、この授業にどのくらい出席しましたか。〈全学共通〉
3. あなたは、この講義において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか。総時間を平均し、講義 1 回あたりの時間に換算してお答えください。〈全学共通〉
4. この講義の時間外において、どのような活動をしましたか？いくつでもあげてください。
5. あなたは、この講義の内容を理解できましたか。〈全学共通〉
6. あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか。〈全学共通〉
7. この講義を受けた結果、どのような変化がありましたか？該当するものを 1 つ選んでください

い。

8. この講義を受けてよかったと思うことを、いくつでもあげてください。
9. この講義を受けて不満に感じたことを、いくつでもあげてください。
10. この講義は、それまであなたが常識と思っていたことを考え直したり、ある物事を別の視点から促え直したりするきっかけになりましたか。
11. この講義の内容に関して、自分なりの意見を持ったり、何かに気づき発見するようなことがありましたか？
12. この講義は、あなたにとって満足のいくものでしたか。〈全学共通〉

今年度使用した演習講読用質問項目は、次の通り。

1. あなたがこの講義を受講した動機のうち、該当するものを2つまで選んでください。
2. あなたは、この授業にどのくらい出席しましたか。〈全学共通〉
3. あなたは、この授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか。総時間を平均し、講義1回あたりの時間に換算してお答えください。〈全学共通〉
4. あなたは、この授業の内容を理解できましたか。〈全学共通〉
5. あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか。〈全学共通〉
6. この講義を受けた結果、どのような変化がありましたか？該当するものを1つ選んでください。
7. この講義を受けてよかったと思うことを、いくつでもあげてください。
8. この講義を受けて不満に感じたことを、いくつでもあげてください。
9. この講義は、それまであなたが常識と思っていたことを考え直したり、ある物事を別の視点から促え直したりするするきっかけになりましたか。
10. この授業の内容に関して、自分なりの意見を持ったり、何かに気づき発見するようなことがありましたか？
11. この講義は、あなたにとって満足のいくものでしたか。〈全学共通〉

なお、人文学部におけるアンケート実施にあたっては、集中講義、4年むけ演習や卒業論文、これらをその対象から除外することになっている。これらを除くと、今年度実施対象とした科目数は388となり、このうち実際のアンケート実施数が345であったため、実施率は88.9%となった。

## 2. 講義の部

### (1) 全学共通の質問項目2・3・5・6・12

人文学部の講義に関するアンケートのうち、まずは全学共通の質問項目1～5に関するアンケート結果について、以下に作表データを列挙した上で検討する。

#### 質問2

	1	2	3	4	5
	90%	80～90%	60～80%	40～60%	40%未満
前期	59.4	27.9	10.8	1.2	0.8
後期	59.5	29.8	9.4	0.8	0.4

### 質問3

	1	2	3	4	5
	3時間	2時間	1時間	30～50分	30分未満
前期	4.8	4.4	11.3	16.1	63.3
後期	5.7	7.1	14.1	18.5	54.6

### 質問5

	1	2	3	4	5
	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
前期	16.3	57.2	18.1	6.6	1.8
後期	20.2	56.6	16.6	5.7	1

### 質問6

	1	2	3	4	5
	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
前期	12.7	50.2	29.5	5.9	1.7
後期	19.5	49.3	26.2	4	1

### 質問12

	1	2	3	4	5
	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
前期	38.7	42.4	14	4	0.9
後期	54.1	34.8	8.3	2.3	0.4

以上のうち、まずは学生側の授業態度に関する認識から検討する。学生側の出席頻度（質問2）に関しては、8割以上出席したとする学生の割合が、9割近くを占め非常に出席状況はよいといえる。これに対して、授業外学習時間（質問3）に関しては、平均30分未満に過ぎないという学生が過半数を占めるが、前期より後期のほうが学習時間が増えており好ましい結果である。全体としてみれば、授業には真面目に出席するが、自主的な学習態度は充分には身につけていない学生の姿が浮き彫りとなる。

つぎに、学習目標に対する内容理解度（質問5）達成度（質問6）に関する学生側の認識について検討する。まず、シラバスに提示された学習目標に対する達成度（質問6）に関しては、それなりに達成できたと思う学生が6割を超える。内容理解度（質問5）のほうは、それなりに理解したと思う学生が7割を超える結果となった。

最後に満足度（質問12）は、それなりに満足できたと感じる学生が8割を超え、とくに後期は半数以上の学生が十分に満足していることが明らかとなった。

## （2）人文学部独自の質問項目1・4・7～11

次に、人文学部の講義に関するアンケートのうち、人文学部独自の質問項目1・4・7～11に関するアンケート結果について検討する。

まず、学生側の受講動機（質問1）に関する回答は、つぎの通り。



#### 質問1

		前期	後期
1	講義の内容に、以前から関心を持っていたから。	15.9	20.2
2	「講義概要」を呼んで関心を持ったから。	20.2	15.4
3	担当教員の授業を以前受講したことがあり、興味を持った経緯があったから。	9.1	19.4
4	先輩や友人に履修を勧められたから。	2.7	2.4
5	自分の専攻分野にとって、履修することが望ましかったから。	22.3	19.2
6	特別な理由はなく、ただ何となく。	1.7	1.1
7	単位取得の関係で、履修する必要があったから。	20.4	15.6
8	時間割の都合から。	7.4	6.6

該当するものを2つまで選ぶ形での回答であるが、いずれの選択肢も2割程度以下の選択率であり、受講前に必ずしも明確な受講動機があったわけではない様子が垣間見える。

次に、授業時間外学習時間として具体的に何をおこなったかという質問（質問4）に対する回答については、以下の通り。

#### 質問4

		前期	後期
1	担当教員に質問した。	4.7	7.5
2	担当教員の指示に従い、予習や復習をした。	6.6	11.4
3	担当教員の指示に従い、宿題をした。	16.8	16.3
4	特に指示を受けていないが、テキストや配布プリントを使って自主的に予習や復習を行った。	8.7	10.7
5	紹介された参考文献を探してみた。	2.3	2.7
6	紹介された参考文献を実際に読んだ。	2.1	2
7	独自に、講義に関連する事項について調べた。	4.9	5.1
8	講義の内容について、友人や一般の人と話題にしたことがある。	21.3	20.4
9	とくに何もしていない。	32.6	23.9

回答の中で最も多かったのは、授業時間外の学習として「とくに何もしていない」という学生であるが、前期に比べ後期では大きく減少している点が注目される。宿題だけではなく、教員の指示によらないものも含めて、予習や復習を行ったという回答が後期に増加していることによるものと考えられ、自主的な学習習慣が身についていく過程が垣間見える。

受講後の所感に関する設問に対する回答は、以下の通り。

#### 質問7

		前期	後期
1	興味や理解が広がったり深まったりした。	44.2	49.3
2	部分的に興味を持つようになった。	41.4	39.2
3	受講前ととくに変化はない。	12.4	9.1
4	受講前よりも興味が薄れた。	2	2.5

質問8

		前期	後期
1	講義内容の難易度が適切だった。	16.3	15.8
2	担当教員の教え方に工夫が感じられ、わかりやすかった。	12.1	15.6
3	担当教員に熱意が感じられた。	19.5	19.1
4	受講前に想像していた以上の知見の広がりを感じられた。	17.4	15.8
5	質問に充分対応してくれた。	5.3	5.9
6	講義が勝手な私語などで乱されることなく、集中できる雰囲気だった。	18.3	16.3
7	板書や機器類の活用が適切だった。	8.5	7.4
8	よかったと思うことは何もない。	2.5	4.2

質問9

		前期	後期
1	講義内容がやさしすぎた。	1.9	4.8
2	講義内容がむずかしすぎた。	13.4	14.9
3	担当教員の教え方に工夫が感じられず、わかりにくかった。	7.7	4.4
4	担当教員に熱意が感じられなかった。	1.4	1
5	受講前に想像していた内容とは食い違いがあった。	6.5	3.4
6	質問に充分対応してくれなかった。	1.2	0.9
7	講義が勝手な私語などで乱され、集中できない雰囲気だった。	1	1
8	板書や機器類の活用が適切ではなかった。	7.6	5.1
9	不満に感じたことは何もない。	59.4	64.6

質問10

		前期	後期
1	大いになった。	33.2	39.7
2	少しはなった。	56	52.8
3	あまりならなかった。	9.3	6.6
4	まったくならなかった。	1.6	0.9

質問11

		前期	後期
1	大いにあった。	24.4	31.9
2	少しはあった。	60	54.9
3	あまりなかった。	14.1	11.8
4	まったくなかった。	1.6	1.4

以上のうち、受講に伴う興味関心の変化（質問7）に関しては、部分的にせよ興味を持ったと回答した学生が、例年通り8割以上に達している。また、講義自体の良かった点と不満な点とを問う質問8と質問9によれば、「不満に感じたことは何もない」という回答が60%前後に達しており、全般的に見ても、良かった点を挙げるほうが多く、不満な点を挙

げるのは少なめである。不満な点としては、講義内容を難しすぎるとする回答のみが1割を超えており、教員の考える適切な難易度との間にやや乖離が見られるといえるかもしれない。

最後に、質問10と質問11について検討する。受講後は、多少でも常識を相対化できるようになったり、別の視点を得ることができたりという学生が9割を超えている。また、多少でも自分なりの意見を持ったり問題を発見できたりという学生も8割を超えるようになっている。

以上を総合すると、受講前には明確な受講動機がなかった学生の多くが、受講後の効果については好評であったと結論付けることが出来る。

### 3. 演習・講読の部

#### (1) 全学共通の質問項目2～5・11

人文学部の演習・講読に関するアンケートのうち、まずは全学共通の質問項目2～5および11に関するアンケート結果について、作表データを列挙したうえで検討する。

##### 質問2

	1	2	3	4	5
	90%	80～90%	60～80%	40～60%	40%未満
前期	61.3	25.5	10	2.1	1.2
後期	63	24	9.2	2.2	1.6

##### 質問3

	1	2	3	4	5
	3時間	2時間	1時間	30～50分	30分未満
前期	16	18.2	29.2	17.4	19.2
後期	18.8	18.1	27.3	17.4	18.4

##### 質問4

	1	2	3	4	5
	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
前期	26.1	57	12.7	3.5	0.7
後期	26.6	56.5	12.9	3.4	0.7

##### 質問5

	1	2	3	4	5	6
	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない	答えられない
前期	18.7	50.2	24.6	3	0.8	2.6
後期	20.3	51.1	21.4	3.5	1.2	2.4

## 質問 11

	1	2	3	4	5
	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
前期	56.4	33	8.9	1.5	0.2
後期	54.1	34.8	8.3	2.3	0.4

以上のうち、まずは学生側の授業態度に関する認識から検討を加える。学生側の出席頻度（質問 2）に関しては、8 割以上出席したという学生の割合が毎年増加傾向にあり、8 割を超えるようになってきている。また、授業外学習時間（質問 3）に関しては、過半数の学生が 30 分未満と回答した講義の場合よりも十分な時間がかけられているが、それでも最も多い回答は 1 時間程度である。最も前期に比べ後期に入り、微増の傾向は窺える。授業の内容の理解度（質問 4）については 8 割以上、シラバスに提示された学習目標に対する達成度（質問 5）に関しては 7 割程度の学生が肯定的な評価を下している。最後に、満足度（質問 11）に関しては、肯定的評価がともに 9 割近くとなっており、講義よりもさらに肯定的評価は高い。

## （2）人文学部独自の質問項目 1・6～10

次に、人文学部の演習・講読に関するアンケートのうち、人文学部独自の質問項目 1 および 6～10 に関するアンケート結果について検討する。

まず、学生側の受講動機（質問 1）に関する回答は、つぎの通り。

### 質問 1

		前期	後期
1	講義の内容に、以前から関心を持っていたから。	15.5	17.4
2	「講義概要」を呼んで関心を持ったから。	14.1	10.9
3	担当教員の授業を以前受講したことがあり、興味を持った経緯があったから。	12.7	20.1
4	先輩や友人に履修を勧められたから。	2.3	1
5	自分の専攻分野にとって、履修することが望ましかったから。	31.4	31.3
6	特別な理由はなく、ただ何となく。	1.1	0.5
7	単位取得の関係で、履修する必要があったから。	19.4	16.1
8	時間割の都合から。	3.4	2.1

該当するものを 2 つまで選ぶ形での回答であるが、「自分の専攻分野にとって履修が望ましかったから」が 3 割を超える以外、他は全て 2 割未満となっている。

このような動機に対して、受講後の所感に関する設問に対する回答は、以下の通り。

質問6

		前期	後期
1	興味や理解が広がったり深まったりした。	61.6	61.6
2	部分的に興味を持つようになった。	33.1	31.8
3	受講前ととくに変化はない。	5	5.8
4	受講前よりも興味が薄れた。	0.3	0.8

質問7

		前期	後期
1	講義内容の難易度が適切だった。	16.5	19.1
2	担当教員の教え方に工夫が感じられ、わかりやすかった。	13	13.4
3	担当教員に熱意が感じられた。	21.2	18.7
4	受講前に想像していた以上の知見の広がりを感じられた。	18.6	16.8
5	質問に充分対応してくれた。	12.3	13.7
6	授業内の作業が、集中できる雰囲気で行われた。	17.4	16.6
7	よかったと思うことは何もない。	1	1.7

質問8

		前期	後期
1	学習テーマや内容の設定がやさしすぎた。	2.1	2.9
2	学習テーマや内容の設定がむずかしすぎた。	13.9	7.9
3	演習等の方法や手順の指示が、わかりにくかった。	5.5	7.8
4	担当教員による学生への助言指導が不適切だった。	1.7	3
5	受講前に想像していた内容とは食い違いがあった。	3	4.5
6	質問に充分対応してくれなかった。	0.6	0.6
7	授業内の作業が、集中できる雰囲気で行われなかった。	1.7	2
8	不満に感じたことは何もない。	71.5	71.1

質問9

		前期	後期
1	大いになった。	47.8	44.1
2	少しはなった。	46.3	49.3
3	あまりならなかった。	5.2	5.3
4	まったくならなかった。	0.7	1.2

質問10

		前期	後期
1	大いにあった。	41.9	44.1
2	少しはあった。	51.2	49.3
3	あまりなかった。	6.2	5.3
4	まったくなかった。	0.7	1.2

ったと回答した学生が、9割を超え、例年以上の好結果を示している。演習・講読を受講して良かった点と不満な点とを問う質問7と質問8によれば、「不満に感じたことは何もない」という回答は、講義よりも高く、7割を超えている点が注目される。一方「よかったと思うことは何もない」と感じる学生は1%程度に留まっている。受講前と受講後の変化に関連して、質問9と質問10に対する回答について検討する。受講後は、多少でも常識を相対化できるようになったり、別の視点を得ることができたりという学生が例年どおり9割を超えている。また、多少でも自分なりの意見を持ったり問題を発見できたりという学生も9割を超えるようになった。いずれもそのうち約半数が「大いにあった」と回答しており、この点において、講義よりもさらに積極的な好評を得ている。講義よりも少人数で実施されることの多い演習や講読の授業形態が学生にとって、非常に有意義なものであることが窺える。

## 第6節 その他のFD関連活動

人文学部FD委員会では、毎年3月に京都大学高等教育研究開発推進センターが主催する全国的なFD関係の「大学教育研究フォーラム」に毎年出張参加している。この年度には、平成21年3月20日・21日両日に第15回フォーラムが開催されており、今回は2名が出張参加した（井上三朗氏・武本雅嗣氏）。

このほか、山口大学内外において、全学や各学部のFD委員会が主催したものではないが、各種の研修会が開催されている。それらの参加状況については、当委員会としては掌握し切れていない。

\* \* \* \* \*

平成20年度 山口大学人文学部FD委員会

磯部	佳宏（委員長）	池園	宏	井上	三朗
武本	雅嗣	田中	均	馬	彪
村田	裕一	山本	真弓（副委員長）		

## 第5章 教育学部のFD活動

平成20年度は研修会・研究会を開催し、学生授業評価・教員授業自己評価を実施した。本章では、まずFD研修会と教育学研究会FDについて報告する。その後、教員授業自己評価における自由記述欄について整理・考察する。

### 第1節 研修会・研究会の報告

#### 1. 「大学教育センターと教育学部・教育学研究科との

#### 教育改善FD研修会」報告

主催：大学教育機構と教育学部・教育学研究科による共催

日程：平成20年6月18日（水）15:00～15:45

場所：教育学部21番教室

対象：全員（拡大教授会出席者）

講師：岩部浩三（大学教育センター長）

内容：グラジュエーション・ポリシー、カリキュラムマップ、Webシラバス、学生授業評価、教員授業自己評価などの相互関係および組織的な取り組みの必要性について理解する。

報告：今回、初めての試みとして拡大教授会開始前の時間を利用したFD研修会を開催した（図1）。講師の岩部浩三・大学教育センター長より「山口大学における教育改善の枠組みについて—教育改善活動におけるPDCAサイクル—」という題目で30分のプレゼンテーションがあり、その後質疑応答が行われた。山口大学のPDCAサイクルのPlanでは卒業生・修了生が備えておくべき資質であるグラジュエーション・ポリシー（GP）、GPの各項目をどの授業を通じて実現するかを明示したカリキュラムマップ、個々の授業の到達目標・成績評価方法を記したWebシラバスが作成されている。それに基づいてDo＝授業が実施され、Check＝学生授業評価・教員授業自己評価や授業参観（ピアレビュー）を行い、その結果をAction＝教育改善へとつなげる流れになっている。PDCAサイクルが機能しているかどうかは法人評価の対象になっており非常に重要であるため、学科・コース単位で時々見直し、卒業時の質保証ができる教育課程となっているか確認してもらいたいという要請があった。また、学部・研究科のFD活動の際には大学教育センターを活用し、報告書作成等の負担軽減につなげてほしい旨の申し出もあった。

質疑ではPDCAサイクルの図2が一方通行ではなく、実際にはCheckとActionの間が何度も行き来する



図1 「大学教育センターと教育学部・教育学研究科との教育改善FD研修会の様子」



図2 「PDCAサイクルの例」

よう修正すべき、との意見があった。最後に学部長より FD 活動の本質的な部分は授業改善であり、報告書作成等の 2 次的な部分の負担を削減しつつ、最も大切な部分について積極的に取り組んでいかなければならないという意見があった。

## 2. 「教育学研究会 F D」報告

日時： 平成 21 年 3 月 7 日（土）10:00～16:00

場所： 教育学部第一会議室

対象： 教育学を研究・教育の領域としている大学教員

講師： 相互研修形式

参加者： 上寺康司（福岡工業大学）、高妻紳二郎（福岡大学）、佐々木司（山口大学）

住岡敏弘（宮崎公立大学）、滝沢潤（山口芸術短期大学）

田代直人（山口学芸大学）、三山緑（東亜大学）、吉田香奈（山口大学）

目的： 本 FD は、「教育学」を研究・教育領域としている大学教員が、大学におけるテキスト開発を目指し所属大学を越えて参集することにより、1）各自の課題を共有し協同的解決をはかること、2）研究・教育実践上の工夫やアイデアを共有し力量形成をはかること、の 2 点を目的としたものである。

報告： まず、各自が担当している「教育学」「教育原理」等の授業について、授業内容や形式、課題、工夫している点などについて論じあった。次に授業のテキスト開発によってすこしでもその課題を解決し、アイデアを共有すべく、テキストの内容や執筆のあり方、文章の書き方などについて議論した。

## 第 2 節 教員授業自己評価における自由記述欄の考察

まず最初に、教員授業自己評価の実施方法について説明する。教員授業自己評価で問う質問項目は、学生授業評価の質問項目と、概ね対応して設定されている（章末の参考資料：図 3～6 を参照）。教員授業自己評価では、まず、教員が学生授業評価の結果を閲覧していない時点で、授業の自己分析に基づいて質問項目に答えていく。質問項目は大きく分けて 30 番までであるが、そのうちの 29 番の「29. 授業実施上の工夫（自由記述）」までを答えていく。一旦回答を保存した後、教員は初めて学生授業評価の結果を閲覧する。その後、教員自らが入力した 29 番までの回答と、学生授業評価の対応する質問項目の結果とを比較することによって、教員が授業を実施する上で心がけたこと・工夫したことが、実際にどの程度授業で有効であったかを確認する。そのうえで最後の、「30. 授業実施上の問題点・改善点（自由記述）」を回答する。これより、担当した授業において、何らかの問題点があるのか・ないのか、もしあるならば、それに対して今後どのように工夫・改善していけばよいのか、教員自らが検討することとしている。

本報告においては、教員授業自己評価の特に「29. 授業実施上の工夫（自由記述）」と「30. 授業実施上の問題点・改善点（自由記述）」の回答に着目し、整理・考察する。29 番の質問項目に対しては、各教員が授業を行う上で工夫した点について記述されており、これを整理した上で広く教員間で共有することにより、他の教員が直面している問題点・改善点を解決する手掛かりとなることを期待するものである。さらに、30 番の質問項目に対しては、各教員が感じている問題点・改善点が記述されており、多くの教員が共通して感じている課題や、数としては少ないけれども、新たな課題が明らかになる可能性がある。



表1 「2008年度前期・後期それぞれの教員授業自己評価実施数と、29番及び30番の質問項目に対する回答数。「実施数」は、教員授業自己評価の回答数。「29番の回答数」は、29番の質問項目について何らかの回答があった科目数。「30番の回答数」は30番の質問項目について何らかの回答があった科目数。「30番公開の数」は30番の回答について公開を可とした科目数、「30番非公開の数」は30番の回答について非公開とした科目の数。教員授業自己評価の質問項目については、章末の参考資料を参照。(2009年4月9日のデータに基づく。)」

学期	実施数	29番の回答数	30番の回答数	30番公開の科目数	30番非公開の科目数
前期	167	119 (71%)	128 (77%)	96	32
後期	62	43 (69%)	50 (81%)	36	14
合計	229	162 (71%)	178 (78%)	132	46

さらには、29番と30番の回答を比較することで、工夫しても課題の改善が困難な事項が明らかとなり、FD研修会等において求められる話題が明らかになると期待される。以上のことから、本報告では、2つの自由記述欄について整理・考察を行う。なお、29番に対する回答については公開されておらず、また30番の質問項目に対する回答については、教員の許可のあったもののみが学内にのみ公開されることとなっている。従って、それらの詳細な記述については紹介しない。

まず、2008年度前期・後期それぞれの教員授業自己評価の実施数と、29番及び30番の質問項目に対する回答数を計数した。結果を表1に示す。教員授業自己評価を実施した科目の中で、「29. 授業実施上の工夫（自由記述）」について回答のあった科目数は、前期・後期ともに約7割であった。また「30. 授業実施上の問題点・改善点（自由記述）」について回答のあったものは、前期：77%、後期：81%であった。両項目について回答が7割以上あることから、教員授業自己評価を実施した教員の多くは何らかの工夫をしており、また、授業実施中の気付きや学生授業評価の結果から、次年度へ向けての問題点やそれに対する改善点等を見出していることがわかる。29番と30番の回答数について比較すると、わずかに30番の方が多い。29番で問う授業実施上の工夫としては、特別回答するほどのことを行っていないが、30番で問う問題点・改善点については、授業を実際に行ってみた結果として、気付いたことがあったということと推測される。あるいは、30番については学内に公開され、学生や教職員が閲覧することから、学内の者へのメッセージとして30番を記述することもあると推測される。なお、29番の回答については全て非公開、30番の回答については、学内に公開する・公開しないを教員が選択することが可能となっている。30番の回答があった中で、約7割の科目で公開とされている。

次に、「29. 授業実施上の工夫（自由記述）」や「30. 授業実施上の問題点・改善点（自由記述）」に対する回答を整理・分類した。整理・分類の方法として、まず「A.授業技術に関する事項」、「B.教育学部特有の事項」、「C.学生への対応に関する事項」、「D.その他の事項」のように大まかに分類し、それぞれの事項について、さらに詳細に分類した。そのうえで、29番、30番それぞれの回答について、各分類に当てはまるものを計数した。分類の結果を表2に示す。

最初に、「A.授業技術に関する事項」について考察する。この分類項目の中で、最も多かったものが、A.1の教材・メディア・課題に関することであった。教員自らがまとめたテキストやプリントを作成することや、独自の課題を作成するなど、多くの教員が工夫していることがわかった。また、それらに対してさらに改善を加えていくなどの意識も見て取

れる。教員は日ごろより学術論文の執筆などの研究活動を行っており、資料を作成し、それらを学生に配布するといった工夫は、意欲的に取り組むことができるためと考えられる。また、特に専門的な分野では、適切なテキストが市販されておらず、教員自らがテキストを作成・配布せざるを得ない事情もあるようである。ただし、専門的過ぎる資料は、特に初学者にとって理解が困難となり、より丁寧な説明が必要となる。そのような改良・工夫を教員は感じているようである。次に多かったものは、A.3 のゼミ・演習方法に関する事項であった。ゼミ・演習の科目では、小グループで議論しながら授業を進めていく形態が多いが、その中で議論を引き出すための各教員の工夫やノウハウがあるようである。このような工夫は、教員独自のものである。従って、そういった工夫やノウハウを持った教員のゼミ・演習の授業を参観する機会を設けることで（ピアレビュー）、他の教員にとって有益な FD の研修機会となるかもしれない。数は少なかったが、A.4 の集中講義特有の事項に関しては、重要な課題が指摘されていた。すなわち、一般に、集中講義では、3～5日間程度の日程で、集中して授業を行う。1日当たりの授業時間は長く（3日間の日程の場合、1日10時間）、学生にとっても教員にとっても極めて過酷である。また、通常連続した日程で行われるため、予習・復習にかけられる時間が少なくなりがちである。学生の集中力を持続させるような工夫を試みている教員もいるが、限界もあると考えられ、制度的な工夫が求められている。

次に、「B.教育学部特有の事項」について考察する。まず、特記すべき事項として、B.1、B.4、B.5 のような学校現場との連携や授業実践に関する内容を取り込むことなどの工夫や、それに関するさらなる改善点が多いことがあげられる。特に教育現場の事情と密接な関わりを持つ授業においては、学習の動機づけを高めたり、事情を知ることができ、こういった工夫は有効である。また、数は少ないが、合併授業や教育実習中の授業実施に関する事項、授業の規模に関する事項が、課題として意識されている。教育学部では、教員養成系の学生と非養成系の学生が、混在して授業を受講する合併授業の数が極めて多い。学生数の規模や、将来への意識、学問分野・学生の興味の対象などが、少しずつ異なることもあって、教員にとって授業実施に困難さを感じる場合がある。また、カリキュラム上、他コース・選修の全く専門の異なる授業科目を履修することが許されることにより、基礎的な知識がないままに、専門科目を履修しようとする学生も見受けられる。その結果、教員の予定していた授業計画通りに授業が進まないなどの問題点も指摘されている。さらに、教育実習中の問題とは、その期間中に教育実習を行う学生が通常の授業を欠席するため、その間の補償をどのように行うかという問題である。これらの事項については、教育学部特有の問題であり、学部独自の FD 活動等で取り上げていくことが望まれる。授業の規模に関する事項については、特に教職科目において指摘があった。教職科目については、教育学部の殆どの学生と他学部の教員免許取得希望学生が受講する。受講生が多いこと（100名～300名）、学生によって専門分野が異なること、従って、きめ細かな指導が必要となってくることから、相反する条件を満足するための工夫が求められるためであろう。

「C.学生への対応に関する事項」について考察する。ここでは、学生の学習意欲・自主性をどのようにして高めていくかという C.3 の項目が最も多かった。29番よりも30番の方が回答数が多いことや、30番は学内に公開されることから、教員の側からの学生へのメッセージと捉えることもできる。また、合併授業に関する項目とも関連がある。教員は学生を刺激し、如何に彼らの意欲を引き出すかは最も重要な課題であるとともに、最も難しい課題でもある。C.5 の学生の理解度を確認しながら授業を進めるような工夫や、C.8 の学習習慣を整えるための工夫も活発になされている。学生の理解度を深めるための取り組みとしても、教員が工夫している様子が見て取れる。さらに、C.4 の基礎学力・知識不足を補う工夫がなされていることや、そのような問題点を挙げる教員が比較的多かったこと

は、前述の教育学部特有の事情もあると考えられるが、高等学校までの履修科目のバラつき・入試制度の多様化なども原因として考えられる。それらを補うための教員の個人的な努力もなされている。興味深い事項として、C.6の学生同士で教え合うことで、より理解を深めるための工夫がなされていること、あるいは、さらにその取り組みを発展させようとする記述があった。確かに、友人同士で議論する・教え合うことや、先輩から後輩へ学習内容のポイントを伝えることは、学習内容の理解に効果があると考えられる。FD活動と関連させて考えたとき、TA制度に通じるものがあると考えられ、大学教育センターで4月に実施されている「共通教育ティーチング・アシスタント（TA）研修会」を積極的にサポートする記述である。

最後に、教員授業自己評価の自由記述欄には、各教員のノウハウや工夫、問題点や改善点などが数多く記述されている。教員が他教員のものを読んで自身の授業に役立てれば、それだけでもFD活動として意義あることと考える。これまで、30番を学生へのフィードバックという意味で公開していた。それに加えて、29番も、教員間の情報交換という意味で公開することも意義あることと考える。さらには、回答の多かった項目や重要と思われる項目に的を絞ったFD研修会を実施するなどの検討も必要である。

表2「教員授業自己評価の自由記述欄に関する整理・分類。自由記述欄について、以下の表の項目に分類し、その回答数を29番・30番の質問項目それぞれについて計数した。行頭に「・」を付した項目は、その項目の内容を補足するものである。」

#### A. 授業技術に関する事項

記号	項目	29番	30番
A.1	教材・メディア・課題に関すること ・テキストを作成、プリント配布、多様なメディアの活用 ・多様なメディアを用いた資料収集を行うよう指導	53	39
A.2	コンピュータの利用 ・課題提出やディスカッションのためのwebシステムの構築 ・メーリングリストを用いたディスカッション	17	7
A.3	ゼミ・演習方法に関すること	30	24
A.4	集中講義特有の工夫	1	5
A.5	授業時間の使い方	2	4
A.6	教室等の環境整備 ・受講者数に応じた教室変更	4	6
A.7	休講を取り戻すための工夫	1	0
A.8	講義における話し方・説明方法、板書方法など	5	9
	合計	113	94

#### B. 教育学部特有の事項

記号	項目	29番	30番
B.1	附属学校園と連携した授業	6	10
B.2	教員採用試験に関する内容を盛り込む工夫	2	0
B.3	極めて専門的・特殊な内容にかかわる工夫	6	6
B.4	授業実践に関するもの	21	10
B.5	現職教員・教育現場との連携	12	6
B.6	学習指導要領に関する内容取り込むなどの工夫	3	4
B.7	合併授業に関すること	0	6

(表 2 の続き)

	・目的意識の異なる学生が受講することによる困難さ		
B.8	教育実習に関連した問題・工夫 ・教育実習中の授業の進行について	4	6
B.9	守秘義務を考慮した授業 ・事例を紹介する場合の配慮	1	0
B.10	講義と演習・実習との時間配分に関すること ・演習や実習を含む授業科目の時間配分や時間数について	1	2
B.11	授業の規模に応じた工夫 ・特に大規模授業における授業実施上の工夫	5	7
合計		61	57

C. 学生への対応に関する事項

記号	項目	29 番	30 番
C.1	出席率向上のための工夫	3	5
C.2	将来教員を目指す学生への対応	9	5
C.3	学習意欲・自主性を高めるための工夫 ・学生の興味ある内容を含めるなど	37	44
C.4	学生の基礎学力・知識不足を補うための工夫	5	11
C.5	学生の理解度を確認しながら授業を進めるための工夫 ・学生の意見を聞く ・机間観察・巡視、小テストなどによる理解度の確認	22	18
C.6	学生間・学年間で教え合い、より理解を深めるための工夫	2	4
C.7	学生の希望と教えるべき内容との乖離、そのための工夫	0	3
C.8	学生の学習習慣を整えるための工夫 ・定期的に課題を課す ・欠席した学生が自習できるよう課題を提示 ・予習の仕方を説明	17	15
合計		95	105

D. その他の事項

記号	項目	29 番	30 番
D.1	実験・実習における安全への配慮	1	0
D.2	コマ数・授業時間数不足への対応	1	2
D.3	シラバスと実際の授業との乖離 ・計画した通りに授業を進めることができないなど	1	2
D.4	他の科目との連携 ・卒業研究の準備段階としての授業の進め方	5	4
D.5	複数の教員が担当する授業に関する問題・工夫 ・教員間で授業内容についての整合性を保つことの困難さ	1	3
合計		9	11

## 参考資料

### 教育学部 学生授業評価質問用紙

このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙マークシートの指示された欄にマークして下さい。

授業科目名 授業科目名を記入して下さい。

担当教員名 担当教員名を記入して下さい。

<学年> 1)1年生、2)2年生、3)3年生、4)4年生、5)修士1年生、6)修士2年生

<学生区分> 1)一般学生、2)留学生（科目等履修生、研究生の場合、マークの必要はありません。）

<学部・研究科> 下記区分に従い、あなたの所属学部等をマークしてください。教育学部生なら2、教育学研究科の大学院生なら9です。

- 1)人文学部、**2)教育学部**、3)経済学部、4)理学部、5)医学部、6)工学部、7)農学部  
8)人文科学研究科、**9)教育学研究科**、10)経済学研究科、11)医学研究科(M)、12)医学研究科(D)  
13)理工学研究科(M)、14)理工学研究科(D)、15)農学研究科、16)東アジア研究科

<学科・課程・専攻>下記区分に従い、あなたの所属課程等をマークしてください。

教育学部 1)学校教育教員養成課程、2)実践臨床教育課程、3)情報科学教育課程、4)健康科学教育課程  
5)総合文化教育課程

教育学研究科 1)学校教育専攻、2)教科教育専攻

<コース等1>下記区分に従い、あなたの所属コース等をマークしてください。

教育学部 1)教科教育コース、2)幼児教育コース、3)障害児教育コース、4)国際理解教育コース  
5)人間教育学コース、6)教育心理学コース、7)表現情報処理コース、8)数理情報コース  
9)スポーツ健康科学コース、10)生活健康科学コース、11)国際文化コース  
12)文芸・芸能コース、13)小学校教員コース(平成21年度入学生以降)

教育学研究科 1)学校教育専修、2)学校臨床心理学専修、3)国語教育専修、4)社会科教育専修、5)数学教育専修  
6)理科教育専修、7)音楽教育専修、8)美術教育専修、9)保健体育専修、10)技術教育専修  
11)家政教育専修、12)英語教育専修

<コース等2>教育学部学校教育教員養成課程教科教育コースの学生のみ、あなたの所属選修をマークしてください。その他の学生はこの「コース等2」にマークする必要はありません。

教育学部 1)国語教育選修、2)社会科教育選修、3)数学教育選修、4)理科教育選修、5)音楽教育選修  
6)美術教育選修、7)保健体育選修、8)技術教育選修、9)家政教育選修、10)英語教育選修

図3「教育学部・学生授業評価質問用紙・表面」

質問Ⅰ	
1	あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？ (括弧内の数字は 15 回授業の場合の出席回数参考値です。) 1. 90%以上 (14 回以上) 2. 80~90% (12~13 回) 3. 60~80% (9~11 回) 4. 40~80% (6~8 回) 5. 40%未満 (6 回未満)
2	あなたはこの授業において、時間外学習 (予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強) をどれくらい行いましたか？総時間を平均し、授業 1 回あたりの時間に換算してお答えください。 1. 3 時間程度または以上 2. 2 時間程度 3. 1 時間程度 4. 30 分~50 分程度 5. 30 分未満
3	教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
4	専門用語や理論的な話は、適切に説明されましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
5	テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
6	板書や OHP、ビデオ、コンピュータなどが効果的に使われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
7	学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
8	あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. 答えられない
9	あなたは、この授業の内容を理解できましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
10	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
11 ~ 30	<これ以降は、担当教員の設問に従って回答してください>

質問Ⅱ

授業担当教員の指示に従ってください。教員によっては、授業に関する感想や要望等を自由記述のかたちで求める場合があります。なお、質問Ⅱへの回答を求める場合、教員が別に記入用紙を配布することになっています。本紙 (教育学部学生授業評価質問用紙) やマークシートには、質問Ⅱに対する回答を記入しないでください。

以上でアンケートは終わりです。ご協力ありがとうございました。マークシートの回収方法は授業担当教員が指示することになっています。

図 4 「教育学部・学生授業評価質問用紙・裏面」

教育学部 教員による授業自己評価

【1.開設科目コード】	【2.系列】	【3.分野】						
【4.科目類型】	【5.開設科目名】	【6.単位数】 単位						
【7.担当教官】	【8.開設期】 年生 期	【9.開設時限】 曜日 ・ 時限						
【10.授業区分】	【11.対象学生】	【12.】						
【13.授業の概要】								
【14.授業の一般目標】								
【15.授業の到達目標】								
知識理解の観点								
思考・判断の観点								
関心・意欲の観点								
態度の観点								
技能・表現の観点								
その他の観点								
【16.授業の目標の記載】 1.シラバスに記載 2.授業中に開示								
【17.成績評価方法】								
	知識・理解	思考・判断	関心・意欲	態度	技能・表現	その他	評価割合 (%)	JABEE 収集資料
定期試験 (中間・期末試験)								
小テスト・授業内レポート								
宿題・授業外レポート								
授業態度・授業への参加度								
受講者の発表(プレゼン)・授業内での制作作品								
演習								
出席								
その他								
合計								
【18.受講登録者数】 人	【19.受験者数】 人	【20.合格者数】 人	(うち秀) 人	(うち優) 人	(うち良) 人	(うち可) 人	【21.不合格者数】 人	
【22.授業回数】 回	【23.休講回数】 回	【24.補講回数】 回						

図 5 「教育学部・教員授業自己評価 (紙媒体)・表面」

【25.出席管理】 1.毎回確認 2.( )回確認 3.確認せず					
【26.出席の評価への利用】 1.出席による加点 最大( )%程度 2.欠格に利用 欠席( )回で欠格 3.利用せず					
【27.学生授業評価】 1) 学生授業評価 (中間) 1.実施 2.非実施 2) 学生授業評価 (期末) 1.実施 2.非実施					
【28.授業実施上の工夫】	さう思わな	い	余りさう思わな	わな	さう思わな
1. 聞き取りやすいよう話し方を工夫しましたか？	1	2	3	4	5
2. 専門用語や理論的な話をわかりやすく説明しましたか？	1	2	3	4	5
3. テキストやプリントなどの教材を効果的に使いましたか？	1	2	3	4	5
4. 板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどを効果的に使いましたか？	1	2	3	4	5
5. 学生に疑問や質問の機会を十分に与えましたか、また対応は十分でしたか？	1	2	3	4	5
6. 学生は、シラバス（授業案内）に記載された学習目標を達成したと思いますか？	1	2	3	4	5
7. 学生は授業の内容をよく理解できたと思いますか？	1	2	3	4	5
8. 授業の内容に学生は満足していると思いますか？	1	2	3	4	5
9. 授業外学習についてお尋ねします 1)宿題 1.毎回課した 2.ほぼ毎回課した 3.時々課した 4.ほとんど課さなかった 5.まったく課さなかった 2)その他授業外学習の指示 1.参考文献等の提示 2.予習・復習の指示 3.その他( ) 4.特に何もしなかった 3)期待した授業外の学習時間（授業1回あたり） 1. 3時間程度または以上 2. 2時間程度 3. 1時間程度 4. 30分～50分程度 5. 30分未満					
【29.授業実施上の工夫(自由記述)】					
【30.授業実施上の問題点・改善点(自由記述)】					

図 6 「教育学部・教員授業自己評価（紙媒体）・裏面」



## 第6章 経済学部のFD活動

### 第1節 平成20年度経済学部FD計画

平成20年度は経済学部のFD計画として、

1. ピア・レビューの実施
2. 全学FD研修会への参加
3. 授業評価の実施
4. 教育改善FD研修会の実施

の4点を掲げた。以下それぞれについて報告する。

### 第2節 ピア・レビュー

本年度は3つの授業（経済学科、経営学科、観光政策学科）についてピア・レビューを計画したが、二つの授業でしか実施できなかった。国際経済学科と経済法学科には、大学院の授業研究会での報告をお願いした。

#### 1. 経営学科

- 1) 授業名：経営数学
- 2) 日時：平成20年6月18日（水）3・4時限
- 3) 担当教員：渋谷綾子先生
- 4) 講義内容：前で行った経営に必要な資金の時間的価値についての概念的説明に基づき（同年6月11日）、今回はパソコンを用いてエクセルファイルに作られた資金の時間的価値（現価、終価、年価）に関する複数の問題を学生が自ら解くことにより理解を深めるもの。  
なお本授業は共通教育棟21教室（ネット環境の整ったPCが受講学生に用意されている教室）でなされた。
- 5) 講義参観の観点：授業全般にかかわるアドバイスをいただきたい。
- 6) 参加教員数：3名
- 7) コメントや助言など：

〈先生方コメント〉	〈渋谷〉
・最初出席カードを兼用した基礎概念に関するテストにより、その後になされるテンプレート（実習シート）による学習に必要な知識を提供しており、学生も入りやすいと感じた。	・テンプレート（実習シート）を用いて授業を行うと、学生はきちんと説明を聞かずに、課題に取り組み始める。最初にまずこちらの話を聞かせることが、このような授業の場合大切である。彼らにしてみるとこのテンプレート（実習シート）が先生というイメージなのだと思う。そこでその場で私の方で解答をいうこと。また教科書を書き写せばよいような問題を設定すること

<p>・テンプレート（実習シート）の問題を解くというのは学生には面白いようです。インターネットをしたり、ゲームをしたりするなどまったく別のことを行っている学生はいなかった。</p> <p>・テンプレート（実習シート）の中身においても、きちんとした関数式を入れ、正解にたどりつくと、回答欄の横に「正解」、間違えると「もう一度考えてみよう」と直ぐに表示され、フィードバックを受けることが興味を持続させているようであった。（学生の中には正解が出せたためであろうか「出来た」と小さな声を出している者もいた。）</p> <p>・すべて正解となったテンプレート（実習シート）をアップロードして、それが記録され、しかも大学サーバー内の自分専用のページにおいて記録されるようになっている。学生にとっても自分の学習状況が把握しやすいので、学習への動機づけとなるだろう。</p>	<p>で、短時間で基礎概念などの確認をしている。</p> <p>・学生は基本的にコンピューターの操作に興味を持っているようだ。このような授業形式にする前は、黒板を使って講義を中心に行っていたがその時は10名程度だった。現在は登録数で80を超えている。また学生のPC操作能力の向上にも驚かされる。コンピューター操作能力の向上というのも彼らの参加への動機づけとなっているようだ。</p> <p>・「正解」「もう一度考えてみよう」という表示を行うようになって、学生はメールをしたり、インターネットを開いて遊んだりしなくなった。またこの授業では全て正解となったテンプレート（実習シート）をアップロードすることで、点数が得られることになっている。学生の感覚ではテンプレート（実習シート）を1枚アップロードすると試験換算で10点ぐらいのイメージがあるのではないだろうか。これによりテンプレート（実習シート）をいくつアップロードしたかが目標になっている学生も正直なところいる。そのような学生の中にはパターン認識だけで課題を処理している者もいるようだ。そこで筆記試験も重視するようにしている。</p> <p>・テンプレート（実習シート）がアップロードされたら、2～3週間以内にシートに関する評価・コメントを行っている。これは学生一人一人が自分用に割り当てられたネット（大学サーバー）上のページにおいてなされている。</p>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

〈先生方コメント〉	〈渋谷〉
<p>・テンプレート（実習シート）作成中、何人かの学生は正解情報を提供し合いながら、実習に取り組んでいた。殆どの学生は概念を理解した上で、応用問題としてのテ</p>	<p>・ご指摘のできるだけ質問を受け付けるように教室中を回るように努めている。但し一人の学生の質問を受けていると、どうしてもそこに掛かりきりになるので、その間</p>

ンプレート（実習シート）の問題を解いていたように思われたが、一部には概念をきちんと理解しないまま正解を友人から教えてもらっている学生も若干数見られた。（多くの先生が授業中に小テストなどを行った時に、同様の問題は多々発生していることと思うが）正解に至らない学生のサポートが重要と感じた。

・今回の授業のテーマは、前回学習した資金の時間的価値に関する概念を活用して、投資など応用場面における演習問題を解くことで理解を深めていくというものなので、演習問題を個々の学生が解いていくというものであった。しかし問題を正解しても、手続き的な処理方法を理解しただけで、概念理解とその現実への応用力を身につけていない学生もいる可能性があるだろう。今回はテンプレート（実習シート）には演習問題が4問用意されていたので、そのうちの1～2問は先生が教壇で、演習問題の解説を全員に向けて行うことで、より丁寧な概念理解と応用力が涵養されるのではないかと感じた。また教授方法を多様化することで学生の集中力を維持することも可能ではないだろうか。

他の質問のある学生は待つことになってしまう。また最初から自分で考えずに質問して、正解を導きだそうとする学生もいる。そのような学生にはできるだけ自分で解くように促し、本当に正解を導けない学生に時間をとるようにするなど、限られた時間をより有効に使うように心がけているが、今後より一層このことを務めていきたいと思う。

・教授方法の多様化など、ご助言を参考にさせて頂き、授業に取り込んでいきたいと思う。

#### <総括>

- ・ITを積極的に活用し、しかもテンプレートやプログラムなどもご自身で作成され、現代の学生に適した大変素晴らしい授業と思われる。また作成されたシステムやテンプレートは工夫がいろいろとなされており、質の高いものと感じた。
- ・概念学習→実習→個別学生へのコメントという基本的な学習の流れが構成されており、順序だった、無理のない学習ができるように感じられた。（今回は実習を見させていただいた）
- ・授業の進め方としては出席票を兼ねた前回内容の復習問題によるリマインド、インストラクション、実習（テンプレートに示された演習問題を解答すること）、Q&A（質問者への個別対応）、完成した実習シートのアップロード、2・3週間後の実習シートへのコメントというものであり、学生にとって負荷のかかりにくい授業となっていた。
- ・出席票や完成したテンプレートの提出状況と成績の関係が明確化されており、また学生はテンプレート（実習シート）の提出状況やそれに対するコメントなどを常時確認できるので学生の授業へのインセンティブの仕組みがきちんとしていると思われる。
- ・一方実習においては、より多様な教授法を活用することで、一層学生の集中力を維持しながら、より効果的な授業が行えるのではないかと感じた。

授業で用いられた資料など：

● 出席票

## 経営数学 6 月 18 日

学籍番号： \_\_\_\_\_ 氏名： \_\_\_\_\_

教科書を参照して以下の空欄をうめなさい。

**現価**：(1) の価値に換算したらいくらとかという評価額のこと、現在価値あるいは現価と呼び、記号 (2) (Present value) で表します。

**終価**：投資の効果が (3) する時点の価値に換算した評価額のこと、最終価値あるいは終価と呼び、記号 (4) (Sum of capital and interest) で表します。

**年価**：毎期末 (通常は年単位) に同額の金額を (5) したり (6) を受け取るように換算した場合の毎期末の評価額で、調整平均値あるいは年価と呼び、記号 (7) (Mean) で表します。

解答欄：

1		2		3		4	
5		6		7			

「資金の時間的価値」を学ぼうえで使用する記号

**P**→現価    **S**→終価    **M**→年価     $n$ →年数     $i$ →年利率

テキスト 33 ページを参考に、資本回収係数、終価係数、年金現価係数、年金終価係数、現価係数、減債基金係数を書きなさい。

	現価 P	年価 M	終価 S
現価 P		資本回収係数	終価係数
年価 M	年金現価係数		年金終価係数
終価 S	現価係数	減債基金係数	

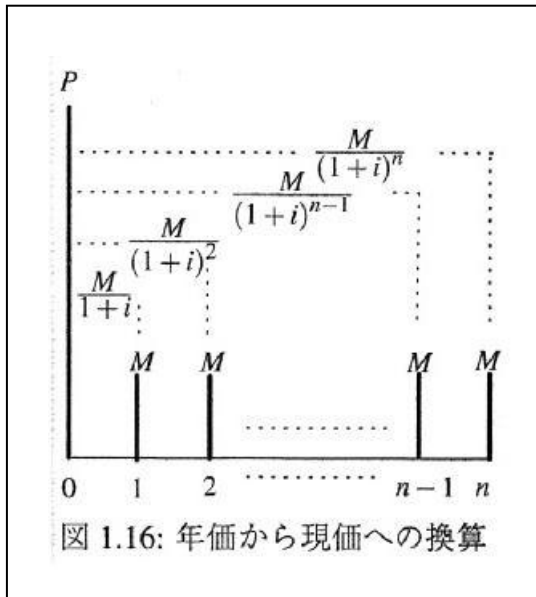


図 1.16: 年価から現価への換算

金Mを毎年末にn年間受け取るためには  
 今、いくら預金しておかなければならないか？  
 (年金の現価Pを求める問題)

1年後に受け取るMの現価は  $\frac{M}{1+i}$

2年後に受け取るMの現価は  $\frac{M}{(1+i)^2}$

3年後に受け取るMの現価は  $\frac{M}{(1+i)^3}$

と考えると、  
 求めようとしている現価Pは、

初項  $\frac{M}{1+i}$ 、公比  $\frac{1}{1+i}$

の等比数列の総和であることがわかる

参考：等比数列の総和の公式  $\frac{a(r^n - 1)}{r - 1}$

$$P = \frac{M}{1+i} \frac{\left(\frac{1}{1+i}\right)^n - 1}{\frac{1}{1+i} - 1}$$

／ 続きをかく

=

意見・要望など

● ゴールシークを使った資金の時間的価値（テンプレート内容）

教科書35ページの例題1.3。

A社では10億円の投資をして工場設備を自動化する設備投資を計画している。この投資の資本利率を5%とするとき、以下の値を求めなさい。

1) 設備の寿命を8年とし、この設備投資で採算が取れるために必要な毎年の収益

この問題では以下の資本回収係数を使います。電卓でも、Excelでも好きな方法で解いてみましょう。

$$[P \rightarrow M]_n^i = \frac{i(1+i)^n}{(1+i)^n - 1}$$

Excelで解くとき、まず、資本回収係数を求める

資本回収係数 →

それに、投資した額の10をかける →


つまり、この投資の資本利率を5%としたとき、この設備で毎年1億5472万円以上の収益が8年以上あげられれば、採算が取れる！

その続きの問題として

2) この設備による収益が8年間毎年2億円と見積もると、この投資の収益率は？

という問題が続く。これはゴールシークを使わないと解けない。

上の問題で資本利率が5%のとき、収益は1億5472万だから、収益が2億になるためには、資本利率は5%より

では、ゴールシークを使ってこの問題を解いてみよう。

i の値の入力用セル（とりあえず1%と書いておく）→

未知数 i を上のセルとして毎年の収益額を求める式 →

	このセルを空欄にしておくことゴールシークがうまくいかない。1%でなくてもいい。どんな値でもいいから入れておくこと
--	----------------------------------------------------------

↑

このセルの計算式の答え（毎年の収益額）が2億円である。最初に投資した10億をかけるのを忘れないように。

ゴールシーク関係のことを忘れた人のために

① i のところに入力用セルの名前(たとえばB29)にして、

$$10 \times \frac{i \text{のセル} \times (1 + i \text{のセル})^8}{(1 + i \text{のセル})^8 - 1}$$

という式を任意のセル(たとえばB30)に入力する(このセルは数式入力セルとよばれる)

②メニューバーの[ツール]→[ゴールシーク]

数式入力セルは、この場合、B30を指定する。

目標値はキーボードから2と入力(毎年の収益額を2億円とすることをめざしているから)

変化させるセルはこの場合B29。OKボタンをクリックすると、毎年2億円の収益をあげる資本利率が計算される。

#### 練習問題 1

B社は100億円の投資をして工場設備を近代化した。今後10年間、毎年15億円の収益を得たいとき、この投資の資本利率は何%必要か？

必要な資本利率(計算式ではなく適当な値を書いておく) →  
収益額を求める式 →


#### 練習問題 2

C社は1億円の投資をして新しい工作機械を購入した。今後5年間、毎年2500万円の収益を得たいとき、この投資の資本利率は何%必要か？

必要な資本利率 →  
収益額を求める式 →


#### 練習問題 3

D社は5億円の投資をして工場を近代化した。資本利率5%で、毎年5000万円の収益を得ていくとしたら、この設備を何年間使うことになるか？

必要な年数 →  
収益額を求める式 →


練習問題 4

E社は20億円の投資をして新しい工作機械を購した。資本利率8%で、毎年5億円の収益を得ていくとしたら、この設備を何年間使うことになるか？

必要な年数 →  
 収益額を求める式 →


きょうはここまで。おつかれさま。

● 個別の学生の授業への参加および理解程度などの管理

## ピア・レビュー6月18日の「経営数学」(担当者: 渋谷綾子)

教室：共通教育棟 21 番教室

出席者：77 名（予測履修者 93 名）

添付の出席票と実習シートが示すとおり資金の時間的価値について学習する。なお、「資金の時間的価値」の基本は6月11日の授業で学び、本日（18日）はやや応用的な内容になっている。

これまでに学生が取り組んだ実習シート一覧

Home
共有管理
申込・設定

**使用状況**

ファイル数：376 file(s)

48MB / 100MB

48,612

今月の共有転送量

79.5MB / 2048MB

**経営数学's space**

現在位置：/実習シート

All/ Clear 名前	サイズ	日付▼	共有
/親フォルダ			
<input type="checkbox"/> 0618ゴールシークを使った資金の時間的価値.xls	26KB	08/06/17 21:44	-
<input type="checkbox"/> 0611資金の時間的価値.xls	170KB	08/06/11 10:09	-
<input type="checkbox"/> 0604損益分岐復習_限界と平均_whatif.xls	227KB	08/06/03 21:51	-
<input type="checkbox"/> 0528ゴールシークによる損益分岐点分析.xls	145KB	08/05/29 20:44	-
<input type="checkbox"/> 0521準備ゴールシークによる損益分岐点分析.xls	49KB	08/05/20 20:13	-
<input type="checkbox"/> 0430関数の式とグラフ.xls	260KB	08/04/29 18:22	-
<input type="checkbox"/> 0423直線のグラフ.xls	189KB	08/04/22 21:55	-

1 Page (1-7/7) 1

1 [08/06/17 21:44]-[08/04/22 21:55]

上記7つ（損益分岐点分析と資金の時間的価値を学ぶ内容）のあと今期中にあと3つの実習シート（内容は線形計画法）が用意されている。

下図は最も学習進度が速い学生の実習シート提出状況である。提出されたシートへの評価は2～3週間に一度教員から各学生に知らされる（「・・・さんへ」というファイル）



[ホーム](#)
[共有管理](#)
[申込・設定](#)

**使用状況**

ファイル数: 376 file(s)

48MB / 100MB

48.61%

今月の共有転送量

79.5MB / 2048MB

---

**マイスペース操作**

アップロード

ダウンロード

ファイルフォルダ移動

フォルダの作成

ファイルフォルダ削除

画像一覧

テキストの作成

---

**共有操作**

**経営数学's space**

現在位置: /植野忍の提出

All/Clear名前	サイズ	日付▼	共有
/親フォルダ			
<input type="checkbox"/> 0618ゴールシークを使った資金の時間的価値(1).xls	26KB	08/06/18 10:50	-
<input type="checkbox"/> 0617さんへ.xls	14KB	08/06/17 21:59	-
<input type="checkbox"/> 0611資金の時間的価値(1).xls	177KB	08/06/11 11:49	-
<input type="checkbox"/> 0604さんへ.xls	14KB	08/06/04 18:51	-
<input type="checkbox"/> 0604損益分岐復習_限界と平均_whatif(1).xls	246KB	08/06/04 11:19	-
<input type="checkbox"/> 0528ゴールシークによる損益分岐点分析(1).xls	149KB	08/05/28 11:02	-
<input type="checkbox"/> 0521さんへ.xls	14KB	08/05/21 12:42	-
<input type="checkbox"/> 0521準備ゴールシークによる損益分岐点分析(1).xls	50KB	08/05/21 10:58	-
<input type="checkbox"/> 0430関数の式とグラフ(1).xls	302KB	08/05/21 10:30	-
<input type="checkbox"/> 0509さんへ.xls.xls	14KB	08/05/09 19:54	-
<input type="checkbox"/> 0423直線のグラフ(1).xls	239KB	08/04/30 11:33	-

## 2. 観光政策学科

- 1) 授業名: ミクロ経済学 I b
- 2) 日時: 平成 20 年 7 月 9 日 (水) 1・2 時限
- 3) 担当教員: 陳 禮俊 先生
- 4) 講義内容: 本講義は前期 4 単位であり、週 2 回行っている。レポートの提出は講義終了後、あるいは宿題・課題の形でメールボックス(教務係)を設置し回収する。今年度は 5 回行い、出席率と合算して評価の 30% を占めている。テストは中間テストと期末試験であり、それぞれ 30% と 40% の割合で評価をしている。本日の課題は、生産者行動の理論を中心として、費用の最小化や産出量と最小費用の関係、費用関数の導出を解説した講義である。
- 5) 講義の目標: ①経済学の基礎知識を習得すること、②経済学理論と現実経済の乖離について理解こととする、③消費者理論、生産者理論から厚生経済学を形成する要素を重点的に抽出すること。
- 6) 参加教員数: 6 名(出席した学生: 約 250 名)
- 7) コメントや助言など:
  - ①教員としての観点(参加教員からの意見)から
    - ・スライドがよくまとまっていた。
    - ・私語もなく、始終静かであった。(最初に注意されていたため、効果があった) 270 人の登録のある講義なので、1 人の私語は講義を進める上で影響を及ぼす。そのため、私語がある場合は退席してもらうようにしている。
    - ・例を示された題材が良かった。
    - ・復習から講義が始められている。前回の説明、新しい内容、次回の報告まで行っている。
    - ・本講義の内容の課題を出している。
    - ・次回の内容に関連した資料を前もって配布している。
    - ・定刻通りに終了している。
    - ・授業中にメモを取っている学生がいなかった。
    - ・寝ている学生がおり、メモを取らせる、または問いかけを行う等の工夫をすると良いのではないか。
    - ・プロジェクターの一つが故障していた。
  - ②担当教員からの意見

- ・この科目は基盤のため、しっかり学ばせないと2・3年の専門の科目が理解できない。
- ・予習をしてもらえるように、次回の講義の資料を前もって渡している。
- ・第2大講のため、講義室が大きく、板書をするができない。そのため、プリントを配布することになっている。
- ・指定しているテキストがある。

8) 授業内容：生産者行動の理論 (2)

- ・費用関数の導出
- ・全ての生産要素が可変的な場合
- ・可変的生产要素が1種類の場合
- ・短期費用曲線と長期費用曲線
- ・生産要素の需要

### 第3節 全学FD研修会等への参加状況

山口大学が平成20年度に行ったFD研修会には、経済学部から12名が参加した。5年に一度の参加が義務づけられていることから、参加は組織的に行った部分と、個々の教官が自主的に参加した部分とがある。

### 第4節 学生授業評価・教員授業自己評価

平成20年度の学生授業評価アンケートの経済学部実施率を「履修登録者あり」の授業科目に対する比率で92.1%で、昨年の89%より若干高まった。これに対し教官の自己評価の実施率は35.4%で依然として低い。さらなる注意の喚起が必要である。

### 第5節 経済学部・経済学研究科教育改善FD研修会

- 1) 日程：平成20年11月19日(水) [吉田地区]  
13:30～14:00
- 2) 場所：経済学部 C201 教室
- 3) 対象：経済学部教員
- 4) 講師：小川 勤 (大学教育センター教授)
- 5) 題目：山口大学における教育改善の枠組みについて  
－教育改善活動におけるPDCAサイクル－



報告：

まず、最初に今回の研修会の目的を明確にした後で、GP、カリキュラムマップ、Webシラバス、学生授業評価、教員授業自己評価などの相互関係および組織的な取り組みの必要性について解説を行った。研修会内容は以下の通りである。

はじめに、現代の大学生像の確認や山口大学の経済学部の学生の授業外の学習時間のデータを示し、いかに学生の学習時間が少なくなっているのかを説明した。このため、教育から学習への視点のシフト(パラダイム・シフト)が必要なことや学習時間を単位の

実質化に結び付けていく必要性を説明した。その後、本学が中期目標に掲げてある教育改善活動における PDCA サイクルについて、枠組みの概要、各ステップにおける具体的な内容について順に紹介するとともに、経済学部における実際の GP を用いてどのように記述されているのか確認を行った。現在 Web 上に経済学部のカリキュラムマップが掲載されておらず、成富センター主事（経済学部教授）に聞いたところかつて作成したことがあるという指摘を受けたので大学教育センターとしてもこの点を再度チェックしたいと思う。

後半では、昨今では社会人力や社会人基礎力といったものが要求されるようになってきており、それらも取り込んだ形で、GP やカリキュラムマップを再構成していくことが今後必要となってくるであろうことを説明した。特に社会人基礎力がなぜ今、大学教育において取組んでいかなければならないのかその背景について、会社側の事情や社会的変化を含めて説明を行なった。取組の事例については愛知学泉大学の事例を紹介した。また、来年 1 月 7 日（水）にこれに関する全学 FD 研修会を開催することを報告した。

最後に質疑を受けたが特になかったが、藤井学部長からは学部として授業の中で社会人基礎力をどのように育成していくのかがまだ明確に見えてこないという指摘を受けた。



\* \* \* \* \*

平成 20 年度経済学部評価委員会委員

鍋山祥子 内田恭彦 澤喜司郎 土生英里 朝日幸代 河野眞治（委員長）

## 第 7 章 理学部の F D 活動

平成 20 年 4 月 10 日の第 1 回理学部 FD 委員会(持ち回り)において、平成 20 年度の理学部 FD 計画を次のように定めた。

1. ピア・レビューの実施：今まで学科単位で行っていたのを学部単位で試行する。
  2. 全学 FD 研修会への参加。
  3. 学生授業評価の実施。
  4. 各学科で問題点、改善点を洗い出し FD 研修、討論等を行う。
- 以下、これらの実施内容について記述する。

### 第 1 節 理学部におけるピア・レビュー

#### 1. 数理科学科のピア・レビュー

##### (1) 実施科目：数理科学入門セミナー

日 時：2008 年 12 月 8 日(月) 7、8 時限

場 所：クラスⅠ：理 14 講義室、クラスⅡ：理 13 講義室、クラスⅢ：理 22 講義室、  
クラスⅣ：代数実験室、クラスⅤ：応用数学実験室

対象学生：数理科学科 1 年生

担当教員：クラスⅠ：中内、クラスⅡ：木内、クラスⅢ：吉村、クラスⅣ：増本、  
クラスⅤ：安藤

レビュアー：クラスⅠ：菊政、クラスⅡ：幡谷、クラスⅢ：廣澤、クラスⅣ：宮澤、  
クラスⅤ：久田見

##### (2) 授業の目標・概要

###### 〔授業の目標〕

高校数学から大学数学へのスムーズな移行を図る。高校で学習した知識を点検し、大学の数学を学ぶために必要な「論理的思考」とは何か、そして、その思考から得られた「自分の考え」を表現する方法を学習し、高年次に学ぶ数学の授業に対する「心構え」を身につける。1 年前期で学習した内容を題材にして、自分の理解度を点検するとともに、自分の考えを「答案を書いて表現」「発表して表現」する練習を行う。

###### 〔授業の概要〕

この授業は、第 1 週を授業ガイダンス、その後 2 週ずつを 1 セットとして 6 セットの授業を受け、最終週に定期試験を受ける。各セットの第 1 週では、準備されたプリント問題を解答し(問題解答)、その後自宅で解答を点検して、第 2 週でゼミ発表(ゼミ演習)を行う。ゼミ発表は少人数指導で、習熟度別に 5 クラスに分ける。

### (3) レビュアーによる授業に対する意見・コメント

#### 〔優れた点〕

- ・ 学生が黒板に板書中、教員が巡回し個別指導しつつコミュニケーションを図っていた。大変丁寧に説明されていた。進行がスムーズである。
- ・ 「理解度の把握」「退屈の防止」「激励」のために教員が机間巡視して受講者全員に声をかけ、それぞれの予復習状況を確認していた。不慣れな発表者に、適切な誘導をすることで、発表の仕方を丁寧に指導していた。注意深い扱いが必要なクラスであるが、難しい運営を上手にこなしていた。難易度に応じて、時間の配分も適切であった。セミナー形式の演習授業がまだ不慣れな学生達に、教員が先頭に立って授業を引っ張っていた。
- ・ この授業は、学生が他の学生たちの前で発表する良い機会となっている。
- ・ 学生が積極的に授業に参加する環境、具体的にはきちんと予習をしてきているという状況が作られていた。これは、今回の授業だけの問題ではなく、開講当初から担当教員が努力して指導した結果であると思う。予習ができていて、授業がスムーズに進行し、学生も集中力が持続し、他人の発表や担当教員の助言を理解しやすくなっていると感じた。
- ・ 授業は終始静かな雰囲気の中で行われており、学生も授業内容に集中していた。学生による黒板への記述答案に対し、「記述の仕方・適切な表現方法・間違いやすい点」などについて、担当教員から細かい注意が与えられていた。学生からの質問に対し、担当教員から誠意ある回答が与えられると同時に、学生との会話を重視した指導が行われていた。担当教員は数学の基本的な考え方を学生に伝える教育を行っており、高校数学から大学数学へのスムーズな移行に配慮した初年次学生に必要な指導が行われていた。

#### 〔検討点〕

- ・ 授業内容について、もう少しじっくり取り組める時間があれば、より良いと思う。下位クラスは大変だろうと思う。
- ・ セミナー形式の授業を行うには、教室の広さが適当でないように思われる。移動用ホワイトボードなどで記述スペースなどを確保し、もう少し狭い教室で行った方がよい。
- ・ 演習時の答案の返却方法は2年生の基礎セミナーと異なり、当該問題のセミナーが終わってから返却されていた。演習時の答案に囚われずに問題を再考するためというのが理由とのこと。なるほど一理あると合点がいった。しかし、それを実行する学生がどれほどいるだろうか考えると、演習時と同じ答案をもってセミナーに参加する学生が多いのではないかと推測する。この返却方法と従来の方とで学習効果に顕著な違いがどうかその結果には大いに興味がある。報告を待ちたい。
- ・ 時間的余裕がないかもしれないが、もし可能であれば今回の課題問題に関連した発展的な問題をいくつか提示すれば、学生の理解力向上に効果的ではないだろうか。

## 2. 物理・情報科学科

### 【物理学分野】

今年度は2つの授業でピア・レビューを行った。

## (1) 実施科目：量子力学 II (演習)

日 時：2009年1月8日(木) 7・8時限

場 所：理学部第12講義室

対象学生：3年生

担当教員：原 純一郎

レビュアー：繁岡 透、朝日孝尚、芦田正巳、笠野裕修、藤原哲也

授業内容：前もって提出されたレポートを添削して返却しておき、そのレポート課題について解説をするという形式の授業であった。

### [授業に対する意見・コメント]

- ・ 聴講した時の講義では、一次元調和振動子の問題を、生成演算子、消滅演算子、数演算子を用いて解く内容であった。大変、懐かしかった。黙々と板書を書く訳ではなく、大きく要点を抑えた式変形を書き記しながら、平易な言葉での説明を多く交えた授業展開で非常に分かり易かったのではないかと思うが、少数ではない数の学生が、板書を取っていない点がやや、気がかりだった。
- ・ ゆっくりと説明されてわかり易い授業だと思う。
- ・ 1コマの内容としては、量的に少ないと思う。
- ・ 丁寧に説明されていたためかもしれないが、学生からの質問が無かったことが気になった。
- ・ 自分でも講義と演習がセットになった授業を担当しているので、非常に参考になった。私の担当している演習では、黒板で学生に回答させるという方式を採用しているが、自主的に問題を解いて来るのが一部の学生に限られてしまい、残りの学生は黒板の回答を写すだけになってしまうことが一番の問題点だ。今回見学した演習の方法はその解決策の一つだと思う。ただ、受講者数が60名程度になると頻繁にレポートを提出させて添削するのは大変で、自分の授業に取り入れるのには工夫が必要だと思った。

## (2) 実施科目：物理学実験 III

日 時：2009年1月26日(月) 5・6・7・8時限

場 所：理学部第15講義室

対象学生：3年生(物理・情報科学科物理学コースの必修科目)

担当教員：野崎浩二、藤原哲也

レビュアー：繁岡 透、朝日孝尚、藤澤健太、輪島清昭

授業内容：約半年間にわたって学生がグループに分かれて行ってきた実験テーマの各グループによる成果発表会であった。

### [授業に対する意見・コメント]

- ・ 3年生を対象とした物理学実験 III の発表会に参加した。最近特に重視されるプレゼンテーションの指導法について学ぶこと、大学3年生までの学習によって物理学の基礎をどの程度身につけているか把握するなどの目的を持ってこのピア・レビューに参加した。この実験を履修している学生集団は新課程で入学した最初の学生を多く含み、また学科改組後の最初の学生たちでもある。実験を通して物理を学ぶ方法、それを表現する方法を担当教員が指導している点が特に興味深く思われた。
- ・ 学生にプレゼンテーションの練習をさせる良い取り組みである。

- ・質問する人がほぼ教員だけであった。学生からの質問を促す必要がある。
- ・発表を見る限りにおいて、実験テーマの設定（難易度、これまでの講義内容との関連）、分量は適切であると思う。
- ・それぞれの発表に対し活発な質疑応答がなされており、発表会の形式を取ることによる教育的な効果は十分にあったと思う。
- ・発表技法の巧拙に各人の間で大きな差があったことは否めない（実験に一生懸命取り組んでいるのは分かるが、その内容を適切に伝えることができていない）。1年生からの3年間で発表の仕方をどのように教育していくかを学科（分野）全体で考える必要があると思った。

## 【情報科学分野】

### （１）実施科目：計算モデル論演習Ⅱ

日 時：2008 年 10 月 14 日(火) 7、8 時限  
 場 所：理学部二号館第一計算機実習室  
 対象学生：物理・情報科学科 3 年生（約 40 名）  
 担当教員：川村正樹  
 レビューア-：吉川、山本、西井、浦上

### （２）授業の目的・内容

#### 〔授業目的〕

本授業の目標は、対象の様々なモデル化とその計算手法を教授する計算モデル論の講義を、その実習を通して実体験することを目標としている。特に計算モデルⅡでは、数理計画モデルおよび生体学習モデル（強化学習）の習得を目指しており、本演習では、その具体的な実習として、(1)ロボット制御を行うプログラムを作成、その動作結果のシミュレーションによる確認、(2)組み合わせ最適化問題を解くプログラムの作成、を行った。レビュー当日の演習課題は、Nクイーン問題と呼ばれる組み合わせ最適化問題を解くプログラム作成の演習であった。

#### 〔実施内容〕

- ・受講者は、各人が一台の PC を与えられ、それぞれ独自に問題に取り組んだ。
- ・初めに、Nクイーン問題に対する基本的なアルゴリズムの解説やプログラミングに関する助言がおこなわれた。
- ・引き続いて学生各自によるプログラミング演習が行われた。
- ・TA および担当教官が各人の進み具合をモニターし適切な助言を行いながら、演習は進められた。

### （３）評価および指摘事項

自由な雰囲気、学生それぞれの進み具合に応じた自主的な学習・実習が行われていると思われる。しかし、与えられた課題への取り組みの進み具合には、学生によってかなり

大きなバラツキがみられる。特にプログラミングなどにおいてはこのことが顕著に表れるようであり、40名程度の演習でも、きめ細かな指導はかなり骨の折れる仕事である。

このような困難に対応するために、本演習では、教員とTAが丁寧に説明しながら演習が進められているように思われた。特に、ネットワーク環境を活用した学習進度・レポート提出管理システムが、担当教官によって独自に開発されていることが示され、多くのレビューワにとっても大変興味深く、参考になる演習であった。

本講義でも見られたように、各教官の教育ノウハウや独自に開発された教育支援システムは、今後は是非オープンにされ、他の教官にも共有されることによって、学科や学部の教育資産として継承・発展させる必要があることがすべてのレビューワの一致した意見であった。このような努力が今後非常に重要になると思われる。

### 3. 生物・化学科

#### 【生物学分野】

##### (1) 実施科目：生物学実験Ⅰ

日 時：2008年11月13日 12:50～17:40

場 所：理学部3号館生物科学学生実験室

対象学生：生物・化学科生物コース2年生（約40名）

担当教員：上野秀一

レビューア-：岩尾康宏・山中 明

##### (2) 授業の概略

生物学実験Ⅰは生物学コース2年生を対象とする必修科目である。生物学を学ぶために必要な実験器具類、計測器の原理と使用法、その留意点、実験計画の立て方、実験によって得られた結果の解析・処理方法、考察の方法などを学ぶことを目的としている。小人数単位で、実際に自分の手を動かしながら体得することで、3年次の生物学実験と卒業実験（特別研究）でのより高度な実験を行えるための基礎トレーニングを行うことを目指している。今回の実験テーマは、ツメガエルの変態期におけるヘモグロビン組成変化の観察であった。

##### (3) 実施内容

実習のはじめにツメガエルの変態について説明をおこなわれた後、カエルのオタマジャクシからヘモグロビンのサンプルを収集する方法についての指導がおこなわれた。今回の実験では、生きたオタマジャクシの血液から赤血球を破壊することなく分離し、溶血によってヘモグロビタンパク質を取り出し、SDS-ポリアクリルアミドゲル電気泳動によって解析できるサンプルを作成した。また、ポリアクリルアミドを作成し、翌日の電気泳動での解析の準備をおこなった。授業が終えた後、2名のレビューア-が講評を行った。



#### (4) レビューアーからの指摘

- ・ 生きた生物を実際に観察し、試料を調整する課題は、自然や生物を観る集中力と生きた生命の感性を養うことができるので素晴らしい。
- ・ 実習参加者への十分な指導を行うための TA によるサポート体制が確保されていた。
- ・ 個々の学生がすべての操作が体験できると実習内容がさらに充実すると思われる。
- ・ 実習の際に、血液採取の手順等は多少わかりにくい点があり、改善が望まれる。
- ・ 実験の前に、分析についての実例を見せておくことと学生の実習に対するモチベーションがさらに高まるのではないか。
- ・ 同部屋で、他の実験班が別の実験を同時におこなっているので説明が聞き取りにくいことがあった。

#### (5) 今後の改善点のまとめ

- ・ 実習実施の計画の改善について分野で相談すること。
- ・ 説明の時間配分を検討すること。
- ・ 配布資料について改良を加える。

### 【化学分野】

化学分野の学部（生物・化学科 1 年生および化学・地球科学科・化学コース 2・3 年生）で行われる授業科目は、(1) 講義形式の科目、(2) 演習を含む科目、(3) 実験科目、(4) 研究室における発表形式の科目、の 4 種類に分けられる。化学分野では平成 17 年度より、この 4 形式の科目の内の幾つかを選んでピア・レビューを実施し、化学教員が実施者またはレビューアーとして参加することとしている。それぞれの内容と、レビューアーからの主な意見・コメントを以下に記す。

#### (1) 講義形式の科目

授業科目：有機化学 I

担当教員：石黒勝也

対象学生：生物・化学科 1 年生

実施日時：2008 年 11 月 8 日（金）9・10 時限 16：10～17：40

実施場所：22 番講義室

配布物：プリント(8p)・・前回の演習解答、講義資料の抜粋（重要部分を消してあり、講義資料を見て授業中に書き込みをさせる）、教科書からの抜粋（重要語句など）

授業内容：有機化合物の命名法／アルカンの配座解析など（教科書第 2 章）

授業の進め方：

- 前回の演習の解説、および、寄せられた質問等への返答
- 学生は PC を持参し、講義資料をスクリーンだけでなく PC から閲覧しプリントに記入最後に演習（約 10 分）を行い、レポート支援システムにて解答を提出
- この授業では、これまでのピア・レビューでの指摘事項や学生からの意見を参考に、以下のような授業方法の改良を行っている。
- 生物・化学科の 1 年生（生物学コース・化学コースに分かれる前）を対象とした共通・

必修科目であるため、生物学コースに進む学生への配慮として、授業・学習に必要な資料は全てプロジェクターにより提示し、また、各自が購入した PC に慣れることも目的として、資料を HP にて公開している。重要部分を消してあるプリントを配布し、スクリーンと PC から講義資料を見て授業中に書き込みをさせている。

- 教科書が改訂され、前の版までは各章の章末に掲載されていた重要語句の一覧とその解説がなくなった。教科書を購入しない生物学コース志望の学生への配慮もあわせ、重要語句と解説を、ホームページおよびプリント（一部穴埋め）にて閲覧・学習ができるようにした。
- 以前のピアレビューにて「説明を聞くばかりなので、学生の集中力が続いているかが疑問」という指摘があったため、19 年度の FD 研修で紹介された LITE(Learning inTeaching)を試行している。これは、授業の途中で、学生を 2 人 1 組として、与えたテーマに関して 1 人の学生がもう 1 人に説明し、人に教えることで学ぶという手法である。
- 従来は演習解答を電子メールにより送信させる方法をとっていたが、最近の迷惑メールの増加により、送信から着信が確認できるまでに、非常に時間がかかるという問題が発生した。そこで昨年より、物理・情報学科・情報コースの授業で用いられている「レポート支援システム」を使わせていただき、Web から出席と演習解答を登録させる形式とした。着信に時間がかかることがなくなり、学生はこれまでの出席状況や自分の解答を閲覧することがようになった。また、授業時間内に解答できなかった学生は出席だけを登録して後で解答を送信でき、教員側にとっても出席確認や演習の採点が非常に楽に行えるようになった。
- 演習の解答に併せて授業への質問・要望についてコメントに記入させ、次の授業の最初に全員に解説している。
- 分子の構造の理解には分子模型の使用が最も効果的であるが、化学が専門の学生だけではないため、分子模型の購入を必須とすることができない。そこでコンピュータグラフィックスによる「立体視」を用い、分子の三次元構造が理解できるように努めている。アンケートの結果、約 8 割の学生は立体視を見ることができるようになっているが、見ることができない一部の学生からは不満がある。(来年度は、共通経費から分子模型の購入し、各自で分子を組み立てることができる予定である。)

レビューアー：2 名

### 〔レビューアーからの意見・コメント〕

ちょうど学部教務委員会にて PC 活用方法が議論されていた時期であったため、他学部からもレビューに来ていただき、貴重なご意見をいただいた。

#### ①講義の内容についての指摘

- ・多くの事例を用いて、有機化学の命名法をわかりやすく説明されていた。
- ・化学は専門外なので内容の詳細については指摘できないが、化学の最重要科目のひとつである有機化学の基礎事項について詳しい解説がなされており適切な内容だと思う。

#### ②講義の進め方についての指摘

- ・講義で触れた内容について、その日に課題に答えてもらうのは、理解力の向上につながると思う。"LITE"はとても良いと思う。
- ・講義資料は文字が大きく、PC で進める授業では重要な点を満たしていると思う。"LITE"は学生が問題意識を持つよいきっかけとなっており、非常に面白い取り組みだ

と思う。

③その他改善を要する点の指摘

- ・構造と名称を同時に出さず、時にはどちらかを伏せておいてクイズの様に出題し、その場で学生に考えてもらってはどうか？
- ・講義の所で演習（練習）問題を挟むと学生にとって刺激になるかもしれないと思った。
- ・ノート PC を使うため、学生の机が狭く、ノートが取りづらいようであった。
- ・PC の接続がわからないのか、講義中ずっと講義の画面にならない学生もいた。

〔ピア・レビュー後の改善〕

「クイズの様に出題し、その場で学生に考えてもらっては」「講義の所で演習（練習）問題を挟むと学生にとって刺激になるかもしれない」という指摘をいただいたことから、その次の授業から、数分で解答できる「short exercise」をプリントに加え、授業の途中で考えさせ、すぐに解答を解説することとした。

最後の学生授業評価の自由記述欄では、以下のような意見が出された。

- ・LITE、short exercise、演習を一つの授業でやるのは少し欲張りすぎだと思う。
- ・もうちょっと問題の提示をして欲しかった。
- ・ただの作業なので空欄語句埋めは不要。
- ・色が判別不能のプリントについて PC 以外の対策をお願いしたい。
- ・「自分で考えるための訓練」という演習の意図は理解できるが、問に対する考え方がわからないし、考えるための材料も少なかった。基礎のない状態では考えることができないのだから考える力がつくはずがないと思った。
- ・ノートパソコンを使った授業は個人的にはよかったが、毎回の演習問題はもう少し簡単な問題を出してほしかった。
- ・プリントの解説中、先生が口で言うだけでは理解しきれないときがある。プリントにもう少し解説（言葉の説明）を入れてほしい。
- ・内容が多くて、理解するのが大変だった。もう少し内容を減らして、その分深くやって欲しかった。

また、学生アンケートの最後に、この授業で試行している様々な教材や手法が学習に有効であったかについて【1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない】から選択させたところ、以下のような結果となった。

- ①授業へのノート PC の持ち込み：1. 22.5% 2. 23.9% 3. 8.5% 4. 12.7% 5. 4.2%
- ②ホームページでの資料の閲覧：1. 36.6% 2. 18.3% 3. 4.2% 4. 8.5% 5. 1.4%
- ③プリントへの書き込み：1. 26.8% 2. 22.5% 3. 12.7% 4. 7.0% 5. 0.0%
- ④毎回の演習及び翌週の解説：1. 35.2% 2. 22.5% 3. 5.6% 4. 4.2% 5. 1.4%
- ⑤受講生からの質問・要望の紹介と回答：1. 28.2% 2. 21.1% 3. 11.3% 4. 5.6% 5. 2.8%
- ⑥LITE：1. 11.3% 2. 18.3% 3. 21.1% 4. 15.5% 5. 2.8%
- ⑦short exercise：1. 29.6% 2. 28.2% 3. 8.5% 4. 2.8% 5. 0.0%
- ⑧立体視：1. 16.9% 2. 14.1% 3. 29.6% 4. 2.8% 5. 5.6%
- ⑨重要語句（プリント）：1. 31.0% 2. 21.1% 3. 15.5% 4. 0.0% 5. 1.4%

この「有機化学 I」は専門科目の中でも特殊事情のある授業であり、これまで、ピア・レビューや FD 研修、また、学生からの意見などから提案された様々な手法をできる限り取り入れてきたが、時間的にも過剰な状況となってきた。来年度はこれまでの試行を吟味し、より有効な手法を取捨選択して行う予定である。

## (2) 実習・演習形式の科目

授業科目：量子化学及び演習 II

担当教員：右田耕人

対象学生：化学・地球科学科 化学コース 3 年生

実施日時：2008 年 7 月 7 日（月） 7・8 時限 14:30～16:00

実施場所：理学部 2 号館 2 階・理学部情報計算機実習室 1

授業内容：クラスター PC を使った Neutral Red の励起状態・遷移エネルギーの計算結果の発表

レビュアー：回答：A、B、C、

### [レビュアーからの意見・コメント]

#### 1) 実習・演習内容についての指摘

- ・今回、PC クラスターを使用した大規模量子化学計算が初めて授業に取り入れられた。量子化学 1（2 年生後期）～量子化学 2（3 年生前期）にかけて理論を履修した後、最後に本格的な量子化学計算プログラムを用いて実際の計算を経験することは、学生にとって非常に有益と思われる。
- ・現在、計算化学は非常に使いやすいものになってきている。本演習は高度な計算化学演習を取り入れており、学生にとっては大変有意義なことと思う。また、計算内容についても一般的なモデル化合物でなく、よく使われるニュートラルレッドであり、有用性も高い。
- ・演習で使用された高精度量子化学計算ソフトウェアは現在世界中の分子科学者が研究の第一線で使用しているものである。そのようなソフトウェアを学生自身が実際に使用することは量子化学分野の理論がどのように実践されているのかを理解する上で非常に有益であると思われる。

#### 2) 実習・演習の進め方についての指摘

- ・化学計算の実習では、何を題材にするかが大きな問題となる。今回、並行して行われている物理化学実験にて用いられた分子を材料に選んだことは、理論と実験の直接的な連携となり有意義であったと思われる。
- ・実際の物理化学実験ともタイアップしており、様々な角度から化学的理解を深めることができる。また、学生に発表させることで、プレゼンテーションの練習にもなり、効果的である。
- ・計算対象分子の吸収スペクトルはすでに 3 年前期の物理化学実験で測定している。講義で学ぶ理論と実際に得られた結果とを関連づける演習内容であり、分子の安定構造とその吸収特性に関する理解をよりいっそう深めるために効果的である。

#### 3) その他改善を要する点の指摘

- ・発表に関し、学生の自主性を重んじているのであろうが、ある程度強制的にしなければ、なかなか発表してくれず、時間のロスにつながる。教員が、各人の発表に対してコメントや指摘をしたり、学生同士で意見交換できると効果的と思う。
- ・光吸収に関与する分子軌道の特徴などを考えさせる時間があればより効果的である。PC クラスターの操作説明に時間を取られてしまっており、改善が望まれる。

## 4. 地球圏システム科学科

### (1) 実施目的

当学科においては、各教員の授業改善のための参考とするため、教育貢献度評価の最も高い科目の授業について、その実施状況を見ることで、学部教育の授業改善に生かす。

### (2) ピア・レビュー

日 時：2008年12月1日（月）9-10時限、11番教室

授 業：金折教授 応用地球科学Ⅰ 第7回目 「地震と断層」

参加者：加納・三浦・今岡・田中・宮田・澤井・阿部 学生31名

配付資料：シラバス・当日の授業内容・観察カード・学生授業アンケート

観察者には資料一式が配布され、授業について気づいた点などをそれぞれ項目ごとに観察カードに記入した。

### (3) 授業研究会

日 時：2008年12月1日（月）18:00～18:35、地球科学セミナー室

参加者：加納・三浦・今岡・田中・宮田・阿部

議 題：応用地球科学Ⅰ 第7回目について

- (a) 授業技術に関して（声の大きさ、話の速度、板書・AV機器の利用など）
- (b) 授業運営・授業構成に関して（難易度・過不足など）
- (c) 授業の目標、達成度、理解度、満足度、内容に関して
- (d) 学習活動、学生の参加度に関して（学生の質問など）
- (e) その他 学生の動向など

それぞれについて意見交換・情報交換を行った。それらの意見や感想は後述のようにまとめられる。とくに予習・復習に役立つ宿題の出し方は大きなヒントとなったものと思われる。それぞれに、参加者各自の授業にとって多くの工夫と改善に活用できる。さらに、授業アンケートの集計結果と合わせて授業改善報告書作成への利用を金折教授へ依頼した。

#### [感想]

・興味があるので受けやすかった ・私語もなくよかった ・ポイントが欲しい ・プリントが一括で効率よかった ・断層や記念館の写真を見て行ってみたいと思った ・図や写真が多くてよかった ・プロジェクターに単語だけでなくもっと書いて欲しい ・普通にわかりやすい ・わかりやすい ・具体例を出しながらなので面白い ・配付資料がよく活用されていた ・板書をもっとくわしくかいてもらえるとわかりやすい ・図もあり説明もわかりやすい ・資料がわかりやすかった ・黒板にキーワードだけなので、自分で考えながらできてよい ・新しく出た概念は、まず何のことか解説して欲しい ・予復習のしやすい授業と思う

#### [授業観察カード]

観察者 6名

以下の観点について「各自の講義にいかすために参考になった点」等を記述してください

い（紙面が足りない場合は裏面も使用してください）。

1) 授業技術に関して（声の大きさ、話の速度、板書・AV機器の利用など）

・板書中心でノートを取りやすい　・聞きやすい声の大きさ　・スピードの速すぎることもあった　・板書しにくい図がPPにあって良い　・メリハリが必要かも知れない　・やや聞き取りにくい部分もあったが、速度など適切であった　・学生の回答の声が聞こえない部分があった　・バランスがとれている　・板書 OK　・復習（課題－予習）よい　・資料が丁寧　・クイズ　・問いかけ

2) 授業運営・授業構成に関して（難易度・過不足など）

・対話式でわかりやすい　・good　・学生を指名して答えさせるのはよい　・途中から話が長く単調になった　・展開のスピードが適当　・復習しないとついていけないかも－やる人はやるが－（やむを得ないかもしれない）　・2極化しそうである　・やさしかったのでは？　・Good

3) 授業の目標、達成度、理解度、満足度、内容に関して

・きちんと聞いている学生については十分達成されたと思われる　・Good　宿題を毎回出すことで理解が進むと思う　・スライド併用でわかりやすい　・基礎に立ち返って復習できるように本が紹介されている　・応用地質学の意味づけが必要か？　ユデダス－OK　・good

4) 学習活動、学生の参加度に関して（学生の質問など）

・よい　・トピック good　・学生の参加度が高い（高い人もいたというべきか）　・宿題を出して予習させるのは良いことであるが、どれくらい実際にやってくるのだろうか　・質問のあったとき学生の声が聞き取れないので、全員に質問内容を周知するよう大きな声で紹介されると良い　・よく参加している　・講義中の学生への問いかけが多くて良い　・活発である

5) その他

・まだわからないことが多い、ということが伝わると良い

## 第 2 節 大学教育機構主催全学 F D 研修会への参加状況

平成 20 年度の大学教育機構主催 F D 研修会および F D 講演会への理学部からの参加者は 36 名、多数の複数回参加者がいたので、延べ参加者は 59 名である。理学部からの参加教員は以下のとおりである。

実施年月日	研修内容	理学部参加教員
平成 20 年 4 月 2 日	T A 研修会	福地龍郎、廣澤史彦、三浦保範、渡辺雅夫、朝日孝尚、青島均、宮川勇、鎌田祥仁、原田由美子
平成 20 年 4 月 7 日	障害学生の授業方法についての研修	木内功、廣澤史彦、朝日孝尚、藤澤健太、宮澤康行、加藤崇雄、増本誠、菊政勲
平成 20 年 7 月 29 日	「より充実した初年次教育を目指して」	藤井寛之、中内伸光、廣澤史彦、野崎浩二、白石清、宮川勇、増山博行、藤澤健太
平成 20 年 8 月 26 日	「学生参加方授業の展開方法」	内野英治、末竹規哲、藤井寛之、笠野裕修、宮澤康行、原田由美子、今岡照喜
平成 20 年 9 月 19 日	メンタルヘルスの手法を学ぼう「大学生の自殺問題－教職員の対応上の留意点」	小宮克弘、藤島政博、宮川勇、木内功、青島均、菊政勲、野崎浩二、渡辺雅夫、吉村浩、幡谷泰史、石黒勝也、輪島清昭
平成 20 年 9 月 25 日	「学習意欲を高める問題解決型の授業展開－その方法と展開－」	澤井長雄
平成 20 年 12 月 19 日	「教育での標準テストの影響」	山中明
平成 21 年 1 月 7 日	「学士力・社会人力を教育する方法」	山中明
平成 21 年 3 月 13 日	「情報セキュリティ・情報モラルの考え方」	石黒勝也
平成 21 年 3 月 18 日	「事例から学ぶ危機対応・自殺のポストベンションについて」	野崎浩二、祐村恵彦、安藤良文、渡辺雅夫、阿部利弥、菊政勲、藤島政博、小宮克弘、宮川勇、吉川学、増本誠

## 第3節 学生授業評価

大学教育センターのデータによると平成20年度の理学部の学生授業評価実施実績は通年で、実施対象科目数173、実施科目数163で、実施率は94.2%である。この数字は全学では最高の数値である。

## 第4節 その他のFD活動

各学科においてピア・レビュー以外に、授業改善、教材開発、学生のケア、外部講師による学科主催FD研修会、学習相談室による学習支援、など教育改善を含めたFD活動が行われた。

また、学部・研究科主催のアカデミックハラスメント防止のための研修会、大学教育機構と共催のFD研修会、愛媛大学で開催された「第2回理系大学教育に関する研究フォーラム」への参加などもなされたが、これらは紙数の関係で研究科の章に記す。

### 1. 数理科学科

#### 授業改善活動と学生ケア体制との連携

数理科学科は新カリキュラムに移行して今年で3年目を迎えた。新カリキュラム実施目的の一つは少人数セミナー教育である。新しく導入された「数理科学入門セミナー」(1年次配当)、「数理科学基礎セミナー」(2年次配当)、「数理科学発展セミナー」(3年次配当)では少人数指導体制を取っており、担当教員相互の協力により、より良いセミナー授業を実践している。各年次のセミナーでは、学生が黒板で発表し教員が問題点を指摘する形式で行われている。学生の学習内容の理解度を高めるために、発表時にその場で細かな指摘や丁寧なアドバイスが与えられると共に、学生の疑問に分かりやすく答えている。こうした教員と学生との間の密度の濃い交流により、ケアの必要な学生の早期発見も可能となり、学生指導にも大きな効果をもたらしている。1、2年次開設科目「数理科学入門セミナー」、「数理科学基礎セミナー」は少しずつ学生の間に着実に定着しつつあり、その成果は今年度から実施された「数理科学発展セミナー」(3年次配当)に結びついている。この授業に対する学生評価もおおむね好評であり、実際、学生成績の向上も見られた。次年度この成果が4年次配当科目である「卒業研究」に結実することを期待したい。

### 2. 物理・情報科学科

#### 【学科共通】

#### e-Learning 教材作成講習会

4月25日に約2時間半にわたって、オープンソースソフト Moodle による e-Learning 教材作成の講習会を開いた。参加者は物理・情報科学科教員7名で、講師は平成19年度から e-Learning 教材の作成に携わってきた大学院生4名が務めた。Moodle の概要の説明を受けた後、基本的ないくつかの形式の問題作成を行った。



## 【物理学分野】

### 共通教育物理学実験のテキスト改訂

物理学分野教員 8 名に共通教育物理学実験の非常勤講師 2 名を加えた 10 名で、共通教育物理学実験のテキストを改訂し、東京教学社から出版することになった。平成 17 年度末に新課程で学んできた学生の入学を意識した大幅改訂を行ったが、今回の改訂はそれに次ぐものであった。平成 20 年度用テキストに対する修正意見を交換した後に作業を始め、各テーマの担当者が作成した原稿を相互にチェックして修正を加えるという方法を採用した。

## 3. 生物・化学科

### 【生物学分野】

#### 学生のケアに関する意見交換

年に 10 回前後開催される生物分野会議の時間を利用して、授業の受講状況や研究室配属後の研究意欲に懸念が感じられる事例を教員が紹介し、他の教員が把握している事実やこれまでの経験を紹介し、対応策について意見交換を行った。教員が問題を 1 人で抱えて問題が深刻化することを未然に防ぎ、適切な対処ができる可能性が高まる効果があったと考えられ、今後も継続していきたい。

## 4. 地球圏システム科学科

当学科及び理工学研究科地球科学分野（合わせて地球科学教室とする）においては、恒常的に教育改善検討 WG が組織されており、ピア・レビューの実施にあたりとともに、教育改善の取り組みを行っている。本年度は、FD 活動の重点項目として(1)ピア・レビューの実施をあげており、また例年と同様、(2)FD 研修会への参加並びに教室独自の FD 研修会の開催、(3)学生院生授業評価の実施とその活用、などを行っている。

#### ○ ピア・レビューの実施

当学科においては、各教員の授業改善のための参考とするため、毎年度学生授業評価をもとに最も学生からの評価の高かった教員がピア・レビューを実施している。

#### ○ 全学 FD 研修会への参加

全学的に実施された FD 研修会への参加状況は、以下のとおりである。

#### ○ 授業技術研修会（今岡照喜、澤井長雄）

#### ○ 学生及び大学院生による授業評価、その他

例年にならって、学部及び修士課程のほぼ全講義についての授業評価を実施した。評価項目等は理学部及び理工学研究科に同じである。また評価結果により今年度のベストティーチャー賞に金折裕司教授を選出し、ピア・レビューを行った。また毎年、毎週水曜日 15～17 時に「学習のテラス」を開設し、修士院生を相談員として、学部学生の学習支援や諸事相談にあたっている。

○学科主催 FD 研修会「大学生のメンタルヘルス：関わりのヒント」の開催

どんな強い人もストレスが強いと心の病気になることが多い。生涯を通じて5人に1人は精神疾患にかかるという（厚労省による「こころのバリアフリー宣言」）。最近、メンタルヘルスに問題のある学生が増加してきており、心の悩みを解決しようと学生相談所を訪れる学生は多い。一方で、多くの教員はそのような学生への対応に苦慮し、学生指導に右往左往している。しかし専門外の未経験のことであるために、必要以上に神経質になってみたり、対応の仕方を誤って健康な周辺学生に迷惑をかける結果となったりしている。このような状況をいち早く打開し、教員が自信をもって教育に専念するためには、メンタルヘルスについて学び、学生への接し方や指導方法に関する指針を得る必要がある。そのような背景と目的で、学生相談所の臨床心理士 今井佳子先生に研修会の講師をお願いしたところ、快くお引き受けくださり、以下のような講演会を開催することができた。

日時：2008年12月17日 14：30～15：30

場所：第一共用セミナー室

以下は今井先生が講演された時のパワーポイントの目次を記したものである。今井先生の了解を得て、ここに掲載させていただく。

1. 精神的病気との関わりの歩み

- ・単科の精神病院（境界型パーソナリティ障害・摂食障害・うつ病・統合失調症）
- ・総合病院神経科（不登校・リストカット・抑うつ状態）
- ・スクールカウンセラー（軽度発達障害）
- ・山口県社会保険協会こころの相談室（パワハラ・セクハラ・家族関係）
- ・山口県男女共同参画センター（DV）
- ・女性のなやみ相談室（不妊・夫婦関係）
- ・山口大学学生相談所

2. 大学相談ならではの、のこと

- ・「死にたい」との訴えが多い（健康度の高い学生でも）
- ・親との関わりが強くなっている
- ・少しお節介な関わりをしている（健康度が高いため・人間成長過程に関与しているため）
- ・「押す・引く」の塩梅の難しさ

3. 大学生の悩み

- ・不安感（孤独・友達を求める・被害的な考え）
- ・家族（親子関係・兄弟関係・親のプレッシャー）
- ・友達関係（ことばによる傷つき・コミュニケーション不足・いじめ体験）
- ・人間関係（研究室内での）
- ・恋愛（別れによる抑うつ状態）
- ・性格（自信がない）
- ・就活（何をしたいかが分からない）

4. 精神的な病気を抱える学生の悩み

- ・服薬に関して
- ・副作用・薬に頼りたくない等

〔抑うつ状態・社会不安障害（社交不安障害 S A D）・統合失調症〕

- ・体調不良との戦い
- ・信頼がなくなる（出席したくても出席できない）
- ・心理的な要因の強い場合（周囲の環境に影響される）

※基本は他の学生と同じ接し方で

ただ、精神的な病気が分かった場合は、十分話し合うことが必要

#### 5. 気になる学生に対して

- ・丁寧な交流（聴き話す・声をかける）
- ・共有する
- ・連携する
- ・相談機関紹介の配慮
- ・羅生門的現実（自分の見方に囚われていないか）  
こころのバリアフリー宣言

#### 6. 目指していること→安定した自我へと育てる

日頃直面している問題だけに講演終了後には多くの質問が出され、今井先生にはそれぞれに丁寧に回答していただいた。研修会の翌日、学科長の手元には、某先生から以下のような感想メールが寄せられた。「昨日の今井先生の話は大変参考になりました。学生の症状を非常に"客観的"に捉えられていることに感銘を受けました。症例を多く体験しておられるからでしょうね。我々の方が神経質になりすぎているのではないかと感じました……。」

## 5. 大学の枠を越えた取り組み

2008年12月13日（土）～14日（日）に愛媛大学で「第2回理系大学教育に関する研究フォーラム」が開催された。1日目はテーマ「学士課程の教育改善・改革」に関する8件の講演、2日目はテーマ「大学院理学教育の充実を目指して」に関する6件の講演があった。山口大学からは、物理・情報科学科の朝日教授と生物・化学科の村藤准教授が参加し、それぞれ、「学部教育におけるカリキュラムおよび学習支援の現状と課題」、「山口大学の大学院教育改革—応用分子生命科学系専攻を例に」という演題で発表した。講演では中四国6国立大学理学部および理学系大学院における教育の取り組みが紹介され、活発な意見交換や討論が行われた。最後に「教育における大学間連携の今後について」というテーマで、どのような企画が可能であるか意見交換をした。

\* \* \* \* \*

平成20年度 理学部 FD 委員会委員

加藤崇雄（委員長）、白石清、村上柳太郎（教学委員会委員）、久田見守（数理科学分野）、朝日孝尚、山本隆（物理・情報科学分野）、岩尾康宏、田頭昭二（生物・化学分野）、今岡照喜（地球科学分野）

## 第 8 章 医学部の F D 活動

各学部の FD 活動報告は、本来、学部単位で取りまとめるべきであるが、医学科と保健学科では、医療人を養成するという教育目的は一致するものの、職種の違いに起因してカリキュラムと授業形態が根本的に異なり、必然的に教員に要求される教育技能も異なっている。さらに、FD 活動に関する歴史的経緯も異なることから、活動は医学科と保健学科で、それぞれ独立して行われている。

そのため、本報告においても、それぞれの活動を別個に記述する。

### 第 1 節 医学科

#### 1. 活動概要

医学科では、社会からの医学教育への強い期待に応え、また全国的に急ピッチで進行する医学教育改革の動きの中で主導的な役割を果たすため、全学規模での FD 活動が本格的に開始される以前の平成 9（1997）年度から、年 1、2 回の 1 泊 2 日のワークショップを中心として独自の FD 活動を展開してきた。

継続的に展開してきた FD 活動は、平成 13（2001）年度以降、毎年、着実かつ具体的な教育改善に結実してきた（例：コース・ユニット制へのカリキュラムの根本的改変、展開医学系テュートリアルの実施、多肢選択型客観問題による統一試験の実施等）。

他方で、平成 15 年度以降は、ワークショップの必要回数が増大する一方、予算的制約もあり、1 泊 2 日型から 1 日で完結するワークショップに活動の中心が移行しつつある。

平成 20 年度も、基本的にはこの流れの延長線上に、教育改善上の具体的な個別テーマに基づいた 1 日完結型のワークショップおよび数時間の講習会を中心に活動を展開した。また、平成 19 年度から取り組みはじめた山口大学の中期計画・中期目標に掲げられたピア・レビュー（公開授業 & 授業研究会）も着実に実施した。

#### 2. 具体的活動

##### （1）ワークショップ（1 日完結型）

###### ① 「テュートリアル・ワークショップ」

1 月 12 日（土） 場所：医学部第 1 講義室 & テュートリアル室

※ 年間 11 ユニットにわたって実施される「展開医学系テュートリアル」のあり方に関するディスカッションと、実際に各ユニットで使用するシナリオの概要の決定。

※ なお、実際に、実施するまでには、各ユニットから提出された原稿を約 10 名の WG 委員が集まって検討し、さらにメーリングリストを通じてやり取りすることで推敲を続けてから使用に供した。

##### （2）講習会・講演会

###### ① 「テューター講習会」（計 3 回）（3 回とも同一内容）

4月4日（金） 第1講義室 （参加者 36名）

4月7日（月） 第1講義室 （参加者 27名）

4月8日（火） 第2講義室 （参加者 14名）

※ テュートリアル実施のための展開系教員を対象とした講習会。

②「多肢選択型客観問題作成講習会」

5月9日（金）17時～ 霜仁会館3階 （参加者 26名）

※ 全国の共用試験 CBT 他、統一試験（基盤系統一試験&卒業試験）で使用される、多肢選択型客観問題の作成技法を習得するためのワークショップ。

※ 参加者が事前に作成した問題を持ち寄り、ブラッシュアップを主体に実施した。

③「カリキュラム講習会」

11月10日（月）第2講義室 （参加者 54名）

※ 医学科独自のコース・ユニット制カリキュラムおよびそれと一体化した eYUME のコンテンツ更新方法に関する講習会。

④（講演会）「医療コミュニケーションのヒント—メディカルサポートコーチング法」

3月19日（木）18時～ 総合研究棟 S1 講義室 （参加者 21名）

※ 学外から医療コミュニケーションの分野でご活躍の奥田弘美先生をお招きし、医学教育の分野で重視されつつある、コーチング技法について講演会を行った。

### （3） 教育評価活動

平成 13（2001）年度から実施している「振り返り評価」（ユニット終了後、マークシートで実施）と平成 13（2002）年度から実施している「進行評価」（1回1回の講義終了後、オンラインで実施）を 20 年度も引き続き実施した。

なお、「振り返り評価」に関しては、全学の統一様式との摺り合わせの問題が浮上し、大学教育センターとの協議の結果、19 年度から全学フォーマットに合わせたデータを提供することで合意に達した。

### （4） ピア・レビュー

（3）で言及した教育評価活動における優秀教員により、年間を通じて計 5 回の公開授業を実施した。

開催日時と担当教員、参加者数等は下記の通りである。

9月1日（月）1・2時限	澤田 知夫（血液・免疫系）
10月2日（木）3・4時限	中村 彰治（中枢神経系）
10月28日（水）1・2時限	西田 輝夫（加齢・老年病態系）
1月6日（火）5・6時限	福本 陽平（臨床医学序説1）
2月9日（月）3・4時限	谷田 憲俊（医療倫理学）

## 第 2 節 保健学科

### 1. 概要

医学部保健学科では平成 20 年度における全学中期目標の達成を目指すこと、さらに、平成 19 年 4 月より大学院医学系研究科保健学専攻博士後期課程が設置され、大学院 / 学部におけるより質の高い研究および教育が求められている。

毎年卒業生に対するアンケート調査では、保健学科の教育・指導内容への満足度は高く評価されているが、本年度はさらなる向上を目指して保健学科独自のものとして以下の内容を企画し実施した。

- ① 大学院生・学生の実態把握と学生参加型授業への改善
- ② 社会人大大学院生への遠隔授業実施の取り組み
- ③ 学部授業ピア・レビュー
- ④ パワー・ハラスメント予防
- ⑤ 大学院生・学部学生による授業評価・教員自己評価のあり方と徹底実施

以上の結果、少々困難と思われる教員自身による自分の授業の客観的評価および改善への意識向上を高め、社会人として大学に学ぶ院生・学生へのより親切で適切な対応を可能とした。

本年度は保健学科において合計 8 回の FD 研修会を実施し、以下に保健学科として本年度行なった各研修会の実施実績について内容ごとに分類して述べる。

### 2. 実施内容

#### (1) 教育における教員の資質向上について (計 5 回実施)

##### 1) 第 1 回：平成 20 年 10 月 8 日

講演会：「保健学科教育改善：山口大学における教育改善の枠組みについて－教育改善活動における PDCA サイクル－」

講師：吉田香奈 先生 (大学教育センター准教授)

まず、本学が取り組んでいる GP (グラジュエーション・ポリシー)、カリキュラムマップ、Web シラバス、学生授業評価、教員授業自己評価などの相互関係および組織的な取り組みの必要性に関する説明が行われた。次に、現在中央教育審議会大学分科会で検討中である「学士力」とは何か、また、経済産業省が検討している「社会人基礎力」とは何か、について説明があり、国の政策レベルでは学習成果の保証に関する議論が進行していることが報告された。続いて、参加者から様々な質問が寄せられた。まず、資料の中で「授業改善に関心がない」という選択肢はどう意味かという質問があり、それは教員本人が自身の問題と考えているという意味だとの回答があった。次に学士力・社会人基礎力は重要だが授業評価ではそれが身につけているかどうかわからないので、どのようにして測定すればよいのかについて質問があった。これについては他大学の事例や現在工学部で進行している電子ポートフォリオ (カルテ) の開発・チェックの取り組みについて紹介があった。

(参加者 27 名：49%)

\* 講演後に回収したアンケート調査結果では、出席者の 96% が今回の研修会が有意義であったと回答し、出席者から、学生の現状や GP については全教員が共通認識することは

大変意義がある、今後シラバスをつくる際に今回の内容を活かしたい、等の意見が寄せられた。また、講演のプレゼンテーションについて、出席者の96%は分かり易かったとの回答を得た。

2) 第2回：平成20年11月12日

講演会：「最近の学生の実態と社会人基礎力の育成」

講師：小川 勤 先生（山口大学 大学教育センター教授）

最近入学してくる学生の実態を知る為に、全国の高校生の意識調査を参考にしたところ、日本の高校生は「現在志向型」で「暮らしていける収入で楽しく暮らす」希望が多く、諸外国の「未来志向型」とは異なっている。また、高校においては学習時間が諸外国と比較して短いのが特徴であり学力低下に繋がっていることが懸念されている。

そこで、大学教育においては質の向上が求められ、明確なGP（グラジュエーション・ポリシー）を定め5つの重点プロジェクトを掲げた。すなわち、(a)大学教育センターと部局がいったいとなった「教育改善FD研修会」の実施により教員の意識改革を図る。(b)「教育コーディネーター」を配置し教員への支援・指導助言を行なう。(c)教員・職員・学生が一体となった研修体制の確立。(d)「オンライン知の広場」を開設し卒業生との交流を実現する。(e)出席管理システムや授業評価システムの教務システムへの統合など教育改善サポートシステムの開発、を挙げている。これらにより、大学入学後の学生に「社会人基礎力」、その中で特に重要な内的報酬への動機付け、すなわち「仕事そのものに興味を覚え、自分の成長に繋がるという実感を得る」ための「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」を養うことが出来ると考えられる。

(参加者38名：69%)

\* 講演後に回収したアンケート調査結果では、出席者の100%が今回の研修会が有意義であったと回答し、出席者から、最近の学生の実態が把握でき、内的報酬への動機付けが必要等の感想が寄せられた。また、講演のプレゼンテーションについて、出席者の100%が分かり易かったとの回答を得た。

3) 第3回：平成20年12月10日 大学教育センターと共催

講演会：「GPの達成に向けて学生参加型授業の展開」

講師：林 徳治 先生（立命館大教授）

学部・学科のGPを達成するために、その手法の一部として、学生参加型授業を授業の中にどのように取り入れていくのかについてビデオや事例紹介を交えて講演が行なわれた。

学生参加型授業で用いられている手法として、強制連結法、ロジックツリー、マイクロプレゼンテーション、オーディエンス教育、無言面接、フォトランゲージ等の紹介が行われた。学生参加型ということでグループワーク的な内容が多かった。オーディエンス教育やPCMの概念を取り入れたクリティカルシンキングの手法であるロジックツリーの作成の過程を実際に学生が取り組んでいる様子をビデオ撮影したものを視聴できたことは、参考になる点が多かったという意見が受講した先生方から多く聞かれた。

(参加者41名：74%)

\* 講演後に回収したアンケート調査結果では、出席者の89%が今回の研修会が有意義であったと回答し、出席者から、実際の講義風景なども見ることができ、実際にどのように行っていけばよいか、方法論が理解しやすかった等の感想が寄せられた。

4) 第4回：平成21年3月19日 医学科FD研修会との共催

講演会：「医療コミュニケーションのヒント～メディカル・サポートコーチング法のご紹介」

講師：奥田弘美 先生（精神科医・相模湖病院精神科）

医療現場において医療スタッフと患者様との対話で注意すべき事柄、また、医療スタッフ同士でコミュニケーションを円滑にする方法について、各事例についてDVDで対話現場を再現し丁寧な説明がなされた。医療スタッフが患者様に接する重要な点は、治療等について医療人の方から押し付けるのではなく、患者様の意見や要求を十分に聞いた上でアドバイスするような口調で治療方針を勧めることである。また同様に医療スタッフ同士で上司から部下への注意についても、部下の意見を良く聞き、部下の向上のために注意していることを理解させ、その解決策を導けるような対話の方法が重要である。

(保健学科参加者9名：17%)

\* 講演後に回収したアンケート調査結果では、出席者の100%が今回の研修会が有意義であったと回答し、講演のプレゼンテーションについても、出席者の100%が分かり易かったとの回答を得た。

5) 第5回：平成20年12月5日

「ピア・レビュー（医療英語）」

担当教授：Professor Susan Turale 先生

保健学科は国際交流に力を入れているが、その1つとしてnative speakerによる英語教育を行なっている。今回ピア・レビューした「医療英語」の内容は、薬局で薬を受け取る患者様と医療者との対話、および病棟で看護師が患者様に服用する薬とその服用方法の説明等の対話である。Native speakerによる正しい英語の発音を習得するのみではなく、薬剤の形状による種類（内服薬、外用薬、錠剤、カプセル、水薬等）、薬効別種類（下痢止め、解熱剤、抗生剤等）、服用方法（経口、点滴、2錠/日等）の英語での表現法を習得する「医療英語」を学生と担当教員との対話方式で授業が進められた。今回はレビュー出来なかったが、この授業以後は学生同士によるロール・プレイ方式で授業を進める予定としている。

(参加者28名：51%)

\* 保健学科講義時間帯であるため、他の講義担当者は参加できない条件で行なわれたが、アンケート調査では出席者の100%がこのレビューは有意義であったと回答し、担当教員が学生の間を動き回り学生との対話が活発であったこと、答えた学生を必ず誉めること、臨床に出た時に学生に役立つ内容であったこと等の意見が寄せられた。

## (2) 社会人大学院生への遠隔授業実施の取り組みについて

(計2回実施：内容は同じ)

1) 第1回：平成21年3月3日および3月11日（3月3日に出席できない人を対象）

講習会：「遠隔授業・TV会議システム説明会」

講師：服部幸夫 先生（保健学科教授）

社会人として勤務に従事しているため毎回大学内で授業を受けられない大学院生に対する遠隔授業や遠方の研究者とのTV会議を円滑に行なうためのPCを用いた方法の説明が



行なわれた。出席者は各自、自分の PC を持参し Web にアクセス後、必要なソフトをインストールし説明を受けながら自分で操作する方法で進められた。さらに、3月3日の説明会においてはサポートの教員が付き個別の対応がなされた。

(参加者 36名：65%)

\* アンケート調査の結果、出席者の 100% が有意義であったと回答した。2名から PC の操作が少々難しく理解しづらかったとの意見が寄せられたが、後日の再度の説明会に出席することで対応した。

### (3) 学生へのキャリアデザイン支援について

#### (CD委員会との共催で1回実施)

1) 第1回：平成20年12月5日

講演会：「学年進行で進めるキャリアデザイン支援プログラムー関西学院大学における取り組み」

講師：森田伸一先生（関西学院大学キャリアセンター次長・キャリア支援課長）

保健学科、特に検査技術科学専攻では毎年学生の就職活動を活発に行なうことを必要としている。そこで学科内 CD 委員会が主催した他大学での CD 活動についての講演を FD 研修会として位置付けた。保健学科では3年次夏期頃から始めるが主には4年次に就職活動を積極的に行なっているのに比べ、他学部ではより早い時期から就職活動を必要としていること、関西学院大学では各学年においての就職活動をシステムティックに行なうことが重要であることが示され、保健学科においても早い時期からの対応を検討する必要性が示唆された。

(参加者 29名：53%)

\* 講演後に回収したアンケート調査結果では、出席者の 100% が今回の研修会が有意義であったと回答し、講演のプレゼンテーションについても、出席者の 100% が分かり易かったとの回答を得た。また、CD 委員会との共同開催も年1回くらい行なった方が良いとの回答を得た。

### (4) パワーハラスメント予防について (1回実施)

1) 第1回：平成21年1月28日

講演会：「パワーハラスメントをどう予防するか～保健学科の事例から学ぶ～」

講師：清俊夫先生（保健学科教授）

保健学科では、パワーハラスメントを防止するための FD 研修会を毎年行なっている。本年もその一環として開催された研修会である。社会的勢力 Social Power とはどのようなことを指すのか、キャンパスにおいてハラスメントが起こる構造の解説、保健学科特有の問題の認識、大学組織としてのハラスメント問題への基本的視点とその対応の流れの確認、ハラスメントを防止するための対応策と人間関係の改善策について講演および質疑応答がなされた。

(参加者 42名：76%)

\* 講演後に回収したアンケート調査結果では、出席者の 90% が今回の研修会が有意義であったと回答し、講演のプレゼンテーションについても、出席者の 90% が分かり易かった

との回答を得た。

## (5) 大学院生・学部学生による

### 授業評価・教員自己評価のあり方と徹底実施

山口大学による授業評価システムおよび保健学科独自で開発した授業評価システムを利用し、大学院生・学部学生による授業評価および教員自己評価を実施するよう、全教員に対して通知し徹底実施に努力した。また、この授業評価で高かった教員については山口大学に対しベスト・ティーチャー賞へと推薦した。

## 3. 今後の課題

### (1) 学科内FD委員会と大学院研究科FD委員会との連携、

#### 教学委員との連携について

平成20年度から全学FD委員会がなくなったので、保健学科としてのFD活動は、保健学科教学委員と連携をとり活動を進めた。また、平成20年度の大学院研究科FD委員長は医学科の教授が担当したので、保健学科での大学院研究科FD活動は特に行なっていないが、研究科FD委員会規則を作成し密接な連携をとったFD活動に取り組むことが必要と思われる。

### (2) 平成21年度の学科内FD研修会の内容検討について

平成21年度での保健学科FD活動へ向けてのアンケート調査や聞き込み調査によると、各自の授業方法を見直し発展に結びつくピア・レビューの回数の増加、実践的に役に立つ授業方法の講習会(20年度に行なった遠隔操作法等)の開催、研究の発展に参考になる講演会の開催等の希望が寄せられた。平成21年度の保健学科FD活動の方向性について参考になるものと思われる。

保健学科でのFD研修会における参加率は高く、教員のFD研修会に対する関心は強いので、今後教員の研究活動や教育活動の発展に貢献できるFD研修会の題材の検討が必要である。

### (3) 山口大学での各FD研修会の全学Web配信について

保健学科の教員は全員多くの講義や実習を担当しているので、保健学科内で開催されるFD研修会に出席するのが精一杯であり、他地区で開催されるFD研修会への参加はたとえ興味深くても困難であるのが実情である。従って平成20年度では、吉田地区で開催されたFD研修会のいくつかをWeb上で同時配信してもらえよう申請し実施された。今後多忙な教員を考慮し、山口大学全体へのWeb配信の実施が望まれる。

### (4) 大学院・学生授業評価の徹底について

大学院・学生授業評価の徹底に関しては、保健学科の実施率は80%以上と高いが、100%

に到達するようさらなる努力が必要である。

## 第9章 工学部のFD活動

### 第1節 はじめに

工学部ではFD活動として以下のものに継続的に取り組んでおり、本年度も引き続き継続的な活動を行った。

1. 公開授業
2. 授業評価表彰
3. 全学FD研修会への参加

以下、本年度の活動をまとめる。

### 第2節 公開授業

工学部では毎年度前期と後期に授業科目を選びそれを公開授業として一般教員の授業参観を進めている。本年度はより多数の教員の参加を促すために、各学科あたり4科目以上の授業を指定してもらい、より授業参観を行いやすいようにした。本年度公開した授業について表1にまとめた。

#### 平成20年度(前期)公開授業一覧 前期公開授業実施期間

6月9日(月)～7月18日(金)

学科	授業科目名	授業実施者		実施日時	
		職	氏名	月日	備考
機械工学科	材料力学Ⅰ	教授	田中 佐	6月 12日	
機械工学科	材料力学Ⅰ	教授	田中 佐	6月 19日	
機械工学科	基礎制御工学	教授	和田 憲造	6月 17日	
機械工学科	基礎制御工学	教授	和田 憲造	6月 24日	
機械工学科	機械設計論	准教授	専徳 博文	6月 11日	
機械工学科	プログラミング言語	准教授	佐伯 壮一	6月 12日	
機械工学科	プログラミング言語	准教授	佐伯 壮一	6月 26日	
社会建設工学科	テクニカルコミュニケーションⅠ	准教授	Karim Rezaul	6月 16日	
社会建設工学科	テクニカルコミュニケーションⅠ	准教授	Karim Rezaul	6月 23日	
社会建設工学科	都市交通工学	准教授	田村 洋一	6月 16日	

社会建設工学科	都市交通工学	准教授	田村 洋一	6月 30日	
社会建設工学科	水理学Ⅰ	准教授	朝位 孝二	木曜日	
社会建設工学科	ものづくり創成実習Ⅰ	准教授	麻生 稔彦	6月 11日	
社会建設工学科	ものづくり創成実習Ⅰ	准教授	麻生 稔彦	6月 25日	
応用化学科	有機合成化学	教授	野口 三千彦	金曜日	期間中可
応用化学科	生物化学工学	教授	福永 公壽	水曜日	期間中可, 6/25 休講
応用化学科	界面物理化学	教授	比嘉 充	火曜日	期間中可, 6/17 休講, 6/24 中間 試験
応用化学(工学科)	分離工学	教授	中倉 英雄	月曜日	期間中可, 6/2 休講
応用化学科	化学工学Ⅰ	教授	山本 修一	月曜日	6/23 は除く
電気電子工学科	計測工学	教授	田中 正吾	6月 10日	
電気電子工学科	計測工学	教授	田中 正吾	6月 17日	
電気電子工学科	電磁波工学	教授	久保 洋	6月 17日	
電気電子工学科	電磁波工学	教授	久保 洋	6月 24日	
電気電子工学科	情報通信工学Ⅰ	教授	羽野 光夫	7月 1日	
電気電子工学科	情報通信工学Ⅰ	教授	羽野 光夫	7月 8日	
電気電子工学科	電気設計	准教授	平木 英治	6月 10日	
電気電子工学科	電気設計	准教授	平木 英治	6月 24日	
知能情報工学科	パターン認識	教授	浜本 義彦	6月 13日	
知能情報工学科	パターン認識	教授	浜本 義彦	6月 20日	
知能情報工学科	電気電子回路	准教授	松藤 信哉	金曜日	期間中可
知能情報工学科	離散数学Ⅰ	准教授	伊藤 暁	木曜日	期間中可
知能情報工学科	プログラミング演習Ⅲ	准教授	山口 真悟	月曜日	期間中可, 6/16、6/23 は除く

感性デザイン工学科	都市計画学	教授	鵜 心治	7月 8日	
感性デザイン工学科	感性デザイン工学特別講義	准教授	村上 ひとみ	6月 11日	
感性デザイン工学科	CAD・CGオペレーションⅠ	講師	長 篤志	6月 16日	
感性デザイン工学科	感性心理学	講師	松田 憲	6月 9日	
工学基礎教育	常微分方程式及び演習	教授	松野 好雅	6月 19日	
工学基礎教育	常微分方程式及び演習	教授	松野 好雅	6月 26日	
工学基礎教育	確率・統計	准教授	柳原 宏	6月 23日	
工学基礎教育	確率・統計	准教授	柳原 宏	6月 30日	
工学基礎教育	確率・統計	准教授	柳原 宏	7月 7日	

## 平成20年度(後期)公開授業一覧 後期公開授業実施期間

11月25日(火)～1月26日(月)

学科	授業科目名	授業実施者		実施日時	
		職	氏 名	月 日	
機械工学科	工業熱力学Ⅰ	教授	加藤 泰生	11月 27日	
機械工学科	工業熱力学Ⅰ	教授	加藤 泰生	12月 1日	
機械工学科	機械工作学	教授	南 和幸	12月 8日	
機械工学科	機械工作学	教授	南 和幸	12月 15日	
機械工学科	機械工学実験	助教	佐藤 克也	11月 25日	
機械工学科	機械工学実験	助教	佐藤 克也	12月 2日	
機械工学科	機械工学実験	助教	野田 淳二	11月 25日	
機械工学科	機械工学実験	助教	野田 淳二	12月 2日	
社会建設工学科	複合構造工学Ⅱ	准教授	吉武 勇	水曜日	11/26を除
社会建設工学科	水理学Ⅱ	教授	羽田野 袈裟義	11月 25日	
社会建設工学科	水理学Ⅱ	教授	羽田野 袈裟義	12月 2日	
社会建設工学科	水理学Ⅱ	教授	羽田野 袈裟義	12月 9日	

社会建設工学科	水理学Ⅱ	教授	羽田野 袈裟義	12月 16日	
社会建設工学科	構造力学Ⅱ	教授	清水 則一	月曜日	12/1・1/26 を除く
社会建設工学科	土木振動学	教授	山本 哲朗	12月 3日	
社会建設工学科	土木振動学	教授	山本 哲朗	12月 10日	
応用化学科	化学工学Ⅱ	教授	山本 修一	12月 8日	
応用化学科	化学工学Ⅱ	教授	山本 修一	12月 15日	
応用化学科	化学工学Ⅱ	教授	山本 修一	12月 22日	
応用化学科	有機反応化学	教授	上村 明男	火曜日	
応用化学科	機能高分子化学	教授	堤 宏守	金曜日	
応用化学科	分光化学	准教授	江頭 港	金曜日	12/5を除く
電気電子工学科	デジタル回路	教授	三好 正毅	12月 5日	
電気電子工学科	デジタル回路	教授	三好 正毅	12月 12日	
電気電子工学科	電気エネルギー工学	准教授	崎山 智司	12月 3日	
電気電子工学科	電気エネルギー工学	准教授	崎山 智司	12月 10日	
電気電子工学科	電子物性学	准教授	甲斐 綾子	12月 12日	
電気電子工学科	電子物性学	准教授	甲斐 綾子	12月 19日	
電気電子工学科	電子物性学	准教授	甲斐 綾子	1月 9日	
電気電子工学科	電子物性学	准教授	甲斐 綾子	1月 23日	
電気電子工学科	デジタル信号処理	教授	三木 俊克	11月 26日	
電気電子工学科	デジタル信号処理	教授	三木 俊克	12月 3日	
知能情報工学科	人工知能	教授	木戸 尚治	木曜日	
知能情報工学科	ニューラルネット	教授	大林 正直	火曜日	
知能情報工学科	数値計算	教授	中村 秀明	火曜日	
知能情報工学科	言語処理系	教授	田中 稔	金曜日	
感性デザイン工学科	図学	教授・ 助教	中園・山本	月曜日	
感性デザイン工学科	ニューロコンピューティング	准教授	守田 了	12月 15日	
感性デザイン工学科	ニューロコンピューティング	准教授	守田 了	12月 22日	
感性デザイン工学科	建築材料・構工法Ⅰ	准教授	李 柱国	12月 1日	

感性デザイン工学科	建築材料・構工法Ⅰ	准教授	李 柱国	12月 15日	
感性デザイン工学科	人間環境工学Ⅱ	講師	後藤 伴延	11月 28日	
感性デザイン工学科	人間環境工学Ⅱ	講師	後藤 伴延	12月 26日	
循環環境工学科	環境物理化学Ⅰ	教授	比嘉 充	月曜日	
循環環境工学科	環境物理化学Ⅱ	教授・助教	堀・隅本	木曜日	
循環環境工学科	環境生物学	教授	福永公寿	木曜日	
工学基礎教育	確率・統計	教授	栗山 憲	12月 1日	
工学基礎教育	確率・統計	教授	栗山 憲	12月 8日	
工学基礎教育	応用物理学Ⅱ	准教授	荻原 千聡	11月 26日	
工学基礎教育	応用物理学Ⅱ	准教授	荻原 千聡	12月 3日	
工学基礎教育	応用物理学Ⅱ	准教授	荻原 千聡	12月 10日	
工学基礎教育	応用物理学Ⅱ	准教授	荻原 千聡	12月 17日	

これら前後期で多数の公開授業を実施し、前期については39名、後期については21名、合計のべ50名の参加者を得た（複数回参加している教員もいるため単純に和とはならない）。工学部では教職員が多忙なため、公開授業に時間的に日程を合わせられないことをかんがみ、公開授業の回数を増やしたが、あまり積極的な参加がされているとは言いがたい状態である。平成20年度内に一度も公開授業を見に行かなかった教員は123名に達し、これは工学部の総教員数173名の71%にもものぼる。次年度からは教員あたり1年に1回はFD活動に参加することを決めており、学科ごとの参加者のチェック体制、および学科長会議などでの不参加者のフィードバック体制も作り上げているので、改善が見込まれよう。あるいは何らかのペナルティーを真剣に考える時期に来ているのかもしれない。

公開授業では授業参観した教員から感想や指摘などをレポートしてもらうことにしている。観想や指摘点を以下に列記する。

## ●優れていると思われる点

### 説明

- ・声も適切な大きさであった。
- ・声は聞き取りやすい。
- ・マイクを使用しており、声が聞き取りやすい。
- ・Japanese was not used in this class. Of course, it is quite natural for you. However, this point is very important.
- ・十分な時間の参観ができなかったが、プロジェクタを用い、要点をまとめているため理解しやすい講義になっている。
- ・この授業は英語で行われるため、まずは教員と学生の意思疎通が重要であると思われる



が、演習問題の説明や解答の導き方などについて学生への問いかけを繰り返し行っている点はよいと思われる。

- ・学生に質問をして学生に答えさせ、授業に参加させようとしている点。
- ・学生を講義に参加（英会話）させようと積極的に働きかけている点。
- ・一班あたりの人数を4人にしているところが良い。学生らがディスカッションをしながら橋梁の制作に取り組んでいる。班内の人数が多いと何もしない学生がでてくるのでちょうど良い人数である。
- ・学生がいきいきと自分たちの班で作った作品の強度を測定し、前回の作品に比べてどこが変わり、何が強度を上げたのかを教官と話し合いながら考えようとしていたこと。
- ・特に横倒れ座屈による破壊を、自分たちや他の班の作品で起こりそうとか起こったとかを良く理解していたこと。
- ・自分たちが考えていた破壊モードと実際の破壊との差はなぜなのかを教官と話しながら考えようとしていたこと。
- ・学生に2回にわたって模型を作らせているが、強度的な改善が図られるように各班を競わせるようにしていること。
- ・壊れた模型をもとに、学生に破壊理由を考察させ、前回模型との改善プロセスを含め、考えて話させるということを習慣づけるような授業づくりになっていること。
- ・学生自らが構造・美観を考慮してデザインした橋梁模型を小グループ（班）で協力し合いながら製作するため、デザイン能力やコミュニケーション能力を高め合うことができる。また、その過程を経て製作した橋梁模型について、班ごとにその耐力（重量効率）を競い合うため、模型の構造性能評価を事前に考察し、それを載荷試験によって確かめ、さらにその破壊機構を基にあらためて構造性能について考えるなど、学生にとって一連の過程で学ぶことは多いものと思われる。特に、一度載荷試験を行った上で、その破壊機構を考察し、その反省を踏まえて次の橋梁模型を設計～製作～試験～考察とつなげることができるところは素晴らしい。破壊試験後に、前回の試験結果を踏まえた上で、どのように改良を図ったかなど、その破壊機構を含めて学生に考えるヒントを与えられている点も優れている。
- ・あらかじめレジメを作成されているので、学生は板書におわれることなく聞けるようだ。
- ・大きな声で説明し、学生が理解するように熱意が強い。
- ・重要な点を指摘する等授業の進め方が優れている。
- ・記号を羅列する説明ではなく、たとえば「限界水深のicは・・・」などと説明されているのでわかりやすいと思う。
- ・担当教員は、二つの表示方法を使い分けることで、学部生が水理学で理解すべき重要な点を効果的に理解できるよう努められていた。担当教員の図表に関する説明を図表のとなりに書き込ませることで、学部生が後から自分で復習しやすい状態を自然な形でつくられているものと考えられる。また、節目には、説明した内容の特に重要な点や理解するために必要なキーポイントについて再度簡潔に述べられていた。講義は、担当教員の声も大きく、ホワイトボードの活字も見やすく、大変理解しやすかった。朝早い授業にも関わらず、よそ見や寝ている学生も少なく、熱心に授業を聞いていた。
- ・試験問題に出すような重要な内容を強調している点。
- ・声が大きくて聞き取りやすく、板書の文字も大きく、丁寧に書いている点。
- ・授業終了後に、質問時間を設けている点。
- ・ケミカルエンジニアリングの導入授業を大人数の学生に対して実施し、教育の実効をあげることが、化学工学の科目が高校までの教科としてないだけにたいへん難しいと思うが、将来、学生の大部分が製造業へ就職することを考えると非常に重要なこと。この授

業では、ややもすれば無味乾燥になり、数式の羅列にとどまる内容を身近な例を引いて興味を持たせ、親しみやすい講義となっている。

今回は、ハーゲン、ポアズイユ、レイノルズ、ゾンマーフェルトなど歴史的な叙述と、ご自身の山本数の紹介もあり学生は興味を持てる内容だった。さらに、学生の理解を深めるため、学生自ら計算して内容を確認できるようにパワーポイントを周到に準備して優れている。

- ・元来、学部学生間では難しい授業と呼ばれている「電磁波工学」を、学生にわかりやすいように丁寧に教えられていた。
  - ・講義を通して丁寧な言葉遣いで説明されている。声の大きさ、速度ともに適切。
  - ・丁寧に講義をしている点。
  - ・今回から新しいアプリケーションを使用するようだが、学生が自習できるように、参考Webサイトや参考文献を紹介していた。
  - ・今後の授業予定、達成目標等を明確に学生に伝えていた。
  - ・声が大きく明快。
  - ・特殊解を求めるための一方法であることを、きちんと説明していること。
  - ・解の意味を理解させるために、実際に方程式に代入して確認させていること。
  - ・密度関数の説明として、離散型の相対頻度から説明したこと。
  - ・例題の説明が丁寧であったこと。
  - ・厳密な証明ではなく直観的な証明をすることでよりわかりやすい理解を促している。
  - ・教員が、学生の説明に適切な解説を加えて理解を深める工夫がされていた。
  - ・洋書を輪講形式で読み進める授業形態をとっている。担当学生は教壇に立ち、20分程度、自分の担当部分を日本語で訳す。また、数式の導出についてはホワイトボードに書いて説明する。
- 教員は担当学生の日本語訳の不適切な部分や、式の導出で不十分な部分を指摘していたが、対話的なので講義形式に比べ、学生の理解を直接把握し、促しやすいと感じた。また、担当学生の分担時間が適切であると感じた。
- ・最初に本日の講義予定をホワイトボードに書いてから講義を始められたこと。  
(自分の講義の参考になった。)
  - ・授業内容で、分離操作などの説明の際に、身近な例との関連を付け加えて説明していた点が、分かりやすかったと思う。
  - ・他科目とこの科目との関連などを説明しており、学生の中で、他科目との関連付けによる理解が深まると感じた。
  - ・伝熱の計算に関する内容であったが、式の物理的意味、直観的な理解の仕方、工学的・実用上の使い方などが丁寧に説明されていた。また、身近な現象との関係も説明されて、理解が深まった。
  - ・丁寧明快で理解しやすい。
  - ・講義内容およびその説明は良い。
  - ・ギリシャ文字の呼び方を説明したこと。
  - ・パワーポイントを使い、かつ学生がノートに書き取る時間をとって説明していたこと。
  - ・光の性質をまとめとして説明していたこと。
  - ・ポイントや注意すべき点を説明する際、その旨を宣言してから説明されている。
  - ・説明の言葉を一つ一つ丁寧に話されていると思った。
  - ・教科書と関連したスライドを見せながら、板書もまじえて、分かりやすく説明していた。
  - ・本題に入る前に補足事項(復習)を説明されていること。
  - ・数式の多い科目なので理解する時間を与えつつゆっくりと授業を行っている。

## 板書

- ・板書の文字も大きく一番後ろから十分判読できた。
- ・板書が読みやすい。
- ・黒板の文字が大きく見やすい。
- ・ホワイトボードの使い方が良い。(式に番号をつけること、アンダーラインをつけることなど)
- ・黒板(4面)に書いた順に、番号をつけていること。
- ・黒板の字が大きいこと。
- ・黒板の板書の仕方がそれほど早くなく適当な間隔を取りながら行っている。
- ・黒板の字は大きくて見やすい。
- ・板書が丁寧であり、式等の説明もわかりやすい。また、文字色を使い分けるなど、工夫が見られる。
- ・板書ではあるものの、図を多用して視覚的に理解しやすい工夫がされていた。
- ・板書の際に、ペンの色を効果的に変えている点が、わかりやすさを促していると感じた。
- ・ホワイトボードへの板書と講義中の声はいずれも適切・明瞭でわかりやすい。
- ・ホワイトボードに書く図や文字が大きくてみやすいところ。

## 資料

- ・講義の資料(配付資料やプレゼンスライド)がしっかり準備されている点。
- ・配布プリントが丁寧に作成されており、授業時間だけでなく、復習にも役立つことが可能で、理解を助けるのには、良いプリントであると感じた。
- ・当日に教授する配付プリントが準備されており、学生の理解度の向上に役立つような点は優れている。
- ・配布物のプリントが分かりやすく書かれている点。
- ・スライドの文字が十分大きい。
- ・配付されたプリントが過不足なく適切。特に、自書できるように工夫されており、学生もただ授業を聞くだけではなく、手を動かして覚えられる。
- ・プリントを配っていること。
- ・教科書以外にプリントを配布してよりわかりやすい説明を試みている。
- ・プリントを用いた授業の進め方は学生にとって理解しやすいと思われる。
- ・プリントも丁寧に作られていた。
- ・概要をプリントにて配布してあった。
- ・その日の講義の重要な点をプリントで配布することは良いと思う。
- ・PPTによる講義では、ポイント部分を中抜きしたレジメが配布されており、書き込みを促す工夫がされている。
- ・パワーポイントが丁寧に作成されている。
- ・講義に関係するところを、実際の作業現場の映像をみせることによって、実感させているところ。
- ・授業に関連するトピックスについて、プリントの配布により話題を提供している。
- ・特に重要な講義内容について、実際の実物資料(核酸)を回覧して、学生への興味を高めている。
- ・授業の進行に応じて、テキストのページ番号を適宜アナウンスしておられ、学生にとっては現在の講義箇所を確認する上でわかりやすい。

- ・講義中の重要な事項については、テキスト中のその部分を学生自ら精読させておられ、学生の授業への集中を持続するような工夫がある。

## 進め方と工夫

- ・図を用いて、説明しており理解が容易であった。
- ・授業中に学生の積極的な参加を促す進行の仕方。
- ・その場で英語で回答を書かせている点。
- ・学生の席を回り学生の書いたものを見て、その場で注意したり感想を述べている点。
- ・学生の自由な発想を否定しないように、常に言動に注意しながら会話や講習、模型作りのアドバイスをを行っている点。
- ・配布プリントを利用して、まず説明する概要を説明し、その後、同じところを式の誘導などを踏まえて詳細に説明される方法は、理解し易いと思われる。
- ・配布プリントだけでなく、場合によって、具体的な断面についてホワイトボードを利用して、説明されており、式の実際への対応などわかりやすい説明であったと思う。
- ・水面形をスライドで図示し、同時に、背景にある原理を説明することにより、理解を促している。
- ・学生が理解しにくいポイントの説明時に、板書・紙資料・プロジェクタを組み合わせ丁寧に説明されている。
- ・講義は、水理学の教科書だけでなく、独自のプリントを配布し、プリントの内容を中心に説明が行われていた。プリントには、流体力学を学習するためにイメージしやすい図表が掲載されており、その図表に関して、パワーポイントやホワイトボードを使用して、丁寧かつ明快に説明が行われていた。
- ・演習問題を解きながら、授業を進めている点。
- ・教科書中の頁を明示しながら、授業を進めている点。
- ・レポートの解答例をホームページ上に、公開している点。
- ・次回の授業内容を予告し、予習を促している点。
- ・授業科目の性質上、授業は数式の羅列となり、物理的に理解するのは難しいところであったが、簡単な実験装置を持ち込んで、体感することで内容を理解できるような工夫がなされていた。
- ・授業科目の内容を社会でどのように応用されているかを紹介することで、学生の授業科目への興味をわかしていた。
- ・教科書の内容を補うような分かりやすいスライドによる説明や、数式中の記号を丁寧に説明をすることで初学者につまずきやすい内容を十分に補っていた。
- ・スライドの中身を一部写させることで、静肅性が保たれ、なおかつ理解をうながすようにしている。
- ・説明の途中で、アプレットの事例を示すことにより、興味を引き付ける工夫がされている。
- ・(今日は、座学の日のように通常とは違うようだが) 説明に飽きたころに、実際にコンピュータを使う演習を組み合わせ、寝てしまったりすることがないように工夫されている。
- ・前回、中間試験を行ったようだが、その解答例を丁寧に解説している。
- ・授業で使うアプリケーション以外にも同種のアプリケーションの紹介があり、将来的に、役立ちそうな情報も紹介していた。
- ・アプリケーションの操作が複雑になり、ついていけない学生が居ると判断された場合は、

もう一度、手順を繰り返して説明されていた。

- ・学生との双方向が行われている。たとえば指名して解かせること、居眠りを適宜やさしく注意することなど。
- ・逆微分演算子を、逆行列と対応して説明したこと。
- ・物理の具体的な問題を題材にとり、微分方程式の意義および物理的な意味を説明し、またグラフを描いて説明しているなど。特に、終端速度の説明など、さすが流体力学の微分方程式の専門家ならでは。
- ・連続型確率変数の平均の式を、直感的に説明しようとしたこと。  
ただし、学生にとって分り易かったかどうかは、分らない。
- ・聴講している学生に、質問する時間も設定されており適切であった。
- ・途中で、個人名を名指しで（簡単な）質問をされていたが、集中力が途切れそうな時に有効だと感じた。
- ・授業開始時に、その回の講義内容の項目を板書するなど、授業の進捗目標を明示している。
- ・講義内容を過度に詰め込まず、余裕のある進度である。
- ・授業の途中と終了時に演習（例題解法）を取り入れている。
- ・授業中に学生に質問し、授業への集中を持続させるような工夫がある。
- ・プリントにしたがって大変丁寧に説明しておられました。式の導出もきっちりとわかりやすくされておられたので学生もついていけたような感じでした。
- ・教科書に既にある図でも、説明を加えながら段階的に図を板書することで、図の内容が分かりやすくなることがあり、説明方法の参考になった。
- ・定期試験に関連するキーワードなどのプリントが配付されており、学生が、どこを勉強すべきか分かりやすくなっており良い工夫と感じた。
- ・各内容を均等に説明するのではなく、基礎式を時間をかけて説明して、現段階で導出の理解が不要な式は運用の仕方のみ解説するなど内容にメリハリがつけられていた。
- ・学生の理解度を把握しつつ（反応を観る）講義を進める。
- ・幾何光学の公式を、図を使い、一番基本になることを示して証明したこと。
- ・パワーポイントで現在説明している箇所は青字にして、分りやすく工夫していたこと。
- ・説明の途中で学生への質問やレポート課題の提示をされ、講義時間中に学生の緊張感が途切れないう工夫されていると思う。
- ・学生に対し、積極的に興味を持たせ、手を動かすように指導する方法は見習う点が多いと思う。
- ・教科書以外に、プリントを配布し、そこに記入させる方法も見習う点と思う。
- ・宿題などの学習を促す努力とそのフォローが良くできていると感じた。
- ・パワーポイントを中心として講義を進めているが、スライドの内容また文字の大きさも適切で、後ろの席からも見やすいものであった。さらに、スライドショーの利用も効果的であり、講義の流れがスムーズであった。なお、スライドの内容は、講義前に資料として配布されており、学生の視点から、理解しやすい工夫がなされている。
- ・プロジェクターの利用だけでなく、黒板を利用して、用語、式また図などを適切に解説している。
- ・宿題解説→講義→宿題（演習）の流れが完成しており、流れはわかりやすい。
- ・多少変則的ではあるが、講義へのモチベーションを高めるための工夫をされている（工場見学を行う、電気主任技術者資格とのリンクについて解説など）。
- ・資格試験（電気主任技術者2種/3種）を元にした演習課題（宿題）を学生に板書させ、説明させるとともに、学生同士で採点しあう方法（少なくとも眠気が起こらないような

配慮)。

- ・演習問題の解答に関し、式、単位に十分配慮して分かりやすく解説されていたこと。
- ・教員が適宜学生とコンタクトを取っている。
- ・学生に考えさせる時間を与えている。
- ・ゆっくりと余裕を持って講義を進行されていること。
- ・補助資料（プリント）を配布され、演習の時間（講義内容の理解の確認）を設けられていること。
- ・お話しスピードは適当であり、声も聞きやすく、板書の文字、スピード、色使いも良いと思う。
- ・科目の特徴かもしれないが、ロジックがしっかりしている内容で、分かりやすく感じた。
- ・授業当初に前回の復習を行うなど、理解度を深める努力がされていた。

## その他

- ・ほとんどの学生はテキストを開き、板書をノートに取っており、効果的な講義方法であると思った。
- ・学生が楽しんでやっているところが良い。
- ・作品の接着不良に依る破壊と実構造物の継ぎ手の破壊との差を理解しつつ、接着の難しさやある場合には手抜きにより、強度が上がらないことを実感していたこと。
- ・実際の構造力学がどのような場面で必要なのかを経験できる点。
- ・T Aとの連関がよくとれ、授業がスムーズに行われている。寝ている学生はT Aが起こす。
- ・返却しているレポートに詳細なコメント等を記入している点。
- ・私語をする学生がいない。
- ・教員の真面目さが感じられる点。
- ・Eについて成り立つ公式を説明し、簡単な場合には証明したこと。  
 $E(X+Y) = E(X) + E(Y)$ が、実は証明が難しいことをのべたこと。  
理由まで簡単に述べれば、もっと良かったかもしれない。
- ・原書のテキストで、学生が板書して説明する方式であった。
- ・講義の声が小さい→改善すべき点にも挙げさせていただいたが、逆に、聞き取ろうとして集中させる手段（よく聞こうとするためには、前の方に座るべきだという考え）であれば、これもまた一案かな？とも思った。
- ・出欠を名簿への署名と点呼の複数回行っている。
- ・非常に熱意の溢れる講義だった。
- ・パワーポイントがシンプルで図と文字が見やすく作られていた。
- ・教科書の内容に即してページ数を指示していること。
- ・講義内容の要点は、何度も繰り返し説明しており、学生の理解を促している。
- ・理由を挙げた上での参考書の推薦。
- ・講義内容のうち、学生は既に知っているだろうが、ともすると意味が理解できていないであろう「定理」について、単位を機軸にして、直感の働くような卑近な例を挙げて説明していたこと。
- ・講義中の声は講義室最後尾まで明瞭に聞こえる。
- ・静かな環境の中で講義・演習が進められている。
- ・広いD31の中で少なめの学生が余裕をもって座っている。隣と一席空いているので私語が少ない（前後の私語は多少あったが教室全体がざわつくといった雰囲気にはなってい

ない。)

- ・穏やかな口調で講義がなされている。
- ・班別英語のプレゼンテーションが行われていた。班ごとに努力している様子がうかがわれた。ここまで指導されるのに苦労されたことと思う。
- ・講義によって学生の英語によるプレゼンテーションする能力の育成に関して成果が表れている感じた。
- ・寝ている学生に対し、起きて授業を聞くようにという指導を細かく行っていた。
- ・説明が丁寧、話すスピードがゆっくりなのでわかりやすかった。
- ・居眠りする学生がとても少なかった。

## ●改善を検討すべきと思われる点とその理由

### 説 明

- ・模範解答を写していく学生の姿が多かったが、学生自身の解答がどのように評価されているかがやや気になった。
- ・現象を説明する際には、ビデオや写真などで視覚的に理解できるような工夫が必要ではないか。
- ・水理学で使用される数式や記号を言葉で説明されているときがあり、説明される内容を100%その場で理解するのは難しいと感じた。  
その日の授業で、特に頻繁にでてくる専門用語や数式・記号などをピックアップし、授業のはじめに再度復習しておけば、その日の授業に対する理解度がより一層深まるものと思われる。
- ・説明が聞き取りにくい。

### 板 書

- ・ノートが取りやすい板書を心がけていただきたい。
- ・一番後ろから拝見させていただいたが、一番後ろの席からでは、ホワイトボードに書かれる文字が小さいように感じた。
- ・板書の字をもう少し、ていねいに書いて欲しい。
- ・新しい公式などを板書する際、先頭に●をつけるなどをすると見やすくなる。
- ・板書の文字が後ろの方からだと見えにくいように感じた。

### 資 料

- ・The characters colored in pink on the dark back in the Power Point are a little bit harder to be seen.
- ・配布されたプリントに重要事項が示されているが、追加説明もされているようだ。プリント中に追加説明を記入する欄を設け、ノート代わりにさせれば、そのプリントで完結した資料となるのではないか。
- ・テキストをダウンロードするように指示されているそうだが、講義に持参していない学生が多々見受けられた。講義に支障はないのか。
- ・図の中の上付き文字と下付き文字のみ少し小さいように思われる。

## 進め方等

- ・ 1。の働きかけに対して、積極的に発言しようとする学生と、まったく発言しない学生がいること。資料の難易度、分量などを工夫する余地があると感じた。
- ・ 教官 1 名で TA4 名であるが、教官をもう最低一名は増やすべきであろう。学生数 80 名を教官一人の責任で管理するのは大変である。特に刃物を使用するので怪我など安全管理のためには助教、技術職員を複数動員する必要がある。
- ・ 荷重の掛け方を上路や下路橋などの形式の違いで変えられるようになると思う。
- ・ 鉛が安全ではない物質で、かつ散らばるようなので別の材料に変更されてもよいかと思う。
- ・ 教室のスペース上、困難のようであるが、2 グループに分けて載荷試験が行われている。学生にとっては、全ての試験状況を観察・考察することが望ましいと思われるので、次年度からは載荷試験の回だけでも別教室で行ってはどうか？
- ・ 講義が一方通行気味なため、講義に集中している学生とそうでない学生の差があるように感じる。
- ・ 特に強調するときは、赤色などの色の違うマーカーを使うと、さらにわかり易くなると思う。
- ・ 説明文を書く際、区切りなどを入れると、学生にわかり易くなる。
- ・ 逆微分演算子の最初の説明（定義の説明）に、もう少し時間をかけると学生に理解しやすくなるのでは。
- ・ E について成り立つ公式を説明し、簡単な場合には証明したこと。  
 $E(X + Y) = E(X) + E(Y)$  が、実は証明が難しいことをのべたこと。  
理由まで簡単に述べれば、もっと良かったかもしれない。
- ・ 話し方が少し早いのではないか。
- ・ 学生が少しざわつくとき声が聞き取りにくくなるので、マイク使用が望ましいと思う。
- ・ 最後の授業なので少し盛りだくさんになって、後半は駆け足になっていた。早くなるとわかりづらくなり、学生もついていくのに疲れて寝ている学生が増えたような感じだった。
- ・ ほかの授業でされておられるかもしれないが、現実の堰（この日の授業は堰と水門の水理学でした）を見て、水の流れのイメージをつかみやすくするとよかったかもしれない。
- ・ 1 コマ目であったためか、遅刻する学生がやや多かったように感じた。この点については、授業の開始時に何か（小テストなど）することで参集状況が改善できるのではないかと感じた。
- ・ 話し方を改善すれば、講義がずっと良くなると思う。具体的には  
(1) 声を大きく、発音を明瞭にして、聞き取りやすくすること。  
(2) 話し方をゆっくりすること。話し方そのもののスピードが速すぎる。  
(3) 話の焦点が学生に分りやすくなるようにすること。そのために、説明が詳しくなりすぎないように、発散する印象を与えないように。
- ・ 学生の能力との兼ね合いかと思われるが(今日に限ってかも知れないが出来が酷かった)、宿題の解説にかなり時間を掛けていた。できる学生にとっては非常に退屈な時間になると思われる。解説にもプロジェクターの利点を生かせるのではないか？
- ・ 演習問題の解答に時間がかかりすぎたため、予定した講義内容をこなせなかったにもかかわらず、次回の演習問題が提示されていた。



- ・演習問題を間違えた場合の対処方法：どこをどう間違えているかをもう少し端的に指摘する方法論はあるだろうか？
- ・講義における演習問題の位置づけが多少気にかかる。

## その他

- ・遅刻に対する指導をしていただきたい。
- ・寝ている学生に対しては、起こすなり、何らかの緊張感を持たせる工夫をされると良いかと思う。
- ・何人かの学生が講義資料を忘れてきたこと。これに関しては、教員から大いに注意を促すことが必要と感じられた。
- ・もう少し話すスピードを抑えた方が学生にとってはいいのではないか？
- ・遅刻者が多少目立つ。
- ・授業のはじめに再度復習しておけば、その日の授業に対する理解度がより一層深まるものと思われる。
- ・受講生がもう少し少なくなると、より効果が上がると思われるが、これは致し方ないことではある。
- ・もしも演習の時も TA が 1 名しかつかないのであれば、少ないように感じる。
- ・後ろに座っている学生は、スライド下部が見えにくい。(今日は特別?)
- ・寝ている学生がいる。(私語をするより良いかも知れない)
- ・帽子をかぶっている学生がいる。
- ・寝ている学生が目立つ。注意をすべきと思う。
- ・講義とは関係ないことをしている学生も目立つ。例えば、携帯でメールをしている。注意をすべきと思う。
- ・遅刻してくる学生がやや多いように感じる。
- ・カバンだけ机の上であり、学生がいない席が後方座席に多い。
- ・声はもう少し大きい方がよいと思う。
- ・ノート PC と画面が遠い配置なので、レーザーポインタ等を使うと指示が楽なのではないか？
- ・操作に対する質問は、主に後ろに座っている学生から発せられているようだ。操作画面の見やすい前に座らせるように促すと良いかもしれない。
- ・学生の方をもう少し見て、講義した方が良い。
- ・私語が多いので、適切に注意した方が良い。(もっとも、私語をしていた学生たちは出席表に名前を書いたらすぐに退席したので、そのあとは静かになった)
- ・授業開始から約 10 分くらいまで特に後ろの席に座っている学生数人が騒がしかったので適切な指導をしてもよいのではないか。
- ・教室が広いのでマイクを使って講義をする方がよいのではないか。
- ・学生の板書の文字が小さすぎたので、指導をすべきであった。
- ・講義の声が小さいように感じた。(後ろの方は、聞き取れにくいのでは?)
- ・声がやや小さく、教室の後方ではやや聞き取りにくい。
- ・遅刻者、名簿に署名後すぐに退出するもの、携帯でメールやネットをしているものなど、受講態度が悪い学生に対して、特段の注意喚起がない。他の学生の授業集中に悪影響を及ぼすこともあるので、改善が望ましいと思う。受講者が多いこともこれらの原因になっていると思われるが。
- ・進度が若干速すぎると思われる。

- ・ 学生の様子を見ていると、板書を写すのに追われて講義内容をその場で考えようという姿勢があまり見られなかった。
- ・ 90分は長いので、途中で少しブレイクがあるとよいと思う。
- ・ 先生が説明を始めた後、いつまでも配布された新聞を読んでいる学生がごく少数ですがいるようだ。
- ・ 講義の途中に質問に回答した学生に平生点を与えているようだが、受講者全員にその機会があるか疑問に感じた。
- ・ 休みの学生が多いよう見受けられた。宿題などでフォローをするとよいと思う。
- ・ 教室（D31）の白板のレイアウトが授業進め方とミスマッチしているようで、教室を変更されてはどうか？
- ・ 講義前半において、私語をする学生が散見され、教室が落ち着かない雰囲気があった。また、講義へ遅れてくる学生が少し多い。学生が講義の最初から集中できる工夫が必要である。
- ・ パワーポイントの文字が最後列からはやや小さく感じる部分もあった。
- ・ D31は学生が余裕ももって座ることができるが、一方でこの教室の固定式ホワイトボードは遠く、移動型ホワイトボードは小さいため、板書を行う講義としては適切な講義室ではないように思える。
- ・ 発表を聞いている学生からの質問をさせるために、質問を評価項目に入れて、義務化するのも一つと思われる。
- ・ 授業中に質問するなどの、学生とのコミュニケーションを行っていない。  
理由：このことにより、受講生の集中力や参加意識が向上すると思うから。
- ・ 「改善を検討すべき」とは直接関係ないが、学生をあてて、前で問題を解かせたが、ポインタ代入文は3人が間違えていた。毎回の講義が身につけておらず、何となくノートを取っている学生もかなりいるものと思われる。レポートでのチェックも、本人がやったかどうか分からないので、難しいかと思う。学生の理解度に併せて進み具合を変えておられるのか？変える必要があると言っているのではないが。
- ・ もう少し受講側に刺激があってもよいのではないかと思った。

## ● その他

- ・ 講義開始後 30分過ぎて2名の学生が遅刻して入ってきた。15分以降の遅刻は入室禁止にするなど工学部統一のルールが必要である。
- ・ 学生が思ったより英語で答えていたこと。もっと黙っているのでは無いかと思っていた。
- ・ 学生の笑顔が印象的だった。
- ・ 載荷試験方法はほとんどが手作りで、作業も大変なようなので、(予算にもよるが) 載荷フレーム・載荷装置等があればもっと作業は楽になるかと思う。現状では教員・TAの負担が大きく、今回のような載荷装置の限界を超えるようなモデルに対しても対応できるため、次年度に向けて検討した方がよいかと思う。
- ・ 授業中に教室を出たり、居眠りする学生が多いように感じた。そのことについて授業後、朝位先生と話をしたが、そのような学生を注意するとまじめに授業を受けている学生から、注意することに対して、無駄だというようなクレームがくるとのことに対応しようが無いような話を伺った。授業を受けることに対する学生の温度差が非常に激しいことがこのような結果を生んでおり、温度差をなくすことの必要性を感じたが、具体的な取り組みはイメージできなかつた。今後も継続的に参観を行って、考えてみたい。
- ・ 他の教員の授業を参観することで、自分の授業の進め方にプラスになる点多くある

ことが分かった。

- ・授業中にトイレ等で退席しない指導をして欲しい。
- ・朝一番の時間帯のためか、遅刻者が多いと感じる。
- ・教科書ならびに配布物を利用しながら、授業を進めているにも関わらず、教科書等を持参しない学生が散見された。授業開始後、30分以上経過しているにも関わらず、数名の学生が遅刻している。出席者は80名程度であり、出席率は高いと思われる。
- ・ほぼ満員の状態で、午後の1番の授業であったので部屋がとても蒸し暑かった。集中力の欠けている受講生もいたようなので、気候に合わせて臨機応変にエアコンを使えたらと思った。
- ・同授業は前半部を私が担当しているので、後半部の進め方を拝聴し参考になった。
- ・後ろでござごそやっている不届き者は、授業の進行を考えるとやはり無視するしかないのだろうか（クラスの大きさの割に行儀の悪い学生が少ないとは思いますが）
- ・テキストを持参していない学生が多い（教室後方に座っている学生の大半）ようだが、演習のときは通常使われていないのか。
- ・講義の進行を考えると仕方ないかも知れないが、学生はノートを写すだけになっているように思われる。
- ・新しいアプリケーションの説明は難しい。将来、使おうと思っている学生には有益な授業だったと思いますが、興味の無い学生（聞く気の無い学生）には、難しい授業だったかもしれない。
- ・後ろの席からは、ホワイトボードの下が見えないので、ホワイトボード全体を上方にあげるなどの処置が必要ではないか → 学部長・事務長に知らせて善処するようにしてほしい。（回答を求む）
- ・全体的にはよく考えられた講義になっている。
- ・電々2204室は前方にしか出入り口がなく、参観が授業の邪魔になった。教室を考慮すべきである。
- ・学生が、講義前に揃わず、始まってからだらだらと教室に入ってくる。
- ・講義中に入入りが多い。気にならないか？（いくら注意しても聞かないのか？）
- ・おそらく試験前の最後の講義で、受講生が多い中での参観を許可いただいたことに感謝する。
- ・エアコンがよく効いていたのだが、学生にエアコンの効きすぎかどうかをたずねておられたのはよかったと思う。TAを授業に臨席させて授業管理させておられたのは、後ろでも目が光っているので大変よいと思った。
- ・式の説明をして演習問題を行えば理解が深まると考えていたが、式自体を掘り下げて説明することが効果的であることを認識することができた。
- ・1時限目の講義とはいえ、眠っている学生（はじめから聞く気がない学生）が多すぎる。10名以上いた。工学部の将来はあるのか？
- ・講義時間の途中に、5分間程度の休み（質問時間もかねる）をとることについては、今後の検討事項となると思う（経験の分析が必要か）
- ・受講人数が多すぎて、A204では教室が狭いように感じた。
- ・講義用ppt及びその印刷配布物等、受講生に講義内容を解説するための準備はされていたが、受講生がノートをとる機会が少ないように見えた。
- ・私の講義でもそうであるが、無断で入退室をおこなう学生が目立つ（数名はTAに断っていたようではあるが）。全学的に、礼儀・マナーの大切さを理解させることが必要であろう。
- ・TAの字がきれいで読みやすい資料となっている。

- ・授業が始まっているのに、チョコレートを食べたり、携帯を操作したり、レポートを提出した数分後に退出したり、また、お話しをされるまでざわついたり、学生の態度の悪さが目についた。
- ・わりあい学生がそわそわしているのが気になった。
- ・テキストを精読した最初の学生の声が小さく、聞き取りにくかった。他の学生も同時に集中できるよう、学生への注意が必要かと思った。
- ・パワーポイントのコピーについては、教科書と重複する内容のためか配布されていなかったようだが、学生がスクリーンに集中するためには、その方が良いのではないかと感じた。

### 第3節 授業評価表彰

工学部で行われているすべての専門授業は、学生による授業評価を受けている。そこで、授業改善のため平成15年度より「学生授業評価アンケート」中の「総合評価」にもとづき、前期・後期の優れた授業を表彰して来た。平成17年度から評価項目が変更されたことに伴い、選考基準を以下のように変更した。

評価項目の内、次の3項目

項目2・・・理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明されましたか？

項目9・・・あなたは授業の内容を理解しましたか(実験演習の場合は、内容理解や技能のレベルは向上しましたか？)

項目10・・・この授業はあなたにとって満足のものでしたか？

を選び、各平均点の和(15点満点)が12点以上のものを「優秀授業」として表彰する。しかしこの方法でも、受講人数や必修・選択の別によって「受講人数の少ない授業が高得点となる」とのクレームが生じたため、

1. 各授業のこの3項目の和と受講者数の分散図を作成して、それを直線回帰し
2. その式によって授業ごとの3項目の和の数値を補正し
3. 補正した値を使って高得点のものから授業評価表彰を行う

こととした(平成19年度評価点検委員会・工学部学科長会議決定)。式の詳細は省略するが、そのデータをもとに優秀授業を選定し、審議の結果評価対象となった授業を下記に示す。評価対象として10名以上の授業評価の回答を得た授業とすることとした。その中から学生からの評価の高かった授業72を選びそれらを優秀授業として、またそれらの中で学科内で最も評点が高かった授業を最優秀授業として表彰した。表彰状は授業科目に対して授与した。以下に表彰を受けた授業(担当教員名は省略)の一覧を示す。

#### 平成19年度優秀授業表彰一覧 工学部

番号	開設科目名	担当教員名	学科	コース	学期	学年	表彰種類
1	ものづくり創成実習Ⅰ	江鐘偉、望月信介、 専徳博文、三上真人、 森浩二	機械	昼	後期	2	最優秀授業
2	流体力学Ⅰ	望月信介	機械	昼	後期	2	優秀授業
3	流体力学Ⅰ	望月信介	機械	昼	後期	2	優秀授業
4	プログラミング言語	佐伯壮一	機械	昼	前期	3	優秀授業

5	内燃機関工学	小嶋直哉	機械	昼	前期	4	優秀授業
6	機械情報工業力学	田之上健一郎	機械	昼	後期	1	優秀授業
7	工業英語	清水則一ほか	社建	昼	前期	4	最優秀授業
8	構造力学演習Ⅰ	清水則一	社建	昼	前期	2	優秀授業
9	構造力学Ⅰ	清水則一	社建	昼	前期	2	優秀授業
10	ものづくり創成実習Ⅰ	麻生稔彦	社建	昼	前期	3	優秀授業
11	測量学Ⅰ	吉武 勇	社建	昼	前期	3	優秀授業
12	建設設計学	古川浩平・田村洋一	社建	夜	前期	4	優秀授業
13	鋼構造工学Ⅱ	麻生稔彦	社建	夜	後期	3	優秀授業
14	鋼構造工学Ⅰ	麻生稔彦	社建	夜	後期	3	優秀授業
15	衛生工学	今井 剛	社建	夜	前期	3	優秀授業
16	構造力学Ⅱ	清水則一	社建	昼	後期	2	優秀授業
17	建設情報基礎工学	進士正人	社建	昼	後期	1	優秀授業
18	複合構造工学Ⅱ	吉武 勇	社建	昼	後期	3	優秀授業
19	鋼構造工学Ⅰ	麻生稔彦	社建	昼	前期	3	優秀授業
20	マトリックス構造解析学	麻生稔彦	社建	昼	後期	3	優秀授業
21	社会建設基礎工学	吉武 勇ほか	社建	昼	後期	1	優秀授業
22	土質力学演習Ⅱ	兵動正幸	社建	昼	後期	2	優秀授業
23	界面物理化学	比嘉 充	応化		前期	3	最優秀授業
24	化学工学Ⅰ	佐伯 隆	応化		前期	2	優秀授業
25	高分子化学	大石 勉	応化		前期	3	優秀授業
26	ものづくり創成実習Ⅰ	堀 憲次、中山雅晴、 吉本 誠、隅本倫徳	応化		前期	2	優秀授業
27	分析化学	吉本信子	応化		前期	2	優秀授業
28	遺伝子工学	赤田倫治	応化		後期	3	優秀授業
29	応用化学工学実験Ⅲ	佐伯 隆、中倉英雄、 赤田倫治、星田尚司、 小淵茂寿	応化		後期	3	優秀授業
30	分離工学	中倉英雄	応化		前期	3	優秀授業
31	微生物学	赤田倫治	応化		前期	2	優秀授業
32	反応工学	吉本誠	応化		後期	2	優秀授業
33	応用化学工学演習Ⅱ	森田昌行、江頭 港、上 村明男、中山雅晴、佐 伯 隆、赤田倫治、星田 尚司	応化		前期	2	優秀授業
34	電気回路Ⅱ	山田陽一	電電	昼	前期	2	最優秀授業
35	半導体工学Ⅰ	山田陽一	電電	昼	前期	3	優秀授業

36	数理計画法	若佐裕治	電電	昼	後期	3	優秀授業
37	コンピュータハードウェア	西藤聖二	電電	昼	後期	3	優秀授業
38	ものづくり創成実習Ⅰ	明石卓也、平木英治、 倉井 聡、河本直哉、 田内 康、松原 篤	電電	昼	前期	2	優秀授業
39	アナログ回路	浅田裕法	電電	昼	後期	2	優秀授業
40	プログラミング	西藤聖二	電電	昼	前期	3	優秀授業
41	基礎電子回路	久保 洋	電電	昼	前期	2	優秀授業
42	システム制御Ⅱ	石川昌明	知情	昼	前期	3	最優秀授業
43	システム理論	石川昌明	知情	昼	前期	3	優秀授業
44	応用統計学	河村 圭	知情	昼	後期	2	優秀授業
45	情報理論	平林 晃	知情	夜	後期	3	優秀授業
46	電子計算機	山鹿光弘	知情	夜	前期	3	優秀授業
47	コンピュータグラフィックス	平林 晃	知情	夜	前期	4	優秀授業
48	システム理論	石川昌明	知情	夜	前期	4	優秀授業
49	CAD・CGオペレーションⅠ	長 篤志	感性		前期	2	最優秀授業
50	プログラミングⅢ	水上嘉樹	感性		前期	3	優秀授業
51	空間デザイン学	内田文雄	感性		前期	2	優秀授業
52	情報デザイン実習Ⅰ	木下武志	感性		前期	2	優秀授業
53	人間計測学	松田 憲	感性		後期	3	優秀授業
54	空間表現Ⅰ	内田文雄、眞木利江	感性		前期	2	優秀授業
55	空間表現Ⅱ	眞木利江	感性		前期	2	優秀授業
56	メディア情報工学総論	多田村克己、三池秀敏、 守田 了、木下武志、 松田 憲、長 篤志、 水上嘉樹	感性		後期	1	優秀授業
57	建築設備工学	中村安弘	感性		後期	3	優秀授業
58	造形実習	木下武志	感性		後期	2	優秀授業
59	情報デザイン実習Ⅱ	木下武志	感性		後期	2	優秀授業
60	空間デザイン学総論	中村安弘、内田文雄、 中園真人、稲井栄一、 嶋心治、眞木利江、 後藤伴延	感性		後期	1	優秀授業
61	感覚知覚生理学	三池秀敏、長 篤志	感性		前期	3	優秀授業
62	空間デザイン史Ⅰ	眞木利江	感性		後期	2	優秀授業
63	空間計画学Ⅱ	中園真人	感性		後期	3	優秀授業

64	材料環境学	小松隆一、喜多英敏、 今村速夫、中山則昭、 諸橋信一	機材		後期	3	最優秀授業
65	有機量子化学 II	笠谷和男	機材		後期	3	優秀授業
66	機能材料工学実験 II	喜多英敏、今村速夫、 酒多喜久、田中一宏、 植村一広、庄井博子	機材		後期	3	優秀授業
67	ものづくり創成実習 II	岡本浩明、森田由紀、 笠谷和男	機材		後期	2	優秀授業
68	線形代数及び演習	西山高弘	共通		後期	1	最優秀授業
69	応用解析 I	栗山 憲	共通		後期	2	優秀授業
70	常微分方程式及び演習	栗山 憲	共通		前期	2	優秀授業
71	線形代数及び演習	西山高弘	共通		後期	2	優秀授業
72	材料設計シミュレーション	仙田 康浩	共通		後期	3	優秀授業

本年度行った、点数補正による授業評価表彰では、

1. 受講者人数による点数の不公平さの是正

を期待したものであるが、実際は補正前後でそれほど大きな差は見られなかった。一方、操作自身が大変煩雑であり、補正係数はその年度ごとの分散を見て決定することから

2. 事務的処理によって簡便に処理できないこと

3. 補正係数の意味合いについて、いまだその根拠が見出せないでいること

などの問題点をはらんでいる。とりわけ上記2については、きわめて深刻であり、本年度の補正計算は昨年度の評価点検委員長の手で行われたが、それ以外のものには単純ではなく、事務職員の手で行うことは現状では不可能である。このため、21年度も授業評価表彰を行うためには早急な改善策が絶対必要であり、現在審議中である。

## 第4節 全学FD研修会への参加

平成20年度も山口大学FD研修会への参加を積極的に行った。工学部からの参加教職員を次の表に示す。

研修会名：「TA研修会」

開催日時：平成20年4月2日

所 属	氏 名	職 名
理工学研究科（工）	柳原 宏	准教授
医学系研究科（工）	野口 三千彦	教授

研修会名：「学生参加方授業の展開方法」

開催日時：平成20年8月26日（火） 13:30～15:00

所 属	氏 名	職 名
工学部	上村 明男	教授

研修会名：メンタルヘルスの手法を学ぼう「大学生の自殺問題－教職員の対応上の留意点」  
 開催日時：平成20年9月19日（金） 13:30～15:15

所 属	氏 名	職 名
工学部	柳 研二郎	教授
工学部	上村 明男	教授
工学部	小嶋 直哉	教授
工学部	木下 武志	准教授

研修会名：「学習意欲を高める問題解決型の授業展開－その方法と展開－」  
 開催日時：平成20年9月25日（木） 13:30～16:00

所 属	氏 名	職 名
工学部	上村 明男	教授

研修会名：「情報セキュリティ・情報モラルの考え方」（開催地：宇部地区）  
 開催日時：平成20年9月26日（金） 14:30～16:30

所 属	氏 名	職 名
工学部	甲斐 綾子	准教授
工学部	平木 英治	准教授
工学部	堀田 昌志	准教授
工学部	榊原 弘之	准教授
工学部	長 篤志	講師
工学部	森田 実	助教
工学部	國次 公司	助教



研修会名：「教育での標準テストの影響」

開催日時：平成 20 年 12 月 19 日（金）14:30～1600

所 属	氏 名	職 名
工学部（留学生 C）	ヒギンズ マイケル	教授

研修会名：「情報セキュリティ・情報モラルの考え方」（開催地：常盤地区）

開催日時：平成 21 年 3 月 2 日（月） 14:30～16:30

所 属	氏 名	職 名
工学部	笠谷 和男	教授
工学部	河村 圭	准教授
工学部	李 柱国	准教授
工学部	田中 一宏	准教授
工学部	山本 正幸	助教
工学部	新銀 秀徳	助教
工学部	三上 真人	准教授
工学部	田中 俊彦	教授
工学部	野田 淳二	助教
工学部	小河原 加久治	教授
工学部	小嶋 直哉	教授
工学部	南 和幸	教授
工学部	森田 実	助教
工学部	国次 公司	助手
工学部	大木 順司	准教授
工学部	江 鐘偉	教授

研修会名：「最近の学生の実態と社会人基礎学力の養成」

開催日時：平成 21 年 3 月 18 日（水） 13:30～16:00

所 属	氏 名	職 名
工学部	木下 武志	准教授
技術経営研究科	春山 繁之	准教授
理工学研究科	亀田 孝嗣	准教授
MOT	グエン・フック・フー	准教授
MOT	向山 尚志	教授
工学部	小嶋 直哉	教授
工学部	田之上 健一郎	准教授

研修会名：「事例から学ぶ危機対応-自殺のポストベンションについて-」

開催日時：平成 21 年 3 月 18 日（水） 16:00～17:30

所 属	氏 名	職 名
工学部	関根 雅彦	教授

## 第 5 節 まとめ

工学部では早い時期からFD活動を、学部の教育活動の中で重要なものと位置づけて、学部内FD委員会を設け幅広く活動を行ってきた。しかし近年参加にやや積極性が見られなくなっている問題があった。各教員がFD活動に最低でも年に1度参加することを目標に本年度は取り組んでおり、FD活動に対する関心とこれらにより、教職員ならびに技術職員の教育活動に対する姿勢は、非常に高いものがあり、高い質のFD活動を続けるにいたっている。平成20年度に行った（あるいは行っている）これらの活動が、工学部の教育活動の質を高めていることには疑問の余地はない。次年度以降もこのような活動を継続して続けることが重要であろう。

# 第 10 章 農学部の F D 活動

## 第 1 節 はじめに

### 1. 平成 20 年度 F D 計画

#### (1) セミナー（農学部公開講演会）の実施

実施学科：生物資源環境科学科、生物機能科学科、獣医学科

内 容：農学部の各教員が、農学部の全教員と学生および農学研究科と医学研究科の大学院生に対して研究紹介を行い、意見交換等により各教育研究分野の活性化と分野間の相互理解の促進を図る。

#### (2) ピアレビューの実施

実施学科：生物資源環境科学科

内 容：授業担当教員の授業を評価担当教員により評価し、評価レポートを作成する。  
評価担当教員は評価を通じて教授法や視聴覚機器の使用等を自身の授業への参考とする。

#### (3) 大学教育センターと農学部・農学研究科・連合獣医研究科と

##### 教育改善 F D 研修会への参加

実施学科：生物資源環境科学科、生物機能科学科、獣医学科

内 容：農学部拡大教授会前に実施される標記研修会に参加する。

#### (4) 全学 F D 研修会への参加

実施学科：生物資源環境科学科、生物機能科学科、獣医学科

内 容：全学で実施される研修会に参加する。

#### (5) 学生による授業評価と教員による授業自己評価の実施

実施学科：生物資源環境科学科、生物機能科学科、獣医学科

内 容：講義、実験、実習、演習等の各授業について全受講学生に対して授業評価アンケートを実施し、教員がより良い授業を作るために参考となる統計資料の作成に供する。

### 2. 活動および報告内容について

平成 20 年度の農学部の F D 活動は、上記の計画に基づき、「セミナー」、「ピア・レビュー」、「全学研修会」を中心に、「その他の F D 活動」も含めて平成 19 年度と同様の取組み

が実施された。

以下にその具体的実施状況を報告し、それぞれについて総括するとともに、学生授業評価の集計結果を分析する。

## 第2節 セミナー（農学部公開講演会）

### 1. 開催セミナー一覧

	開催日	演題	講師	学科
1	4月8日	ブルセラ症の発症機序および診断法に関する研究	度会雅久	獣医学科
2	5月28日	糖タンパク質の品質管理における糖鎖機能の解明－鶏卵白オボアルブミンをモデルとして－	松富直利	生物機能科学科
3	6月25日	香気成分の化学－最近の進展とその成果－	赤壁善彦	生物機能科学科
4	7月1日	RNA干渉を用いたネコ免疫不全ウイルスの複製阻害	馬場健司	獣医学科
5	7月17日	有用微生物の探索－環境保全への利用を目指して－	藤井克彦	生物機能科学科
6	10月6日	西アジア原産作物「ムギ」の有望性と諸形質－育種を目指して－	丹野研一	生物資源環境科学科
7	10月30日	脱窒菌を利用した亜酸化窒素発生の抑制	横山和平	生物機能科学科
8	11月27日	植物は何のために匂いを出す？－揮発性化合物による化学生態学－	松井健二	生物機能科学科
9	1月15日	混合機能オキシダーゼによる還元当量の受容と分子内伝達経路/機構	右田たい子	生物機能科学科
10	2月5日	ウイルスの新たな生態の解明	前田健	獣医学科

### 2. セミナーの総括

農学部のセミナーでは、各学科の教員が農学部の全教員と学生および農学研究科と医学研究科の大学院生に対して研究紹介を行い、意見交換等により各教育研究分野の活性化と分野間の相互理解の促進を図っている。平成20年度は10回実施され、平成17年度の20回、平成18年度の11回、平成19年度は7回と減少してきた傾向が反転して増加した。とくに生物機能科学科の教員が6回実施しており、農学部セミナーを通じてのFD活動に対する強い意欲が感じられる。平成19年度の報告書で分析したように、各セミナーには多数の教員と院生・学生が参加しており、実施の回数もさることながら、その内容も活発な質疑などが行われ質の高いものと評価されよう。平成21年度以降も平成20年度と同程度に実施されることが妥当であろうと考えられる。

## 第3節 ピアレビュー

### 1. 実施授業一覧

実施日	授業科目	教員	学科	評価担当
6月11日	応用動物生態学	細井栄嗣	生物資源環境科学科	高橋 肇
7月7日	基礎園芸学	山内直樹	生物資源環境科学科	糸原義人
12月1日	作物学汎論	高橋 肇	生物資源環境科学科	鈴木賢士
1月13日	農地保全学	深田三夫	生物資源環境科学科	藤間 充
1月15日	作物学汎論	高橋 肇	生物資源環境科学科	丹野研一

### 2. ピアレビューの総括

農学部のピアレビューは、平成20年度は5回実施され、平成17年度に4回、平成18年度に13回、平成19年度に7回実施されていることを考えると、年度による増減はあるものの常に一定数の活動がみられるようである。このようにピアレビューの回数が比較的高レベルで維持されているのは、平成18年度から実施された生物資源環境科学科におけるピアレビューのローテーション制が定着したためであり、評価担当教員のレポートによると、年度ごとに異なる担当授業から教授法や視聴覚機器の使用などの指摘を受けることで新たに学ぶ点が多かったようである。したがって、生物資源環境科学科に関しては、ローテーションが一巡するまで、このピア・レビューへの高い関心が維持され、授業改善に役立つと期待される。一方、それ以外の学科では授業のピアレビューが全く行われなかった。平成19年度の報告書でも書いたように、授業の質が必ずしもピアレビューの回数に比例するというわけではないが、このように教員が直接に授業に参加してその改善について意見することは、FD活動としても最も効果的な方法の一つと言えよう。

## 第4節 大学教育センターと農学部・農学研究科・

### 連合獣医研究科との教育改善FD研修会

#### 1. 実施報告

主催：大学教育機構と農学部、農学研究科、連合獣医研究科、医学系研究科(農学系)による共催

日程：平成20年06月18日(水) 14:30～15:00

場所：会議室

対象：全員(拡大教授会出席者)

講師：木下真(大学教育センター講師)

内容：グラジュエーション・ポリシー、カリキュラムマップ、Webシラバス、学生授業評価、教員授業自己評価などの相互関係および組織的な取り組みの必要性について理解する。

報告：拡大教授会開始前の時間（30 分間）を利用して、「山口大学における教育改善の枠組みについて－教育改善活動における PDCA サイクル－」という題目で、講師によるプレゼンテーションと、その後の質疑応答から成る FD 研修会を開催した。講師によるプレゼンテーションでは、卒業生・修了生が備えておくべき資質を定めた GP、GP の各項目をどの授業を通じて実現するのかを示したカリキュラムマップ、個々の授業で GP の各項目を実現するための具体的な到達目標・内容・成績評価方法を定めた Web シラバス、これらの相互関係を中心とした解説がなされた。この解説を通じて、GP を満たすためには、各教員が授業を設計する際に、他の授業との関連性を意識するような組織的な取り組みも必要であることが示された。また、GP、カリキュラムマップ、Web シラバスの掲載先とアクセス方法が示され、各教員でアクセスして、担当している授業に割り当てられた GP 項目を満たしているかなどの確認をして欲しいとの依頼があった。さらに、学部・研究科の FD 活動の際には大学教育センターを活用していただき、報告書作成等の負担軽減につなげてほしいとの申し出もあった。

## 第 5 節 全学 F D 研修会

### 1. 参加教員一覧

開催日	研修会種別	農学部教員の参加人数
7月29日	第1部：講演「よりよい初年次教育の実現のために」 第2部：「初年次教育指導ワークショップ研修会」	6名
8月26日	「学生参加方授業の展開方法」	1名
9月19日	メンタルヘルスの手法を学ぼう 「大学生の自殺問題－教職員の対応上の留意点－」	6名
9月25日	「学習意欲を高める問題解決型の授業展開－その方法と展開－」	2名
3月18日	「最近の学生の実態と社会人基礎学力の養成」	1名
3月18日	「事例から学ぶ危機対応-自殺のポストベンションについて-」	1名

### 2. 全学 F D 研修会の総括

農学部教員の全学 FD 研修会への参加人数は、平成 20 年度は 17 名であった。平成 19 年度はのべ 71 名で平成 18 年度の 18 名や平成 17 年度の 15 人を大きく上回っていたのに比べるとふたたび大きく減少している。これは、平成 19 年度では、獣医学科に入学した特別支援学生対する修学支援のための研究会が 3 回開催され、学部長ならびに多くの獣医学科の教員がそれらに複数回出席したためである。このような特殊事情があったため、平成 20 年度になって農学部教員の FD 活動への意欲が急速に減退したとは言えない。むしろ、平成 19 年度のように農学部教員の参加動機を高めるような研修会が企画・実施されることを望みたい。

## 第6節 その他のFD活動

### 1. 農学部主催のFD研修会

#### (1) 電子式入力装置「スターボード」を利用した

#### 新しい授業スタイル講習会

日時：平成20年6月4日（水）13:00～13:50

場所：農学部会議室（農学部2階）

講師：重岩義人（日立コンシューマ・マーケティング）

参加者：農学部教職員8名

概要：近年、PC+パワーポイント+プロジェクターの組み合わせで授業をする教員が多数いるが、パワーポイントを使用した場合は、ポインターなどで説明箇所を指し示す授業になりがちで、学生はスクリーンを漫然とみていることも多い。また、書き込みは別途ホワイトボードへの記入するため、授業の流れが中断されてしまう。本講習会で紹介する「スターボード」は、映写したスクリーン上への書き込みができるタブレット式電子ボードである。パワーポイントでの投射画像や各種の写真など、スクリーンへ投射されている映像に簡単に書き込みができる（パワーポイント以外のソフトにも対応している）。また、スクリーンをホワイトボードとして使用することも出来る。さらに、授業終了後には画面上で記入したファイルを、PDF等へ変換し学生へ配付することも可能である。

講習会では、日立ソフトウェアよりデモ機を1ヶ月間借り受けるのに先立ち、スターボードを用いた新しい授業スタイルを紹介した。

スケジュール：13:00～13:30 スターボード使用法講習会

13:30～13:50 質疑応答

#### (2) 獣医学科FD研修会：聴覚障がい学生への学習指導方法について

コーディネーター：佐藤晃一

日時：平成21年3月11日（水）16:30～17:30

場所：農学部3番教室

参加者：農学部獣医学科教員17名

研修目的と内容：獣医学科に在籍する聴覚障がい学生への専門教育が始まって1年が経過した。その間、聴覚の低下により補聴器が使用できなくなるなど、入学当初と授業における状況が大きく変わってきている。3年次では、さらに多くの専門性の高い講義が行われるとともに、実習も多数開始されることから、授業方法について困難が予想される。そこで、本FD研修会は、獣医学科教員に対して、聴覚障がい学生への学習指導についての理解を深めることを目的とし、2年次に授業を担当した教員の助言等を参考に、講義および実習の方法について研修を行う。

## 第7節 学生授業評価と教員授業自己評価

### 1. 共通項目の集計結果比較

#### (1) 講義

##### 質問1

学生：あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？

(括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です)

回答：1) 90%以上(14回以上) 2) 80~90%(12~13回) 3) 60~80%(9~11回)  
4) 40~60%(6~8回) 5) 40%未満(6回未満)

	回答選択率 (%)						回答 平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	78.4	17.6	3.2	0.4	0.3	-	4.7

回答平均値は、1)を5点、2)を4点、3)を3点、4)2点、5)を1点として計算した。

##### 質問2

学生：あなたはこの授業において、時間外学習(予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強)をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。

回答：1) 3時間程度または以上 2) 2時間程度 3) 1時間程度  
4) 30分~50分程度 5) 30分未満

	回答選択率 (%)						回答 平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	7.0	8.9	21.3	22.8	39.8	-	2.2

##### 質問3

学生：教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない

	回答選択率 (%)						回答 平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	31.9	34.3	22.5	8.8	2.5	-	3.8

##### 質問4

学生：専門用語や理論的な話は、適切に説明されましたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない

	回答選択率 (%)						回答 平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	33.2	39.7	19.3	6.5	1.2	-	4.0



### 質問 5

学生：テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない 6) この授業は該当しない

	回答選択率 (%)						回答 平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	38.5	35.7	18.4	5.5	1.6	0.3	4.0

### 質問 6

学生：板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが、効果的に使われましたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない 6) この授業は該当しない

	回答選択率 (%)						回答 平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	39.0	33.5	18.7	6.4	1.7	0.7	4.0

### 質問 7

学生：学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない

	回答選択率 (%)						回答 平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	31.4	33.1	28.8	5.5	1.2	-	3.9

### 質問 8

学生：あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない 6) 答えられない

	回答選択率 (%)						回答 平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	15.9	33.9	39.0	6.4	2.0	2.7	3.6

### 質問 9

学生：あなたは、この授業の内容を理解できましたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない

	回答選択率 (%)						回答 平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	18.2	43.9	26.5	8.3	3.1	-	3.7

### 質問 10

学生：この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない

	回答選択率 (%)						回答 平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	28.5	38.1	24.6	6.4	2.4	-	3.8

## (2) 演習・実験・実習

### 質問 1

学生：あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？

(括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です)

回答：1) 90%以上(14回以上) 2) 80~90%(12~13回) 3) 60~80%(9~11回)  
4) 40~60%(6~8回) 5) 40%未満(6回未満)

	回答選択率 (%)						回答 平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	96.9	1.5	0.5	0.2	0.9	-	4.9

### 質問 2

学生：あなたはこの授業において、時間外学習(予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強)をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。

回答：1) 3時間程度または以上 2) 2時間程度 3) 1時間程度  
4) 30分~50分程度 5) 30分未満

	回答選択率 (%)						回答 平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	22.0	12.0	18.5	14.0	33.5	-	2.7

### 質問 3

学生：教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない

	回答選択率 (%)						回答 平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	48.9	29.6	16.2	3.4	2.0	-	4.2

### 質問 4

学生：演習・実習・実験の方法に関する指示は、わかりやすく説明されましたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない

	回答選択率 (%)						回答 平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	49.4	29.9	14.8	4.3	1.6	-	4.2

### 質問 5

学生：教材または器材が使用された場合、それらは適切に活用されましたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない 6) この授業は該当しない

	回答選択率 (%)						回答 平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	51.5	29.7	12.2	2.6	1.1	-	4.3

### 質問 6

学生：学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない

	回答選択率 (%)						回答 平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	55.5	27.9	13.9	2.0	0.7	-	4.4

### 質問 7

学生：教員から手本・示範が示された場合、それらは適切でしたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない 6) この授業は該当しない

	回答選択率 (%)						回答 平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	51.8	28.0	12.5	2.1	0.8	4.8	4.3

### 質問 8

学生：授業中は、演習や実習に集中できる雰囲気でしたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない

	回答選択率 (%)						回答 平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	51.8	29.5	15.4	2.4	1.0	-	4.3

### 質問 9

学生：動物を扱う実験・実習は、安全性に重点が置かれていましたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない 6) この授業は該当しない

	回答選択率 (%)						回答 平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	34.6	16.2	13.2	1.9	0.7	33.4	4.2

### 質問 1 0

学生：動物を扱う実験・実習は、動物愛護精神をもって行われましたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない 6) この授業は該当しない

	回答選択率 (%)						回答 平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	30.5	14.8	15.4	1.3	1.2	36.9	4.1

### 質問 1 1

学生：あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない 6) 答えられない

	回答選択率 (%)						回答 平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	37.1	31.2	23.4	2.1	0.8	5.4	4.1

### 質問 1 2

学生：知識や技能のレベルは向上しましたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない

	回答選択率 (%)						回答 平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	46.9	38.8	11.7	1.7	0.9	-	4.3

### 質問 1 3

学生：あなたは、この授業の内容を理解できましたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない

	回答選択率 (%)						回答 平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	39.1	43.9	13.3	2.7	1.0	-	4.2

### 質問 1 4

学生：この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない

	回答選択率 (%)						回答 平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	52.5	30.8	12.9	2.5	1.3	-	4.3

## 2. 学生授業評価と教員授業自己評価の総括

農学部の学生授業評価の実施率は93%で、平成17年度の83%、平成18年度の90%、平成19年度の93%と上昇してきた高い実施率を昨年度に続き維持することができた。来年度以降もこの高い実施率を持続していけるよう、学生授業評価の意義について教員各位と確認していきたい。一方、教員授業自己評価については、平成21年4月17日（入力締め切りは4月末日）の時点で、入力率が56%と、他学部と比較して極めて高い値を示した。この時期での入力率ではあるが、平成19年度では22%、平成20年度では49%であったことからみても、農学部教員のFDへの意識が年々高まっていることが伺われる。

平成20年度は、学生授業評価を講義用の10項目の質問ならびに実験・実習用の14項目の質問に関する集計結果を示した。なお、平成19年度は教員授業自己評価との比較を試みたが、平成20年度ではこのデータがまだ入力中であるため、学生授業評価のみで検討することにした。なお、平成20年度から回答の選択肢を肯定的なものから順に並べたため、平成19年度のものと比較できるように、(1)を5点、(2)を4点、(3)を3点、(4)を2点、(5)を1点として計算した。平均値は、2.2~4.7の範囲にあったが、その多くが4点台と高く、学生がそれぞれの授業を比較的良好と評価したことを示していた。

上記のように、平成20年度は、平成19年度と比べても学生授業評価アンケートの実施率と教員の授業自己評価の入力率ともに高い値を保ち続けたが、平成19年度に実施した学生と教員双方の評価結果を比較することができなかった。個々の教員は入力時にぜひともこれら評価を比較し、認識の違いがあるようであれば、なぜそのような違いが生じるのかを考えてもらいたい。

## 第8節 まとめ

平成20年度の農学部FD活動は、上記のように19年度のFD活動を継続する計画に基づいて実施された。その結果、19年度と比較して、学部独自の取り組みであるセミナー（農学部公開講座）の実施回数はやや増加したものの、ピアレビュー実施授業数はやや減少した。全学FD研修参加教員数は、「ノルマ」の考え方から解放されたため減少したが、学生授業評価実施授業数は平成19年度と同様の値を持続しており、農学部教員のFD活動への意識が減退していないことを示した。全体としては着実にFD活動が実施されたと評価できる。

以上の20年度FD活動の総括結果をふまえ、21年度のFD活動も、基本的に20年度の活動を継承・維持することを目標に実施し、学部の教育研究レベルの維持を図るべきであろう。

\* \* \* \* \*

平成20（2008）年度 農学部FD委員会

生物資源環境科学科	宇佐見晃一、高橋肇（委員長、全学FD委員）
生物機能科学科	内海俊彦、阿座上弘行
獣医学科	中市統三、和田直己

## 第 1 1 章 人文科学研究科の F D 活動

今年度の大学院人文科学研究科の FD 活動としては、当研究科の所属教員が人文学部のそれと重なることから、大学教育機構と共催の形での FD 研修会、大学教育機構主催の FD 研修会・講演会への参加、教員間授業公開（ピア・レビュー）については、人文学部のそれと合同の実施となる。ただし、学生による授業評価アンケートについては、人文学部で実施しているようなマークシート方式のものを採用せず、研究科独自の記述方式のものによって実施した。教員自己評価入力については、全学的に実施している方式に準拠して実施した。

### 第 1 節 教員間授業公開（ピア・レビュー）

人文学部との合同によって実施した。詳細については、第 4 章「人文学部の FD 活動」の第 1 節「教員間授業公開（ピア・レビュー）」を参照。

### 第 2 節 大学教育機構との共催による

#### 教育改善 F D 研修会

人文学部教員の参加者と一致する。詳細については、第 4 章「人文学部の FD 活動」の第 2 節「大学教育機構との共催による教育改善 FD 研修会」を参照。

### 第 3 節 大学教育機構主催 F D 研修・講演会への参加

人文学部教員の参加者と一致する。詳細については、第 4 章「人文学部の FD 活動」の第 4 節「大学教育機構主催 FD 研修・講演会への参加」を参照。

### 第 4 節 人文科学研究科における自由記述式アンケート

人文科学研究科における授業アンケートについては、従来、自由記述式のものを実施している。各授業における人文科学研究科の大学院生の受講者が極めて少数であるため、アンケート回答者の匿名性を確保することが難しく、個々の授業ごとでマークシート方式のアンケートを実施できないからである。仮に実施したとしても、ほとんどの授業における回答シート数は、教員が閲覧できる規定枚数を下回るため、教員が閲覧できず、アンケートを実施する実質的な意味がない。大学院生むけのアンケートとしては、自由記述式のほうが適切という観点からも、当研究科のアンケートは自由記述式とし、しかも授業別ではなく、研究科全体の範囲で回収する方式をとっている。

平成 20 年 7 月中旬、指導教員に依頼し、A4 サイズのアンケート用紙を 1 枚ずつ大学院生に配布した。学務第一係に投函口を設け、前期試験最終日の 8 月 4 日（月）を締め切りとし、大学院生各自の手で回答を直接投函してもらうという回収方法を採用した。このアン

ケートの質問項目は、つぎの3点である。

「(1)人文科学研究科の授業（講義・演習）について、良いところ、このまま継続してほしい点があれば、教えてください。

(2)人文科学研究科の授業（講義・演習）について、今後できれば改善してほしい点があれば、教えてください。

(3)その他、ご意見ご要望ご感想があれば、教えてください。」

なお、アンケート対象学生数は29名、うち回収された回答用紙は9枚であった（回収率31.0%）。以下、この回答結果を原文のまま示す。

※アンケートにご協力いただいた方々からのご回答

---

■ Aさん

(1)人文科学研究科の授業について、良いところ

→特にないです。

(2)人文科学研究科の授業について、改善してほしい点

→できれば一種のテキストを使いながら、授業を受けさせてもらいたい。

(3)その他

→できれば奨学金（留学生向けの）を増やしていただきたいと思います。

---

■ Bさん

(1)人文科学研究科の授業について、良いところ

→〔空欄〕

(2)人文科学研究科の授業について、改善してほしい点

→「他専攻の講義から○単位」とあるが、これに限っては学部生の講義ならどれでも取得可（単位になる）というように配慮してもらえると嬉しい。

(3)その他

→〔空欄〕

---

■ Cさん

(1)人文科学研究科の授業について、良いところ

→演習の時、自分で考えて、自分の意見を発表するのがいいと思います。また、それで、考え方がちょっと違ったりすると先生と相談しながら、お互いの意見を説明するのが、学生の勉強に役に立つと思います。

(2)人文科学研究科の授業について、改善してほしい点

→別にないです。

(3)その他

→自分の意見などを発表できる授業が多ければいいなと思います。

---

■ Dさん

(1)人文科学研究科の授業について、良いところ

→少人数の演習は密度の濃いもので、とてもありがたいです。

(2)人文科学研究科の授業について、改善してほしい点

→今、学部生向けに開設されている概説科目を数単位分、卒業単位に含めてほしい。専門以外の分野に入りやすくなるので。同じ人文系の分野でもそれぞれ分野の毛色は違うと思うので、概説科目もとれたらいいなと思います。

(3)その他

→〔空欄〕

---

■ Eさん

(1)人文科学研究科の授業について、良いところ

→他コースや専攻の授業を選択できるところ。少人数での指導。

(2)人文科学研究科の授業について、改善してほしい点

→論文指導 学部の時にもおもったが、きちんと論文の書き方を教えてほしいし、もっときめこまかに指導してほしい。また、コースや教員によって差があると思う。画一的でいいとは思わないけれど、最低限のところほどのコースや教員でもやるべきと思う。

(3)その他

→〔空欄〕

---

■ Fさん

(1)人文科学研究科の授業について、良いところ

→なし。

(2)人文科学研究科の授業について、改善してほしい点

→黒板消し・イレーザーが使い込まれすぎているので取り替えてください。消しても黒板・ホワイトボードがきれいになりません。

(3)その他

→人文学部玄関前電子掲示板のスクロールが遅すぎるので改善してもらいたい。

---

■ Gさん

(1)人文科学研究科の授業について、良いところ

→学生が発表してからみんながそれについて検討して行く点がいいと思います。

(2)人文科学研究科の授業について、改善してほしい点

→先生が一方的におっしゃるより、できればみなさんが自分の考えや意見などを言う時間が多ければいいと思います。

(3)その他

→〔空欄〕

---

■ Hさん

(1)人文科学研究科の授業について、良いところ

→自由方式で発表できる所はいいと思いました。

(2)人文科学研究科の授業について、改善してほしい点

→〔空欄〕

(3)その他

→奨励金は人文の言語専攻にも候補して欲しいです。

---

■ Iさん

(1)人文科学研究科の授業について、良いところ

→〔空欄〕

(2)人文科学研究科の授業について、改善してほしい点

→〔空欄〕

(3)その他

→院生どうしの交流－例えば研究上の悩みを共有する－等があればいいと思う。



---

以上、人文科学研究科の最大の特徴といえる、演習形式を中心とした少人数制の授業が高く評価されていると考えられる。一方で、自分の研究分野以外の科目については、学部開講の概説科目も受講したいという希望も見られる。また、教育関連の施設についての改善の要求も提出されている。さらに、特に留学生からは、奨学金の受給者数を増やしてほしいという希望が提出されている。

\* \* \* \* \*

平成20年度 山口大学大学院人文科学研究科FD委員会

磯部	佳宏（委員長）	池園	宏	井上	三朗
武本	雅嗣	田中	均	馬	彪
村田	裕一	山本	真弓（副委員長）		

## 第 1 2 章 教育学研究科の F D 活動

平成 20 年度より、教育学研究科の F D 活動として、学生授業評価及び教員授業自己評価のアンケートを始めた。本章では、これらの実施状況と結果について報告する。

まず、アンケートの実施方法を説明する。学生授業評価は、基本的に授業の最終回に実施する。各授業の担当教員が、アンケート質問用紙と回答のためのマークシートを受講生に配布する。受講生がマークシートに回答を記入の後、教員が回収し封筒に入れて封をする。それらを、教育学部学務係において回収の後、大学教育センターへ提出し、読み込みと統計処理を行う。アンケートの回収数が 5 以上の場合、各質問項目ごとに評価値・回答数の分布、群平均・科目平均を集計する。その結果を各授業の担当教員へ提示する。アンケートの回収数が 5 未満の場合、アンケート結果は担当教員に提示しない。その後、教員は教員授業自己評価を実施する。なお、学生授業評価及び教員授業自己評価の質問用紙は、章末の参考資料：図 1～4 に掲載した。

学生授業評価及び教員授業自己評価の実施科目数を表 1 に示した。ここでは、学生授業評価の実施科目数、アンケート回収数が 5 未満の科目数、教員授業自己評価実施科目数を、前期と後期に分けて示した。教育学研究科においては、1 科目当たりの受講生が少なく、約半数（46%）の授業科目でアンケート回収数が 5 未満であった。

次に、学生授業評価アンケートで回収されたもの全てについて、回答選択肢を分類したものを表 2 に示す。全ての質問項目について、8 割以上がポジティブな評価であり、良好な結果であった。学部の授業と比較して、大学院の授業科目の多くは、受講者数が少ない。従って、教員と学生とのコミュニケーションを十分に取ることが可能である。質問項目の「Q1. 専門用語や理論的な話は、適切に説明されましたか？」や「Q3. 学生への疑問・質問への対応や議論は、十分でしたが？」が極めて良い評価を受けているのはこのためであると考えられる。

さらに、教員授業自己評価の自由記述欄について考察する。教育学研究科の教員授業自己評価についても学部のそれと同様に「29. 授業実施上の工夫（自由記述）」と「30. 授業実施上の問題点・改善点（自由記述）」の欄が設けてある。これらの記述について大まかに、a.ゼミナールに関する事項、b.専門分野に関する事項、c.その他の事項に分類した。その結果、a.のゼミナールに関する事項が最も多かった。すなわち、多様な学生が参加するゼミナールをどのように進めていくか、問題点や改善点を感じた教員が多いようである。b.の項目としては、大学院の専門授業としてのレベルを保つことの難しさを指摘したものもあった。その他には、柔軟に授業を進めることができることの良い点を指摘するものもあった。なお、受講者数が少ないため、学生授業評価を実施しても教員にフィードバックされないため、実施の意義について疑問を投げかけるものもあった。表 2 のように全体の結果を F D 報告書に掲載し、学生からの全体的な評価を教員にフィードバックすることで、意義のある学生授業評価としていきたいと考えている。それとともに、少人数授業のための、よりよい学生授業評価アンケートについて、今後も検討を続ける必要がある。

表 1 「学生授業評価及び教員授業自己評価の実施数。学生授業評価の実施科目数には、アンケート回収数が 5 未満の科目も含む。(データは、平成 21 年 4 月 10 日の時点のもの。)」

	学生授業評価			教員授業自己評価		
	前期	後期	合計	前期	後期	合計
実施科目数	23	49	72	41	19	60
5 未満の科目数	2	31	33	—	—	—

表 2 「平成 20 年度前期及び後期の学生授業評価アンケート回答数の頻度分布。Q1～Q7 は質問項目の番号を、A1～A6 は回答選択肢の番号を示す。A1 から A5 まで、良い評価から悪い評価の順に回答選択肢を設けている。表中では、各質問項目において、回答のあったもののうち有効のものだけを取り出し (アンケート有効回答数)、それに対する回答選択肢の比率(%)を示している。なお、Q6 の質問項目についてのみ A6 の回答選択肢が設定されているが、これは、その授業が Q6 の質問には該当しないと思われる場合に選択することとなっている。学生授業評価質問用紙は章末の参考資料を参照。」

前期

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7
A1	65.6%	56.7%	65.9%	58.5%	65.2%	46.6%	66.5%
A2	23.2%	25.4%	19.3%	21.0%	17.9%	19.0%	20.4%
A3	8.0%	16.1%	11.7%	17.4%	12.5%	8.6%	8.1%
A4	1.8%	1.3%	1.8%	1.8%	2.2%	3.6%	3.2%
A5	1.3%	0.4%	1.3%	1.3%	2.2%	0.0%	1.8%
A6	—	—	—	—	—	22.2%	—
アンケート有効回答数	224	224	223	224	224	221	221

後期

	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7
A1	70.0%	65.4%	71.0%	56.9%	63.3%	59.7%	63.8%
A2	21.2%	27.2%	21.2%	29.6%	25.6%	13.4%	24.9%
A3	6.9%	6.0%	5.1%	9.3%	7.9%	7.9%	7.5%
A4	1.8%	1.4%	2.3%	2.3%	2.3%	1.4%	1.9%
A5	0.0%	0.0%	0.5%	1.9%	0.9%	0.0%	1.9%
A6	—	—	—	—	—	17.6%	—
アンケート有効回答数	217	217	217	216	215	216	213

## 参考資料

教育学研究科 学生授業評価質問用紙	
<p>このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする統計資料を作成することを目的に行います。統計資料の作成以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して率直な回答を行って下さい。回答は、あてはまる数字を選んで回答用紙マークシートの指示された欄にマークして下さい。</p> <p>なお、受講者数が5名未満の場合、裏面の質問項目について、受講者と教員とが話しあってください。教員はその結果をもとに、教員授業自己評価の自由記述欄：「29. 授業実施上の工夫」と「30. 授業実施上の問題点・改善点」を記入します。この場合、アンケートシートに記入する必要はありません。</p>	
授業科目名	授業科目名を記入して下さい。
担当教員名	担当教員名を記入して下さい。
<学年>	5) 修士1年生、6) 修士2年生
<学生区分>	1) 一般学生、2) 留学生 (科目等履修生、研究生の場合、マークの必要はありません。)
<研究科>	下記区分に従い、あなたの所属研究科をマークしてください。教育学研究科の大学院生なら9です。 8) 人文科学研究科、 <b>9) 教育学研究科</b> 、10) 経済学研究科、11) 医学研究科(M)、12) 医学研究科(D) 13) 理工学研究科(M)、14) 理工学研究科(D)、15) 農学研究科、16) 東アジア研究科
<専攻>	下記区分に従い、あなたの所属専攻をマークしてください。
教育学研究科	1) 学校教育専攻、2) 教科教育専攻
<コース等1>	下記区分に従い、あなたの所属専修をマークしてください。
教育学研究科	1) 学校教育専修、2) 学校臨床心理学専修、3) 国語教育専修、4) 社会科教育専修、5) 数学教育専修 6) 理科教育専修、7) 音楽教育専修、8) 美術教育専修、9) 保健体育専修、10) 技術教育専修 11) 家政教育専修、12) 英語教育専修

図1 「教育学研究科・学生授業評価質問用紙・表面」

質問Ⅰ（受講者が5名未満の場合、この質問項目について、受講者と教員とが話しあってください。教員はその結果をもとに、教員授業自己評価の自由記述欄：「29. 授業実施上の工夫」と「30. 授業実施上の問題点・改善点」を記入します。この場合、アンケートシートに記入する必要はありません。）

1	専門用語や理論的な話は、適切に説明されましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
2	参考資料や文献の提示・紹介は適切に行われましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
3	学生の疑問・質問への対応や議論は、充分でしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
4	あなたの研究テーマにとって、参考になる知識が得られましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
5	この授業は、あなたの期待した内容を含んでいましたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
6	ゼミナールの運営は適切でしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない 6. この授業は該当しない
7	この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？ 1. そう思う 2. ややそう思う 3. どちらとも言えない 4. あまりそう思わない 5. そう思わない
8 ～ 30	<これ以降は、担当教員の設問に従って回答してください>

#### 質問Ⅱ

授業担当教員の指示に従ってください。教員によって、授業に関する感想や要望等を自由記述のかたちで求める場合があります。なお、質問Ⅱへの回答を求める場合、教員が別に記入用紙を配布することになっています。本紙（教育学研究科学生授業評価質問用紙）やアンケートシートには、質問Ⅱに対する回答を記入しないでください。

以上でアンケートは終わりです。ご協力ありがとうございました。マークシートの回収方法は授業担当教員が指示することになっています。

図2「教育学研究科・学生授業評価質問用紙・裏面」

## 教育学研究科 教員による授業自己評価

【1.開設科目コード】	【2.系列】	【3.分野】						
【4.科目類型】	【5.開設科目名】	【6.単位数】 単位						
【7.担当教員】	【8.開設期】 年生 期	【9.開設時限】 曜日 ・ 時限						
【10.授業区分】	【11.対象学生】	【12.】						
【13.授業の概要】								
【14.授業の一般目標】								
【15.授業の到達目標】								
知識理解の観点								
思考・判断の観点								
関心・意欲の観点								
態度の観点								
技能・表現の観点								
その他の観点								
【16.授業の目標の記載】 1.シラバスに記載 2.授業中に開示								
【17.成績評価方法】								
	知識・理解	思考・判断	関心・意欲	態度	技能・表現	その他	評価割合 (%)	JABEE 収集資料
定期試験（中間・期末試験）								
小テスト・授業内レポート								
宿題・授業外レポート								
授業態度・授業への参加度								
受講者の発表（プレゼン）・授業内での制作作品								
演習								
出席								
その他								
合計								
【18.受講登録者数】 人	【19.受験者数】 人	【20.合格者数】 人	(うち秀) 人	(うち優) 人	(うち良) 人	(うち可) 人	【21.不合格者数】 人	
【22.授業回数】 回	【23.休講回数】 回	【24.補講回数】 回						

図 3 「教育学研究科・教員授業自己評価（紙媒体）・表面」

【25.出席管理】 1.毎回確認 2.( )回確認 3.確認せず									
【26.出席の評価への利用】 1.出席による加点 最大( )%程度 2.欠格に利用 欠席( )回で欠格 3.利用せず									
【27.学生授業評価】 学生授業評価(期末) 1.実施 2.非実施									
【28.授業実施上の工夫】	そう思う	う	ややそう思	言えない	どうもとも	思わない	余りそうは	ない	そうは思わ
1. 専門用語や理論的な話をわかりやすく説明しましたか?	1	2	3	4	5				
2. 参考資料や文献の提示・紹介を適切に行いましたか?	1	2	3	4	5				
3. 学生の疑問・質問への対応や議論は、充分であったと思いますか?	1	2	3	4	5				
4. 受講者の研究テーマにとって、参考となる知識を与えたと思いますか?	1	2	3	4	5				
5. 受講生の期待した内容を含んでいたと思いますか?	1	2	3	4	5				
6. ゼミナールの運営は適切であったと思いますか?	1	2	3	4	5				
7. この授業は、受講生にとって満足のいくものであったと思いますか?	1	2	3	4	5				
【29.授業実施上の工夫(自由記述)】									
【30.授業実施上の問題点・改善点(自由記述)】									

図 4 「教育学研究科・教員授業自己評価(紙媒体)・裏面」

# 第 1 3 章 経済学研究科の F D 活動

## 第 1 節 平成 2 0 年度経済学研究科 F D 計画

平成 2 0 年度の F D 計画として、

1. 授業の事例研究・報告
2. 全学 F D 研修会への参加
3. 授業評価の実施
4. 教育改善 F D 研修会の実施

の 4 点を決めた。2 項、4 項については経済学部で述べたので、他の 2 点について報告する。

## 第 2 節 授業の事例研究・報告

### 1. 事例研究・報告会の概要

経済学研究科は、独自の F D 活動として、昨年度に初めて実施された事例研究報告会を、今年度も実施した。この会の目的は、大学院授業担当教員に講義や研究指導の実施方法を報告してもらった上で、教員間で意見交換を行い、それらを今後の教育活動に役立てることである。

今回は、澤田教授と尹教授に報告を引き受けていただいた。報告会の開催日時は 2008 (平成 20) 年 7 月 16 日で、経済学研究科から 20 名が参加した。

澤田教授の報告の主題は、コーチングを活用したワークショップ的なゼミ運営であった。尹教授の報告の主題は、講義運営と修士論文指導についての問題点と改善策であった。両教授の詳しい発表内容については、添付した資料（両教授が作成し、報告会で配付されたもの）を参照していただきたい。

### 2. 討論の内容

両教授の報告の後、参加教員から次のような質問が出された。

〈澤田教授の報告について〉

質問 1：現状とゴールのギャップを認識した上で、それを埋めるための解決策に学生の目を向けさせるということだが、学生が解決策をうまく見つけられない場合はどうするのか？

返 答：「そこから何を学びましたか。それをどう活かしていけそうですか。」という質問をし、失敗からの学びを成功の資源としていくことができる。また、小さな変化が大きな解決につながっていくので、小さな解決策を考えることから始めると、解決策が何も考えられないことはほとんどない。

質問 2：質問 1 に関連して、学生が解決策に目を向けない場合はどうするのか？

返 答：教員が上手な聞き役になる。じっくりと話を聴いた上、「なにがあったら、解決に目を向けられるようになるか」という質問する。



〈尹教授の報告について〉

質問3：留学生は日本語論文をどの程度理解するか？学生の能力差にどのように対応するか？

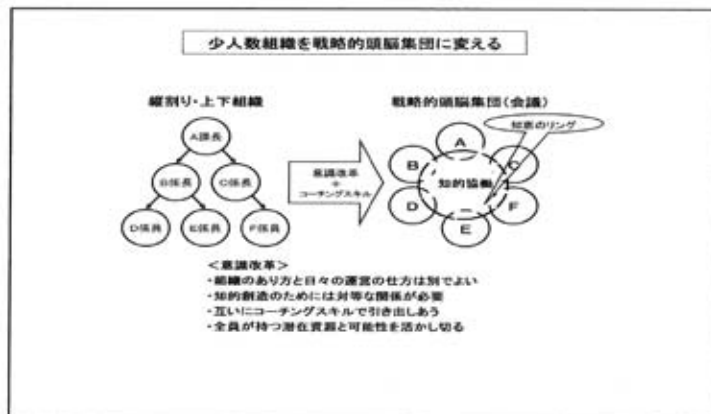
返 答：内容を理解する度合いは学生によって異なる。学生の能力差を考慮して講義運営を行う。

質問4：修士を卒業して就職する人と、博士課程への進学を目指す人とを区別せず、アカデミックな指導を行なうのか？

返 答：研究科である以上、アカデミックに行なう。

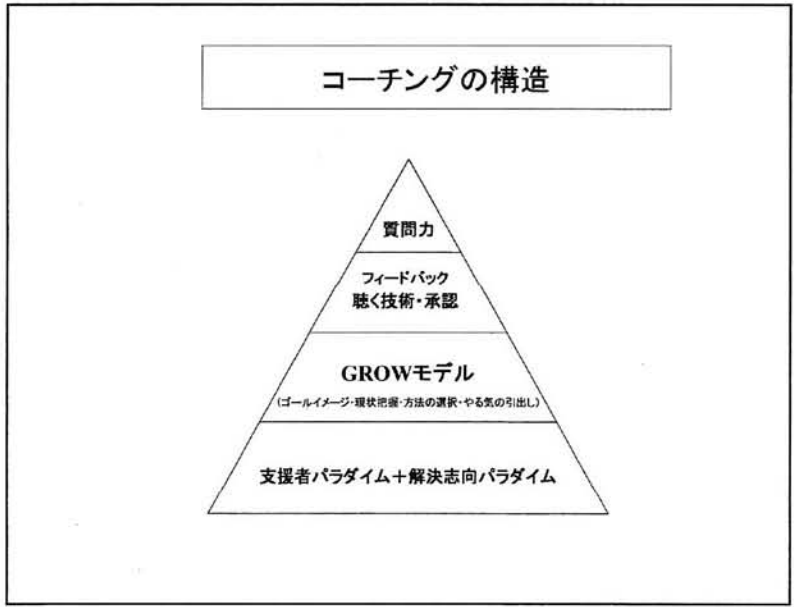
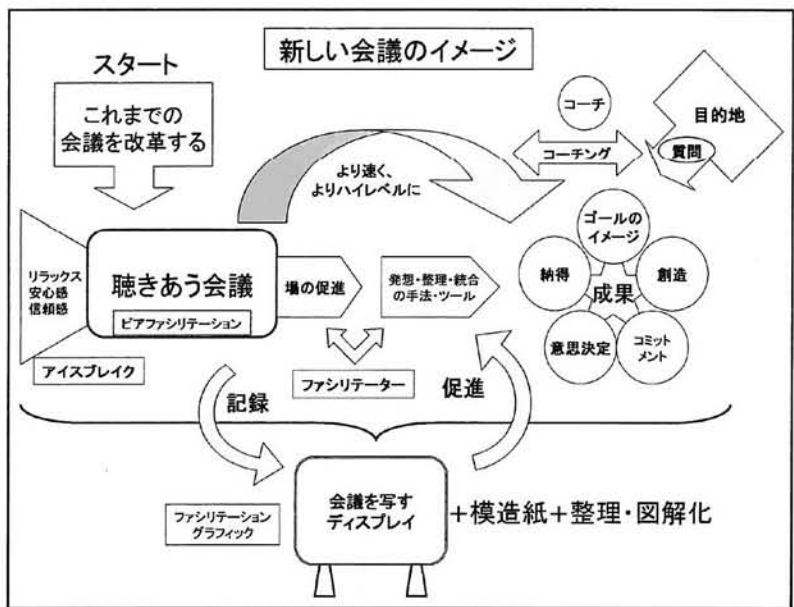
### 3. 報告資料

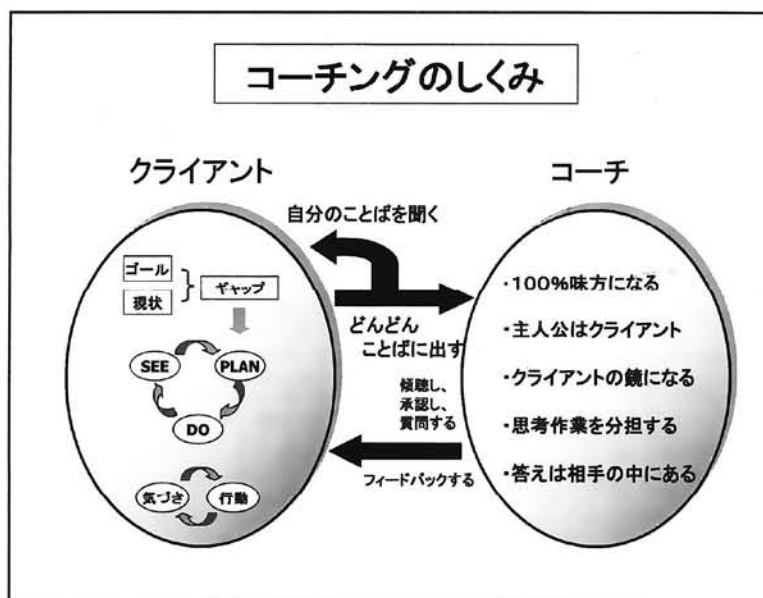
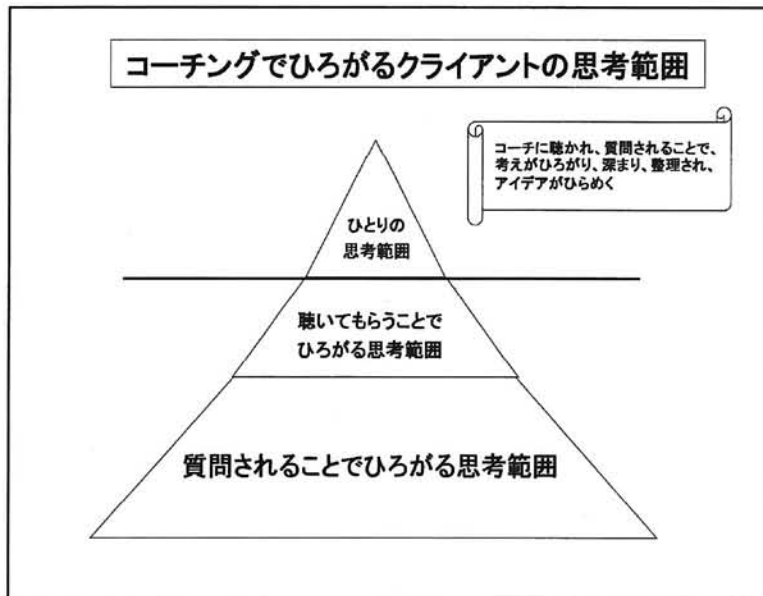
#### (1) 澤田先生報告資料



**職場のコミュニケーションパワーを高める**  
＜メンタルヘルスから、ブレークスルー（難問突破）まで＞

<p><b>「聴きあう文化」</b>をつくる</p> <p>信頼関係と安心感、リラックスした緊張感</p> <p><b>「ことば化」</b>する</p> <p>「おもい」をことばにする</p> <p><b>「議論の場」</b>をつくる</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・場割の工夫（明るさ、共通し、開放感）</li><li>・席の配置</li><li>・スケジュール</li><li>・結果の出やすいテーマ設定</li><li>・ルールを決める</li><li>・リフレッシュ・気分転換を上手にする</li></ul> <p><b>議論の「共通の土俵」</b>をつくる</p> <p>みんなでホワイトボードを見ながら議論する</p>	<p><b>考えを拡げ・深めるための質問体系</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・解決した状態は、どのようなものですか？（解決機能）</li><li>・何をどうしたいのですか？</li><li>・現状は10点満点で、何点ですか？</li><li>・相手の立場から見たら、どう見えますか？</li><li>・そこから何を学びましたか？</li></ul> <p><b>「みんなの頭を一つにする」</b></p> <ul style="list-style-type: none"><li>・他人の頭を使って考える（コーチしてもらう）</li><li>・自分の頭を人に使ってもらう（コーチ役をする）</li><li>・みんなの頭を一つに磨き合わせる（自他非分離）</li></ul> <p><b>「発散プロセス」と「収束プロセス」の区別</b></p> <p><b>コーチ、ファシリテーターを使う</b></p>
--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------





(問1) 発表したり、質問に答えるとき、先生がうなずきやあいづちをしてくれると、話がしやすいですか

ゼミの種類 (回答者数)	非常に話しやすい	話しやすい	ふつう	話しにくい
院ゼミ (6人)	5	1	0	0
卒論ゼミ (6人)	5	1	0	0
演習Ⅱ (12人)	7	5	0	0
演習Ⅰ (4人)	1	2	0	1
基礎セミナー (19人)	10	6	3	0
合計 47人 (100%)	28人 (59.6%)	15人 (31.9%)	3人 (6.4%)	1人 (2.1%)

(問7) 質問と応答を重視する学習方法は、そうでない場合に比べて、「学ぶことが多い」と思いますか

ゼミの種類 (回答者数)	非常に学ぶことが多いと思う	学ぶことが多いと思う	ふつう	あまりそう思わない
院ゼミ (6人)	1	5	0	0
卒論ゼミ (6人)	3	3	0	0
演習Ⅱ (12人)	2	9	1	0
演習Ⅰ (4人)	2	2	0	0
基礎セミナー (19人)	7	9	3	0
合計 47人 (100%)	15人 (31.9%)	28人 (59.6%)	4人 (8.5%)	0人 (0.0%)

(問8) 質問と応答を重視する現在のゼミの運営方法は、10点満点で何点と評価しますか

ゼミの種類 (回答者数)	1点 全然良くない	2	3	4	5	6	7	8	9	10点 大変良い
院ゼミ (6人)	0	0	0	0	0	0	0	1	4	1
卒論ゼミ (6人)	0	0	0	0	0	0	0	1	2	3
演習Ⅱ (12人)	0	0	0	0	0	0	4	4	4	
演習Ⅰ (4人)	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2
基礎セミナー (19人)	0	0	0	0	0	1	6	8	3	1
合計 47人 (100%)	0	0	0	0	0	1人 (2.1)	10人 (21.3)	15人 (31.9)	14人 (29.8)	7人 (14.9)

4

大学院ゼミの回答から

<p>評価の理由</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○発表に対する先生のコメントを聞くだけでなく、質問されることにより、自分自身で考えようとする</li> <li>○自分で答えを導き出し、声にすることにより理解が深まる</li> <li>○自分の中から答えを引き出される</li> <li>○自分の頭の中がスッキリする</li> <li>○次に何をすべきか、やることが明確になり、やる気が出る</li> <li>○図解がわかりやすい</li> <li>○他人の発表でも、自分の発表でも、問題点や意味、考え方の違いを知ることが出来る場になっている</li> <li>○いろいろな人の意見が聴け、自分の持っていない視点から物事を考えることができる</li> <li>○質疑応答が飛び交っていると自分も質問しやすくなる</li> <li>△質問がないとき、すぐに答えられないときにあせりを感じる</li> </ul>
<p>こうなればもっとよくなる</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他人の意見も幅広く聴く</li> <li>・全員が内容を理解できるようになる</li> <li>・明確な答えが見つかる</li> <li>・みんなが沈黙することがもっと少なくなれば</li> <li>・答えに詰まったときなど、整理する時間があれば</li> <li>・継続的なコーチングの環境があれば</li> <li>・全員の意見が飛び交う場であること</li> <li>・院生も黒板を使ってプレゼンをする</li> <li>・さらにしゃべりやすい環境になること</li> </ul>
<p>学生の追加コメント</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学生からの問題提起に対して、先生が道筋をつけて説明していただき、それを頭の中でいろいろと深めていけ、この方法によって、いろいろな視点からの考え方ができるようになると思っています。</li> <li>・学生はクライアント役ばかりだった気がするので、コーチ役も混ぜたらいいのではないのでしょうか</li> <li>・ゼミはとても質問しやすい環境でしたが、質問について考えていくうちに話についていけないときがありました。自分が発表のときは、質問されることで、それまで気にしていなかったことに気づきました。</li> <li>・自分の発表に対する先生のコメントを聞くという従来型のゼミとは別の新しいゼミ形式でしたが、自分が考えていることを質問により引き出され、それに答えることによって、自分の頭が整理でき、終わった後にスッキリした気分になることが多かったように思います</li> <li>・コーチングの質問は、一見、簡単な質問のように感じますが、実はそれが核心的な質問だったりする気がします。</li> </ul>

## (2) 尹先生報告資料

2008年7月16日 12時30分～ 於：経済学部 C-201 教室

### 大学院授業事例研究報告会

報告：尹春志

#### I. はじめに

山口大学経済学部に赴任して以来、約11年間にわたって、東アジア経済研究(A・B)ならびに年度によって演習を担当した。東アジア経済研究の履修者は、年度によってばらつきがあるものの、概ね3名～10名前後であり、過去に修士論文の指導を行なった大学院生は計7名程度である。今回は、講義進行および修士論文指導上感じている問題点と、その対処のために最近行なっている改善策について紹介したい。

#### II. 東アジア経済研究(A・B)

##### 1. かつての講義のスタイル

- (1) 授業で取り扱うテーマを事前に決め、日本語論文と英語論文を4～5本ずつ準備する。
- (2) 授業参加者1名を事前に指名し、内容の要約を報告してもらう。
- (3) 論文の内容に則して解説。
- (4) 成績評価は、出席と授業で行なう討論への参加程度で行なう。

##### 2. 最近の問題点

- (1) 英語論文を読めない受講生の増加
- (2) 事前配布したテキストも読んでこない学生が増加
- (3) 出席だけして何もしない学生が増加

##### 3. 過去2年の改善策

- (1) テキストの分量を半分程度に減らす(1テーマ3コマのペースで進める)。
- (2) 全員がテキストを読むことを義務付けるために、各テーマの初回にテキストの論点を参加者全員に列挙してもらう。
- (3) 授業参加者が指摘した論点についてのみ解説し、テキストに書かれていない内容を補足説明する。
- (4) 講義最終回に授業をつうじて学んだ点をA4ないしB4用紙1枚程度にまとめて報告させ、出席と合わせて成績評価の判断材料とする。

#### III. 修士論文指導

##### 1. かつての指導スタイル

- (1) 1年次：各自の修士論文のテーマに則した文献を指示し、その内容の質疑。
- (2) 2年次前期：修士論文初校の構成について指導し、各節ならびに項について文章化したものを提出してもらい、添削と内容の指導。合わせて参考文献の書き方、文献引用の仕方などを指導。
- (3) 2年次後期：前期の添削指導した草稿をもとに修士論文の推敲を進め、12月末には提出前最終稿をチェック。

##### 2. 最近の気になりはじめた点

- (1) 指示された文献のみを読み、自分で関連文献を渉猟しない。参考文献一覧も作らない。

- (2) 比較的容易に入手できる統計データも既存文献から切り貼りする。
- (3) 既存文献を列挙すれば、文献サーベイを行っているとは勘違いしている。
- (4) 既存文献をただ写しているために内容に矛盾があっても気付かない。
- (5) 指導中に口頭で説明した内容を検証することなく写す。

### 3. 現在行なっている対処策

- (1) 1年次の間は、基本的に手取り足取り細部にわたって教えるということはず、研究は自分で行なうものだという認識をもたせるよう努める。具体的には・・・
  - ① 修士論文のテーマに則して、課題を提示し、その内容を毎週もしくは隔週で報告させる。
  - ② 報告に対して質問を行い、答えられなければ、それを次回の報告の課題とする。また報告内容が既存文献の引用である場合には、その旨、明記するよう徹底する。
  - ③ 報告のなか統計データを用いている場合には、データの入手方法を指示し、自分でグラフや表を作るようにさせる。
  - ④ 1年前期末にそれまでに読んだもしくは収集した文献の一覧表を提出させ、文献の書き方などを指導する。
  - ⑤ 長期の休暇をはさむ場合には、休暇中の勉強の成果を必ず報告させる。
- (2) 2年次に入ってから、修士論文の内容を含めて指導している。具体的には・・・
  - ⑥ 春休みに修士論文初稿の構成を考えさせ、2年次前期初めの演習で報告してもらい、内容について具体的にアドバイスを行なう。
  - ⑦ 初稿構成にもとづいて、隔週で文章化したものを報告してもらい、内容の過不足、矛盾などを指摘・修正する。

以上が現在進行中の過程。以下今後の予定。

- ⑧ 夏季休暇明けに修士論文の構成を再検討したものを提出。
- ⑨ 11月末修士論文初稿提出、内容をチェックの上、演習で指導。
- ⑩ 12月冬季休暇前に最終稿提出と形式面でのチェック。

## 第3節 学生授業評価・教員授業自己評価

経済学研究科の学生授業評価アンケートの「履修登録者ありの科目」に対する実施率は38.5%で依然として低いレベルにある。これは殆どの授業が少人数であるため、実施に躊躇があるためと思われる。教員の自己評価の実施率も31.1%で低い数字に留まっている。

## 第 1 4 章 医学系研究科の F D 活動

### 第 1 節 概要

平成 2 0 年度に関しては、医学系研究科独自の F D 委員会を創設し、来年度以降の医学系研究科の F D 活動実践のための準備をすることに費やされた。

このため、医学系研究科所属教員は、それぞれが関連深い（実際に兼担で教育を担当している）各学部（あるいはその上部の研究科）の F D 活動に参加する形で F D 活動を行った。

具体的には医学部の学部教育を兼担している教員は医学部（第 8 章）の F D 活動に、理学部・工学部の学部教育を兼担している教員は理学部（第 7 章）・工学部（第 9 章）ないしは理工学系研究科（第 1 5 章）の F D 活動に、農学部の学部教育を兼担している教員は農学部（第 1 0 章）ないしは農学系研究科（第 1 6 章）の F D 活動に参加した。

具体的活動内容に関しては、それぞれの該当の章を参照されたい。

なお、平成 2 1 年度に関しては、委員会体制が整備されたことに伴い、独自ないし学部と共催の形で F D を企画実施していく予定である。



# 第 1 5 章 理工学研究科の F D 活動

## 第 1 節 理学系

平成 20 年度の理工学研究科理学系の主な F D 活動は次の 3 点である。

- (1) 全学 F D 研修会への参加
- (2) ピア・レビューの実施
- (3) 授業評価の実施

(1) の全学 F D 研修会への参加については、理学部の F D 活動の部分と重複するので、そちらを参照して頂きたい。ここでは、それ以外の活動内容について記す。

### 1. ピア・レビュー

理学系のピア・レビューは地球科学分野で行われた。

例年「地球科学セミナー I・II」に関して、教員・大学院生全員参加のもと「教室談話会」を設け、毎月 1 回、水曜日に 2～3 時間にわたって、研究発表と討論を行っている。毎回 M1 大学院生から 2 件、教員から 1 件の演題を提供し、相互に討論を行っている。教員は、個別の研究紹介ではなく、自分の専門分野の全般的レビューを行うよう努めている。

今年度実施した演題は下記のとおりである。

#### ○第 1 回：2008 年 5 月 28 日

- 後根裕樹 (M1)：沢の屈曲量と上流の長さとの比例関係
- 河野光宏 (M1)：持続した混濁流を示唆する塊状砂岩層
- 佐藤 彰 (M1)：パホイホイ溶岩の形態と定量機構
- 今岡照喜 (教員)：花崗岩の空間問題

#### ○第 2 回：2007 年 6 月 25 日

- 高崎善成 (M1)：DEM を用いた地すべり抽出
- 滝沢顕吾 (M1)：富山県宇奈月地域の地質と火成作用
- 長松 雄 (M1)：山陰古代三紀コールドロン群の岩石学的研究
- 三浦保範 (教員)：ナノ粒子・組織の特徴と重要性

#### ○第 3 回：2008 年 7 月 30 日

- 西塚 大 (M1)：山口県柳井地域室津半島の領家帯深成岩類の産状と岩石記載
- 平松 圭 (M1)：西日本の前期白亜紀火成活動：兵庫県篠山地域の例
- 永尾隆志 (教員)：阿武単成火山群・伊良尾台火山形成史—ストロンボリ式～準プリニー式噴火

#### ○第 4 回：2008 年 9 月 24 日

- 丸本和徳 (M1)：青野山火山群のアダカイト質安山岩～デイサイトの成因
- 光原奈美 (M1)：蛇行流路の幾何学的特徴
- 村上裕晃 (M1)：鳥根県南西部～山口県北東部の深部流体に関する地球化学的検討
- 宮田雄一郎 (教員)：高領域流れを示唆する堆積物重力流の堆積構造

## 2. 学生授業評価

大学教育センターのデータによると、平成 20 年度の学生授業評価実施実績は通年で、  
①理工学研究科 実施率 54.6%（実施対象科目数 293、実施科目数 160）  
②医学系研究科 実施率 61%（実施対象科目数 118、実施科目数 72）  
であるが、理学系のみを見た場合はどのようになるかは不明である。

## 3. その他の F D 活動

### (1) 大学教育機構との共催による F D 研修会

平成 20 年 6 月 25 日に大学教育機構と理学部・理工学研究科・医学系研究科の共催による F D 研修会が行われた。出席者は 47 名であった。以下にその報告を掲載する。

#### 理学部・理工学研究科（理学系）・医学系研究科（理学系）FD 研修会

大学教育センターと理学部・理工学研究科（理学系）・医学系研究科（理学系）との

教育改善 FD 研修会報告

主催：大学教育機構と理学部・理工学研究科・医学系研究科による共催

日程：平成 20 年 06 月 25 日（水）14:30～15:15

場所：理学部管理棟 4F

対象：全員（運営協議会出席者）

講師：吉田香奈（大学教育センター准教授）

内容：グラジュエーション・ポリシー、カリキュラムマップ、Web シラバス、学生授業評価、教員授業自己評価などの相互関係および組織的な取り組みの必要性について理解する

報告：運営協議会開始前の時間を利用して、吉田香奈・大学教育センター准教授より「山口大学における教育改善の枠組みについて－教育改善活動における PDCA サイクル」に関する説明が行われた。山口大学の PDCA サイクルの Plan では卒業生・修了生が備えておくべき資質であるグラジュエーション・ポリシー（GP）、GP の各項目をどの授業を通じて実現するかを明示したカリキュラムマップ、個々の授業の到達目標・成績評価方法を記した Web シラバスが作成されている。それに基づいて Do=授業が実施され、Check=学生授業評価・教員授業自己評価や授業参観（ピアレビュー）を行い、その結果を Action=教育改善へとつなげる流れになっている。PDCA サイクルが機能しているかどうかは法人評価の対象になっており非常に重要であるため、学科・コース単位で時々見直していただき、卒業時の質保証ができる教育課程となっているか確認してもらいたいという要請があった。特に GP・カリキュラムマップの見直しについては、数理科学科の事例を参考にしながら具体的な説明が行われた。



発行資料2

2019年度教育改善活動実施状況	
実施項目	実施状況
学生授業評価	実施済み
教員授業自己評価	実施済み
ピアレビュー	実施済み
カリキュラムマップ	作成済み
Webシラバス	作成済み
GP	策定済み

## (2) 大学の枠を越えた取り組み

2008年12月13日(土)～14日(日)に愛媛大学で「第2回理系大学教育に関する研究フォーラム」が開催された。1日目はテーマ「学士課程の教育改善・改革」に関する8件の講演、2日目はテーマ「大学院理学教育の充実を目指して」に関する6件の講演があった。山口大学からは、物理・情報科学科の朝日教授と生物・化学科の村藤准教授が参加し、それぞれ、「学部教育におけるカリキュラムおよび学習支援の現状と課題」、「山口大学の大学院教育改革—応用分子生命科学系専攻を例に」という演題で発表した。講演では中四国6国立大学理学部および理学系大学院における教育の取り組みが紹介され、活発な意見交換や討論が行われた。最後に「教育における大学間連携の今後について」というテーマで、どのような企画が可能であるか意見交換をした。

## (3) アカデミック・ハラスメント予防に関する研修会

平成20年10月1日の運営協議会の前に学部・研究科主催によるアカデミック・ハラスメント予防に関する研修会が行われた。出席者は51名であった。以下にその際に用いたパンフレットを掲載する。

**心当たりがありませんか？**  
**こんなことが、アカデミックハラスメントなどのトラブルにつながります！**  
**自分の学生との接し方を、今一度、冷静に考えてみましょう。**

平成20年10月 学部長

### 1. 常識的な時間範囲を超えて学生を拘束していませんか？

日常的に(例えば20時以降の)夜間や休業日に学生を実験やゼミなどで学生を研究室に拘束しているようなことはありませんか？もちろん、学生が自主的に夜間や休日に研究活動を行うことは自由です。(ただし、夜間や休日に実験などを行う場合は届け出ることが規則で義務付けられています。)[「理系の学生だから夜も休日も研究に励んで当たりまえだ。」のような考え方は現在の一般社会では通用しません。

やむを得ない理由で休日などにセミナー、その他研究活動を行う場合、あるいは行うように指示する場合も、

- ・学生にその理由をきちんと説明し、その必要性を納得させ、学生の了承を得る。
- ・なるべく日常的にならないように配慮する。
- ・他の曜日を休みに振り替えるなど、学生の健康維持や日常生活の保障のため配慮をする。などを行っていますか？この場合、学生の承諾があればすべてよしというものでもありません。教員と学生の立場の関係では学生は弱者です。したがって、学生からすれば「納得はしていないが拒否しにくいから承諾した形になってしまった。」という状況に陥り、結果として**“強制”**になってしまう可能性は十分あります。教員はその辺の事情を考慮し、学生への言い方が高圧的にならないように注意する必要があります。

### 2. 学生の就職活動の時間を奪っていませんか？

「指導教員から就職活動の時間が与えてもらえない。」という学生の不満が聞こえてきます。教員から見れば、「就職活動を効率的に行っていない。就職活動を理由に研究や学習を怠けている。」と思われる学生が一部いるかもしれません。しかし、そうではない学生もいます。教員は以下のことを理解し、学生の就職活動に可能な限り配慮することが必要です。

- ・ほとんどの学生にとっては、就職活動は初めての経験であるので、要領を得ていないのは当然である。就職活動をしながらその要領を得ていくものである。
- ・自分の将来のことにかかわることなので、学生は就職に関して慎重であると同時に最優

先項目である。

・学生は就職に関して神経質になり、うまくいかないと落ち込んでしまったり、焦ったりしてしまう。

教員は、学生の就職活動で研究の進捗が滞ることを危惧し、「就職活動のために研究指導ができない。」と主張することがあるようです。しかし、学生にとっては“就職”は自分の今後の人生に関わる重要なことです。学生の立場に立ってよく考え、就職活動を効率的に行えるように配慮し、適切な助言を与えましょう。学生にとっては大学の研究室はあくまでも社会に旅立つ過程での通過点です。

### 3. 研究指導に関して、研究計画などを学生に強引に押し付けていませんか？

学生を自分の研究を遂行するための“労働力”と考えてはいませんか？学生は決して労働者ではなく、研究を通して教育を受ける立場にいます。教員はそのことをきちんと理解し、研究計画などについても学生の自主性を尊重し、それが誤っていれば正しい方向に導いてあげることが必要です。最初から研究テーマ、研究計画や方法などを強引に押し付けるなど本人の自主性を認めないことがあってはなりません。

### 4. すべての大学院生が研究者を目指していると思っはいませんか？

「大学院に進学するのだから、研究者になりたいのであろう。→研究の世界で生きていくためにはこの程度のことはできて当然。」という勝手な論理を作っていませんか？現在の大学院への進学状況を考えれば、大学院進学者すべてが研究者になるわけではありませんし、それを希望しない学生も多く存在することは確かです。「大学院に進学して研究をやりたい。もう少し深く学びたい。」ということと、「研究者になりたい。」ということとはかならずしも同じではありません。教員のほとんどは研究者になりたくて大学院に進学した経験を持っているので、“誤解”が生じやすいのですが、決してそうではないことを認識し、行き過ぎた指導にならないように注意する必要があります。

### 5. 教育指導を怠っていませんか？教育指導について、必要以上に学生間で差をつけていませんか？

研究に関して、日常的に助言指導をしていますか？あるいは、常に「自分で考えろ。」のような、丸投げと受け止められるような指導をしていますか？学生は授業料を支払った上で教育を受けている立場であり、その限りでは、教員には必要な教育指導や研究に関する助言指導をする義務があります。各学生の習熟度の段階に合った適切な指導をすることを心がけることが重要です。

自分と意見が合わない学生などに対して、教育指導を行わないとか、研究に関する助言指導の頻度が低いとか、学生間で必要以上に教育指導に差があってははいけません。学会発表の指示なども、個々の学生に対して、発表する理由あるいは発表できない理由をきちんと説明する必要があります。学生の不公平感や教員と学生の信頼の欠如にもつながりますし、研究室全体の雰囲気も悪くなります。

### 6. 学生に対して人格を否定するような発言、高圧的なものの言い方をしていませんか？学生とコミュニケーションをとることに努めていますか？

学生に教育指導をする際に適切でない言い方や言葉使いをしていませんか。また、高圧的な言い方をしていませんか。学生個々、同じことを言っても受け止め方は違います。教員は自分の尺度だけで物事を判断せず、広い視点に立って冷静に判断し、発言することが求められます。いろいろな受け止め方をする学生がいることを認識する必要があります。

学生とのコミュニケーションをとるということも大切です。半年に1度は学生と二人で時間をかけて日常の研究活動、学習活動、学生の希望、学生の将来などについて、話をする機会を設けるなどの配慮が必要です。教員側としては十分にコミュニケーションが取れていると思っはいても、実はそうではなかったという事例も多くあります。大学院生の場合には副指導教員など他の教員と連携しながらの助言指導を活用することも大切です。例えば、定期的に指導教員以外の教員が学生と面談することも有効です。

### 学生の不満のこえ

・あまり指導してもらえなかったことと、テーマが何度も変わり、納得のいく実験をさせてもらえなかったこと。自分の与えられたテーマは、教官には魅力がなかったようで、続けたくても続けさせてもらえず、何度もテーマを変えられました。テーマの変更になんて納得しないとテーマを変えないと卒業させないと言われ、1～2ヶ月というわずかな期間で、新たに実験や修論をやらなくてはならなくなり、大変困難な状況でした。教官の期待した結果が得られなかった実験はすべて自分の実験の技術が悪いせいだと言われ、実験自体を失敗と見なされ、実験に必要なものを買ってもらえなかったり、性格や人間性も否定され、研究や学校生活を行う上で、精神的にも非常に辛い状況で論文を仕上げなければなりませんでした。

・どこの研究室かは書きませんが指導教官の態度が高圧的だった。大学の教官は研究者であると同時に指導者としての立場があると思う。もう少し生徒の立場にたって考えて欲しい。私の指導教官はとても親切で尊敬のできる人でよかったです。ただ、友人のところはひどい教官だった。卒業する私達に何も言ってくれなかった先生のことです。

・大学院生の就職活動は研究も並行するため時間がありません。そのあたりの配慮が足りない先生方がいるので、学生の立場を考えてほしい。山口で就職活動ができないことが多く、大阪や東京など移動するために、ほとんど研究室に行けず実験が進みません。一部の先生は研究を優先してほしいようですが、就職活動時期は限られています。就職活動が終わってからも十分に実験はできると思います。遊んでいて実験が進まないのならば、文句などを言われても仕方ないとは思いますが、就職活動をしていて実験をしると言われても無理があります。

就職活動と実験のどちらが大切かと尋ねられれば、今の時期では、就職活動が大切だと答えます。就職活動は精神的にも辛いときもあるし、移動する交通費もかかります。私は今10万円以上使いました。貯金は、ほとんどなくなりました。地方の学生にとって時間とお金が、どれだけ大切かを理解してほしい。お金をくださいとは言いませんが時間はください。終わってから一生懸命に研究をするつもりです。しかし、就職活動時期に圧力をかけられれば満足はいく活動が出来ません。

あなた方のために実験をしているのではない。研究室に勤めているわけではなく、お金を払って学びにきているのです。それなのに実験技師のように扱われ、実験が進まないからということでは圧力をかけられても困る。

研究業績がいいからいい指導教官とは限りません。研究だけがしたいのならば、民間の研究所に行ってください。大学教授は素晴らしい研究者であると同時に私達を育て、指導してくれる人物でもあると思っています。

厳しいことを私達に言ってくれるのはありがたいと思っていますが、私達のことを考えていない発言や態度には正直なところ残念に思っています。

と直接言いたいのですが、それで成績をCにされると困るのでここに投稿しました。後輩たちのために。

\* \* \* \* \*

平成 20 年度 理工学研究科 理学系 FD 委員会委員

加藤崇雄（委員長）、白石清、村上柳太郎（教学委員会委員）、久田見守（数理科学分野）、朝日孝尚、山本隆（物理・情報科学分野）、岩尾康宏、田頭昭二（生物・化学分野）、今岡照喜（地球科学分野）

## 第2節 工学系

平成20年度の理工学研究科工学系の主なFD活動は、次の3点である。

- (1) 全学FD研修会への参加
- (2) 授業評価表彰
- (3) 公開授業

全学FD研修会への参加については、工学部のFD活動の部分と重複するので、そちらを参照して頂きたい。理工学研究科工学系では、本年度より新たに授業評価表彰を始めた。学生による授業評価は既に段階的に実施しており、昨年度はほぼ全部の授業で行われた。この結果を受けて、優秀な授業を表彰することでこれを讃えると共に一層の改善を促し、また他の授業への波及効果を期待している。

以下に、理工学研究科工学系の優秀授業表彰一覧を示す。

### 平成19年度優秀授業表彰一覧（理工学研究科工学系）

番号	開設科目名	担当教員名	専攻	学年	表彰種類
1	微分方程式学特論	岡田真理	数理科学	1・2	最優秀授業
2	破壊力学特論	大木順司	機械工学	1	最優秀授業
3	機械音響工学特論	小嶋直哉	機械工学	1	優秀授業
4	コンポジット材料学特論	合田公一	機械工学	1	優秀授業
5	構造材料学特論	吉武勇	社会建設	1	最優秀授業
6	構造力学特論	麻生稔彦	社会建設	1	優秀授業
7	施設設計工学特論	高海克彦	社会建設	1	優秀授業
8	高分子化学特論	大石勉	物質化学	1	最優秀授業
9	結晶工学特論	小松隆一	物質化学	1	優秀授業
10	表面材料化学特論	酒多喜久	物質化学	1	優秀授業
11	固体触媒特論	今村速夫	物質化学	1	優秀授業
12	機能性高分子材料特論	比嘉 充	物質化学	1	優秀授業
13	固体化学特論	中山則昭	物質化学	1	優秀授業
14	材料分析学特論	中塚晃彦	物質化学	1	優秀授業
15	スピン応用学特論	浅田裕法	電子デバイス	1	最優秀授業
16	固体物性論特論	嶋村修二	電子デバイス	1	優秀授業
17	半導体光物性特論	山田陽一	電子デバイス	1	優秀授業
18	応用物性学特論	荻原千聡	電子デバイス	1	優秀授業
19	知的財産権特論	三木俊克, 原田直幸	電子デバイス	1	優秀授業
20	センシングシステム工学特論	田中正吾	電子情報システム	1	最優秀授業
21	電子計測特論	西藤聖二	電子情報システム	1	優秀授業
22	情報ネットワーク特論演習	山鹿光弘	電子情報システム	1	優秀授業
23	情報ネットワーク特論	山鹿光弘	電子情報システム	1	優秀授業
24	電力変換工学特論	田中俊彦	電子情報システム	1	優秀授業
25	電気システム制御特論	若佐裕治	電子情報システム	1	優秀授業

26	電子計算機特論	山鹿光弘	電子情報システム	1	優秀授業
27	人間環境工学演習	中村安弘	感性デザイン	1	最優秀授業
28	環境エネルギー工学特論	中村安弘	感性デザイン	1	優秀授業
29	デジタル映像処理特論	長 篤志	感性デザイン	1	優秀授業
30	廃棄物処理工学特論	今井剛	環境共生	1	最優秀授業
31	都市防災システム特論	瀧本浩一	環境共生	1	優秀授業
32	環境共生学原論Ⅰ	兵動正幸 他	環境共生	1	優秀授業
33	精密分離プロセス工学特論	中倉英雄	環境共生	1	優秀授業
34	都市環境工学特論	今井 剛	環境共生	1	優秀授業
35	持続的防災システム特論	村上ひとみ	環境共生	1	優秀授業

本年度から学部と同様に大学院授業でも公開授業を始めた。公開した授業を下表にまとめる。

## 平成20年度(前期)公開授業一覧 前期公開授業実施期間

6月9日(月)～7月18日(金)

専攻	授業科目名	授業実施者		実施曜日又は日時
		職	氏名	月 日
機械工学	システム計算工学	教授	小河原 加久治	6月 30日
機械工学	システム計算工学	教授	小河原 加久治	7月 7日
社会建設工学	応用弾性学特論	教授	進士 正人	6月 24日
社会建設工学	応用弾性学特論	教授	進士 正人	7月 1日
物質化学	結晶工学特論	教授	小松 隆一	6月 17日
物質化学	結晶工学特論	教授	小松 隆一	6月 24日
電子デバイス工学	光電子デバイス工学特論	教授	只友 一行	6月 16日
電子デバイス工学	光電子デバイス工学特論	教授	只友 一行	6月 23日
電子情報システム工学	波動伝搬工学特論	准教授	堀田 昌志	6月 26日
電子情報システム工学	波動伝搬工学特論	准教授	堀田 昌志	7月 3日
感性デザイン工学	基礎デザイン特論	准教授	木下 武志	6月 18日
環境共生系	環境共生学原論Ⅰ		工学系教員	水曜日

## 平成20年度(後期)公開授業一覧 後期公開授業実施期間

11月25日(火)～1月26日(月)

専攻	授業科目名	授業実施者		実施曜日又は日時
		職	氏名	月 日
機械工学	熱機関工学特論	准教授	三上 真人	11月 27日
機械工学	熱機関工学特論	准教授	三上 真人	1月 8日
社会建設工学	施設設計工学特論	准教授	高海 克彦	火曜日
物質化学	高分子化学特論	教授	大石 勉	火曜日
電子デバイス工学	固体物性論特論	教授	嶋村 修二	11月 26日
電子デバイス工学	固体物性論特論	教授	嶋村 修二	12月 3日
電子デバイス工学	固体物性論特論	教授	嶋村 修二	12月 17日
電子デバイス工学	固体物性論特論	教授	嶋村 修二	12月 24日
電子情報システム工学	情報ネットワーク特論	教授	山鹿 光弘	火曜日
感性デザイン工学	空間造形学特論Ⅱ	講師	真木 利江	11月 27日
感性デザイン工学	空間造形学特論Ⅱ	講師	真木 利江	12月 4日
環境共生系	地盤防災工学特論	教授	兵動 正幸	月曜日

大学院授業に対する授業参観はまだ定着していないので、のべ参加者は前期2名、後期0名と低調であるが、今後の活動に期待したい。



# 第 1 6 章 農学研究科の F D 活動

## 第 1 節 はじめに

### 1. 平成 2 0 年度 F D 計画

#### ( 1 ) セミナー（農学部公開講演会）の実施

内容：農学研究科の各教員が、農学部全教員と学生および農学研究科と医学研究科の大学院生に対して研究紹介を行い、意見交換等により各教育研究分野の活性化と分野間の相互理解の促進を図る。

#### ( 2 ) 教員による授業自己評価の実施

内容：農学研究科の授業を担当する教員に対して、実施した講義、実験等についての自己評価アンケートを実施し、教員が良い授業を実施するための自己啓発に役立てる。

#### ( 3 ) 学生による授業評価の実施

内容：農学研究科の授業を受講した学生に対して、年度末に講義、実験等についての評価アンケートを自由記述形式にて実施する。集計結果は、授業全般に対する学生の意見・要望として、今後の授業改善の参考とする。

#### ( 4 ) 大学教育センターによる農学研究科の教育改善 F D 研修会への参加

内容：農学部拡大教授会前に実施される標記研修会に参加する。

#### ( 5 ) 全学 F D 研修会への参加

内容：全学で実施される研修会に参加する。

### 2. 活動および報告内容について

農学研究科の F D 活動は、平成 20 年度よりはじめて上記のような計画をたて、「セミナー」、「授業自己評価」、「全学 F D 研修会」を中心に実施された。

以下にその具体的実施状況を報告し、それぞれについて総括するとともに、今後の問題点を指摘する。

## 第2節 セミナー（農学部公開講演会と共催）

### 1. 開催セミナー一覧

	開催日	演題	講師	分野
1	5月28日	糖タンパク質の品質管理における糖鎖機能の解明 －鶏卵白オボアルブミンをモデルとして－	松富直利	生物機能科学分野
2	6月25日	香気成分の化学－最近の進展とその成果－	赤壁善彦	生物機能科学分野
3	7月17日	有用微生物の探索 －環境保全への利用を目指して－	藤井克彦	生物機能科学分野
4	10月6日	西アジア原産作物「ムギ」の有望性と諸形質 －育種を目指して－	丹野研一	生物資源環境科学科
5	10月30日	脱窒菌を利用した亜酸化窒素発生の抑制	横山和平	生物機能科学分野
6	11月27日	植物は何のために匂いを出す？ －揮発性化合物による化学生態学－	松井健二	生物機能科学分野
7	1月15日	混合機能オキシダーゼによる還元当量の受容と分子内伝達経路/機構	右田たい子	生物機能科学分野

### 2. セミナー内容要旨

#### (1) 「糖タンパク質の品質管理における糖鎖機能の解明」

##### －鶏卵白オボアルブミンをモデルとして－

タンパク質は翻訳後修飾により、遺伝情報を超えた新たな機能を獲得し、多彩な細胞機能を発揮することができるようになる。翻訳後修飾の中心的なものの一つに糖鎖修飾があり、全タンパク質の約50%以上が何らかの糖鎖付加を受け、タンパク質機能に必須な役割を果たしていることが知られている。特に、N-結合型糖鎖は、フォールディング、輸送、仕分け、細胞認識等でかなめ役割をしている。一方で、糖鎖の異常がタンパク質のアンフォールディングを生じ、様々な疾病（とくに、アンフォールディング病）を引き起こすことも明らかになりつつある。こうして、糖タンパク質の生合成や分解などの異常によるヒトの疾患の原因究明の点からも、糖鎖の機能解明が重要である。

N-結合型糖タンパク質オボアルブミンは、その一次配列において2個所（Asn-292、Asn-311）にN-結合型糖鎖認識配列を持っている。しかし、鶏卵白中では、オボアルブミンはAsn-292にのみ糖鎖を持つモノグリコシル化型として存在する。一方、Katoらは、オボアルブミンが輸卵管で一時的にジグリコシル化型として発現されていることを報告している（Arch. Biochem. Biophys., 1986）。さらに、Suzukiらは、輸卵管中のペプチドN-グリカナーゼがオボアルブミンのAsn-311に付加した糖鎖を特異的に切断することを報告し、卵白中のオボアルブミンがモノグリコシル化型で存在する理由を示した（Proc. Natl.

Acad. Sci., 1997)。しかし何故、Asn-311に糖鎖が付加したジグリコシル化オボアルブミンが合成され、その後部位特異的に切断されて卵白に移行するのだろうか。また、卵白中にオボアルブミンの非グリコシル化型は検出されていないことから、糖鎖修飾とタンパク質の機能とが密接に関係していることを示唆するが、ジグリコシル化型は卵白中には存在しないし、輸卵管でも一時的にしか存在しないため、オボアルブミンでの糖鎖機能は不明のままである。一方、最近、Yoshidaらは、糖タンパク質のN-結合糖鎖が細胞質内の糖タンパク質のクリアランスのタグとして機能していることを示し (Nature, 2002)、新たな糖鎖機能を見い出している。

筆者らは、酵母発現系を用いて、オボアルブミンの発現・分泌を研究する中で、モノグリコシル化型に加えてジグリコシル化オボアルブミンが分泌されることを見い出した。これはオボアルブミンの糖鎖機能を解明するうえで格好の材料である。ここでは、酵母発現系において、モデル糖タンパク質としてオボアルブミンのフォールディングや分泌における糖鎖機能を紹介する。

## (2) 「香気成分の化学」-最近の進展とその成果-

生物より放出される香気成分の分析、単離・構造決定、生合成メカニズムの解明、およびその応用に関する研究を系統的に行っている。

今回は、

- 1) 海洋を想起させる香気成分に関する研究
- 2) アレロケミカルの探索に関する研究
- 3) 新規合成方法の確立とその応用に関する研究
- 4) カンキツ類の香気成分に関する研究
- 5) その他 竹酢液の香気成分に関する研究

といった、最近2、3年の香気成分の化学に関する研究の進展ならびにその成果を述べる。

すなわち、1)では、海産紅藻より新規な海を想起させる香気成分の単離・同定に成功し、その香気特徴に関する知見を得た。2)では、海産緑藻に障害を与えると、有意に増加する揮発成分を発見し、その構造を決定した。また、貝の摂餌行動において、海藻より放出される成分がアレロケミカルとして機能していることを実証した。3)では、香気成分の生合成メカニズムの解明の結果、推定された酵素反応を合成に応用して、新規な一炭素還元反応を確立した。4)では、山口県オリジナル柑橘品種において、はじめてその香気成分の同定を行い、その一方で、親と新品種間での香気成分を直接比較して、その香気特徴を究明した。また、5)では、これまで正確な分析例のない竹酢液の同定を行い、その成分を明らかにした。

## (3) 「有用微生物の探索」-環境保全への利用を目指して-

環境微生物学研究室では、産業や環境浄化に利用可能な性質を持つ微生物を探索し、その特徴を解析している。本セミナーでは以下の研究成果を紹介する。

- 1) セルロース系農産廃棄物の分解を担う微生物

化石燃料に替わる新たなエネルギー資源としてエタノールが注目されつつあるが、原料穀物の供給不安定から、セルロース系農産廃棄物（CB）を原料としたエタノール生産に期待が寄せられている。CBを糖化する場合は酸処理等の“前処理”が必須であるが、技術的課題が多く残されている。演者らはCBを含む培養液で環境試料を培養し、これらを炭素源として生育する微生物を分離した。分離株はいずれもセルロース、ペクチン、マンナンといったCBの構成多糖類に対して分解能を持ち、系統分類から糸状菌であると示唆された。

## 2) アスタキサンチンを生産する微細藻類

微細藻類は一般に、光合成で自身の生育に必要な有機物を生合成する。高等生物には生合成できない生理活性物質を生産するものもある。演者らは下水処理場からアスタキサンチン（AX）を生産する微細藻類を分離した。AXは抗酸化活性や色揚げ活性から食品・医薬・農林水産分野で利用されつつある。本株はヘマトコッカス（既知のAX生産微生物）ほどの生産能はないが、無機塩類培養液での増殖が良好であり、培養条件の特別な制御も不要であることから、ヘマトコッカスに替わる天然AX生産微生物として研究を進めていく価値があると考えられた。

## （4）「西アジア原産作物『ムギ』の有望性と諸形質」

### -育種を目指して-

日本原産の農作物というものはほとんどない。いま食卓にのぼる農作物の多くは、もとは世界各地のさまざまな環境に生えていた植物だった。そのため日本で栽培するには、品種の改良や栽培法の工夫など、乗り越えるべきハードルがいくつもある。とりわけコムギ、オオムギなどのムギ類は、冬に降水が多く夏に乾燥する地中海性気候の西アジアに原産する農作物であり、夏季降雨の日本で安定生産するには多くの課題が残されている。演者は、ムギ類の収量性・品質にかかわる諸形質について、その遺伝のさまざまな側面を明らかにすべく研究を行ってきた。おなじコムギであってもその中にはさまざま変異が存在し、それら変異形質の特徴を明らかにすることによって、将来の育種・生産のための有用な知見を得ようというものである。本発表ではこれまで演者がたずさわってきた①オオムギの二条・六条形質の連鎖地図の作成と起源地解明、②東アジア・モンスーン域にのみ存在するオオムギ半矮性（「渦性」）の原因遺伝子の解明、③原始タイプのコムギである一粒系、二粒系コムギのシリアでの生産力栽培試験、④考古遺跡から出土する植物からみる作物進化と農耕のはじまり、について紹介する。またいくつかの農作物を新たに日本に導入するための育種・栽培上の問題点、中山間農業にその技術を活かす展望などについて考察する。

## （5）「脱窒菌を利用した亜酸化窒素発生の抑制」

亜酸化窒素（ $N_2O$ ）は、 $CO_2$ の300倍の温室効果を持つと評価されている。大気中の濃度は $CO_2$ に比べはるかに低いですが、農耕地からの発生量の比率が高く、堆肥等生物系廃棄物の農耕地投与が更に進めば農業全体としての寄与は更に高くなる。土壌からの $N_2O$ 放出は、嫌気条件の強い湛水状態の水田よりも畑状態から多いことが分かってきた。土壌微生物の中で $N_2O$ を生成する微生物として、脱窒菌、硝化細菌および一部のカビが知られている。

脱窒菌は、低あるいは無酸素条件化で一連の窒素酸化物を電子伝達系の最終電子受容体として利用する細菌群で、末端酸化酵素として働く一連の脱窒系酵素を合成する。N<sub>2</sub>O は NO の還元により生成し、一部の脱窒菌は N<sub>2</sub>O を最終産物として放出するが、一般には亜酸化窒素還元酵素 (NOS または N<sub>2</sub>O R) により N<sub>2</sub> にまで還元される。

N<sub>2</sub>O を消去する生物学的プロセスは、脱窒菌の NOS による還元過程しか知られていない。この過程を利用できれば、畑土壌から発生する N<sub>2</sub>O を N<sub>2</sub> に還元することができるはずである。ところが、NOS は脱窒系酵素の中で最も酸素感受性が強く僅かな酸素の存在で阻害されるといわれている。このため、酸素濃度の異なる微小部位が混在する畑状態では脱窒菌は主に N<sub>2</sub>O 生産者として働くことになる。

#### 【好氣的脱窒】

1990 年代に廃水処理層から単離された *Thiosphaera pantotropha* (現在は、*Paracoccus pantotrophus*) は、大気条件で、分子状酸素と窒素酸化物を最終電子受容体として 1:1 の比で利用し、亜硝酸イオンを N<sub>2</sub> にまで還元できる、即ち、好気条件下で NOS が活性な好氣的脱窒菌である。このような特性を持つ好氣的脱窒菌ならば、畑土壌でも N<sub>2</sub>O を還元できる可能性がある。山大内の牛糞堆肥から *Pseudomonas* sp. CM1、*Paracoccus denitrificans* 96 及び 97 の 3 株を単離し解析を進めている。

#### 【植物内生脱窒菌】

土壌中に外来微生物を接種して定着させることは非常に難しいとされている。この上に、脱窒能を安定して発現させるためには基質を供給し続けねばならないという問題が生じる。これを解決するために、エンドフィティック窒素固定菌に倣って、植物体に内生する脱窒菌を利用することを考えている。これならば、植物が供給する硝酸イオンを誘導物質、光合成産物をエネルギー源として脱窒系酵素が誘導される可能性がある。

野外のいくつかの植物に脱窒菌あるいは硝酸還元菌が内生することを確認した。次に、*Pseudomonas* sp. CM1 をノシバに感染させ、大気中の N<sub>2</sub>O 還元系の作出に挑戦している。

### (6) 「植物は何のために匂いを出す？」

#### -揮発性化合物による化学生態学-

植物は花だけでなく葉や根からも様々な匂いを出している。こうした匂いは植物が光合成でせっせと貯め込んだ炭素源とエネルギーを消費して出されるので、意味もなく出しているは無駄となるはずである。最近の研究で植物がこうした匂い物質を外界とのコミュニケーションに巧みに利用していることが明らかになってきた。

今回のセミナーでは匂い (揮発性化合物) により構築される植物を中心とした生態ネットワークについて私たちの研究成果を含めてお話しする。

### (7) 「混合機能オキシダーゼによる還元当量の受容と

#### 分子内伝達経路/機構」

研究室の主要テーマとして取り組んで来た、ヘムオキシゲナーゼ (モノオキシゲナーゼで、混合機能オキシダーゼサブグループのメンバー) によるヘム分解機構を、「還元当量 (電

子)の利用」という観点から紹介する。このグループの酵素反応には電子がなぜ必要で、どのように使われるのかを物理化学的に解説し、さらに現在競争で取り組まれている、「電子をどのようにして受け取り、どのように活性部位へ伝えてゆくか」について、私達を含めたいくつかのグループによる研究を比較しながら紹介する。グループ間の方法論・考え方の違いと、結論の類似点、相違点について理解していただければうれしく思う。

今年度は、「3年生にもわかりやすく」、という教育的配慮に満ちたセミナーが多かったように思う。年度最後のセミナーになるのではないかと予想し、あえて“わかりやすくはないテーマ”で締めくくろうと思う。時には硬い食物を取るのも悪くない(必要な)のではないだろうか。生命科学は幅が広く、こんな探求の仕方をしている研究者の一団(生物無機化学分野)もいるということを知っていただければと思う。

### 3. セミナーの総括

農学研究科のセミナーは、農学部全教員と学生および農学研究科と医学研究科の大学院生を対象に行われてきた農学部公開講演会のうち、農学研究科教員が担当するものを、新たに研究レビューとして認定したものである。

平成20年度は上記のように7回実施され、多数の教員と院生・学生が参加し、活発な質疑が行われた。来年度以降も本年度と同程度の回数で実施されることにより、各教員および研究科全体の研究活動の活性化につながると期待される。

## 第3節 教員授業自己評価

### 教員授業自己評価の総括

農学研究科の教員授業自己評価については、平成21年4月17日(入力締め切りは4月末日)の時点での入力率が、55%と山口大学大学院の全研究科のなかでも最も高かった。入力締め切りまでに最終的にどの程度の教員が入力するか把握できないが、後期授業の入力数が増加することを考えるとまだ増加するであろうと予想される。

## 第4節 学生授業評価

### 1. 農学研究科の学生授業評価

農学研究科では、授業実施後に自由記述式の授業評価アンケートを実施した。アンケートでは、「このアンケートは、よりよい授業を作るために教員が参考にする資料の作成を目的に行います。それ以外の目的でこのアンケートを利用することはありません。また、成績評価とは無関係です。個人情報と同等の安全管理措置を講じますので、安心して本年度受講した講義(非常勤講師による授業は除く)に関する感想や要望等を率直に記述してください。」の説明とともに、「授業科目名」「授業教員名」とあわせて学生の「感想・要望」を自由に記述させた。その結果、対象7科目に対し2科目について回答があり、実施率は28.6%であった。大学院の講義・実験は、少人数で実施されることが多いため、このよう

な形態の質問になり、さらに評価者個々のプライバシーを保護する意味でも、その結果を報告書の形で残しにくい点もあるが、これら評価は授業実施教員にとって授業改善に大いに役立つものとなったはずである。

## 2. 医学系研究科（農学）の学生授業評価

### (1) 講義

#### 質問 1

学生：あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？

（括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です）

回答：1) 90%以上（14回以上） 2) 80～90%（12～13回）

3) 60～80%（9～11回） 4) 40～60%（6～8回） 5) 40%未満（6回未満）

	回答選択率 (%)						回答平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	83.3	11.1	5.1	0.0	0.4	-	4.8

回答平均値は、1) を5点、2) を4点、3) を3点、4) 2点、5) を1点として計算した。

#### 質問 2

学生：あなたはこの授業において、時間外学習（予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強）をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。

回答：1) 3時間程度または以上 2) 2時間程度 3) 1時間程度

4) 30分～50分程度 5) 30分未満

	回答選択率 (%)						回答平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	21.0	18.9	18.5	12.4	29.2	-	2.9

#### 質問 3

学生：教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない

4) あまりそう思わない 5) そう思わない

	回答選択率 (%)						回答平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	63.7	23.1	10.7	1.7	0.9	-	4.5

#### 質問 4

学生：専門用語や理論的な話は、適切に説明されましたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない

4) あまりそう思わない 5) そう思わない

	回答選択率 (%)						回答平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	65.2	25.8	7.7	1.3	0.0	-	4.5

### 質問 5

学生：テキストやプリントなどの教材が、効果的に使われましたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない 6) この授業は該当しない

	回答選択率 (%)						回答平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	58.6	23.3	13.4	2.6	0.0	2.2	4.4

### 質問 6

学生：板書やOHP、ビデオ、コンピュータなどが、効果的に使われましたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない 6) この授業は該当しない

	回答選択率 (%)						回答平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	63.8	23.7	9.9	1.3	0.0	1.3	4.5

### 質問 7

学生：学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない

	回答選択率 (%)						回答平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	61.2	25.9	12.5	0.4	0.0	-	4.5

### 質問 8

学生：あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない 6) 答えられない

	回答選択率 (%)						回答平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	36.8	32.9	21.2	0.4	0.4	8、2	4.1

### 質問 9

学生：あなたは、この授業の内容を理解できましたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない

	回答選択率 (%)						回答平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	41.8	42.2	13.4	2.2	0.4	-	4.2



### 質問 1 0

学生：この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない

	回答選択率 (%)						回答平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	64.1	24.7	9.9	1.3	0.0	-	4.5

## (2) 演習・実験・実習

### 質問 1

学生：あなたは、この授業にどれくらい出席しましたか？

(括弧の数字は15回授業の場合の出席回数参考値です)

回答：1) 90%以上 (14回以上) 2) 80~90% (12~13回) 3) 60~80% (9~11回)  
4) 40~60% (6~8回) 5) 40%未満 (6回未満)

	回答選択率 (%)						回答平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	85.3	9.2	5.5	0.0	0.0	-	4.8

### 質問 2

学生：あなたはこの授業において、時間外学習 (予習・復習・宿題やレポート作成・試験勉強) をどれくらい行いましたか？ 総時間を平均し、授業1回あたりの時間に換算してお答えください。

回答：1) 3時間程度または以上 2) 2時間程度 3) 1時間程度  
4) 30分~50分程度 5) 30分未満

	回答選択率 (%)						回答平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	29.4	22.0	16.5	9.2	22.9	-	3.3

### 質問 3

学生：教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない

	回答選択率 (%)						回答平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	79.8	10.1	10.1	0.0	0.0	-	4.7

### 質問 4

学生：演習・実習・実験の方法に関する指示は、わかりやすく説明されましたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない

	回答選択率 (%)						回答平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	72.5	16.5	11.0	0.0	0.0	-	4.6

### 質問 5

学生：教材または器材が使用された場合、それらは適切に活用されましたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない 6) この授業は該当しない

	回答選択率 (%)						回答平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	70.6	15.6	13.8	0.0	0.0	0.0	4.6

### 質問 6

学生：学生の疑問や質問への対応は、充分でしたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない

	回答選択率 (%)						回答平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	75.2	14.7	10.1	0.0	0.0	-	4.7

### 質問 7

学生：教員から手本・示範が示された場合、それらは適切でしたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない 6) この授業は該当しない

	回答選択率 (%)						回答平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	65.1	19.3	13.8	0.0	0.0	1.8	4.5

### 質問 8

学生：授業中は、演習や実習に集中できる雰囲気でしたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない

	回答選択率 (%)						回答平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	73.4	17.4	8.3	0.9	0.0	-	4.6

### 質問 9

学生：あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない 6) 答えられない

	回答選択率 (%)						回答平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	42.2	27.5	22.0	0.9	0.0	7.3	4.2

### 質問 1 0

学生：あなたは、この授業の内容を理解できましたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない

	回答選択率 (%)						回答平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	50.9	35.8	11.3	1.9	0.0	-	4.4

### 質問 1 1

学生：この授業は、あなたにとって満足のいくものでしたか？

回答：1) そう思う 2) ややそう思う 3) どちらとも言えない  
4) あまりそう思わない 5) そう思わない

	回答選択率 (%)						回答平均値
	1	2	3	4	5	6	
学生	63.6	30.7	4.5	1.1	0.0	-	4.6

## 第 5 節 全学 F D 研修会

### 1. 参加教員一覧

開催日	研修会種別
7月29日	第1部：講演「よりよい初年次教育の実現のために」 第2部：「初年次教育指導ワークショップ研修会」
8月26日	「学生参加方授業の展開方法」
9月19日	メンタルヘルスの手法を学ぼう 「大学生の自殺問題－教職員の対応上の留意点－」
9月25日	「学習意欲を高める問題解決型の授業展開－その方法と展開－」
3月18日	「最近の学生の実態と社会人基礎学力の養成」
3月18日	「事例から学ぶ危機対応-自殺のポストベンションについて-」

## 第 6 節 まとめ

平成 20 年度の農学研究科および医学系研究科（農学）の F D 活動は、平成 19 年度と同様、授業自己評価以外は、全て学部と重複した項目であるため、大学院独自の取り組みはほとんどない。しかしながら、大学院教育に対する外部評価が強化される傾向にあることから、今後、両研究科独自の F D 活動の充実が求められると予想される。また、農学研究科独自の学生による授業評価アンケート（自由記述のみ）についても、平成 19 年度と同様、実施率・回収率とも低かったが、少人数で実施する授業に対しては学部で実施されるような授業評価アンケートを実施することは難しいと考えられる。

いずれにしても、本報告書は平成 19 年度に続き 2 回目の F D 報告であり、今後の農学研究科 F D 活動が継続的に改善され続けていくことが期待される。

\* \* \* \* \*

平成 20（2008）年度 農学研究科 FD 委員会

生物資源環境科学分野 宇佐見晃一、高橋肇（委員長、教学委員）  
生物機能科学分野 内海俊彦（医学系研究科）、阿座上弘行

# 第 17 章 東アジア研究科の F D 活動

## 第 1 節 平成 20 年度東アジア研究科 F D 計画

東アジア研究科 FD 委員会は、大学院設置基準の一部改正によって大学院における FD 研修が義務化されたことをうけ、平成 19 年度より発足したものである。東アジア研究科は、博士課程のみの独立した大学院であり、主たる教育活動は学生に対する研究指導となっている。こういった現状を鑑み、FD 委員会としては昨年度に引き続き「研究指導法についての検討会」を企画するに至った。

## 第 2 節 東アジア研究科 F D 研修会

平成 20 年度に東アジア研究科が実施した FD 研修会は 4 回である。そのうち 3 回は、東アジア研究科が毎年 10 月に開催している「博士学位準備論文報告会」を参加契機として利用するべく、当該の報告会終了後に開催している定例の FD 研修会である。この定例の研修会では、博士学位準備論文報告会で発表を予定している学生の主指導教員に研究指導法についての実践報告をしてもらうというものである。

事前の準備として、主指導教員には「研究指導上の留意点」を FD 委員会に提出してもらった。FD 委員会は、その「研究指導上の留意点」を東アジア研究科全教員に対して開示。研修会当日、参加者は「研究指導上の留意点」を念頭に置きつつ、学生の博士学位準備論文報告を聴くことになる。そして、博士学位準備論文報告会の終了後、FD 研修会を開催。主指導教員があらためて「研究指導上の留意点」について補足説明を施し、博士学位準備論文報告会での学生の報告を実践事例として参照しつつ、意見交換を行なうこととした。

なお、「研究指導上の留意点」については以下のような観点を想定している。

- ① 学生の研究課題に対して主指導教員がどのようなサポート体制を敷いているか。  
(例：「海外における調査研究の指導について」、「国際学会への参加について」)
- ② 学生の学位請求論文作成に向けて、どのような困難を感じているか。あるいは、その困難をどのように克服したか。  
(例：「査読誌投稿論文の作成指導について」、「論の体系化にあたって〇〇の点が不足」)

### 1. 第 1 回東アジア研究科 F D 研修会

第 1 回東アジア研究科 FD 研修会は以下の通りに実施された。

題 目：「第 1 回東アジア研究科 FD 研修会～研究指導法の検討～」

日 時：平成 20 年 10 月 17 日（金）東アジア研究科（経済・経営・法律コース／開発政策コース）博士学位準備論文報告会終了後

場 所：経済学部多目的棟 2 階 203 室

参加者：橋本寛、塚田広人、植村高久、成富敬、横田伸子、李海峰、石龍潭、古賀大介、森野正弘（以上 9 名）

## (1) 研修会の手順

東アジア研究科（経済・経営・法律コース／開発政策コース）博士学位準備論文報告会開始前にアンケート用紙を配布。各報告を聞いた後、「報告者の指導教員に対する、指導上のアドバイス・コメント」を記入するように、参加教員に依頼した。その際、以下の三つの観点を参考例として掲げた。

- ① 既存研究渉猟が確実に行われているか？
- ② 既存研究の成果を正確に整理分類し、総括できているか？
- ③ その上でオリジナル性が明確であるか？

報告会終了後、ディスカッション形式で教員相互に意見を交換。具体的には、まず報告者の指導教員が、現在指導している際の工夫、直面している問題について実践報告をした。続いて他の参加教員が、それに関する質問や問題解決につながるアドバイスを行った。また、同時に参加教員から、先に記入したアンケート等をもとに、学生の報告を聞いたうえで、指導教員に対して指導に関するコメント・アドバイス（改善点など）を行った。

## (2) 提起された問題とその解決法について

研修会では次のような問題点が提起され、それに対する解決法が話し合われた。

### 1) 留学生の語学に関する問題について

指導教員による実践報告事例として、日本に来て初めて日本語習熟する学生の専門書を読む能力についての問題が提起された。その対処法として、専門書の日本語文章を読ませ、書かせ、まとめさせる指導を行っていることが報告があった。

上記の実践報告に対し、ある参加者（外国人研究者）から、自己の日本語習得体験例が語られた。それによれば、専門書の各章を読み、毎週ごとに、200字、400字、800字、1200字と、少しずつ分量を増やしながら日本語の文章で内容を要約していくトレーニングを日本留学直後に行い、有効であったとのことである。また、他の参加者からは、日本語の文章をチェックする機会が必要との意見が出された。これについては、東アジア研究科として日本人の学生と留学生とを組み合わせたチューター制度をつくったらどうかとの提案があった。

### 2) 途中交代の学生の指導のあり方について

指導教員が交代した場合の指導内容の継続性等に関する困難が問題提起された。これは、教員の転出などに伴い、主たる指導教員が交代せざるを得なくなった場合のことである。

この点に関しては、学生の研究計画・論文内容がしっかりしていれば、教員が変わっても、指導は可能であること、また、初期の研究計画等を他の教員(副指導教員)がしっかり確認する必要性があるとの結論に至った。

### 3) 社会人学生の指導上の問題について

社会人学生が自らの抱える問題を研究テーマとして設定した場合に、その問題に対する様々な経験を持ってはいても、それをアカデミックに表現することができないということがあるとの問題が提起された。

この点に関しては、専門書を読ませ、まとめさせる訓練を行うという対処法が示された。専門書の内容・構成のあり方を学ばせ、レビューエッセイを書かせる。この積み重ねによ

って、その専門領域における学術的規範を身につけさせるということになる。

#### 4) モチベーションが低下した学生の意識向上について

3年という限られた時間のうちに博士論文を作成しなければならないため、焦りが強く出てしまいがちであり、にもかかわらず時間がとれなくなった場合に、学習意欲の低下現象が見られるとの報告があった。その他、知識不足・独創性の欠如・時間と成果が正比例しないなどのケースでモチベーション下がりがちとのことであった。

この点に関し、教員は全力で指導するというのが大前提であるとした上で、あとは本人の資質の問題もあり、課程内での修了が困難な場合は論文提出による学位取得の道も模索すべきだとの意見が出された。いずれにしろ、評価は厳格に行わなければならない。この問題については、なお、議論を煮詰める必要があるとして終了した。

### (3) 研修会の運営上の問題点

東アジア研究科でのFD研修会は、教育方法・技術における問題提起・解決に関する教員間のピア・レビューを趣旨としているが、今回、学生の論文報告会の後の研修会ということもあり、参加者のコメントは教員の研究指導法に関するものよりも、学生の研究内容に関するものの方が多くなってしまった。また、時間的な制約のため、アンケートを十分に活用できなかったということが、運営上の課題として残された。

## 2. 第2回東アジア研究科FD研修会

第2回東アジア研究科FD研修会は以下の通りに実施された。

題目：「第2回東アジア研究科FD研修会～研究指導法の検討～」

日時：平成20年10月20日(月)東アジア研究科(比較文化コース)博士学位準備論文報告会終了後

場所：人文学部第5講義室

参加者：小谷典子、添田建治郎、田中誠二、辻正二、阿部泰記、湯川洋司、額厚、高木智見、坪郷英彦、平野芳信、根ヶ山徹、森野正弘(以上12名)

### (1) 研修会の概要

本FD研修会は、これに先立って開催された東アジア研究科(比較文化コース)博士学位準備論文報告会での学生の発表を踏まえ、当該学生の主指導教員がこれまでに行ってきた研究指導の方法や方針、あるいは抱えている問題点などを個別に実践事例として報告。その報告に対する様々な意見を参加者から募り、検討を加えるという形式で催された。

### (2) 提起された問題とその解決法について

研修会では次のような学生指導の経過と留意点、及び課題が報告され、それに対する様々な意見が交わされた。

#### 1) 学生指導の経過

1年次 ・問題意識を明確にし、研究テーマの焦点を絞る。

- ・そのために、先行研究に関する文献を収集し検討する
- ・研究テーマに即した調査研究（2月：海外におけるフィールド調査）
- 2年次
  - ・調査結果のとりまとめ、学会報告（8月）
  - ・学会誌への論文投稿（9月）
  - ・追加調査研究（9月：日本国内におけるフィールド調査）
  - ・第1回目の準備論文報告会（10月）
  - ・学会報告、学会誌への投稿予定
- 3年次
  - ・追加調査研究、第2回準備論文報告会、学位論文執筆予定

## 2) 指導上心がけた点

### ① 研究環境の整備

- ・研究に必要な文献、データ分析に必要なソフトの用意

### ② 学会活動の促進

- ・東アジアプロジェクト研究への参加（海外における調査補助）
- ・関連学会への入会
- ・学会報告を通じて研究者としての自覚を促す

## 3) 課題

当該学生は、修士課程までは他分野を専門としていたため、博士課程から新たに研究方法などを学ばなければならなかった。そこで、通常指導における研究テーマの絞り込みに加え、学部授業のTA依頼により、研究方法の習得機会を設けた。

## 4) 指導上の感想

学会誌への論文投稿を経験させたことが学生にとって大きなプラスとなった。この経験を通して学生が研究者として成長したことを感じている。

指導者の策定した指導計画と学生の研究遂行の速度とに、若干のギャップがある。

## 5) 参加者からの意見

上記 1) から 4) にかけての実践報告に対し、研修会参加者からは、以下のような意見が提出された。

- ・研究者としての意識（専門家としての意識）を自覚させる方法について、大変参考になった。
- ・1年次に比べて、研究の視点が明確になっていた。指導の成果と思われる。
- ・指導上の要点が参考になった。
- ・他分野を専門としていた学生の指導が多くの労苦を伴うことについて、経験者として同感である。
- ・指導法はおおむね適切であると思う。
- ・学生を調査補助者として起用するという指導は大変有効であると思う。
- ・学生の特性を捉え、学生の自立を促すための手立てを考えた実践と理解した。
- ・学生との接触を丁寧に行うことが、一時間のかけ方も含めて一、大切であると理解した。
- ・学会投稿論文を作成することの有効性を再認識した。
- ・異なる学問領域に専門を変更した学生を指導することの大変さを痛感した。



### 3. 第3回東アジア研究科FD研修会

第3回東アジア研究科FD研修会は以下の通りに実施された。

題 目：「第3回東アジア研究科FD研修会～研究指導法の検討～」

日 時：平成20年10月24日（金）東アジア研究科（教育開発コース）博士学位準備論文  
報告会終了後

場 所：教育学部B棟3階（情報処理演習室）

参加者：名島潤慈、福田隆真、西村正登、葛崎偉、瀬瀬厚（以上5名）

#### （1）研修会の概要

本FD研修会は、これに先立って開催された東アジア研究科（教育開発コース）博士学位準備論文報告会での学生の発表を踏まえ、当該学生の主指導教員がこれまでに行ってきた研究指導の方法や方針、あるいは抱えている問題点などを個別に実践事例として報告。その報告に対する様々な意見を参加者から募り、検討を加えるという形式で催された。

#### （2）提起された問題とその解決法について

研修会では2名の教員から実践事例の報告があり、それぞれに対する様々な意見が交わされた。

##### 【一人目の実践報告】

##### 1) 学生指導の経過

- 1年次 ・ 5月～9月：関係の文献調査、また、研究テーマに関連したアンケート調査を行った。
  - ・ 10月～1月：文献調査結果およびアンケートの成果をまとめ、学会（全国大会）で発表をした。
- 2年次 ・ 7月：学会で発表した結果を更に発展させ、国際会議で発表をした。
  - ・ 8月～9月：論考の詳細な検討を行った
  - ・ 10月：詳細な検討を行った論考をまとめ、学会へ投稿した。
  - ・ 11月～2月：学会誌の査読審査を受ける。

##### 2) 指導上心がけた点

- ① 目指す方向を定めてあげ、そこへ向けて前進させること。
- ② 調査の結果がまとまり次第、学会等で発表するように勧めること。
- ③ 論文執筆の過程で問題点や課題を指摘し、適宜文献調査を行わせること。

以上のような指導方針により、本人に自信を持たせ、研究者としての自覚を促した。

##### 3) 課題

当該学生は、生活環境に様々な制約があり、研究に専念する時間を断続的にしか取れないことが一番の問題である。

##### 4) 指導上の感想

着実に研究者としての成長は見られた。ただ、研究時間をいかに確保するかは、最終的

には本人が解決すべき課題である。所定の年限内に学位を取得するためには、この問題を解決する必要がある。

#### 【二人目の実践報告】

##### 5) 先行研究の収集と選択

学生に対してはまず、研究テーマに関わる先行研究を国内外で検索し、必要なものを選択するように指導した。やがて、学生が主体的に関連する文献の収集を行うようになった。

##### 6) 論文全体の内容構成の検討

研究を進める過程で新たな知見を得たり、文献を入手したりした際は、常に研究課題全体との関連を考えて採用するように指導した。その結果、研究の進展とともに研究テーマが明確になっていった。

##### 7) 研究における主体性

研究を行っているうちに、研究テーマに対する学生の興味や関心が増えることもある。その場合、研究における主体性を尊重し、極力、学生の興味や関心を優先するように心がけている。その結果、学生は意欲を失うことなく、自らの責任のもとに研究に臨むようになっていく。

##### 8) 参加者からの意見

上記 1) から 7) にかけての実践報告に加え、もう一人の実践報告（個人が特定される可能性が高いため、詳細については省略）があり、以上三人の実践報告に対し、研修会参加者からは、以下のような意見が提出された。

#### 【一人目の実践報告について】

- ・ 文献調査を行わせ、研究成果を学会で発表させ、国際会議や学会誌へ投稿させるなど、着々と学生の指導を行っていると感じた。
- ・ 学生の特性を積極的に引き出す試みをしている点に感心した。
- ・ 学会発表・論文発表に対して、日常的に指導を行っていることが理解できた。
- ・ ある程度の成果があれば、それをまとめるように学生を促すという指導法に感心した。

#### 【二人目の実践報告について】

- ・ 研究テーマを、より焦点化させるようにするとよいかもしれない。
- ・ 先行研究の収集と選択、論文全体の内容構成の検討、研究主題への興味付けなど、いずれも学生の主体性、自主性を尊重した指導を行っていると思う。
- ・ 学生の主体性を尊重することは、研究意欲の向上につながるということをあらためて再認識した。

#### 【三人目の実践報告について】

- ・ 個人の抱える事情と研究とをどう両立させていくかが問題である。
- ・ 修士課程から引き続き同じ学生を担当したことで、一貫した指導が行えたかと思われる。
- ・ 学生の研究環境に配慮している点、とても参考になった。
- ・ 長期的な展望を持って指導していることに感心した。
- ・ たとえ時間がかかろうとも、厳密さを優先するという指導法に共感した。

## 4. 人文学部・人文科学研究科・東アジア研究科（人文系）

### 合同による教育改善FD研修会

大学教育センターと人文学部・人文科学研究科・東アジア研究科（人文系）合同による教育改善FD研修会は以下の通りに実施された。

主催：大学教育機構と人文学部・人文科学研究科・東アジア研究科（人文系）による共催

日時：平成20年7月16日（水）14:45～15:45

場所：人文理学部大会議室

対象：人文学部拡大教授会出席者

講師：岩部浩三（大学教育センター長）

#### （1）研修会の概要

本FD研修会は、グラジュエーション・ポリシー、カリキュラムマップ、Webシラバス、学生授業評価、教員授業自己評価などの相互関係および組織的な取り組みの必要性について理解することを目的として実施された。

今回、初めての試みとして拡大教授会開始前の時間を利用したFDを開催。講師より「山口大学における教育改善の枠組みについてー教育改善活動におけるPDCAサイクルー」という題目で30分のプレゼンテーションがあり、その後質疑応答が行われた。

#### （2）提起された問題とその解決法について

講師からは、授業改善のPDCAサイクルが機能しているかどうかは法人評価や各種補助金等の審査の対象にもなっており、その成果は今後重要であるため、学科・コース単位で時々見直していただき、卒業時の質保証ができる教育課程となっているか確認してもらいたいという要望があった。

次いで、卒業生・修了生が備えておくべき資質であるグラジュエーション・ポリシー(GP)、GPの各項目をどの授業を通じて実現するかを明示したカリキュラムマップ、個々の授業の到達目標・成績評価方法を記したWebシラバスの概略が説明された。また、今後の組織的FD活動を進めていくためのヒントとして、カリキュラムマップやシラバスの具体例に基づいて、良い点や改善すべき点が指摘された。学部・研究科のFD活動を計画する際には大学教育センターを活用し、報告書作成等の負担軽減につなげてほしいとの申し出もあった。

プレゼンテーション後の質疑応答は予定時間を大幅に超えて活発になされた。参加者から示された意見は以下の通りである。

- ・ 学生主体の教育を求めて行くと、現状の学部組織の在り方との整合性が問題になる可能性がある。
- ・ シラバスや授業評価のシステムは、教育改善のPDCAサイクルの中に位置づけられており、ばらばらではなく一体のシステムであるべきではないか。
- ・ 「概説」などの授業の目標は設定しやすいが、特殊講義の目標はことばでは表現できないのではないかな。

## 5. 参考資料

### (1) 第1回東アジア研究科FD研修会のアンケート用紙

平成20年度 東アジア研究科FD研修会（社会動態講座）アンケート

お名前 \_\_\_\_\_

以下の観点を例として参考にしながら、報告者の指導教員に対する、指導上のアドバイスやコメント（ご意見）をお願いします。見習うべき点のほか、改善点もあわせてお書きください。

- ①既存研究渉獵が確実に行われているか？
- ②既存研究の成果を正確に整理分類し総括できているか？
- ③その上でオリジナル性が明確であるか？

\* 報告会終了後、30分程度、FD研修会を予定しております。ご協力よろしく  
お願いします。

①報告者名 \_\_\_\_\_ (指導教員名) \_\_\_\_\_

コメント

②報告者名 \_\_\_\_\_ (指導教員名) \_\_\_\_\_

コメント

## (2) 第2回東アジア研究科FD研修会のアンケート用紙

### 【平成20年度 第2回東アジア研究科FD研修会・コメント票】

※本コメント票は、FD研修会終了時に回収いたします。なお、こちらのコメント票により出欠を確認いたしますので、必ずご提出してください。

お名前:

~~~~~  
A先生の研究指導法について

\*コメント

### (3) 第3回東アジア研究科FD研修会のアンケート用紙

#### 【平成20年度 第2回東アジア研究科FD研修会・コメント票】

※本コメント票は、FD研修会終了時に回収いたします。なお、こちらのコメント票により出欠を確認いたしますので、必ずご提出してください。

お名前:

~~~~~

①A先生の研究指導法（指導学生：a）

\*コメント

②B先生の研究指導法（指導学生：b）

\*コメント

③C先生の研究指導法（指導学生：c）

\*コメント

\* \* \* \* \*

平成20年度 山口大学大学院東アジア研究科FD委員会

植村 高久

森野 正弘（委員長）

古賀 大介

# 第 18 章 技術経営研究科の F D 活動

## はじめに

技術経営研究科では FD 活動として以下に示す活動に継続的に取り組んでいる。

- (1) 授業記録によるセルフレビュー
- (2) 全学 FD 研修会
- (3) 教育改善を目的とした評価活動
- (4) その他の FD 活動

以下、平成 20 年度における FD 活動を報告する。

## 第 1 節 セルフレビュー

技術経営研究科は社会人大学院生を対象とした大学院であるので、平日は勤務しながら大学院課程を修学できるように授業を週末の二日間に開講している。そして、宇部・北九州・広島 of 3 教室体制で授業を行っていることにより、全教員が週末に授業を担当している。本研究科の授業の基本方針として、宇部教室（常盤地区）、北九州教室ならびに広島教室の 3 カ所のすべての教室において、全カリキュラムを対面式授業で行うことを基本としている。そのため、授業が開講される週末は全教員が授業を担当しているため、公開授業等によるピアレビューを行うことが非常に難しい。そこで、公開授業に代わって、授業を録画した動画映像を自ら閲覧して振り返りを行うセルフレビューを行った。以下に、セルフレビューにおけるチェック項目を挙げる。

また、授業の録画を受講者が閲覧できるようにもアクセス権を設定することにより、授業の復習など自宅学習の効率化に寄与できた。

◆ 優れていると感じた点についてメモを作りましょう。

### 【説明】

- ・ 声をはっきりとして聞き取りやすいですか。
- ・ 丁寧に講義内容を説明していますか。
- ・ 大学院生の職務内容を念頭に置いた説明をしていますか。
- ・ 大学院生が各自の業種に応じて演習課題を展開できるように意図されていますか。
- ・ 専門分野が違う受講者にも理解し易いように説明が工夫されていますか。
- ・ パワーポイントの使い方は適切ですか（文字の大きさ、スライドの送り方など）。
- ・ 動画を使った説明など、学生の興味を引き出す工夫がされていますか。
- ・ 学生の理解する（呑み込む）ペースを考慮して、説明のテンポを調整していますか。

### 【資料】

- ・ パワーポイント スライドのフォントサイズは適切ですか。
- ・ パワーポイント スライド 1 枚当たりの時間を十分に設定しますか。
- ・ 講義説明を書き込むのに必要な時間が十分確保されていますか。
- ・ 講義で専用ソフトウェアを利用する際には、操作マニュアルが用意されていますか。
- ・ ニュース・報道・Web 情報を引用している場合、引用元を明記していますか。

### 【教授法】

- ・ スクール形式による説明と、グループ学習による討議がバランス良く取り入れられていますか。
- ・ 事前課題を用意していますか。
- ・ 個々に授業の工夫を取り入れていますか。  
（事例 授業の最後の 10 分間を利用して、「その授業における振り返り」の時間を設定する。）
- ・ 学生のモチベーションを引き出すような工夫をしていますか。
- ・ 講義の進行と、グループワークによる討議が結びついていますか。
- ・ 学生の発言は適度に行われていますか。
- ・ 特定の学生の回数が多いなどの偏りはありませんか。

◆ 改善を要すると感じた点についてメモを作しましょう。

### 【事例】

- ・ 授業時間内で説明時間が足りない。  
（対策例 eラーニングなどを利用して一部を事前学習に割り当てるなどの対策が有効です。）
- ・ テキストだけのパワーポイントスライド  
（対策例 写真などを活用する）
- ・ 教材資料が多い  
（対策例 授業における講義内容に合わせて、資料を調整してください。）



- HOME
- 理念と特色
- アドミッションポリシー
- カリキュラム
- 科目紹介
- 時間割
- シラバス
- 教員紹介
- 卒業生、在校生より
- 教育拠点
- 開講スタイル
- 履修例
- 入学案内
- 個別入試相談
- 入試情報
- 2009年度 授業体制
- 科目等履修生
- 授業料免除など
- 企業向けプログラム
- MOTとは?
- Q&A
- 用語集
- 沿革
- 活動実績
- プロジェクト採択実績
- イベント情報
- プレスリリース
- 刊行物
- 交通アクセス
- リンク
- 講義情報(学内向け)
- 教員募集

**VIDEO**

MOT教育  
コアカリキュラム

先進ものづくり  
人材育成プログラム

MOT協議会

西日本MOT  
コンソーシアム

開講授業

期	科目名	担当教員	講義ビデオ															
前期1年	新産業創出論	久保元伸	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
前期1年	プロジェクトマネジメント特論	大島直樹	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
			17	18	19													
前期1年	知的財産権論	木村友久	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
前期1年	会計・財務特論	向山尚志	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
前期1年	組織と人材マネジメント特論	河村榮	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
前期1年	企業経営特論	稲葉和也	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
前期1年	プロジェクトマネジメント演習	大島直樹 柴田浩太郎	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16

期	科目名	担当教員	講義ビデオ														
前期2年	経営戦略特論	大久保隆弘	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
前期2年	国際経営戦略特論	NGUYEN PHUC HUU	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
前期2年	経済分析特論	NGUYEN PHUC HUU	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
前期2年	地域経済論	松浦良行	1-2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	
前期2年	地域イノベーション論	稲葉和也	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
前期2年	技術評価特論	久保元伸 松浦良行	1-3	4	5-6	7	8-9	10	11	12	13	14	15				
前期2年	リスク管理特論	千秋隆雄	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
前期2年	研究開発型ベンチャー特論	福代和宏	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
前期2年	環境・エネルギー技術特論	福代和宏	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
前期2年	ビジネスプラン演習	向山尚志	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15

期	科目名	担当教員	講義ビデオ															
後期1年	経営組織特論	河村榮	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
後期1年	戦略思考特論	NGUYEN PHUC HUU	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
後期1年	マーケティング戦略論	大久保隆弘	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
後期1年	知的財産戦略特論	石川文夫 井上浩 川上由基人 木村友久 佐田洋一郎	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
後期1年	コンテンツビジネス法務特論	木村友久	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
後期1年	創造的問題解決特論	上西 研	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
後期1年	財務戦略特論	松浦良行	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
後期1年	ベンチャー資金戦略特論	向山尚志	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
後期1年	技術戦略特論	久保元伸	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
後期1年	新商品開発戦略特論	福代和宏	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
後期1年	生産管理特論	春山繁之	1	2	3	4	5	6	7	8-9	10	11	12	13	14	15	16	
後期1年	生命医療技術特論	林裕子 奥野竜平	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
後期1年	情報化製造技術特論	上西研 五家政人	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
後期1年	先端機能材料特論	大島直樹	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
後期1年	情報ネットワーク特論	河野 亘	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
後期1年	商品開発演習	福代和宏	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
後期1年	知的財産戦略演習	木村友久	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16

期	科目名	担当教員	講義ビデオ														
2年通年 (前期、後期)	特定課題研究	向山尚志他	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15

アーカイブ

このページへのリンクは自由です。このページに関するお問い合わせは、こちらまで。  
 山口大学大学院技術経営研究科(MOT専門職大学院)  
 〒755-8611 山口県宇部市常盤台2丁目16番1号 TEL 0836-85-9876 FAX 0836-85-9877  
 E-mail mot@yamaguchi-u.ac.jp

## 第2節 全学FD研修会

本研究科の教職員が参加した平成20年度の山口FD研修会の一覧を示す。

研修会名	開催日時	会場	講師
各学部・研究科が実施するFD活動の支援	平成21年10月20日(月)	常盤地区 D棟4階	木下 真
学生を授業に参加させる課題解決型授業方法	平成20年12月10日(水)	小串地区(医学部総合研究棟S1講義室)	林 徳治
教育での標準テストの影響 :The Influence of Standardized Tests in Education	平成20年12月19日(金)	吉田地区(共通教育棟2階会議室)	Edwards Nathaniel
学士力・社会人を教育する方法 (講演及び事例報告)	平成21年1月7日(水)	吉田地区(共通教育棟2階会議室)	松村 直樹 辻 多門 藤井 文武
情報セキュリティ・情報モラルの教え方	平成21年3月2日(月)	常盤地区(工学部D24教室)	糸長 雅弘
情報セキュリティ・情報モラルの教え方	平成21年3月13日(金)	吉田地区(共通教育棟2階会議室)	糸長 雅弘
最近の学生の実態と社会人基礎力の養成	平成21年3月18日(水)	常盤地区(工学部D23教室)	小川 勤
「事例から学ぶ危機対応-自殺のポストベンションについて-」	平成21年3月18日(水)	大学会館会議室(2階)	平野 均
インストラクショナルデザイン(ID)セミナー 3/25(ID入門セミナー) 3/26-27(ID実践研修会)	平成21年3月25日(水)~ 27日(金)	常盤地区(工学部D講義棟演習室)	内田 実

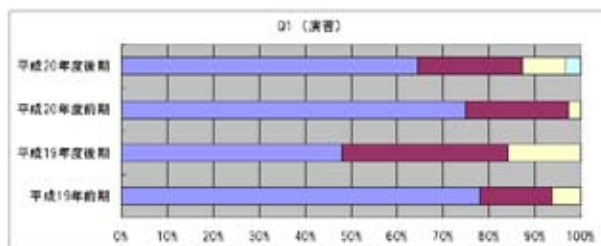
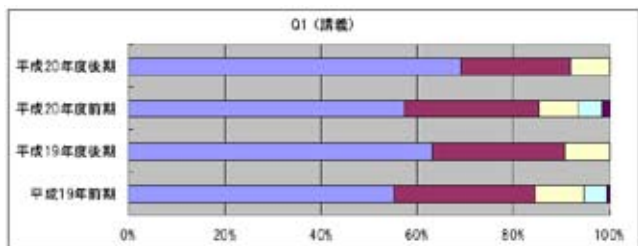
## 第3節 教育改善を目的とした評価活動

### 1. 学生授業評価

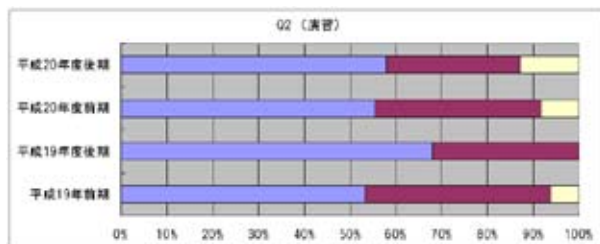
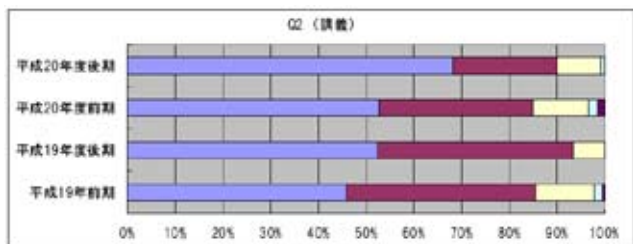
[学習指導法に対する学生授業評価]

学習指導法に対する学生による5段階の授業評価の結果では、「どちらとも言えない」から「そう思う」までの肯定的な意見が、6項目とも80~90%を締めている。

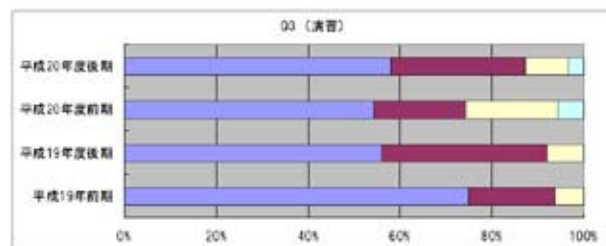
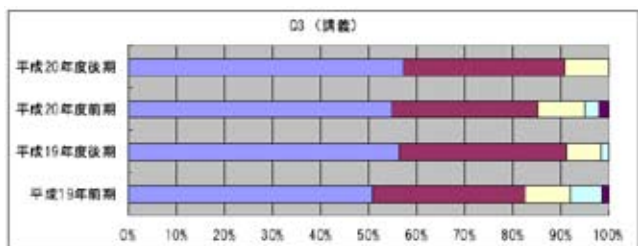
質問（Q1）：教員の話し方が明瞭で、聞き取りやすかったと思いますか？



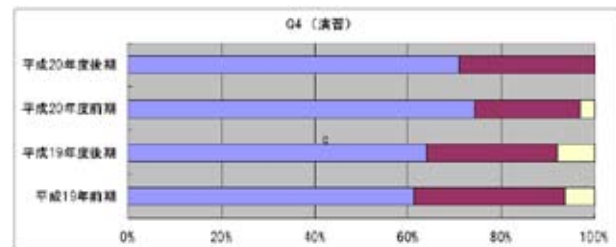
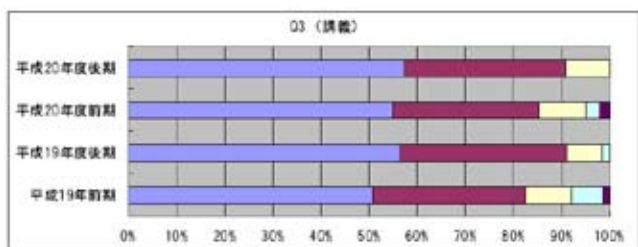
質問（Q2）：理論や考え方、専門用語などが、わかりやすく説明されたと思いますか？



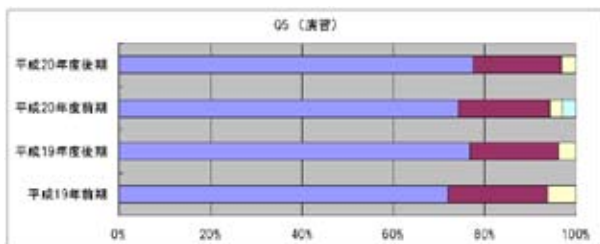
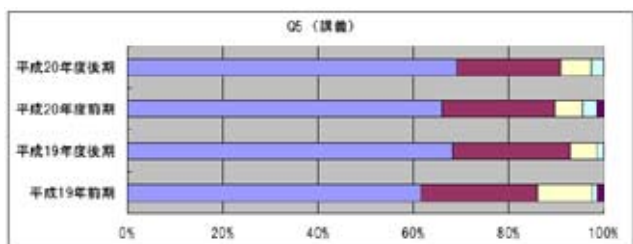
質問（Q3）：教材、板書、プロジェクターなどに授業の理解を促す工夫がなされていたと思いますか？



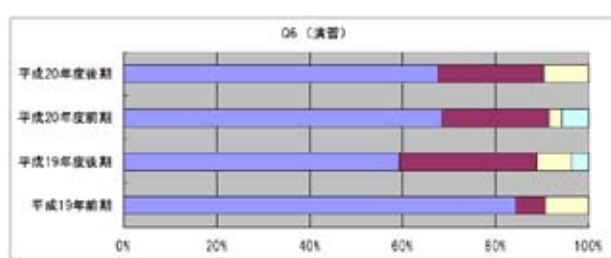
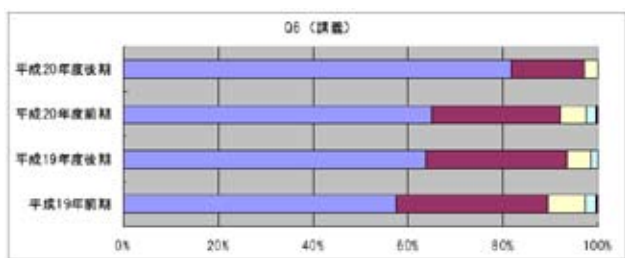
質問（Q4）：練習問題、課題・宿題、参考文献の例示など授業外での学習を促す工夫がなされていたと思いますか？



質問（Q5）：学生の疑問・質問への対応が十分であったと思いますか？



質問（Q6）：担当教員の熱意を感じましたか？



回答選択肢					
	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	余りそう思わない	そう思わない

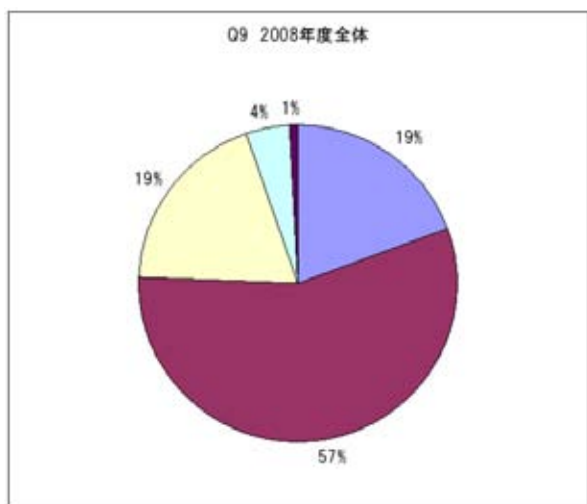
[授業の成果に対する学生授業評価]

授業の成果に対する5段階による選択式の学生による授業評価の結果では、「そう思う」から「ややそう思う」の肯定的な意見の占める割合は、質問（Q8）学習目標の達成については93%、質問（Q9）授業の理解については95%、質問（Q10）授業に対する満足度は97%であり、これら3項目とも90%台の高い評価であった。

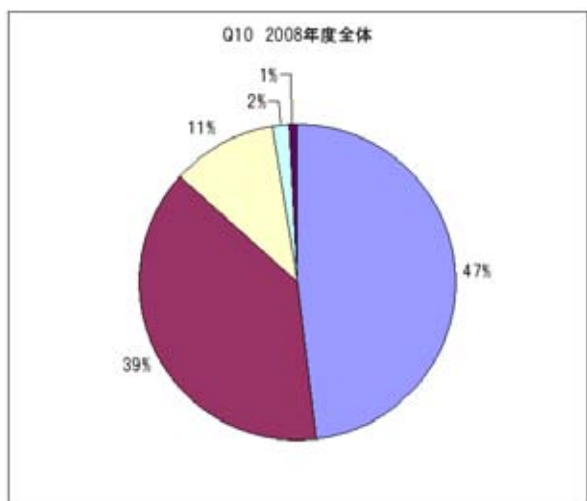
質問（Q8）：あなたは、シラバスに記載された学習目標を達成したと思いますか？



質問（Q9）：あなたは、授業の内容を理解できましたか？



質問（Q10）：この授業は、あなたにとって満足のものでしたか？



回答選択肢					
	そう思う	ややそう思う	どちらとも言えない	余りそう思わない	そう思わない



## 2. 教員授業自己評価

教員による授業の自己評価では、(1)から(9)までの9項目(話し方の工夫、考え方の説明の工夫、教材と補助機器の工夫、授業外学習、質問の機会、授業に対する熱意、学習目標の達成、学習の理解および授業満足度)のすべてについて4以上(平均4.4)のスコアとなり、高い評価であった。また、授業外学習については、1科目1週間当たりの平均時間数が1.5時間であった。

項 目	平均
(1)聞き取りやすいよう話し方を工夫しましたか?	4.3
(2)理論や考え方、専門用語などをわかりやすく説明しましたか?	4.5
(3)テキスト・プリント等の教材、黒板やOHP、ビデオ、プロジェクターなどの授業の理解を促す工夫をしましたか?	4.5
(4)練習問題や演習、課題・宿題、参考文献の例示など授業外での学習を促す工夫をしましたか?	4.5
(5)学生に疑問・質問の機会を十分に与えましたか?	4.5
(6)熱意を持って授業を行いましたか?	4.3
(7)学生は、シラバス(授業案内)に記載された学習目標を達成したと思いますか?	4.5
(8)学生は授業の内容をよく理解できたと思いますか?	4.2
(9)授業の内容に学生は満足していると思いますか?	4.5
(10)授業外学習について(学習時間)(※)	3.0

1)そうは思わない, 2)余りそうは思わない, 3)どちらとも言えない, 4)ややそう思う, 5)そう思う

(※) 期待した授業外の学習時間(授業1回あたり):

1:0.5時間未満, 2:0.5~1時間, 3:1~1.5時間, 4:1.5~2時間, 5:2時間以上

## 第4節 その他のFD活動

### 1. 外部FD活動への参加

日本教育工学会主催 FD 研修会に参加し、FD 活動に関する教育工学的アプローチについて研修した。

日本教育工学会 2008年冬のFD研究会  
テーマ「高等教育現場における教育技術を問う」

「FD」の言葉もすっかり定着し、高等教育現場でさかんに授業やカリキュラムの改善が試みられるようになりました。何をするか？どのようにするか？という段階も過ぎ、日々の実質的な成果の積み重ねが求められています。多様な学生の現状、変化する教育ニーズの中でも、核となるのは教員の教育技術であり、その向上を助けるためのさまざまな理論、道具を教育工学は提供してきました。冬の合宿では、あらためてFDに対して教育工学の視点からどのようなアプローチが可能なのか、研究者としての立場と高等教育に携わる教員の立場の両面から、その可能性を探ります。

日時： 2009年2月21日（土）13:00～22日（日）12:00

会場： 熊本県山鹿市大字宗方150

対象： テーマに関心を持つ研究者・学生

定員： 30名（定員になり次第締切ります。）

#### ■スケジュール：

21日

13:00： あいさつ

13:15： 教育技術とFDを考えるワークショップ開催にあたって：  
（コーディネータ：村川雅弘・鳴門教育大学）

14:00： ワークショップ

カリキュラムデザイン、ICT利用、FD、学習評価、eラーニングなどをテーマにサブグループに分かれたワークショップを開催します。参加者には、サブグループのテーマに関する実践事例などを持ち寄って討議する。

22日

09:00： パネル：ワークショップを振り返って  
： 総括協議（コーディネータ：鈴木克明・熊本大学）

10:30： 基調講演「高等教育現場における教育技術を問う」  
（登壇者：宮田 仁・滋賀大学）

## 2. MOT教育におけるコア・カリキュラムの検討

本学大学院技術経営研究科は、国立大学法人としては最初に開講したMOT専門職大学院である。MOT専門職大学院として充実・発展を図りMOT教育に対する社会の要請に応えることを目的として、MOT教育におけるコア・カリキュラムについて改めて本研究科の全教員による検討を行った。参考として、平成13年3月に報告・公開されている「21世紀における医学・歯学教育の改善方法」を参照している。

中央教育審議会 初等中等教育分科会 教員養成部会 専門職大学院ワーキンググループ  
(第9回) 議事録・配付資料

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/13/03/010331.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/13/03/010331.htm)

まずは、MOT教育における教育内容を分類するための大項目について検討し、さらにそれぞれの大項目別に詳細な学習知識項目の抽出と整理を行った。参考として、平成21年1月現在10大学ある技術経営系大学院が公開しているWebシラバス分析を行った。検討の結果、大項目は以下のようにした。

### 《大項目》:

- ・ イノベーションマネジメント
- ・ 技術戦略とR&Dマネジメント
- ・ 知的財産
- ・ オペレーションマネジメント
- ・ 経営学（企業戦略、組織と人材、企業倫理、ビジネスエコノミクス、統計）
- ・ マーケティング
- ・ 会計・財務

これらの大項目のうち、「技術戦略とR&Dマネジメント」、「オペレーションマネジメント」、「経営学（企業戦略、組織と人材、企業倫理、ビジネスエコノミクス、統計）」、「マーケティング」、「会計・財務」について、さらに詳細な中項目について検討した結果を添付する。



# MOT コア・カリキュラム 大項目別中項目の検討結果

〈大項目〉:

## ○技術戦略と R&D マネジメント

企業戦略、事業戦略と連動、統合した技術戦略の立案に必要な主要事項を説明できる。  
技術戦略における実行施策である研究開発（R&D）のマネジメントに必要な主要事項について説明できる。

### 【中項目】

#### 1. 科学と技術

科学と技術についてそれぞれ動機、行為、特性（評価の視点）などから説明できる。

#### 2. 企業戦略、事業戦略との関係

企業戦略、事業戦略と技術戦略の関係を説明できる。

○企業戦略、事業戦略については他の大項目「経営学」で扱う。

#### 3. 技術動向分析

技術動向の分析や予測に関係する主要な事項についてその特徴、効用と限界について説明できる。

小項目の例：技術の成熟度（Sカーブ）、デルファイ法、外挿法、相関モデル法・・・など

○市場などの事業環境分析は他の大項目「マーケティング」で扱う

#### 4. 保有技術（内部資源）分析

技術に関する内部資源分析に用いられる代表的な方法についてその概要を説明できる。

小項目の例：要素技術ポートフォリオ、製品・技術マトリックス・・・など

（名称は様々であるが）自社が保有している技術を二つの軸で分類して俯瞰する方法について説明できる。

#### 5. 技術評価

会計・財務の投資採算分析で学んだ手法などを利用して、技術を評価する方法についてその概要を説明できる。

小項目の例：リターンマップ法、NPV・・・など

#### 6. 技術獲得

技術戦略における技術獲得について、自社開発、提携、産学連携などを説明できる。

#### 7. 技術ロードマッピング、技術ロードマップ

技術戦略、研究開発マネジメントにおける技術ロードマッピングの位置づけ、役割についてその概略を説明することが出来る。先端技術を例にとり、技術ロードマップを構成する要素について説明することができる。

#### 8. 研究・開発の役割（機能）

「研究開発」の内容は多様であり「研究」と「開発」では目的、内容が異なるためにマネジメントの視点も異なることを知っている。企業等における研究・開発の役割、研究と開発の差異について説明できる。

小項目の例：研究、製品開発、プロセス開発、技術サービス（生産財特有の）・・・など

#### 9. R&D（研究・開発）マネジメント

企業等における研究・開発をマネジメントする場合に必要な主要な事項について、

それらの概要を説明できる。

個々のテーマ（プロジェクト）を対象とした観点からは・・・

企業等における R&D テーマの発案から実施、完了に至るプロセスで行なわれる R&D テーマ評価の必要性及び、どの様な観点からそれが行なわれるかについて例を挙げて説明できる。

企業・組織における研究・開発活動を対象とした観点からは・・・

資源配分の状況（研究開発ポートフォリオなどによる）を把握することの重要性、研究・開発活動の成果や生産性の評価についてその必要性、どの様な観点からそれが行なわれるかについて例を挙げて、問題点も含めて説明できる。

《大項目》：

## ○オペレーションマネジメント

企業活動のオペレーション全般について製品開発、生産計画、資材調達、作業管理、物流管理およびプロジェクトマネジメントの観点から説明できる。

【中項目】

### 1. 製品開発とプロセス

製品開発のプロセスと生産管理の位置づけの変化について説明できる。

### 2. 生産性の管理

生産方式と生産性向上の関係について説明できる。

### 3. IE (Industry Engineering) (工程分析・作業分析・稼働分析など)

生産プロセス全体の効率化のための PDCA について説明できる。

### 4. 納期と工程管理

納期と工程管理の必要性について説明できる。

### 5. 資材調達

資材調達システムにおける発注方法と在庫発生メカニズムについて説明できる。

### 6. 原価管理

会計・財務で学んだ原価計算を用いて原価管理の必要性と管理方法について説明できる。

### 7. 品質管理

TQC の概念および管理手法について説明できる。

### 8. サプライチェーンマネジメント

SCM の基本的な仕組みについて説明できる。

### 9. プロジェクトマネジメント

企業活動におけるプロジェクトマネジメントの役割と知識体系（PM のフレームワーク）について説明できる。

《大項目》：

## ○経営学

経営学関連の基本的教育内容を「企業戦略」、「組織・人材、企業倫理・技術者倫理」、「ビジネスエコノミクス・統計」に分類する。

「経営学」に関する企業経営及び業務に必要な理論を体系的に理解し、主要事項を説明で

きる。(下記の「企業戦略」1.～4.、「組織・人材、企業倫理・技術者倫理」6.～8.、10.、11.、「ビジネスエコノミクス・統計」12.～15.に対応)。

「経営学」に関する企業経営及び業務の実践に必要な主要事項について説明できる(下記「企業戦略」5.、「組織・人材、企業倫理・技術者倫理」9.に対応)。

## 【中項目】

### 「企業戦略」

#### 1. 経営理念 (ミッション)

企業の戦略に影響を与える経営理念 (ミッション) についてその役割と重要性を理解し、説明できる。

#### 2. ドメイン

事業領域の選択に関わるドメインの意義を説明できる。

#### 3. 外部環境分析

企業の外部条件としての機会と脅威を分析するフレームワークを説明できる。

#### 4. 内部環境分析

企業の内部条件としての強みと弱みを分析するフレームワークを説明できる。

#### 5. 戦略の立案

戦略論のフレームワークを用いた戦略策定について説明できる。

### 「組織・人材、企業倫理・技術者倫理」

#### 6. 企業倫理

マネージャーあるいは技術者として業務を遂行していく上で前提となる倫理観について説明できる。

#### 7. 組織マネジメント

組織の効率性と創造性を適切にバランスさせるためのマネジメント手法を説明できる。

#### 8. モチベーション

組織メンバーが組織目標の実現に向け活動するための、人事制度を含むモチベーションのマネジメントの枠組みを説明できる。

#### 9. リーダーシップ

組織目標を実現するためのリーダーシップの役割とその効果的な実践方法について説明できる。

#### 10. 法令遵守 (コンプライアンス)

自社の活動に関連する主要法令及び行動規範について意義を説明し、遵守徹底に向けての個人的・組織的な取り組みを提案できる。

#### 11. CSR

CSR の概念を理解し、事業活動を遂行するに当たっての位置づけと重要性を説明できる。

### 「ビジネスエコノミクス・統計」

#### 12. 消費者の行動

ミクロ経済学の観点から、価格や所得の変化がどう消費需要量に及ぼすかに関する基礎的な理論を理解できる。

#### 13. 企業の行動

ミクロ経済学の観点から、企業が利潤極大化のため、市場の構造に対して、生産活動

がどう行うべきかに関する基礎的な理論を理解できる。

#### 14. 市場のメカニズム

ミクロ経済学の観点から、企業の目標は利潤極大化、家計の目標は効用極大化で、両者の相互作用が、需要、供給、価格となって現れることを説明できる。

#### 15. 統計

初歩的なデータ分析とデータを用いた仮説検証・解釈ができる。

### 〈大項目〉:

## ○マーケティング

マーケティング戦略の立案に必要な主要事項を説明できる（下記1.～3.に対応）。

マーケティング戦略の実践に必要な主要事項について説明できる（下記4.～10.に対応）。

### 【中項目】

#### 1. 市場機会の発見

顧客のニーズ、企業のシーズ、ビジネスを取り巻く環境変化に着目し、市場機会の探索方法について説明できる。

#### 2. セグメンテーションとターゲティング

マーケティング・リサーチ方法の過程、市場セグメンテーションの方法、ターゲット市場の選定方法について説明できる。

#### 3. ポジショニング

自社製品の独自性（競合製品との差別化）と製品ポジションの設定方法について説明できる。

#### 4. マーケティング・ミックス(1)製品戦略

製品差別化、製品の本質サービス・補助的サービス、製品ライン政策に関する具体的な内容について説明できる。

#### 5. マーケティング・ミックス(2)価格戦略

留保価格、コスト、競合製品の価格等の要件を考慮に入れながら価格政策について説明できる。

#### 6. マーケティング・ミックス(3)流通チャネル戦略

製品ポジションの観点から流通チャネルの幅について、収益性の観点から流通チャネルの段階数について説明できる。

#### 7. マーケティング・ミックス(4)プロモーション戦略

プッシュ戦略とプル戦略を含めた統合的なプロモーション戦略について説明できる。

#### 8. ブランド

ブランドの重要性と状況に応じたブランド構築について説明できる。

#### 9. CS

顧客満足の特徴と顧客満足を高める方策について説明できる。

#### 10. 生産財マーケティング

購買行動の特徴等、消費財マーケティングとの相違に留意しながら、生産財市場におけるマーケティングについて説明できる。

## 〈大項目〉:

### ○会計・財務

ねらい

- ・ 財務諸表の意味と仕組みを理解する
- ・ 財務分析による他社比較ができる
- ・ 企業価値評価の方法を理解する
- ・ 投資採算性の評価方法を理解する

#### 【中項目】

##### 1. 複式簿記

企業会計においてあらゆる経済活動を 2 面的に記録することの意味を理解し、簡単な仕訳ができる。

##### 2. 損益計算書

期間損益計算の意味と作成方法を理解し、収益・費用の主要な項目を説明できる。

##### 3. 貸借対照表

企業の資産・負債・純資産を示す貸借対照表の意味を理解し、主な項目を説明できる。

##### 4. キャッシュフロー計算書

損益計算と異なるキャッシュフローの意味と役割を説明できる。

##### 5. 原価計算

原価計算の基本的な仕組みと役割を説明できる。

##### 6. 直接原価計算と全部原価計算（管理会計の考え方）

原価を変動費と固定費に分け、固定費を在庫に配賦しなければ原価が異なることを理解する。

##### 7. C V P 分析（Cost/Volume/Profit）と損益分岐点

変動費と固定費の内訳から、損益分岐点売上高を計算する方法を説明できる。

##### 8. 企業価値評価

企業価値の概念と主要な評価方法を説明できる。

##### 9. 投資採算分析

投資プロジェクトの採算性について各種の評価方法を説明できる。

##### 10. 資本コスト

負債コストと株主資本コストによる資本コストの概念を理解し、適切な資金調達方法を説明できる。

##### 11. 税務上の利益

企業経営において課せられる税金の種類と、会計上の利益と課税所得の違いを説明できる。

# 第19章 連合獣医学研究科のFD活動

## 第1節 はじめに

山口大学大学院連合獣医学研究科は、山口大学、鳥取大学、宮崎大学および鹿児島大学の農学部獣医学科の教員組織並びに研究設備および施設を連合した標準修業年限4年の大学院博士課程である。大学院博士課程の学生は、主指導教員の属する大学に配属され、主指導教員のもとで研究指導を受ける。

### 教育活動

1. 共通ゼミナール（4大学は距離的に離れているので、4大学の学生は年1回4大学のうちの一つの大学に集合し、3泊4日のゼミナールを行う）
2. 各大学における特別講義
3. E-ラーニング

## 第2節 共通ゼミナール

日 時：平成20年7月1日（火）～7月4日（金）

場 所：宮崎大学及びホテルJALシティ宮崎

参加学生：72名

- 1) セミナーについて
  - ・講義を広く浅くという形ではなく、1つの講義を深く教えていただきたい。
  - ・セミナーの時間を増やして欲しい。最新的话题を聴きたい。各講座ごとの講義があれば良かった。
- 2) 実践プレゼンテーション論について
  - ・PCが効果的に使用されており、視覚的に分かりやすい説明であった。
  - ・結果・考察のまとめ方、英語でのプレゼンをする上でのポイント等を説明して欲しかった。
  - ・コンピュータの使い方やスライドの作り方よりも、国際学会発表時のマナーや発表の仕方、経験談などが聴きたかった。
- 3) 統計学について
  - ・今まで統計学を学んだことがなかったが、アウトラインが良く理解できた。
  - ・統計は、理論があまり理解できないまま統計ソフトを使っている場合が多く、非常に役立った。
  - ・少ない時間の中で、サマリーとしてはまとまっており、自分が何を勉強すべきかが分かって良かった。
  - ・1年次の基礎編（統計関数）と取得データの例から实际的に解析を行う2年次以上の講義を分割して欲しい。
- 4) 英語論文の書き方について（基礎編）
  - ・しっかりと書き方やテクニック等を教えてもらえたので、今後役に立てることができると。
  - ・資料がしっかりしていてとても参考になった。

- 5) 研究交流会について
- ・世代、職種、国も違う人達と討論できるのが良かった。是非、続けていただきたい。
  - ・テーマについて、その年の話題を教員側からも、1、2題程度出してもらえるとよいと思う。
- 6) 学生研究紹介について
- ・宮崎大学の先生方にたくさん出席していただき、ディスカッションが盛り上がり大変良かった。
  - ・講座別にしたことで、少人数でより深く内容を知ることができた。
  - ・十分な質疑応答時間があり良かった。今後も続けて欲しい。
  - ・可能な限り英語で質問をすることは、英語のトレーニングになり良いと思う。
  - ・講座別に分かれていたが、各自聴きたい発表を選択できれば良かったと思う。
- 7) 特別講演について
- ・タイムリーな内容であり、分かりやすいスライド、話し方であった。もう少し長く聴きたかった。
  - ・学部生時代に勉強した感染症の名前が多く出てきて、非常に興味深く聴くことができた。
- 8) その他全体に関する意見、要望など
- ・大学での講義は、移動時間はかかるが良いと思う。ホテルが各自、自由な点が良かった。
  - ・毎年、セミナー終了後に提出するアンケートで出てくる要望を、次の年に生かしていると、3年目で分かった。年々充実したセミナーになっていると思う。
  - ・各大学持ち回りで行うより、福岡など交通の便が共通しているところで行って欲しい。
  - ・日程については、土日を含んでいる方が参加しやすい。
  - ・合宿制ではなかったので、コミュニケーションの時間があまりなかった。合宿制の方が一体感が生まれると思う。
  - ・学生と先生が話す機会をもっと作り、研究に対して深い話しがしたい。
  - ・各大学に優秀な先生がいらっしゃるのだから、地域性を生かした各大学の講師による授業が良いと思う。
  - ・日程が詰まりすぎていると思う。もう少し内容を絞っても良いと思う。
  - ・交通費の補助について、対応がもう少し柔軟であってもいいと思う。

## 第3節 各大学における特別講義

### 1. 平成20年度山口大学大学院連合獣医学研究科特別講義 (1) 第1回

実施日:平成20年6月13日(金)10時30分~12時00分

実施大学:宮崎大学

担当教員名:1) 鳥取大学 岡本芳晴 教授

「獣医領域における最先端がん治療」

2) 山口大学 甲斐一成 教授

「イヌジステンパーウイルスの分子生物学」

3) 鹿児島大学 宮本篤 教授

## (2) 第2回

実施日：平成20年10月10日（金）10時20分～11時50分

実施大学：山口大学

担当教員名：1) 宮崎大学 山口良二 教授

「分離に重要な受容体発現 Vero 細胞と近年の日本流行イヌジステンパーウイルス株の遺伝子系統樹解析」

2) 鹿児島大学 宮本篤 教授

「Species differences of cerebral vasoresponsiveness to histamine and 5-HT」

3) 鳥取大学 岡本芳晴 教授

「獣医学における最先端がん治療－自家がんワクチン療法－」

## (3) 第3回

実施日：平成20年11月14日（金）10時30分～12時00分

実施大学：鹿児島大学

担当教員名：1) 鳥取大学 岡本芳晴 教授

「獣医領域における最先端がん治療－光線力学的温熱化学療法－」

2) 宮崎大学 山口良二 教授

「病理学的、ウイルス学的解析による流行イヌジステンパーの解析」

3) 山口大学 和田直己 教授

「The role of trunk muscles during treadmill walking in quadrupedal mammals (cats)」

## (4) 第4回

実施日：平成20年12月12日（金）10時30分～12時00分

実施大学：鳥取大学

担当教員名：1) 鹿児島大学 岡達三 教授

「A novel protein “PSP” 新規なタンパク質 PSP」

2) 宮崎大学 山口良二 教授

「Comparison of Molecular and Growth Properties for Two Different Canine Distemper Cluster, Asia 1 and 2 Isolated in Japan」

3) 山口大学 甲斐一成 教授

「マウス白血病ウイルスの研究」



## 第4節 E-ラーニング

全教員の収録おわり本格的運用が開始された。

## 第5節 その他

聴覚障害学生修学支援についての研修会が開催された。



平成 20 年度 山口大学 教学委員会 名簿

部 局 名	職 名	氏 名	任 期	備 考
大学教育機構	機構長	塚原 正人		
大学教育センター	センター長	岩部 浩三		
学生支援センター	センター長	小宮 克弘		
保健管理センター	所長	平田 牧三		
留学生センター	センター長	林 徳治		H20. 4. 1~H20. 9. 30
	センター長事務取扱	塚原 正人		H20. 10. 1~H21. 3. 31
人文学部	教授	Hintereder-Emde Franz	H20. 4. 1~H21. 3. 31	
人文学部	教授	Alam, Djumali	H20. 4. 1~H22. 3. 31	
教育学部	教授	杉浦 崇夫	H20. 4. 1~H21. 3. 31	
教育学部	教授	和泉 研二	H20. 4. 1~H22. 3. 31	
経済学部	教授	有村 貞則	H20. 4. 1~H21. 3. 31	
経済学部	教授	武居 奈緒子	H20. 4. 1~H22. 3. 31	
理学部	教授	白石 清	H20. 4. 1~H21. 3. 31	
理学部	教授	村上 柳太郎	H20. 4. 1~H22. 3. 31	
医学部	教授	中村 和行	H20. 4. 1~H21. 3. 31	医学部医学科
医学部	教授	清 俊夫	H20. 4. 1~H22. 3. 31	医学部保健学科
工学部	教授	関根 雅彦	H20. 4. 1~H21. 3. 31	
工学部	教授	田中 俊彦	H20. 4. 1~H22. 3. 31	
農学部	教授	山田 守	H20. 4. 1~H21. 3. 31	
農学部	教授	高橋 肇	H20. 4. 1~H22. 3. 31	
学生支援部	学生支援部長	澤田 敏行		
学生支援部	教育支援課長	村中 隆実		
学生支援部	学生支援課長	藤井 純朗		

平成 20 年度 山口大学 学部・研究科 FD 担当者 名簿

部 局 名	職 名	氏 名	備 考
人文学部 人文科学研究科	准教授	磯部 佳宏	
教育学部 教育学研究科	准教授	野村 厚志	
経済学部 経済学研究科	教授	河野 眞治	
理学部 医学系研究科 (理学) 理工学研究科 (理学)	教授	加藤 崇雄	
医学部 (医学科) 医学系研究科 (医学)	准教授	川崎 勝	
医学部 (保健学科)	教授	梅田 昭子	
工学部 医学系研究科 (工学)	教授	上村 明男	
農学部・農学研究科 医学系研究科 (農学)	教授	高橋 肇	
理工学研究科 (工学)	教授	内海 俊彦	
東アジア研究科	准教授	田中 俊彦	
技術経営研究科	准教授	森野 正弘	
連合獣医学研究科	教授	大島 直樹	
		和田 直己	

平成 20 年度 山口大学 大学教育センター 名簿

部 局 名	職 名	氏 名	備 考
大学教育センター	センター長	岩部 浩三	
〃	教育企画・実施部主事	宮川 勇	
〃	教育企画・実施部主事	成富 敬	
〃	教育評価部主事	北本 卓也	
〃	教授	小川 勤	
〃	准教授	吉田 香奈	
〃	講師	木下 真	
〃	助教	岡田 耕一	
〃	教育コーディネータ	兼石 俊明	
〃	事務補佐員	野原 志帆	

平成 20 年度 山口大学 FD 報告書「山口大学の FD 活動」

平成 21 年 9 月 発行

編集・発行 山口大学大学教育機構、山口大学教学委員会  
 山口市吉田 1677-1  
 TEL (083)933-5150 (学生支援部教育支援課)

印刷所 (有)いづみプリンティング